

529

529-209



1200501496419



3. 5. 15

納本

不國不國
不國不國

魚盲

昭和
三
一
內交
圖書

目次

南小泉村……………三
 あの家この家……………三〇
 お灸屋の兄弟……………三〇
 茗荷島……………三三
 卓上……………五八
 不生女の一生……………六一
 盲魚……………一〇六
 家鴨飼……………一二五
 久本氏……………一三三
 鬪……………一四三
 乳母……………一五一
 紫……………一五六

馬(童話)

敗北者……………一六四
 弟の碑……………一九七
 男柱……………二〇五
 男五人……………二二〇
 壁の花……………二三八
 小春日……………二五〇
 癌腫……………二五四
 第一人者……………二八三
 生れざりしならば……………三二四

附録(戯曲)

(丁)

盲

魚

裝幀
小
村
雪
岱

南小泉村

かつて其村に住みける頃、親しく見聞せる事どもを書集めたる短篇七篇、あるひは八篇あり、「南小泉村」と名づく。こゝに、その一のところごとくと、その二とを掲ぐるものなり。

第一

百姓ほどみぢめなものはない、取分け奥州の小百姓はそれが酷い、襤褸を着て糲飯を食つて、子供ばかり産んで居る。丁度、その壁土のやうに泥黒い、汚ない、光ない生涯を送つて居る。地を這ふ虻の一生、塵埃を嘗めて生きて居るのにも譬ふれば譬へられる。からだは立つて歩いて、心は多く地を這つて居る。親切に思遣ると氣の毒にもなるが、趣味に同情はない。僕はその濕氣臭い、鈍い、そしてみぢめな生活を見るたびに、毎も、醜いものを憎むと云ふ、ある不快と嫌悪とを心に覺える。實際、かれらの中には、『生れざりしならば』却つて幸福であつたらうと思はれるのがある。いや、僕が目だけには、その方が多いやうに見た。

然し斯う考へるのは、強ちに僕の僻見ばかりではあるまいと思ふ。親しくかれらの中に立雜つて、深くその生活になじんだら、誰しも然う取るに相違ないと思ふ。僕は誤つて餘り

近寄り過ぎた。眞實、心からかれらの親友にならうと思はゞ、少くとも自分を五歩、六歩距て置いて、そこから遠退いてかれらを見るに限る。——これは僕の正直を云ふのだ。僕は一年以上も、かれらと一緒に住んで居た者である。

試みに、その顔立を見ても、直ぐ分る。家畜に家畜の匂があるやうに、百姓には百姓の紛れぬ骨相がある。知れる、直ぐ知れる。賤しい顔立で直ぐ知れる。手足や胸元の日やけばかり隠しても駄目だ。

仙臺の人は好く斯う云ふ事を云ふ。濱方から來る輩は頬骨が高く、山根の衆は多く頬骨が高く、中にも女の髪の毛は羨しいほど濃く長いのが多い、と。けれども百姓にはそれが無い、何物も顔に秀でた特徴と云ふものが無い。感激がない、發奮が無い、力が無い、どれもく皆平凡な卑しい面構のものばかりだ。四十男で髯すら無いのが多い。それもその筈である。雨を畏れ、風を畏れ、害虫を畏れ、日として自然の威壓に戦かぬ日とは無く、始終、をどつて居る心の揺は、明かにその顔を疲れ鈍して、山に住む人、海に住む人の如く唯自分の力だけを頼りに、飽迄自然と戦ひ、それを征服して行かうと云ふ、烈しい意氣込とか努力とか云ふものはテンドで見られない。かれらの生涯はまア降伏の生涯なのだ。そして、それが一番かしこい爲方だと、自ら諦められるほどの、それはみぢめな言甲斐ない生涯なのだ。と云ふのも、土地と

云ふ動かない約束があるからだ。いかに悶えても腕いても、その苦しい絆から脱する事が出来ぬものは、長い間の習慣に教へられた。

皮膚は厚いけれど、年寄も小兒も、みな貧しい色の黄色に黄ばんで、澤がなく乾いて居る。顔は大概歯と顎の大きい偏顔で、條蟲でも居さうに眼瞼が弛んで居る。手足ばかり無態に大きい癖に——十人に入人までは土不踏が無い——胸元や肩の筋肉に緊張と云ふものが無く、下腹の皮がさもしく重垂れて居る。醫者の目に見ても決して賞むべき體格では無い。病氣は放肆な身持と營養の不良から来るのが多く、特にも胃擴張を患はぬものは一人も無い位である。養價の低い過食には、さすがに強い牛のやうな胃腑も抵抗が出来ないと見える。その口元の亂次無さ、その鼻付の賤しさ。特に厭なのはかれらの目付である。まるで人を畏れる獸の目だ。口元に愚鈍らしい薄笑を浮べて、恐しく茶色な小さい目を、始終惡態さうにキョト／＼動かして居るのに遇ふと、僕は毎も、多く土耳古にあると云ふ、賤屬ジブシイの眼を思出さずには居られない。竹箒を賣つて、鑄掛をして、卜占をして、總ゆる人に厭嫌れながら、的もなき放浪に生涯を送るかれらの運命も、蓋し餘儀ない約束のやうに思はれる。僕は如何に贅澤の謙遜をしても、かれら小百姓と同じ血が體に流れて居るとは信じたく無い僕には醜いものを一種の罪惡と吐つた時代もある。醜い、醜い、百姓の生涯はその醜い生涯だ。

仙臺の西北の隅から入つて、愛宕山の裾を南へ東へと流れるのが廣瀬川、埋木と鮎で名高い川である。その川下の誓願寺の渡場から堰分れて、南方の町々を通つて東を指す枝川を六郷川と云ふ、南小泉はその又枝分れの小溝に沿うた小村で、その近傍の小字を併せて、今では六郷村に組入つて居る。戸数はやつと二百戸許、細長い家續き、土地が濕る所爲か無花果が好くそだつ所である、大概は先づ農家で、その外には戸村、石岡と云ふ在郷をした士族が二軒——僕が間借をして居たのはその石岡の方で——、五兵衛の水車、おはち媪さんの駄菓子屋、それに何處から何うして紛れ込んだか、茂三さんと云ふ提灯張が居る位なものだ。尤も近頃は集治監の看守が引移つて來たと云ふが、それは僕の知らぬ事である。その他には夏季でも心太さへ賣る家が無い。尤も、石油、味噌、醤油、蠟燭、縫糸、煙草位の日用品は區長の家で取次をして居るとの事だ。米は水車屋から買つて喰べる——、田舎は田舎でも此邊は大抵一升買をして居る。その他の買物や何かは皆仙臺の河原町を調法して居る。この邊ではかア町と言慣して、鐵道線路を踏切つて行くと、十二三町とも無い位である。小學校の生徒は半分は仙臺に、半分は吹曝の田圃を東路に一里ばかり、荒井と云ふ小村に行く、そこに八郷村の役場も駐在所もある。

大きな町には、きつと、そこから吐出す芥川がある。詰り、

渠等の根性の卑吝は云ふ迄も無いこと、改めてこゝに云はぬにしても、渠等がいかにも訴訟上手な事も、僕には厭惡の一つとなる。一生を自然の前に跪づくの外にかれらには仍ほ跪づくべき地主がある、詰り、二人の主人に仕へるのだ。樹目を盗むとか、年貢の換納とかは常住としても、毎年の減方願ほど地主に取つて盡甲斐のないものは無い。やれ雨だ、風だ、浮塵子だと、來る年も來る年も作格に云分を付けて、幾らかの分減に有付かうとする掛引の際とさば、中々商人などの眞似及ぶ所では無い。坪刈や毛見をすると云へば、それには又そのの通路を用意して置いて、經驗の無い地主の目を暗ます。執念深く頑固に、殊勝らしく、そして煩さく附纏はれる内には、こちらの方も到底根負けして了つて、見す／＼狡い言條を通してやる事になる。その上、べんちやらの巧いこと。朴訥らしい重い口を動かして、町の人には氣が射して云はれぬお世辭を、平氣でツケ／＼云つて、自餘高い城下の衆を巧に喜ばせて居る。人には銘々の矜さへ無ければ、どんなにでも相手を喜ばすことが出来るものだ。

僕は前のところで、奥州の小百姓生活に馴染過ぎたと云つた。それは然し、唯その一部分、仙臺を中心とする近在の百姓を指したものである。更に詳しく云ふと城下の南はづれに直ぐ續いた、南小泉と云ふ一部落に、僕は田舎醫者として一年以上住んで居た。その頃の記憶を云ふに過ぎないのだ。——それには先づその村の様子から明かにするが順序らしい。

町の老廢物を排泄するのだ。そして、最寄の小村は、大抵、その小川に沿うて部落する。南小泉村もやがてその一つである。百姓として獨立の百姓では無く、多くは都會の下賤になつて生活を立て、居る。鄙しいのは素よりその筈だ。丁度其の居まはりの田畠が、町から流れ出る、湯の垢、染屋の紺汁、洗水、灰汁、塵埃に灌漑されるやうなものだ。

田も耕るけれど、半分は栽園もの、其日々々の活計はまあ其方で立て、居る。それは重に女子達の役目で、前日東分けをして置いた根もの蔓ものを、毎朝零明に新河原町に擔出し、その市場で町の青物屋に手渡をするので——觸賣するものはタント無い。何しろ荒々しい棒手振共を相手に、一文二文の儲をせまくり合ふのだから、人氣は自然と悪くなるばかり、曠家でも娘共でもみな人を喰つた輩ばかりだ。女だてらに負けじと罵り争ふさまは、見得も外聞もあつたもので無い。まるで喧嘩だ、奪合ふのだ。そして、その幾分かが公然に各自の所得になるものだ。で、年寄でも小兒でも唯は居られぬ。茄子もぎとか苗ひきとか、それ／＼に細かい私得口を探してみな働く。それが銘々の小遣錢になる。だから、子供でも駄賃を貰はなければ、小用一つ達してくれない——小錢の有難味が骨の髄まで滲込で居ると見える。年寄ともは小袋錢を香さうに肌にしツカリ着けて、嫁子にもそれを見せまいと隠して置き、秋春の湯治や、病氣差合の時の藥代や養生喰の代に用意する。時々町から小間物賣が廻つて來ても、娘は娘、

年寄は年寄で、私かに物蔭や何かに商人を呼込んで、人に見られないやうに、ソット財布の紐を解く。全く、かれ等の間に錢の貴ばれるのは不思議な位だ。親子不和も兄弟論争も大抵はその私得金から起るのが多い。情誼の情合のと云つても、錢だけは除外される。夫婦中でも減多に油断は無く、始終お互の身錢を卑しく讀んで居る。若者同志が肆な情交でも、それはたゞ軀と軀とが觸れ合ふと云ふだけの考で、更に立入つた事になると、男——多くは女の方から逃出してつふ。別れ話や其他のきまづい話は、大抵、幾らでもない小袋錢から割出されるのだ。私は、小百姓の間に、眞に戀らしい戀を見出した事がない。もしあつたとすれば、それは歌の無い戀、涙の無い戀、そして思出の無い戀だ。

丁度、其頃僕は醫學校を中途にして、的も無く仙臺に放浪して居た。病院の助手を勤めて見たが、怠け者はどこへ行つても怠け者、餘り思はしい事も無いので、親戚の家にブラブラ遊んでゐる所へ、出入の百姓——それでも村では収入役——が来て、その村、南小泉にある某醫師出張所の代診に來ぬかと云ふ。本院の先生は月に二三度しか見えぬから、常の所得はみな自分のものになる。行々は本院の名義で、小學校のトラホーム治療も頼む事にしよう。手當は少ないけれど、藥價の方で埋合せるだけのいかさまはキット出来る、との話である。素より糊口にも困り抜いて居る所ではあり、且つ、

て、月に三四度袴を穿いて學校に出るのが仕事。ふだんは家に居て鶏の世話や寫物などして居る。奥さんは又近所の娘達を集めて裁縫の稽古だ。小さな丸髻に結つて、瘦せた、小形の、いやに起居の几帳面な人で、癩性らしく始終唇をブルブルさして居る。漬物上手なのが酷く御自慢である。

第二

こゝへ来て確か三日目、始めて往診患者があつた。掛ちつての病人だと云ふので黒瀬ろくと云ふ名を診察簿に繰つて見ると、病名は化膿性肋膜炎とある。そして、摘要欄の中に前に居た代診の筆跡で、何日、何日あるひは「など克明に小書してあるのを見ると、孰れ、餘り有難い病家ではない。數字は其日／＼の診察料を書付けた控で、見た所、多くも十錢を超えぬらしい。

「何うだね。疼痛でもある模様か。」と私は羽織を引掛けながら、使に來た子守ッ兒に尋ねる。藥籠の準備があるので。「何せうだかね。俺ア頼まれて來たんだから。」と子守はそこに突立つた。肉桂か何かをニチャ／＼舐つて居る。「注射器——針を持つて來てくれと云はなかつたか。」「何とも云はれせん。」

で、その子守に跟いて行く。割に年喰かも知れないが——でも、十五とはなるまい——病身らしく羸細い瘦削けた子守で、背の嬰兒の方が餘程苦しさうだ。それでも睡つて居る、ガ

その頃は未だ醫者になる氣の時ゆゑ、後期試験の實地研究になるだらうと考へて、直様その出張所に雇はれる事となつた。本院の××醫師と云ふのは、揉上の長い、鬚髯の剛い、デツプリ肥つた五十恰好の人で、これまで松ヶ濱の村醫をして居たのだが、悍二人の教育旁々仙臺へ出て來たのだと云ふ。何様、金縁の眼鏡を業々しく掛けた所や、將棋の強い所や、紐付の足袋を穿いた所は、田舎醫者に持つて來いの人格である。

「君がM—君で、何うか何分宜しくお頼申します、僕も開業勿々の事で、充分の御補助は出來ますまいが：一旦、斯く仙臺に開業した事ですから、諸君の盡力を藉りてこの近在に得意を集め、大に本院の擴張を圖りたい考です。」と、打解けた書生らしい調子で云ふ。妙に音の鼻へ掛る人で、ると云ふのが皆うに聞える。そして出張所は外にも二三ヶ所、近在に設けてあつて、順番にそれを廻つて歩くのだと云ふ。無論、本院には患者らしい患者は無いらしい。

其日は、紹介してくれた収入役の相伴で、乾沙魚の煮付に何か田舎臭い細君の手料理で、酒を振舞れたと覺えて居る。

僕は直様荷物を引纏めて、南小泉村の出張所へ引移つた。奥州風な長方形の茅葺の石岡と云ふ土族の家、その奥座敷を二間借りて診察室にも藥局にも待合室にも充て、居るのだ。家族は老人夫婦たゞ二人。主人は村の學務委員を勤めて居

ツクリ首を抜いてクン／＼睡つて居る。

「お前、その兒の姉さんか。」

「なんでそんな事。俺アこゝに貸されて來たんだもの。」

「家は何所だ。」

「茂ヶ崎しや。」と子守は大人ものゝ藥草履にスタ／＼と砂煙を立て、行く。

年は十四だと云ふ、親爺は鐵道工夫だが、去年死んだために、三年の年季で子守に雇はれて來たのだとの事だ。

五月も下旬——いや、六月に入つてからかも知れない。朝の間はカツと夏晴れて、單衣を欲しい位な天氣であつたが、午後から、急に西曇がして、雲行が怪しく亂れる。低く擴がると云ふよりは寧ろ疊されるのだ。特に家を出る頃からは、空氣が重く凝つて妙に冷氣が身に染む、若葉の緑が際立つて鮮かに見えた。邊が段々暗くなつた。土橋を渡る時、路を横切つて、眞白な家鴨が二三羽、トツ／＼と鳥屋の方に急いで行く、寂しい田舎道は兩方から生ひ冠る繞林の下を灰色に長く續いて見える。稍には風がざわつき始めた。

子守は黙つて急足になつた。

町を南に出切ると、道はそこに盡きて、三又の作場道に分れる。黒瀬の家はその岐路の小高い丘の上、眞黒に雨腐れた草葺の低い家で、村では一番新家だけに——と云つてもそれは三十年も前の事——繞林も何も無く、たゞ北の方だけ、風防の竹藪になつてゐる。茂ヶ崎廣土の平原が目路の限り軒先

からズット前に開けて、それが何處から、何處まで、青々と背延びた麥畑である。くだ狐が出ると云ふのは此頃の事だらう。時々思出したやうに冷たい風が、その上にざわ／＼と音立て、吹過ぎる。そして、その度、走り穂がチラチラ見える。がそれもホンの一時、風が息むと、周囲はまた森ともとの静寂に復つて、段々暗くなるばかりだ。妙に蟬谷が痛む。

「こゝでがすよ。」と子守は僕に教へて門前から引返して行く。

入口の戸が閉つて居る。二三度呼懸けて見たが返事がない。で、板倉の前を廻つて裏口に出ると、その戸が五六寸ほど明いて居る。

「おい、居るかね。」

「誰でがす？」と鈍いと云つてもこれは、咽の底から筒抜ける、力の無い掠れ聲である。

「黒瀬ろくと云ふのは、お前さんの家だらう。」

「貴方はね。」

「石岡に居る者だ、醫者だ。」

「醫者様かね、そこ明きすぞ。」

と、立ちさうも無いので、戸を明けて中へ入る。眞暗な爐端に老婆がたゞ一人、巻蒲團にもたれて蹲つて居る。

「後をピツシリ閉めてくなんせ。」

「閉めたら眞暗になる。」

「咳嗽も出す。」

「盗汗は？」

「盗汗も出す。」

未だ蟹を離さない。妙に僕から目を外らすやうにして、それを喰べて居る。

「誰も居ないやうだな。みな河原町か。」

「おげんに遇ひせんかつたか、板倉の前で。」

「おげんね！ 何處の人だ。」

「俺ア嫁のおげんしや。」

「遇はないよ、幾度も呼んで見たけれど。」

「んでは、又、引張り出しやがつた。畜生！ 何んと云ふ畜生だ！ 犬だ！ 犬だ！ 畜生。」

と、老婆は喰べる手を置いて、火の氣のない爐の一所を凝と見凝めた。でも、聲の調子が激するのでも無い。同じ事だ。激しても聲に現はれないのだらう。櫛が二三本、眞白な尉になつて、空しく冷えた藥罐には、煤がヒラ／＼と下つて居る。

ドット二度ばかり、烈しい風が雨戸に當つた。そして、あとは又森となる。表に足音がしたやうであつたが、それぎり

で、何の事もなかつた。

婆さんは偶と氣が付いたやうに、骨節が知れないまではれきつた、自分の大きい掌を打返し／＼眺めて、「あゝ、こんなに脹れて了つた。」と、小さな目に涙を一杯溜めて居る。

兎も角診察した、化膿性とは些と受取憎いけれど、髓に肋

「んでも、風が吹込んでね、咳嗽が出て苦しいから。」

戸を閉切ると、生温かい百姓家の籠氣がムツと鼻へ来る。濕つた微の臭が中でも鋭どい。空合を氣遣つて天窓まで閉めたので、人顔もハッキリ分らない位だ。僅かに戸の透間を通して来る北明でボンヤリ中の様子が知れるばかり。それでも、爐傍には花莖を敷いてある、そこに坐る。

老婆はブル／＼顫えのある太い指で、ボリ／＼皮を剥きながら何か喰べて居る。蟹だ。この邊で馬蟹と云ふ蟹だ。疊に直に置いた筈の中にも、大きい、小さい、まだ五つ六つ入つて居る。

「病人はお前かね。」

「はア。」と年寄は、その白い肉を爪で剥いで、畜さうに喰べながら、時々白眼返しに僕をジロリ／＼と見る。

百姓の年は分り難いもの、特に女の年寄は然うだ。何んでも六十近い、目の小さい、鼻の低い、雀班のある大顔の婆だ、一體に肥つた上に病氣の爲めに總體腫を持ち、フェウ／＼と肩で呼吸して居る。ドンヨリ濁つた目に光が無く、口をきくのも億劫さうだ、油染みた藍手拭で鉢巻して、この陽氣に綿入を三四枚も着脹れて居る、傍に寄ると汗臭い匂がする。

「何う悪いな、熱でもあるのかね。」

「何んだか彼んだか、體中切ないだらけで、生きた空アがあせん。」

「咳嗽は？」

膜炎には相違ない、何にしても難症だ、濁音部は第四肋間まで擴かつて、心音は殆んど聞取れない。素人療治の按摩膏や瘻音を胸一面に貼付けてあつて、觸るのも何だか厭な氣がした。

「何うでがすべ。」と、ソロリ／＼と壞れ物を扱ふやうに、自分の膚を入れて、斯う問ふ。

「大分水が溜つて居るから、それを取らないぢや不可まい。」と、驗温器を挿してやる。

「薬で散らす事は出来ぬかね。」

「早くならそんな事も出来ようが、今となつてはチト手後だ。」

「そんなぢや、俺ア死ぬのすか。」

「そんな事は無いさ、水さへ取れば大抵大丈夫だと思ふ。」

「それにや、また金でがすべ。」と、僕の顔をデロリ見る。

「でも、生命には換られまい。」

「今の醫者様は商人のやうだ。あれも金、これも金、本當に盡甲斐の無い事だ。」

それには僕もムツとした。

「では、お前の好きなやうにするさ、無理に勧めるんでは無

いから。」

「だけんど、俺アこの病氣に掛つてから、何んぼ錢を費はせられたと思つて？ やれ、何所に好い家傳藥があるの、お禁厭があるのつて、あの畜生に渡した錢ばかりでも、勘定した

ら十兩近くになりす。それでも唯の一度もこれとは思つた事がアせん。尤も、あの畜生の事ながら、銭は持つて行つても、何を買つて来やがるんだか分るもんでない。本當に憎い畜生だ。犬のやうな奴でがす。」

「誰だね、それは。」

「俺の御亭の畜生しや。又、今日もおげんを引張出しやがつて、何所で何してるか分るもんでねえ。」

「おげんと云ふのは、お前の嫁だらう。」

「嫁だか何んだか、あれも矢張り畜生しや。」と、話して居る所へ、ゴトリと戸を明けて入つて来たのは、そのおげんである。色白のデツプリ肥つた薄眉の、如何にも農夫の娘らしい女で、稼ぎ姿の胸元をだらしなく開けて入つて来た。年は二十位だらう。齒を眞黒に染めて居た。

「おげん、知つてるぞ。」と老婆は睨むやうに白い目を其方に見せる。

「何んしや、お母さん。」

「知つてるく／＼かくしても駄目だぞ。主は畜生だ、犬だ。」

嫁は黙つて此方を些いと向いたが、聞えぬ振して流元で洗物を始めた。姑はたゞいら／＼するばかり、凝とその後姿を見詰めて居た。憎いほど丸々と肥つて、肩肘、腰、體中の發育すべき總てが、今まさにその發育をつくしたと云ふ形だ。それを見る年寄の眼には、嫉し憎しの情が、明かに燃えて居るやうだ。

ヨロキヨロと動く、瘦せた小男だ。

「僕は然うですが、お前さんは。」

「黒瀬の家の當代でがす。」

「何んぞ御用か。」

老爺は顔にかゝる雨を平手で拂ひながら、

「まあお出なさい、そこらまで一所に行きますから。——實は内の婆さんの病氣でがすが、貴方様のお見立は何せうでがすべな。」

「まあ難しいやうだな、尤も水でも取つて見たら、何う變るかも知れないが。」

「さ、その事で御座りますて。」と自分の後に喰付いて歩きながら、水を取つた所で、受合つて癒ると云ふでもありませんめいもんな。」

「それは分らないよ。」

「實は先刻から納屋の所に立つて聞いて居したが、御覽なさる通りの一徹ものでがすから、その前で彼是云ふより、却つてソツト先生様さ御願する方好いと思つて、あすこでお待申して居たんでがす。」と、百姓には譜の切れた、もの馴れた口振である。旨意はたゞ、手術をすれば治るなどと、患者の氣を動かしてくれるなど云ふのだ。これが常の年ならば、例令駄目と聞いても、念晴らしにも、手術を願ふのだが、何分にも、兵隊に出て持人の悴は居ず、二三年この方の不作續きで何うする事も出来ぬ。全く今日の飯米にも追はれて居る次第、なか

「老爺は何所さ行つた。」

「知りませんよ。俺ア。」

「かくしても駄目だぞ、足腰が利かないと思つて、主ア俺を馬鹿にするな。」

「知らないもの。」

「好しく、本當に云ふなよ、俺ア徳三に書かせて彌八んとかさ手紙やるぜ。」

「……。」

「やるく／＼。後で恨んでも泣いても……そんな時ア俺ア關はねえ。」と、ホロ／＼と涙が頬を流れて落ちる。

でも、嫁は黙つて流窓を見詰めたまゝ、凝と立つて居る。家の中が眞暗になつた、驗温器の度盛も讀めない位である。果して降出して来た、バラ／＼と大粒な雨が戸に當る。肌がスウと冷まされるやうな氣がする。

傘を借りて表に出ると、空模様は一層悪しく變つて居る。西の方は眞つ暗に鬱がつて居るが、さつきから見ると幾らか明るくなつたやうにもある。そして、麥の浪は風に絶えず騒いで居る。小鳥の群が灰色の空を、蝙蝠のやうにヒラ／＼と塙へ逃げて行く。

門側の藁によの前まで来ると、そこに無掛つて居た一人の百姓老爺がある。笠もかぶらず、平氣で懷手をして居る。

「貴方は今度石岡様に御座つた先生でがすね。」とその百姓はニヤ／＼笑ひながら寄つて来る。頭のツルリ禿げた、眼のキ

／＼病人にかまけて居られる場合でない。死ぬ人と一所に生きたものも死んでは居られない、大丈夫助かると云ふ見極が付かない内は、必ず／＼手術を勧めてくれるなど、それを如何にも殊勝らしく巧に訴へるのであつた。そして、

「あゝ、小百姓ほど因果なもののがアせん。」と長い溜息を洩す。

「僕はたゞ好い加減に聞いて、フン／＼挨拶して居ると、老爺は切りとそれを頼んで、雨の中をビシャ／＼と濡れながら歸つて行く。

翌日行つて見ると、幾らか顔の腫も退いたやうだ。今朝は味噌粥を二ぜん喰べたと病人も喜んで居る。そして幾らか僕に對する態度も變つたやうだ。もとの無躰はなくなつた。

「癒りすべかね、先生様、この病氣は。」

「癒るとも、この順で腫さへ退けば心配はない。私も精々骨を折るから、お前も氣を付けて養生するが好い。」

「は、何うか然うしてくんなせ、俺ア死んだらこの家は眞つ暗だ、あの畜生どもに何せうされるか分らない、そでなくてさへ勝手に搔廻すべえと思つてたくらんでるのだん。些とだつて俺が爐傍から目を離すと、それこそ、家は亂離骨灰になりすからね。」

「御亭主は養子だと云ふね。」

「あの畜生しか、あれは婿に來たのしや、もとは閑上の法印の悴でね。二十四の時から俺アがとこへ養子に來たでがす。」

と色々いりわけを話して居る所へ、
「おろく、今日は何せうだや。」

と、外から懸掛けて入つて来たのは、矢張同年位な老婆、朝市歸りだらう、紺の胴着に股引手甲と云ふ、甲斐々々しい扮装、瘦せた眇の婆だ。汚ない手拭で切りと汗性の鼻をふきながら、僕に挨拶もせず土間に突立つて居る。

「矢張好い事もなくつて、困つたもんだ。」

「悪いな、醫者様は何んと云ふ。」

「水を取つたら好かんべえと云ふのさ。」

「取つて貰ふ氣か、主は。」

「その事さな、唯ぢや取られねいかん。」

「それでも、キット癒る見當さへ付いたら、取つて貰ふ方が好かんべ。錢がないではなし、命には換られぬが。」と上櫃に腰掛ける。

病人はデロリと僕を偷見る。今の話を聞かれたのを恐れたらしい。そして、澁々した調子で、「主は俺ア私得でも溜めてると思つてるんだな、駄目だよ最う、費つてくゝの揚句だから、今では藥代さへ納めかねてゐる位だもン。」

「私得米を賣つたら好かんべ。」

「私得米？」

「さうさ、今度のやうな事の役に立てないで、溜めてばかり居ても何んにもならない、賣れよく。賣るなら俺ア好い商人世話すべツちや。」

上へならべる。

お作は、その銅貨を帯の間に深く挟んで、
「んではな、後になつたら生きの好い、うみたての卵子を三つ持つて来てやるぞ。主の事だからなりたけ大きい所を負けて置くべさ。だけど、俺ア嫁に話して駄目だぞ。あいらはウンと音いんだから、何んだの彼んだのと云ふに決つてる。」
「主はまたその錢で、盛切（コップ酒）でもひつかけるんだべえ。」

「は、は、ムム。」

と賑を見せて大口に笑つて、

「俺ア命は酒だ。酒さへ飲むと何日も正月よ。主なぞ若い時から辛抱して、身錢ばかり溜める氣になつてるから、心の臓が齧つて、そいで、そんな病氣に馮かれるんだ。早く癒つて、湯治にでも行つて、些つと盛切の味でも覺える事さ。」

「俺ア何せうしても、そんな氣になれぬいよ。損な性分だな。」

「それでも、錢があるから好いべツ。」

「なんのあるもんで、主は馬鹿ばし云つてる。」

と不快さうに、ムツとした調子で僕を見る。

第三

南小泉村に引移つて四五日目。是非一度は顔つなぎの酒振舞をひらけ、少しを呑んで村方の氣受を損しても不可まい、と、石岡（僕の間借して居る家）の主人が切りにすゝめる。自

「主は何日でもそんな事。俺ア騙すべえと思つてるんだ、何日だかの頼母子屋のやうな人だべえ。」

「あれ、本當だよく。」と、いそがしく顔を拭廻して、「本當に買負の人だぞ。河原町の針庄の店に居たんでな、今度新見世を出したよ。賣る氣あるなら那の人が好いぞ。」

「今の相場は何んぼ位だ。」

「さア、俺ア好つく知らねいけど、六十錢位なものだべ。」

「然うかな。」と、ボンヤリ何か考へてる。

「明日行つたら好く聞いて來んべえ。」

病人は何とも云はなかつた。熱も少し減いたやうだ。

今度は病人の方から、「お作、主の家に卵があつたけな。」

「あるぞく。新らしいのがある。」

「少し譲しんでくんねいか、三つばかりで好いから。先生様

に聞いたら、あれの半熟が一番養生になるとよ。」

「主の家にや無いのか。」

「此間來た鶏卵買にみな賣つて了つたもんで、そいに、一つでも貰つて食ふと、おやぢの顔悪るい事と云つたら無い。あいらは俺アの死ぬのを待つてるのだからな。何うか、これだけかな譲してくれろや。」と肌付の小袋を出して、その中から銅貨幾枚か出して渡す。米なら五合も入りさうな小袋で、長い紐で首にかけて居る。傍に寄つたら肌の匂ひが染込んで居さうだ。

序に僕への診察料——を些と考へて、——白銅三枚を疊の

家で拵へればお膳は一人前三十錢位ですむ、酒も五合宛あれが好い。蒲鉾だけは些と遠くとも城下の何屋から買つた方が格廉である、色々算盤を取つてくれた。人数は三十幾人、これも一々名前を書出して見せられた。で、本院とも相談の上、何日、開院の披露の宴を張る事にした。

それには先づ、招待ながら村の重立つた家を此方から廻つたら好からう、見識振つても在郷は通らぬ、腰は低くする事だ、と隠居の差圖である。中にも水車の五兵衛は村の若者頭、衛生係を兼ねてる村の口利き。先づこれが第一。次ぎは區長。次は上の清太郎、村での分限である。この三軒は大切である。と教へられた。主人の隠居は外に用の無い身體ゆゑ忙し振が出来るのを何より喜んで居るのだ。こまかく氣の付く年寄で、汁の實や魚の切りやうにまで小言が絶えない。舊士族で馬術師範の家格だが、維新後間も無くこの村にお在郷したので。一人息子の家督は某宮家に調馬の奉公をして長く東京生活して居た。

すると奥さんの意見には、一旦那樣、板橋の家さも廻らなくては不可ませんべ。直ぐ向合つて居て知らん顔も出來まい。」と云ふ。

奥さんも、矢張り士族の出で、良人に別れ、子供に別れ、不仕合な體をこの石岡へ後妻に來たのだ。最う十四五年にもなる。頭が高いと云つて隣近所のうけは餘り好くなかつた。「なに關ふもんか、あんな畜生めら、知らない顔してる方が

「好い。」といつこゝな隠居は直ぐ憤つた聲である。

「そだつて、然うは参りますまい、源兵衛は兎に角源左衛門に悪い。それに、身寄身系も多いんだから。」

「あいつは馬鹿だ。畜生の親だ。」と隠居は喫半しの煙管を煙草盆に當り亂らす。

本性は庄司だが、板橋の名が好く通つて居る。その板橋は今でも門前の小川にかゝつて居る——他の家は多く土橋だ。當代は源兵衛、弟の源七は役場の雇をして居る。親父の源左衛門は今年九十幾つで、門脇の非島に小さな家を建て、今年十六になる末娘のおふよと一緒に居る。一昨年先の婆様を見送つた當座はひどく力を落して、自分もブラ／＼病にかゝり、些とぼけたやうだなど噂された位だが、間も無く何所からか茶飲相手の今の婆さんを見付けて来てからは又元通りの元氣になつて、私得島の指圖やら青物市場の懸引を自分一人でやつて居る。脊は高い、骨組も好い。寄生蟲でも居さうに臉のゆるく重張れた、黄色い顔の老爺だ。心の鈍さを表はす口尻は何時も白くとがめられて居る。龜の子の胴亂を腰に下げて、青竹の杖をついて、裾をバサ／＼と河原町（青物市場のあるところへ）と出で行く、年中白手拭の鉢巻を眞向にだらしなく結んで居る。兎に角その板橋へも顔を出す事にした。

先づ水車場に五兵衛を訪ねた。新調の袖羽織に袴、氣耻し

「あゝ然りですかい。」と、僕の挨拶を立ちながら聞いて、いやに尊大らしい口を利く——まるで旅すがりの遊藝人でも扱ふ風だ。そして、その、小さな狐目で、僕をデロ／＼見て居る。

「何分馴れない事ですから、是非一つ御助力を仰がねばなりません。」

「免状はあるかね、開業醫者の。」

「ですから、當分、本院の名義を借りる積りなんです。」これには僕は頗る参つた。でも、長く某病院の助手をしてゐて、その道には多少の自信ある事など、搔つまんで話した。

「年は幾何だね。」

「二十六です。」

「御家内は。」

「まだ、獨身です。」

「そだが、二十六には老けて居すね、誰が見ても三十五六だ。」と、五兵衛先生は笑ひながら前掛の埃をバタ／＼と叩いて、

「ま、上つたら何うだね。」と、應場なものだ。

處へ、學校歸りの赤ツ毛の涕を垂らした小娘が、「五兵衛爺ツあん、役場から頼まれて來した。」と鼠封筒の手紙を持つて來た。そして、不審さうに僕をデロ／＼見て、バタ／＼と駈出して行つた。

「又だ、盡甲斐の無い事ツた。」五兵衛は手紙を讀んで、さて、勿體らしく眉を蹙めた。

い黒の中山帽子も被つた。何所までも悪丁寧に下々と出て、遜つた様子を見せた。先方を喰ふ氣だ。

五兵衛の水車は、廣々した植付前の水田を前に、村はづれ庚申堂の直ぐ傍にある。杉皮葺の、横に細長い、堀立同様の平家。眞向の風當りを恐れて、掌くらみの石塊を屋根一面にならべてあつた。これが搗場、二間ほどの恐しく床の低い住居をそれに懸下げてあつた。

店頭の往還には空荷馬車が一臺つないである。臺の長い駄馬はその重い車を引擦りながら、そちこちと路傍の青草を食んで居た。家鴨が五六羽ケツ／＼とこぼれ米をあさつて居た。

榎木の伸芽が風に光つた。

五兵衛は白前の土場、稼場に仕上りの俵をく／＼つて居た。二十幾臺の立杆はゴト／＼ゴト／＼と煩さく、目眩しく地響して、話聲もロクに聞えぬ。腦が疲勞する、頭から糠だらけの若者が二人、房州砂を石臼に添して廻つて居た。土間へ入ると埃臭い濕氣が冷やりと顔に當る。

頭のグルリ禿げた、瘦た小男が五兵衛である。その癖年は存外若いらしく、四十を出て幾らでも無いと見た。頬骨は高い、手足の小さな、皮薄い顔立——まア百姓ばなれのした顔立である。慢性の結膜炎とか云つて、青眼鏡の素透を掛けて居た、紺の無尻に帆木綿の前掛をしめて、節不似合の海老茶毛絲のシャツを伊達らしう着て居た。

「何か急な御用なんですか。」僕は飽迄先方の意を測へて、故と大業に尋ねるのだ。

「何有、學校の改築事件で又委員に引張出されたんでがすが、斯う何にも彼にもやらせられては、全く盡甲斐がありません。全體村長が無能な人でがすからな。」

「然し、公共の事業ですから、まアやるだけが名譽です。」「名譽だか何んだか知れないけど。斯う一々引張出されるのは耐りせんよ。」とユツタリ組んだ後手に落付を見せながら、小さな目は忙しなく、若者共の白上げを眺めて居たが、「おい多利、それで針庄は上りだな、そんだら直ぐ、丸三の五俵を仕掛ける。二番白で好いぞ。それから荒井の七俵だ。」と大聲に指圖して居る。

「旦那、針庄は米が悪るいかして餘程切れした。何うしすな。」と、多利と呼ばれた若者である。

「馬鹿、そんな時にや節を加減するんだ。」

「はオ。」と、鈍さうな多利は篩場の方へ行つた。茶の間へ通された。窓の高い薄ッ暗い間だ。土間にギツシリ積上げた米俵で風が些つとも通さぬ。時折門や壁の隙間からフツと吹込む糠埃に、そこら一面に白い。疊に足跡が付きさうだ。新聞紙を貼詰めた壁際に、榎木目の長火鉢ばかり不似合に目に付く。大きな飯鉢が眞中に投出してあつた。顔に、手に、蠅がうるさい程居る。河原町へ買物に出たとかで、女房は居なかつた。

「さ、とどら無いけど。」と五兵衛は花菖蒲を僕に敷いてくれて、自分は火鉢の前に無慮な胡坐を掻いた。そして、僕を呼ぶに君、君と友達附合である。

鐵瓶も冷めて居る。火も無い。縁の缺けた瀬戸火鉢にマツチを添えて出した。

「一日に餘程搦ませう、何の位？」

「何有知れたもんでがすよ。今年は今十臺も殖して見ンベかと思つてるけど、何しろ今でさへ體が引張足ンない位だから思ふやうに出来せんぞな。」

「結構です。急しい位でなくちや不可ない。斯うして、誰に頭を抑えられると云ふ事も無く、自分の額に汗して公明な生活をして居られるのは實に羨しいと思ひます。」

「大きに、そこはがすな。これで、天皇陛下を除けば、誰の前でも威張つて胡坐かいて通れるんでがすからな。」と顎を開いて得意さうである。「そだから私は何時でも云ふんだ。勞働は神聖さ、ね、國家の事業でがすからね。國會議員は月給を貰つてる、われ／＼は村會から百文も貰はない。それで渠奴等以上の事業を働いてるんだ。」と滔々として大氣焔である。氣が張つて來ると、妙に熱心な演説口調になつて、慷慨の拳を叩いたりするのだ。

僕は好い加減の相槌を打ちながら感服して聞いてやつた。女房が歸つて來た。脊の低い、色の黒い、鈍さうな顔の女である。そこに突立つて、口をポカンと開いて、不審さうに

僕も笑つて立上つた。

區長の家に廻つたが、これは役場へ行つた留守。

次に村一番の金持と云ふ、虎之助の家を訪ねた。これは五兵衛と違つて、些いと喰へない老爺らしい、何を云つても、「んね／＼。」と畏つてばかり居て、相手にならぬ、二言目に「俺やうなはア在郷者は駄目で御座りす。」と遁を張つて居る。

歸り路に寄つたのが、板橋の源兵衛の家である。先づ隱居所の源左衛門に顔を出した。

源左衛門は例の鉢巻で、狭い座敷の眞中に胡坐を掻いて、パクリ／＼煙草を燻して居た。隱居所とは云ふものゝ、高が六疊一間の臺所があるばかり。それも半分は手前の手を貸して建てたらしい、それは粗末な普請——この邊の百姓は大抵屋根小前ぐらゐを自分で葺く。坩黒い荒壁は日に乾割れて、雨が透した所だけ白く微腐つて居る。床も低い。庇も浅い。

六月にも近いと云ふ日中に、老爺は厚い綿入れを二三枚着ぶくれて坐り直した前から膝頭がだらしなく覗いて居る。その茶飲仲間と云ふ今の婆様は、澁紙のやうに顔の赤焦けた、目のシヨボ／＼した、源左衛門に較べて立つたら、やつとその腋窩までもあるまいと思はれる程小さい六十恰好の婆である。小さな本田番に結つて居た。喘息らしい咳嗽をゴホ／＼して居る癖に、始終煙管を離さない、喋る事も好く喋る。愛

僕を見て居た。斜視のやうだ。

「これ、この人は今度石岡だんぼの家さ御座つた先生様だ。」女房は黙つて、些いと辭儀したばかり「河原町の相場は七十錢だとき、上るばかりでがすぞ。」

「然うかな、由三は大喜びだべ。」

「最少し待つたら、もつと上るかも知んねえね。」と安双子の絆纏を脱ぎ捨て、無愛憎な顔してツイと出て行つた。

五兵衛は又前に戻つて氣焔を吐き始めた。

「それぢや、何れ又御伺ひしますが、何分とも宜しく御頼申します。」と歸仕度するを無理に引留めて、

「好うがす、出来るだけ力になりすべ、貴方も亦一生懸命に稼ぐんだな。第一藥價だかな、ありや成丈安くするんだね、折角俺が口を利いても、今度の醫者は高いなんて云はれると困るから。」

「承知しました。出来るだけやります。」

「私はこれが病氣でがしてな、頼まれつと厭んだと云はれねえ性分だ。この前も矢張り、石岡だんぼの家に居た何とか云ふ醫者に頼まれてね、閉上邊の諸親類まで觸れ廻つたもんだ。それで一文になるでなし、女房にや大小言を喰つたのしや。」と顔を見せて大笑ひである。

「その氣質を飲込んで、お頼みに上つたんです。」

「は／＼は／＼、君にひどい所を見込まれたもんだ。人が悪るい。」

憎好く澁茶を汲んで出したが、磯く伸びた爪垢を見ては些いと飲む氣になれない。

用の話が済むと、婆さんが切つて出す茶漬をお茶受けに、くだらない世間話である。奥州の田舎では何よりもこの漬物をお茶受けにするのだ。

「そんでは、はア、貴方は未だ奥様が無いのかね。」と源左衛門老爺は、咽喉にゆるい、だらしの無い聲でグツリ／＼と云ふ。

「まだ修業中の體ですからね。」

「なんぼ、修業だつてはア、奥様持つて修業出来ないち事あるめえ、獨りぢや徒然でがすべ。」と厚い唇でメラ／＼と笑ふ。

「甘い事ばり云つて、先生様が嘘でがすよ、チャンと好い奥様を隠してあんだから。」と婆まで口を入れる。

「そだべえな、そでなくて、この年まで一人で御座る筈ないもんな。」

然うでがすとも、今時の若い人ア仲々油断なんねえからね。」

「そだども、そだども。俺ア若い時分とはア、まるで世の中別だかな。何うでがす、貴方、婆様にあてられしたべ。」

僕は黙つて笑つて居た。

「そんな事云つて、内の爺様だつて若い時は随分道樂して、そりや手も付けられなかつたと云ふからねし。餘所の後家を

探して歩いたりね。」

「嘘でがすぞ、宜い加減な事云つてる。」と、老爺は大口を開いて鈍い濁つた聲で笑つて居る。

「何んで嘘でがすけな、俺ア皆聞いて知つてるもの。正作とこの婆様とも、昔ねんごろしたちけな、そいから、一本杉のあれともだとさ。」

「あんな事云つてけつかる。」と、目を下げてエヘラ笑して居る。

「何しろ若い頃は、下帯を獨りで結めた事ないツて爺様だからね呆れた人さ。」

「俺の事ばり云ふけど、婆様だツてはア随分、知らねえ顔は出来めえ。」

「俺アそんな事はアせん。貴方であるまいし、そいに俺ア若い時から男は大嫌いなんだもの。」と、妙に眩しいやうな顔して老爺を見上げた。

「何うだがな。」

「何うだがつて、本當の事がすよ。」

「何うだがな。」

「そんたら云つて見さんせ、證據もない癖に口から出まかせ云つてる。俺ア日天様かけても賭すツから。」

「まア、云はなくとも好げすよ。俺ア本當に知つてるんだから。」

「あれだもン。貴方には負けすよ。」と婆はさも怒りましたと云つた顔をする。

云つた顔をする。

「あはゝはゝゝゝ。」と老爺は又だらしなく、空を突向いて笑つて、「そだけんど、あれで石岡だんほこそ油断なんねえ、今こそあゝしてお袴など穿いてしち八釜しい面しているけんど、昔はア、何うしてゝ爲方の無え道樂者だつた。舎弟の源三さんと同じ女子張つた時なぞ大騒ぎだツた。」

「今の奥様来てからかね。」

「未だ來ない時分の事さ。今の奥さん來てからはスツカリ直つた。餘程取扱ひが好いと見えてな。」と、こんな話をして居る所へ、悴の源兵衛が忙しさうに入つて來た。

源左衛門老爺の悴である。顔まで好く似て居る。茶棹縞の手織木綿の綿入に同じ羽織を厚着して居る。大きな白足袋、色褪めた毛織子の蝙蝠傘を持つて居た。年四十に近い、唇の厚い、痘痕のある男だ。

縁先に突立つて、「お父さん、困つたな、裁判が何うも面白くない。」とキョト／＼忙しさうな口振りである。

「甚吉の方かな。」と老爺は日和に鈍い目を向た。

「野郎旨く代書人を抱込みやんつたと見えて、此方に不利益な申立ばかりしやがる。寧ろその事、刑事問題にして告訴すれば好かつた。然うすりやグウの音も無いんだ。」と獨りで力味んで居る。

「一體、どれ位貸したんだな。」

「何有、金は些つとさ。そだけんど、黙つて居ると、癖にな

るからな。グン／＼訴へてやるんだ。畜生、覺えて居るが好い、今に刑事の示談にしてウンと取つてヤツから。」

「然うすつと、又裁判所通ひだな、田植前は困つたもんだ。」

「田植なぞ何うだつて、義務は義務だから、訴訟しても取つて見せる。」と額の汗を汚ない手で拭いて居た。

老爺が僕を紹介しても、う、う、とばかりで耳にも入らない様子である。

「これだからな。」と襟側に腰かけて、懐の服紗包を出して、何か知らぬ證書らしいのを老爺に見せて居た。他にも證文や裁判所用紙に書いたものがドツサリ入つて居た。

あの家の家

一

その年の十一月、私の居た南小泉村にデフテリアが激しく流行した。尤もその年は甚しい雨続きで、百姓どもは立薬の相場を心配して居た。提灯張り茂三の伴が初發で、僅か一月ばかりの間に、十二三名の新患者を出した。小學校は當分臨時休業、縣廳から視察醫員が来ると云ふ騒ぎ。頸曲りの區長は朝ツばらから酒臭くなつて、「主等も銘々に氣を付ける事ツた。病人一人出る度に此方等の手数がどの位だと思ふ。納め金ばかり責めるツて小言吐かすが、こんな時の事を見せい。」と赤筋張つて小作人の女子どもを叱り付けて歩いた。

で何の病人も初めは狼狽して必ず私の所へ連れて来る。併し、身上の爲る家はデフテリアと聞くと直ぐ仙臺の醫者を呼寄せるので、終ひまで私の手に掛つて治療を受けた患者はやつと四五人位しか無つた。何れも村で數へられる貧乏人ばかりだ。病氣は癒しても藥禮は些つとも集らない。診察料どころか、少し癒りかけると藥取りにも來なくなるのが多い。母屋の石岡隠居と相談して、血清は前金の事と嚴重に長押へ貼札までしたが、矢張り何にもならなかつた。無いものを取ら

うとは云ふまいと、高を括つて憎いほど猥るく構えて居る。年寄のある家は中でも困らせた。

扱つた患者の中で、一番經過の不定型なのは、馬車曳き源作の娘であつた。その前にも耳で二三度來たやうだが、顔の蒼膨れた、見るから執拗らしいおぢうと云ふ女兒であつた。

雨の降る晩、夜更けた門を叩いて、脊の低い源作は五つにもなる娘を、素肌を負つて來た。

「先生様、これでも矢張り馬牌風がすかね。」と寒い所いもあらうが、顔色を變へて頓へて居る。

然し、些いと見た所では確にデフテリアとは云はれない。單純な扁桃腺炎でも小兒には斯う來る事がある。熱も八度以下、咽頭も然ら腫れては居ない。唯氣掛りなはグツタリ頸を横に曲げて、始終痛さうに唾液ばかり飲んで居る。で、源作に然う話して聞かせると、「然うですか、そんなでは難有いな。若し馬牌風なぞなら、俺ア何せうすべえかと思つた。」と胸を撫で、喜んで居た。

尙ほ念の爲め聲音を驗さうと思つて、種々愛措なぞして見たが、兒童は源作に繼り付いてしぶとく口を利かない。意地悪い上目遣ひして、デロ／＼此方の顔色ばかり窺つて居る。源作がハラ／＼して、叱つたり嚇したりして見ても駄目であつた。

「随分剛情な兒だな。」と私は口を利かせる事を思切つた。

「然うでもないんですがね。矢張り先生様が恐いんですがすべもの、誰にでも斯うでがす。」と親父の方が小さくなつて居た。

兎に角、その晩は一號の血清を注射して經過を見る事にした。

次の朝も源作は仕事を休んで、おぢうを負つて來たが、様子は大きく變つて居ない。耳下の腫が心持赤味を持つたやうだ、「こゝ痛いか、痛いか。」と鉛筆で些い些い壓して見ると、ピクリ／＼とその度に身體を縮める癖に、剛情に泣きもしない。手に二錢銅貨を固く握つて居た。

「何うで御坐りすべ。少しは良い方で御坐りすべかねし。」と源作はオド／＼して私の顔色ばかり氣にして居る。源作は小鬚に火傷跡のある、鼻も口も思切つて小さな、苦勞性らしい小男である。

「然し、餘り瘦せやうが甚いぜ、病人だから少し氣を付けて養生させなくちゃ不可いよ。」

「は。それでも貴方、食なざア随分好い方で、俺よりも澤山喰べる位でがすがね。今朝も鶏卵の大きいのを二つも喰べて來たんでがす。」と悪い事でも謝るやうに、眞赤になつて言譯して居る。

穢い襦袢に纏つて、柱に凭掛けられたおぢうは、息をゼイ／＼鳴らしながら、力無い目の隅から二人の顔をデロ／＼見較べて居た。

「鶏卵も鶏卵だが、牛乳は是非飲ませろ。それに、こんな雨降りの中を連れて歩いちゃ不可ない。他へ傳染したら何うする。家へ歸つたら女子へ然う云つて、暖かく寝かして置くだぞ。」

「家のお吉は上の家の刈上げの手傳ひで、二三日前から那方さ行つてるもんでがすから。」

「上の家ツて、丹野は何うでも病人は尙ほ大事だらう。若し死にでもしたら何うする。」

「いゝえ、丹野が大事だなんて、なんばお吉だつてそんな譯ではがアせん。世間でこそ色々な事云ふけど、俺ア何んとも思つて居せん。」と年には限びた顔を混雜させて、何氣なく云つた私の言葉を切りと打消して居た。そして、「何んの彼ののと云はれて詰らんねえ。歸りは上の家さ廻つて、無理／＼でもお吉を連れて歸りすべえ。」とブツ／＼云ひながら歸つて行つた。薬局の小窓から見ると、低い下駄を穿いて畠の泥濘をピシ／＼と濡れて行く後姿が、雨の中に小さく見えた。

「あの通りの馬鹿でがすからな。年中女房を他の自由にされて居るんです。馬鹿な奴だ。あの女兒だつて誰の種だか判るもんですか。」と後でお茶の時に石岡隠居がこんな事を云つて苦々しがると、

「そだつて、大根と女房は盜まれる位自慢だつて云ふから。好いかも知れせん。」と奥様は齷を出して笑つて居る。

「丹野も丹野だな。要造の女房であんなに手を焼いた癖に、

まだ懲りないと見える。」

「要造はあんな三百代言見たいな奴だからだけど、今度ア小前の者だから安心なもんで御坐りすべさ。」

「丹野もあれで中々始末屋だから、考へてるな。」と老人も笑つて居た。

雨はビショ／＼と降つて、疊でも柱でも家中が濕氣臭い。

翌朝は源作の代りに、女房のお吉が薬取りに來た。頸の短い、肥つた、色の白い、奥州特有の農夫の娘であつた。源作を三十五六としても、年は十四五も違ふらしい。病人の容態は何うだと聞いても、「別に變る事はないとしゃ。」と他に頼まれたやうな事を云つて居る。

「昨夜あたりから聲は嘎れないか。咳嗽は何うだ。」

「然うだね、然う云へば聲は少し嘎嘶れたかね。咳嗽は出いせん。」と薬を持つて歸つて行つた。

二

その午後は村役場に豫防法の會議があつたので、私は石岡隠居と一緒に、××醫師の代理に出た。そして、自分の意見だけ簡單に陳べて、蠅の煩さい小使部屋に皆の歸りを待合せて居た。

後から黄縞の袖の羽織を着た男が入つて來た。

「おい源吉、これでいつもだけ。」と小使を使つて土瓶に酒を買はせ、踏込爐に跨火しながら飲始めた。これが丹野に相違になつて了ふ。」

「ぢや、罪滅しに一度は見舞つてやるんですね。」

「罪滅しは好いだ、その度毎に幾何かつ、痛むからねえ、君。」と賑かに笑つて、酒の代りを小使に云付けて居た。

歸りは丹野の發起で、役場前の新茶屋へ寄つて飲む事になつたが、石岡の隠居と私だけは、そこで別れて、吹曝しの田圃道を歸つて來た。

「あの位な奴だけど、到頭あの身代を女で片付けて了つたからね。」と隠居は道々、丹野が小兒の時から道樂話をして聞かせた。

小泉へ歸ると、最うトツブリ暮れて居た。道の兩側から繞林が押覆さつた暗い道を、雨後の泥濘に氣を取られて來ると、板橋の多助の家の前に、提灯に灯を點した新しい俵が一臺待つて居た。

「あゝまだ死なゝいと見えるね、仙臺から醫者が來てるやうだ。」と隠居は杉垣に寄つて用を達しながら耳を澄すと、ヒュウ／＼と筒を飛ばすやうな、病兒の呼吸遣ひが眞暗な薬屋根の中から洩れて聞えた。

ないと見て居ると、先方でも些い／＼相手欲しさうに見て居る。煙草の脂で齒が、眞黒く染つた。頸に絹ハンケチを巻付けた三十恰好の男であつた。

「何んだ、高が二百圓。何時まで吟味してるんだ。」と此方へ聞かせる積りか、ブツブツ云つて居た。

「君ですか、その石岡隠居の家を借りて、開業したと云ふ醫者様は。」と到頭口を切つて來た。「何うです、患者はありますか。悪いものが流行りますね。いや、然うぢやない。君等から見ると好いものが流行るんだつけ。」と罪の無い事を云つて笑つて居る。村の者の話には、好い身代を大半飲み潰したの、女狂ひして死ぬまで本妻の傍に寄付かないの、慢心者だのと色々の噂もあるが、見た所は到つて奥底の無い、交際好さうな人に見えた。

「時に源作とこの病人は何うです。助かりさうですか。」

「まだそんな程ぢやないやうに見えすが、何しろあんなのは却つて重く來るものですからな。」

「然うですかね。何うせ助からないものなら、早く片付いて了ひば好いに、傍ばかり迷惑な話さ。」

「然うも行きますまいよ。自分の兒として見たら。」と云ふと、

「誰の子だかそんな事が判るもんですか。事に依つたら私の子かも知れないんだ。」と反返つて笑つて居た。

「貴方もですか。」

「醫者様にはかり好い錢を取られる。」と隠居は獨言のやうに云つて、後からトポトポと跟いて來た。

家へ歸つて見ると、源作の所からは何んとも云つて來ては居なかつた。

三

久し振りに天氣が晴れた。川端へ散歩に出掛けた序に、源作の家を見舞つて見ると、表の戸も雨戸も閉つて居る。戸を叩いて呼んだら、馬屋の方から汗を拭き拭き源作が駈けて出て來た。

私の顔を見ると餘程慌てた様子だ。「病人に變りがないもんでがすから。」と目をキョト／＼さして居る。好くある事だ。醫者を取換えたのだらうと、思ふと、然うでも無いらしい。

「お吉、お吉。」と自分は泥足ゆゑ、雨戸の外へ廻つて何度も呼んだが返事がない。病人の寢息だけが荒らく聞こえる。「又寢惚れて居やがるな。」と中へ入つてガタビシと戸を開けた。

ムツと微臭い、暗い簾敷の座敷に、薬が喰み出して薬蒲團の上に、お吉は腕を投出してグウ／＼寢て居る。二三日の間に見違ふほど變つて、頬の邊など全く鉛色に衰えた病人はその傍に小さくなつて眠つて居た。矢張り銅貨を手に握つて居た。そして睡りながらに、時に犬の吠えるやうな咳嗽をして居た。

「こりや不可ないぞ。」と私は一目見るより、病症が喉頭を犯

した事を知った。
「駄目ですかね。」と源作は急に狼狽して、お吉を揺起したが、女は半分夢の中で、肉付の好い胸元を擴げて病人に乳を含ませようとする。

「馬鹿、お醫者様だぞ。」と亭主に叱り付けられて、目を覺ましたものゝ、矢張りボンヤリして蒲團の裾に坐つて居た。頸筋の肉が呼吸する毎に膨れ上つて、口も小鼻も開いて居る。胸を開けて見ると、心窩は脊中へ喰付くほど陥んで居た。

「何んだって、斯う悪くなるまで打遣つて置いた。此方から来て見ないと、殺して了ふ所だつた。」
「先生様、そんなに悪るいんですがすかね。」と源作は最う涙聲である。

「悪いも好いも、貴様達が殺すんだ。何んだ、これは。」腹の上に襪襦袢に包んだものがある。源作は苦笑ひしながらそれを取つたが、ヒク／＼動いて居たから蛙に違ひない。

お吉は俯向いてホロリ／＼と涙を流して居た。
「兎に角、最う一度注射しよう。家へ駈けて行つて薬籠を持つて来てくれ。」と云付けても、夫婦は顔を見合はせて居て立ちさうもない。

「又錢が惜しいんだらう。そんな事云つてると死ぬぞ。」
「そんな譯では御座りせんけれど、先分も未だ濟んで居ないんですがすから。」と小さく言譯する。

が待つて居た。田舎町は眞暗な茅屋根の下に深々と寝靜つて、下駄の音が遠く響いた。

「幾つになる見だね。」
「去年の暮生れた兒しや。やつと抑え立ちする位なものでがす。」と空臈の老爺は夜深けの寒さに、提灯持つ手をガタ／＼顫へさせて居る。

「然うすると、今度の上さんの子だね。急に悪くなつたのか。」

「なアに、晩方まで子守に負はれて、表に遊んで居したツけ、急に咳嗽を爲出して、甚いもんだね、あれ／＼ツて見てる間に聲も立てなくなつて了ひした。そいに、旦那がああ通りだから家内中大騒ぎさ。騒いだツて何うなるツて譯でないけど、性分とて爲方の無えもんだ。何うも今度の御内儀の血筋は病ひ甲斐ないやうだ。去年は去年で大きい方が腦膜炎で二月も病院さ入る。又今度も死んだ活きたで金が掛かる。本當に身代潰しの兒どもだ。困つたものだ。」

「又雨かね。酷く寒くなつて来た。」
「さア、未だ待つてるやうだね。」と星も無い暗い空合を見上げて。

「丹野の家も以前は好かつたんですがね、俺ア年期に來た頃は素晴らしいもんだつたが、今の旦那が馬鹿したもんだから今ぢや年貢取つても借金の利息に廻はんねえだから、困つたものだ。總領の徳之助でも大きくなつたら何うだか知れない

「金錢の事を今云つたツて爲やうがない。早く薬籠を持つて來るのさ。」と急立て／＼も屈托して居て動かない。

「だら爲方ないから、上の家の旦那へ話して見べえかねお吉。」

「然うさね。だけんど、又眼から火出る位叱られツからね。」
「そだツて、針爲なけば助からないと先生様は云ふしな。」と悄れ切つてる。

で、私は源作を叱り付けて、無理に薬籠を持つて來させた。注射針の痛みで小兒は目を覺して激しく泣き立てたが、聲はスツカリ噎れて、言葉は全く聞取れなかつた。源作は獨りチリ／＼廻りして小兒を賺して居た。

「源さん、本當に死ぬんだべか。俺ヒク／＼とするの見てるなア厭んだな。」とお吉は病人の顔を凝つと見て居た。

四

「Mさん、Mさん。さア本當の病家です。」と夜中に起された。丹野の娘が急に悪るくなつて、迎の者が來て居ると云ふ。

「睡たいのを我慢して行つても、今度は我慢甲斐がありませんぞ。氣張り屋の丹野の事だから、起し賃くらゐの事は黙つて居ても爲いすぞ。」と奥さんは片合はせの裾をズル／＼引擦つて薬籠や何かの用意を手傳つた。

提灯を持つて、峯吉と云ふ、敏頭をして居る丹野の老爺が、これも十四で學校通ひしてるんだから、海のものとも山のものとも判らない。」と獨りでブツ／＼云つて居る。

「峰老爺は獨りなのかい。女房持つた事はあるだらう。」

「一度持つて見いたがね。持つたツて爲方ねえから相談づくで分れた。今、ほれ、一本杉に掛茶屋出して田樂屋の婆さん、あれが然うがすよ。今でも時々寄つてはその頃の話して笑ふのしや。」

「却つて暢氣で好いだらう。食ふ事の心配は無しさ。」

「然う云へば然うだが、これで餘り暢氣でも無いんだね。」と齒の無い口で笑つて行く。

門を入ると、馬屋續きの若者部屋に灯が見えた。峯老爺は軒先から大聲に聲を掛けた。

「多利か、今から何んするんだ。」

「なアにな。これから仙臺の病院まで行くんだとさ。外ア寒むかんべえな。」と若い者の聲が聞こえた。

「又他愛も無い馬鹿錢費ふ。あんな鼠の赤子見たいなもの、死んだツて何んだ。風引くから、臙斗着て行けよ。」と峯老爺は小言を言ひながら重い臺所の戸を明けると、

「馬鹿、靜かに／＼。」と中の中から叱り付ける主人の聲が聞えた。

「俺ア悪いんでない。戸に文句云はせいよ。」と老爺はソソソ入つて行つた。火の無い爐傍には近所の輩が三四人、膝を並べて野郎疊の上に寒むさうに坐つて居た。太いテカ、煤

光りする柱には、「三年間、諸事儉約。」と貼出した。その紙も最う煤ぶつて居る。

「源作とこへ寄つて来たかよ。」と清太郎は腫ぼつたい顔して次の間から出て来た。

「寄つたつて何ぜうにすべえ、向ふだつて病人あるんだもの。」と爐傍へ寄つて煙草入を拔出した。

「困るなア、明日の朝早く河原町まで馬車引かせたいんだがな。」と自分の事に紛れて、私なぞには氣が付かないやうであつた。

「馬車なら俺が引いて行きすべえ。なアに、譯は無え事ツた。」と近處の者の一人が行つた。

「然うかね、では御苦勞だけれど、十二三俵だから河田屋まで搬んで貰ひすべ。」

私が診察して居る中に、後からく河原町の醫者が二人も駈付けた。病状は餘程激しく来て、二號注射液を二頭も注射したが、中々利きさうは無い。嬰兒は些つとも凝つとしては居ず、小さな掌を握り締めて聲を立てる力も無く床の上を顛轉して居る。若い後添の妻君は最うオロ／＼して泣いてばかり居る。

醫師仲間の協議は、直ぐ仙臺の病院へ送つて、氣管切開するより外に策は無いと決つた。その話を清太郎へ年長の醫者から話すと、清太郎は一耐りも無く眞着になつて了つた。「それ、別家の伯父さん呼んで来いよ。」と自分は立ちもしな

にも當惑して居る。

「あの婆さんぢや、とても小兒の看護は難かしい。矢張りお吉を連れて来なくちや駄目だ。全體、こんな病人を抱えて居て、遣る奴も遣る奴だが、行く奴も行く奴ぢやないか。」「んてがすけど、丹野へはお吉も長らく奉公して居たもんだで、諸道具の納ひ所でも何んでも、家の人達より好く知つて居るでがす。今度来たお連は未だ馴れねえ、是非来て居ろつて旦那が云ふもんでがすから。」と話す間も楷火を弄つたり、咳拂ひしたりして、私の顔を見ないやうにして居る。

「そんな事ばかり云つてると、病人は死ぬぞ、承知か。」と嚇して見ても、黙つて俯向いて居た。

「確りしないか、馬鹿な男だ。」と叱り付けて歸り掛けると、源作は見送りに立つて来て、然も云憎さうにモチ／＼しながら、

「先生様、實は何時もく来て頂いても、診察料も上げられないので、俺アはア……。」と眞赤になつた。

「そんな遠慮は明日から後でして、今日は先づ病人を大事にしろ。」

「そいに、注射の分も一本だけ借になつてるもんでがすから。」とオド／＼して戸口に立つて居る。

家へ歸ると、地木綿の短い羽織を着た二人連れの作男が所の風で、晝中灯の點いた提灯を下げながら、丹野の小兒のお知らせに來た。氣管切開後経過が悪くて、今日の正午頃病

いで、臺所の方へ差圖して居る。下駄を突掛けて駈出す音が聞こえた。

「お父さん、駄目なのか。」と先妻の總領で十四になる徳之助は睡い目を擦りながら起きて來た。

「貴様なぞ、那方へ行つて。何んだ今頃起きて來やがつて。」と清太郎は險しく叱り付けた。

五

その晩、その翌日の経過で見ると、源作の娘はデフテリアの危険期は通り越したやうだが、何うも肺炎を併發したらしい。熱はグツト上つて、細長い胸膈は樽のやうに膨れ上つた。そして、肋骨は鉛色に皮膚から透過つて見える。他の顔さへ見ると、「うま、うま。」と喰物の讒言ばかり云つて居る。

お吉は又丹野夫婦の留守居を頼まれて、上の家へ行つて居て、近所の老婆が手傳ひに來て居た。

診察して居る間も、源作はなるべく私に近寄らぬやうにして、病人の世話を年寄ばかりに任せて居る。爐傍に胡坐掻いて煙草ばかり吸つて居た。この頃の源作には一體にそんな様子が見えた。私に話掛けられるのを妙に恐れる風があつて、藥貰ひに來ても縁側の隅ツこに小さくなつて居て、何うすゝめても座敷へは上らなかつた。

「源作、病人は些と長びくやうだら。」と、手を洗ひに臺所へ來ると、源作は急に姿勢を直してお辭儀したゞけ、返事する

院で死んだと云ふ。

「態々の所、御苦勞でげした。」と石岡隱居が矢張り所の風で勞ふと、

「ま、これで二三日ア鱈腹小豆餅に有付けツからなア。」と若い者は笑ひながら出て行つた。

六

死んだ小兒は未だ病院から歸つて來て居ない。床の間には戒名の無い位牌へ線香を立てゝあつた。茶の間には近所の者やら弔み人やらが詰掛けて居て、臺所には手傳ひの女子どもが賑かに喋りながら庖丁を鳴らして居る。お吉もその中に交つて禪がけで働いて居たが、私の顔を見ても格別挨拶するのでも無い。

峯吉は草鞋穿きのまゝ木尻に腰掛けて、手盛りで飯を詰込んで居た。喰ふだけ喰ふと、膳を投出してサツサと何處かへ出て行かうとする。

「峯吉小父ア。急しい遁げちや駄目だよ。又一本杉さ行くだべえ。」とお吉は笑ひながら聲を掛けた。

「馬鹿吐かせ。俺アお寺の方を掛合ひに行くんだ。」

「嘘だ、お寺さは多利が行つたもん。そんな事云はねえで薪木でもこなして下れせいでよ。」

「厭んだね。俺ア昨夜から夜通しだ。佛様だか蜜柑箱だか背負はせられて火葬場まで行つて來たんだから、不淨落しに一

杯引掛けて寝べえ。旦那歸つて來たら寺さ行つたと云つて置
くんだぞ。あの佛だらそんで澤山だ。」と笑ひくく出て行つ
た。

お吉は物置へ出たり入つたりして、獨りでツリく働いて
居た。

そこへ清太郎は可也酔つて車へ乗つて歸つて來た。目を赤
く腫らして居る。

「何んだ。甲みに來てくれた人にお膳も出さないで、早く用
意しろよ。今に火葬場から皆が歸つて來ッぞ。」と大聲で臺所
へ云付けて居る。今まで手持無沙汰に堪へて居た人達も、急
に煙草入を腰に納めて座敷のお膳へ坐つた。私も無理に強い
られてその席へ出た。

席がやゝ亂れて、話聲が高張付になつた頃、源作は穢ぎ着
物で縁側からオツく甲みを述べに來た。清太郎は最うグラ
グラに酔振つて、議論にもならない政治論なぞ始めて居た。

「源作か、好く來て呉れた。まア坐れ。色々世話掛けたが、
到頭駄目だッたぞ。」と清太郎は据はつた目で小作人を見て居
る。

「然うでがしたつてね。嗚はアお力落しでがすべ。」

「まア主のお膳も此處へ出させるから入つて坐れ。」

「こんな扮装して居すから。」と源作の迷惑がるのを無理に引
上げて、叱り付けるやうにして酒を飲ませた。源作は遠慮を
爲い／＼飲んで居る。

病人は蟹のやうに毛深い瘦せた手を夢中に振廻して、矢張り
食物の謔言を云つて居た。瞳孔は餘程開いた。

戸口まで出ると、眞赤に酔つた源作は氣持好さうにフラ
フラして歸つて來た。私の胸倉に擱つて離さない。

「ねえ、先生様、人を助けるのはお医者様の役だ。俺ア知つ
てる。験が無いから験が無いと云つたんだ。悪るい事アあん
めえね。験があればあるッて、俺ア正直に云ふさ。誰に憤ら
れたッて關はねえ氣なんだ。然うでねえか、ねえ先生。」と卷
返しく／＼同じ事を云つて居た。そして、貸すと云ふ金も借り
ないで來たと云ふ。

「あれが旦那癖なんですか。酒飲んだ時はあんなに氣大き
くなるけれど、覺めてる時ア、そりや音齧なんだからね。俺
チャンと知つてをんだ。そこへ行つちや、お医者様は違ふも
んだ。なんぼ俺見たいな貧乏人だつて療治しねえッて事アね
えさね。爲ないッて云つても俺ア聞くもんでねえから。」と私
の顔色を窺ひながら云つて居る。
その三日目におぢうは死んだ。

「何ぜうだ、源作、主とこの兒も病氣だつてな。少しでも好
い方になつたか。」と誰かに聞かれて、「何んだかはア、些つと
も験が見えねえで困りしてがす。」とうつかり言掛けて私の居
るのに氣が付き

「あッ、先生様。」と眞赤になつて狼狽へながら、「なにはアそ
の、病氣の性質も、餘程悪るいんでがすべもの。」と斷々にト
チツて居る。

「はははは。源め失敗りやがつた。」と皆に笑はれて、源
作は泣き出しさうな顔になつた。

「なにはアその私どもの活計だから、養生物ばツて満足にあ
てがはれねえでがすもの。薬ばかりで験の見える筈はがアせ
ん。」と切りに謝つて居た。

「源作、主も困つて居べえ。何ぜうして暮らしてる。」と目の
吊し上るほど酔つた清太郎は氣が大きくなつて、「困つてる事
ア無えぞ、錢貸してやんべえ。何んぼだ。」と思掛けなく云出
したので、源作は何んと云つて好いか、度拍子を失つて、唯
頭ばかり下げて居た。

「何も佛様の爲めだ。俺が貸してヤツから、何んぼ要る。遠
慮なく云つて見たら好かんべえ。」と懷中から財布を出して紙
幣の小口なぞ見せて居た。

源作は頭ばかり下げて借りるとも借りないとも云はなかつ
た。

何うせ通り路ゆゑ、歸りながら源作の家へ廻つて見ると、

お灸屋の兄弟

土用に近いある日のこと。患家から歸つて見ると、机の上
に阿刀田支吉と云ふ名刺が載つてあつた。肩書に千葉専門學
校の學生としてあるけれど、自分には全く知らぬ人だ。金縁
の舶來象牙紙に活字も氣取つてゴジツク新型である。

何か言置はなかつたかと聞くと、何れ又來ますがお暇があ
らば尋ねて頂きたいとの事である。然うすりや近所の人だ。
折から奥様は留守。取次ぎに出た裁縫弟子のおうんは、その
金ボタンの制服姿の威に蹴られて、碌に顔は見なかつたが、
何んでも薄髭を立て、近眼鏡の若い立派な人だ。夏休みで一
昨日歸つたとか、そんな事を云つて居たと云ふ。何うも分ら
ない。

後で役場から歸つて來た家の主人に名札を出して尋ねて見
たが、隠居にも些いと思付かなかつたが、又考へて、「ソソぢ
や若しや竹家ダンボ所の總領息子かも知れせん。阿刀田は
阿刀田に相違ないが、あの息子の名が支吉ツて云つたかな。
何んでも東京さ修業に出てるツち話は聞いて居ましたがな。」
とも云ふ。

「竹家のダンボと云ふのは、一本杉のお灸師でせう。」
「さいさ。然しあすこのわらし（兒童の事）なら家さも何と

竹家ダンボは足輕か組衆か、何れにしても輕い身分の士
族である。今こそ稿の羽織なぞ引張つて、他の口も利き、相
應に人附合もして居るが、その以前十二三年前までは、笹作
を渡世にして、それを自分で觸賣して歩いて居たものだ。竹
屋ノと云ふのはその頃の名である。間で郵便の脚夫をして
居たのも僕等は確かに見て知つて居る。背のズッコリ低い、
甚い猪頭の、脚の短かい小男である。如何にも卑賤さうな面
構で、厚腫れた唇がワングリ上反つて、兩の目が海豚のやう
に小さく飛んで居る。五十を越して頭も禿げた癖に女子好き
で、好い下女婢の中に混り込んで何時も馬鹿にされて居
た。目尻を下げてエヘエ笑ひながら、そここの臺所を窺
き歩いて贅語を賣つて居る。何時か家に居た下女に悪戯を
して、柄杓で頭から水をぶっかけられて居たのを憶えて居
る。「本當にいけ好かない竹屋ダンボだ。商賣物の策が腐るか
ら早く歸らんせ。」などと云はれても、愚鈍さうな顔の箍を弛め
てゲタゲタ笑つて居た。

その中に家屋敷にも分れて、この一本杉に蟄息するやうに
なつた。そこで思立は灸師の看板である。徳四——竹屋ダ
ンボの名——の妻はもと或る町醫者の娘である。里方で見覺
え聞覺えた術を便に私得取りの積りで看板を出して見た。と
ころが、それが運好くも近郷近在の評判となり、今では日に
廿や卅の客があるやうになり、農閑の日や土用うしの日は百
近い數取りするさうだ。荒井の豆腐屋老爺の中氣を直したの

か云つて行く筈だけれどな。好く悪戯しに來い／＼したも
んだから。」と決めかねて居る。

「旦那さん。屹度然うで御坐りますよ。昨日土橋ン所で冬三
アん遇つたら、然う云つて居りした。お兄さんが東京から歸
つて來たんで河原町さ魚買ひに行くんだツて。」次の茶の間で
稽古して居る内弟子の誰かが言葉を入れた。

「然うか、冬三が然う云つて居たか。ソソぢや然うだな。」

「お兄さんが歸つたから、いと忙しのが猶忙しくなつて、
體が引張足ないやうだつて云つて居りした。」

「然うかな。あの竹家ダンボの伴がそんなに出世したか
な。」と隠居は未だ腑に落ちない風であつた。

竹家ダンボなら僕も知つて居る。小兒の時から顔馴染だ。
城下（仙臺のこと）から南小泉へ入る、俗に一本杉と云ふ
下町のお灸師である。今こそ仙臺市の内だが、以前はこの小
泉の内であつた。店格子に竹簾を掛下げて、切髪の婦人が灸
療治の繪額を出してある家がそれだ。雨腐れて重さうな茅葺
で、堀立ての坊主門の傍には柘榴の大株が咲いて居る。ダン
ボさんとも阿刀田様とも云はれて、この界限では醫者以上に
繁昌して居る。大抵の病人なら必ず一度はこゝの療治を受け
る。取分けて胃弱と心臓病には家傳の秘法があるなぞ云はれ
て居る。ダンボさんとは此邊の農家一般の通り名で、在郷せ
る士族を然う呼ぶのだ。

が評判のもとで、老爺は閑を潰して効能を説き廻つたのだと
云ふ。だから今では、大分貯つたらうの、好い株だのと近所
の噂にも出る位になつた。で、奥様——今では阿刀田様の奥
様で通つて居る——が點取の役、亭主の徳四は袴なぞ穿い
て、馬鹿話に田舎の女子連を喜ばせながら女の方を引受けて
居る。ツイこの頃も見掛けたが、何時見ても變らない顔だ。
もう六十だらうに、十年先きと同じ事である。

活計が何うやら立つ様になると、竹家ダンボの氣位が急に
高くなつた。人にも笑はれまいとするには小兒どもの教育が
肝腎だと云つて、長男は東京へ修行に出し、娘のうめは市立
高等女學校へ通はせた。たゞ末ッ兒の冬三だけは學校も小學
校だけで退さして、屋敷内の裁園畠や内外の雜仕事を一人さ
せて居る。眞逆續ッ兒でもあるまいに何う云ふものかと世間
でも怪んで居るが、飯時も冬三ばかりは木尻に畏まつて、雇
人扱ひされて居ると云ふ噂である。

冬三は好くこゝの石岡（僕の居る家）へも白水を集めに來
る小男の親父に酷肖似て、矢張り唇の厚い、鈍さうな顔付の
若者である。至つて無口な男で、通り合に此方から言葉をか
けてもヘエツと笑ふだけ、鉢巻を奪いで行過ぎて了ふ。然し
傍が彼是不審がるほど當人は別に氣にも掛けず、平氣で稼い
で居る。田植時なぞは餘所の日傭仕事まで取つて居ると云ふ
ことだ。

冬三の一心は豚にある、渠は一昨年あたりから豚を飼初め

た。縣農會より拂下げのヨウクシャとか云ふ内國雜種の豚を、屋敷鏡の小屋に丹精して飼つて居る。之だけは渠一人の私得財産であつて、誰の世話も受けず誰に世話もさせない、合所界隈の白水類を貫集めたり買集めたりして、夫の飼料に面倒を見て居る。子が子を産んで下から下へ敷を殖して行くのを待つて居る。初の二頭が此頃六七頭になつた。愚鈍の冬三もこの豚には全く眞劍であつて、なけなしの小遣錢を貯めては養豚何やら云ふ書物を東京から取寄せたり長町の農學校に出掛けてその飼方を見せて貰つたり、豚にかけてはからもう夢中である。一廉の身上隨をこの豚でおこす積りで居るのだ。

「豚は何せうがすね」と誰でもお世辭にそれを聞くと、渠は最うホク／＼喜んで、「サツパリ駄目しや。餌ばかり食つて些つとも肥りせん。手間にも合はないもんでがすね」と決つて然う云ふ。

「そんだつて、最少しの辛棒だ。あれが三十四も殖いて見さんせ、それこそ好い身代になるんだもの。」

「へ、何せうなもんだか」と涎をす／＼つて喜ぶ。そして、時も惜しまず豚に付いての經驗話やら何かを長々とやり出す。二日ほど間を置いて、その支吉君が尋ねて來た。晒の好い久留米の白緋に、絹縮の絞帯をキチンと締めて、輕い麥藁帽子を被つて居た。母親にでも似たのか色は白い。眼の細い、口元に締りの無い青年である。薄い細い髪の毛を眞中から兩方に梳けて、金縁の眼鏡を伊達らしう掛けて居た。家の奥縁

は見て、「まづ、竹屋の俵があんなに出世したべえか、まあ何所の和子様と云つた風をして居りす。」と蔭で驚いて居た。

「お父さんやお母さんは達者で居るか。何時もはア御無沙汰ばかりして居るんだから好しく云つて下なんせ、本當に立派な若い人になつたこと、途中でなぞ遇つても分んなくなりしたね。」と奥様が茶なぞ搬んで來て煩さく愛指を云ふので、若者は「はアはア」と素直に聞いては居るものゝ、何所か迷惑さうな様子が見えた。ホット赤くなつて四角に坐つた膝を俯向いて居る。根ツから氣の弱さうな人だ。

別に用事はなかつたらしい。退屈だから遊びに來たのだ。村に歸つて見ても話相手はなし、稀にあつても専門外の話は興がない。幸ひ僕が出して居る看板を見付けたので、兩方の研究の補足にもならうと思つて訪ねた。顯微鏡もあり、多少の參考書も持つて來たから見に來てくれとの事である。舌の音を強く響かして東京の辯を眞似て居るけれど、肝腎の訛が少しも抜けない。セがシエになつたりスガシになつたりする。言葉尻の御座んすが癖らしいが、その又御座んすがごだんすと聞えて可笑しい。尋中の三年級から東京の錦城中學に入つて居て、一昨々年とか千葉の専門學校へ入つたのだと云ふ。然うすれば四年級だ。

年は廿四五である。渠は無業遊に座敷の方々を見廻したり、机の上にある處方

録や書籍を取つて擔げて見たりして居る。

座敷と云つても八疊一間である。眞中に一開張の大机を出して、その上に諸帳簿や眼科藥盒や舊式圓筒の手提藥籠やが載せてある臥床醫典や外に二三の醫書もあつた。關際に木製の寢臺を置いて薄汚れた白毛布を敷いてある。枕は赤い括りの付いた舟底である。これで患者を按腹するのだ。外には醫聖ピポクラテスの懸額と二三枚の眼底表が壁にかゝつて居るばかりだ。床に掛けた、松本順先生の佛心魔手の軸と共に、總て先代の代診生が居抜きまゝである。

床脇一間の押入れを抜いて、そこが藥棚になつた。硝子戸もないニス塗の棚で、重曹、健末、マグネツシヤなど云ふ通常藥を心にして五六十の藥瓶が並べてある。規則がやかましいから劇毒藥だけは錠前付の古本箱に入れて置くけれど、秤器は日本製の四瓦秤をつかつて居るのだ。

患者は重にどんな種類が多いとか、トラホームの手術は何式によるかとか、暗室がなくて眼底検査は何うするかとか、彼は種々のことを問ふ。此方はたゞ遜つて、先を得意がらせる返事さへして居れば好いのだ。彼はたゞ大業に驚いて自分の矜りを満足させるのだ。

暗室がなければ眼底検査は夜にする、雨戸さへ締めれば好いと云つてやつたら、彼は噴出した。「驚いたね、こんな先生にかゝつちや患者も往生ですなア。」

「それでも結構助かりますよ。」

「そりや助かるでせう。然し醫者とある以上は此方も相當な設備をせんで、職業に對する義務が済みますまいぢやありませんか。何うで御座んせう。」

「そりや患者次第の事です。こゝらの患者は僕等にそれだけの設備をする餘裕を與へません。」

「それも然うですな。然し驚きますな。僕等は學校の博士達はいやに難かしいことばかり云ふもんだから、開業なんて餘程大業なものだと思つて居たんです。斯う云ふ、君のやうな開業振りを歸つて話したら大に驚くでせうよ。」と云ふ口裏には、妙に僕等を見下し嘲るやうな様子が見えた。この人を怒らせても爲方がないから僕も笑つて居た。

烟草盆を掲げて、こゝの隠居が入つて來た、左の耳が些と遠いので聲が大きい。

「や、大きくなつたな。何時歸つて來した。お父さんも喜んだべえ。」と何時までも小兒に見て無遠慮に云ふ。

「はい。」と仕方なしに畏つた。

「矢張り醫者の方をやるんだつてな。最う何年で卒業するんだ。」

「あと二三年です。」と吃りながら小聲で答へた。

年寄にそれが聞えたのか聞えないのか、「何んせ結構だな、お父さんもあんなに辛棒したんだから、これからは些と樂をしなくちや埋んねえ。何んか、矢張りお灸の方は流行つて居るか。」

「さア何うですか。」と横に流した足の裏を撫で、居た。
「何んしろ好い、運と云ふもんだ。お母さんのお蔭で家が立つたのだから。」と自分の云ひたい事ばかりサッサと云つて居る。何時も性急な年寄である。

玄吉君は囊から手持無沙汰にモジ／＼しながら顔を赤くして居たが、好い加減に話の切目を付て立上つた。何れ又來ると云つて居たが面白くない顔であつた。

丁度黒瀧の病人も見やらない顔で、僕もその邊までブラ／＼一所に出掛ける事にした。

夕方である。長い田舎町に押覆さつた青葉は急に黒ずんで見え、涼しい大年寺風は眞直に村道を吹抜けた。

村はづれの石橋の上まで來ると、向うから弟の冬三が三匹の豚を追ひながら、雨上りの固い石塊道を素足にこちらへやつて來た。

石橋を渡ると道は二つに分れ、一つは一本杉の方へ、一つは僕の行く黒瀧の家の方へ行く。こゝで別れるのだ。丁度そこへ冬三も出合ふ。

冬三は例の愚鈍さうな顔をニヤリさして僕へ挨拶をすまして、「お兄さんお關婆さん囊から來て待つて居すぜ。藥がなくなつたんだとしゃ。」

「千葉から小包來なかつたか。」
「來いせんでがしたね。何んの小包なのしゃ。」
「何んでも好い。主などの知つた事ぢやない。」と僕へ挨拶し

「處が矢張り駄目で御座りすね。育たない奴は何うしても育たないもんです。何うせ死ぬやうに出來てるもんと見えすね。何んぼ飼物を喰はせても疳の強い奴は喰べた物は身にも肉にもなりせんからね。喰へば喰ふほど瘦せるばかりでがす」と初對面の僕に遠慮しい／＼ノロクサ話して居る。聲まで響がない。

「然う云ふもんですかな。云つて見ると。人間にでもそんな所がありますからな。」とツイその時は氣も付かずに云つて、後から飛んだ事をしたと思つた。

幸ひに彼には氣が付かなかつた。
「然うでがすかね。人間にも矢張りそんな事が御座りすかね。」と眞面目に聞いて居る。

向うから芋苗の天秤をユサ／＼擔いで來るのはお作婆さんである。出過ぎもので話好きで、人は好いが、向つ腹立ちで村の通り者である。これを一括めて地方の言葉でお十八夜様と云ふ、最う六十越して髪の毛は眞白だが、何時も元氣の好い、歌好きな婆さんである。頼まれり村の産婆をして居る。

相變らず向うから立停つて聲を掛ける。
「先生様、何所へ御座るね。河原町へ女郎探しに行くにや未だ時が早かんべ。」と周圍關はぬ高張付である。これに係つちや誰れでも勝てないのだ。

「何有、黒瀧の病人見に行くんだ。餘程悪いやうだから。」
「あれもはア大概にしてお暇したら好かんべえにな。あゝし

て、細いステッキを振りながら向うへ行く、村を出切つて野道に出ると華かな夕日がつつとその白地の浴衣に射付けた。
冬三は口をアングリ開いてその兄貴の後姿を眺めて居た。
一匹の豚はグウと鼻を鳴らした。

「冬三さん、何所へ行くね。」と僕は聲を掛けた。
「豚に水つかつて遣るべえと思つてしゃ。久しく洗はないもんだから蹄が焼けて爲方がアせん。」と肩を振立て、行く。丁度僕が行くと同じ方である。

話しながら二人歩いた。
「然し豚を洗ふなら何もこんな遠くまで來ないだつて、直ぐ前に川があるぢやありませんか。」

「そいが駄目なのしゃ。あの川は下の方で米研につかふ水だからつて、村方の人にウンと小言云はれたからねし。遠いげんども五兵衛あんの下まで行くんでがす。」

「成程、こりや尤もだ。」
「豚は最う何匹に殖えたね。十頭も居ますかね。」と問ふと、冬三は以つての外だと云ふ顔して僕を見返つて、「なんでしゃ。そんなに一度に殖いるもんだら好いけどもねし。」

「だつて飼初めてから最う二年近くなるでせう。」
「何んしろ手馴れないもんだから、親豚に敷殺されたり蹴殺されたりしておとす方が餘計だから何んにもなりせんてがす。」

「小屋を別にしたら何うです。」
て助かつてたつて何んになりすけな。嫉妬で骨の髄まで焼けてるんだもの。業の悪い婆さんさ。」
「然うも行かないさ、誰だつて生命は惜しいからな、お前だつてまだ／＼死んで行く氣はあるまい。」
「私は何んとも思はないね。本當にしゃ。死ぬなア壽命だ。何んぼ醫者の藥でも壽命は動かねえからねし。」と腹をかゝえて高々と笑上げて、その涙を溜めた目を冬三に向ける。

「冬三あんこ、何んとしたぞ。何時會つても影薄いなア、好い若い者が何時／＼まで豚のがんがくでももあるまい。些とシツカリしろちえや。」
「何んでも好いよ。何時でもこんな事ばし云つてる。」と冬三は厚い唇を尖らして、赤くなつて俯向いた。

「お吉の方は何せうした。主の云ふ事を聞いたよかな。」
「俺ア知らねえ。」
「憤るな、憤るなよ。全體主は吝いから駄目さ。情婦は握り拳で出來ねえ、半襟の一掛けも奮んで見ろよ、譯の無え事だ。貯めて置いた我得金を出すなアこんな時なんだぜ。」と眼を細くして、面白さうに揶揄つて居る。

「馬鹿婆ア、何吐すんだ。」と冬三は小聲で獨りブツ／＼云つて居る。

お作婆はそんな事に御遠慮が無い。「それに主は一體に氣弱いから駄目だ。まア奴等ア家見ろよ、玄吉一人が殿様の胎でもあんめえ。何んぼ總領だつて餘りと云へば方圖のあつたも

もあつたも

んだ。自分ばり木の股からでも生れて来たやうな面付してけ
つかる風が俺アには面白くねえ。何故グン／＼云つてやんな
いのだかな。」

「そいは何も俺の知つた事で無え。」

「知つた事でねえ？ そりあ主が腑甲斐ないからだ。俺もこ
の家の忤だからつて威張つて見ろ、それで好かんべえ。四の
五も無い事ツた。」

「俺ア最う行くよ。」

多三は路傍にクン／＼して居る豚どもを呼集めて、堰の方
に歩き出した。

「あれだもの。一生冷飯喰ふやうに出来てやがる。」と蔭から
悪口を云つて居た。

「それぢや。」と僕も行過ぎやうとするのを、婆さんは又捉へ
て、

「ぢやな先生様、黒瀧さ行つたら、媼さんに好い加減に目繰
見ろと云つて下んせよ。」

「本當に云ふぞ。」

「好がすとも、誰が云ふんでもない、お作が云ふんだ。本當
に云つて下んせ。そいから河原町の方だかな。」

「最う好いよ。」と僕は歩き出した。

僕の後姿を見て、婆はアハ／＼と大口を開いて笑つた。

黒瀧の病人は相變らず好くない。滲出液はもう第二助間ま

のやうに肌を突かである。何所の糞でかチロ／＼と地蟲が鳴
出した。

五兵衛の水車場近くまで来ると、その圍堰に豚が未だグ
ウ／＼鼻を鳴らして居た。

無論多三のだ。それでは多三はと周圍を見廻はすと、二三
本押覆さるやうに生へた川柳の下に蹠んで誰かと話して居
る。

僕には氣が付かぬらしい。

「多三さん。」と呼ばれて、喫驚した顔を此方に向けた。

「未だ居たのかね、何してるんです。」

「え、なアに。」と甚くどちりながら、ウソ／＼出て来るその
後から、矢張り家に来る仕事弟子のうちにてお吉と云ふのが
それも極り悪るさうに出て来た。

何うせ見付けられたと思つたのだ。

「お樂みだツたんだね。邪魔をして悪かつたね。」と云ふと、

「え、何んでそんな事、今来て些つと話して居たばかりでが
すよ。」

「何うでも好いさ。」

「本當だ、なアお吉。」と多三は困り切つてお吉を味方に取ら
うとする。

お吉は鼻の低いコマチャクれた顔をしてたゞ點頭いた。虎
之助と云ふ水呑百姓の娘で、まだやつと十五か十六ぐらゐに
しかなるまい。

で昇つて居る。心音も微弱である。病人はそれでも強情を張
つて爐傍を離れない。濁汚れた綿入れは汗にむれて、傍へ寄
るとブンと臭い。

未だ滲出液を取る氣になれないかと聞けば、白い目で額越
しに僕を見上げて何んとも云はない。老爺は爐傍に膝小僧を
揃えて、鈍豆の煙管こスパ／＼煙草を吹いて居る。これ以て
知らぬ顔だ。

この頃では病人も老爺も餘程僕を迷惑がつて居る風である。

「先生様この頃はとろべつ悪寒はするし、それに息が苦しく
て臥ても居られせん。何んとかなんねえものでがすかね。」と
病人は染々訴へて居た。滲出液が化膿し始めたのかも知れ
ぬ。別に策はないから黙つて居た。

すると又、「あゝあ、俺ア死ぬんですかね。先生様もお醫者
様でがすべ、お醫者様ならこの位の病氣癒されないのですか
ね。」

「だから寧ろ廣く見せたら何うだ。河原町にも醫者はドツサ
リある。」と云つてやると、老爺は皺だらけの爪の汚ない掌を
顔に當て、「オイ／＼聲を立て、泣き出した。死にたくない
と云ふんだ。

それでも老爺は到頭僕の歸るまで黙つて何も云はなかつ
た。

黒瀧を出る頃は最う薄暗かつた。夜氣は涼しく凝つて、水

翌日はこちらから一本杉に尋ねた。支吉は出掛けた留守だ
が、皆がすゝめるゆゑ入つて待つて居た。

町屋造りの北口の無い家で、薄暗い座敷がたゞ二つだ。そ
れと見世に疊を敷込んで、そこが家族の棲居になつて居る。

壁の眞黒な木柱などはもう歪んで居た。奥の床の間には支那
渡りの宮脈軸をかけて、その前には恭しく三寶に神酒徳利を
飾つてある。患者は云ふまでも無く田舎の女子連で、蓆簀張
りの掛出しの上に四五人寐轉んで居た。枕を借りてグウ／＼
日當り近くに眠つて居るのもある。

竹屋ダンボの奥様と云ふのは、もう汗ノタになつて性根の
ない洗曝しに紺紺の着物を裾長くズル／＼と着て、地木綿の
帯をだらしなく結んで後から横紐か何かをぶら下げて居た。
目性の弱い聲の低い、氣霽らしい人だ。僕にも些いと挨拶し
たゞけ、俯向いて田舎老爺の背中に點取りして居た。

「まア此方が何んぼも涼しがす。こツちへお出ななせ。」と徳
四は艾を置掛けて居た客を打遣つて、自分を見世の間へと案
内した。

こゝは猶ほ暗らい、もとは鹽物商ひでもした家らしく、壁
は輪取つて汚れ、柱や板敷は鹽に濡れて居る。疊も眞赤に焼
けて、そここゝに心が喰出して居た。

往還に向いて格子近く、萌黄羅紗の覆布をかけた机がある。
支吉君のだ。机の上には第一に鐵刀木製の顯微鏡の箱を置い

て、その傍には試験管やら色々の試薬やら硝子瓶ブレアラト器、總てそんな物がキッチンと置並べてあつた。本も可也ある。内科、外科、その他の成書を堆く積重ねた上に、須氏の解剖圖譜、組織書その他金縁の原書も四五冊ある。

「あア貴方が石岡さんに御出なさる先生ですか。何うです御商法の方は、田舎ですから然う思ふやうな程の事はありません。」と自分の昔を忘れて大きな口分である。

「僕等なんかまア薬屋の氣で居ます。」

「然うでもありませんが、これで醫學と云ふ奴は餘程難かしいものと見えますな。あれを見て下んせ。去年から彼は百圓近くも本を買はせられたが、本當にやる日になると中々あれ位ぢや追付かないと云ふんだから恐しいもんでがすな。あれを皆暗記で覚え込むまでが一骨で御坐りすべな。」

「顯微鏡は何倍ですか。」

「六百倍とかでがす。」と自身立つて自慢そうに蓋など明けて見せて、「これ一つで八十六圓ですからな。これが無くちや勉強が出来ないと云はれて見ると、買つてやらないと云ふ譯にも行かず、本當に生優しい事ではがアせんな。大抵の身上は修業ばかりに入れ揚げて了ひます。」

「何も彼もお出来になる身代だからです。中々僕等ぢや思つても追付きません。」

徳四はズル／＼と涎を吸り込んで、「然うでも御ざりますま

いけど、本當に金のかゝる學問ですな。時に失禮ですが貴方は何方の御出身で。」

「僕は殆んど獨學です。」

「獨學で出来まますかな實地の勉強が。」

「出来ないでも爲方ないですからね。」

「然う云へば然うですけど、これで人間の生命を預かる商買なんですから、粗末な事は出来せんしな。」

と得意さうに話して居る所へ、「暑い／＼。」と叫びながら、玄吉君は外から歸つて來た。五ツ紋の細羽織に仙臺平の袴なぞ着いて、車に乗つて歸つて來た。徳四は最う僕の事なぞ忘れて行也飛出して迎上げた。

「お父さん、車屋へ氷でもやつて下さい。」

「はい／＼、今買つて來てやりすべ。」

「早くです。冬三は何所へ行つた。暑い所を驅させて氣の毒なんだ早く買つて來てやつて下さい。」

「そんなにまア息を切らして、この暑い所を歸つて來る事ア無いから、最少し涼しくなつてから歸つて來れば好いに。」と徳四は吾子の團扇なぞ取つてやる。

「だつて、窮屈でならないんです、何か喰べて行けの何んのとシツコク攻められるのが煩さいし、それに第一こんな長く坐つて居た事が無いから膝の骨が抜けるやうなんで、耐りません。」

「は／＼は／＼。些つたア懲りるさ、何んぼなんでも然う書

「もう歸つて來すべ。」

「困るなア那奴實に暢氣なんですからな。」仔細らしく鼻に皺を寄せた。

「本當に玄吉では氣が急しくて困る。貴方に歸つて來られると、家の中が戦になつたやうだ。」と徳四は不足らしく云ふ。

「當り前さ、貴方達のやうな、そんな暢氣な連中と一緒にされて耐りますか。」

「ほ、又小言だ。」

「ダンボサン、何うか俺のな焼いて下なんせ。山根に歸るんで道が遠いんだから。」次の間から療治客の一人が聲を掛けた。

「ホラ、あちらからもだ。」と笑ひながら徳四はアタフタその方へ驅出した。

處へ孫娘らしい十二三の赤ツ毛に手を引かれて庭口から入つて來た女年寄がある。目が悪いと見えて、竹の杖を曳いて居た。雀斑の汚ない、小さな婆である。

「今日は、若い先生は城下からお歸んなすつたべかねし。」とそこへ來て小腰をかよめる。

「お、お崎婆さんか。辛つと今歸つて來ました、早く行つて見て貰はんせ。」

「ぢやア誰方も御免なすて下なんせ。」とそちこちに頭を下げながら、汚れたガーゼで目を拭き／＼入つて來た。

玄吉君は僕の居るのに些とトチツた風であつたが、それで

生風のゾンザイでも困るがな。」

「田舎の人はくどいからね、話が。」

「さう、田舎／＼と云ふなよ。主だつて田舎者の子でないか。」と最うホク／＼喜んで居る。

「僕ア矢張り田舎は嫌ひだね。」

「誰だつてしや。在郷で暮らすより東京で暮らす方が好うがすもの、だから早く俺も東京さ行つて暮らすやうにして下んせ。」

「お父さんのやうな、そんな人を東京へ連れて行つたら大變でせう。第一その大きな聲ばかりでも耐らない。」

「何んでしや。その時はその時で又チャンと御隠居様になつて見せすのしや。」

「何うだかな。」

「本當でがすよ。」

その中に玄吉は軽い浴衣を着換へて出て來た。

「いや、失敬しました。今日は親類廻りだなんて煩さい御用を云付られたもんですから。暑かつたですよ。」とハンケチを出して顔の汗を取つて居る。

「多三は何うしました。昨日云付けて置いた停車場の方は最う好いのかしら。」

「何んだか知らないけれども、今朝暗いに起きて城下へ行くツて出掛けたやうです。」

「何時まで何をしてるんだ。」

も幾らか得意さうな様子も見せて、
「實は君、近所のものなんです、切りに頼まれたから、二
三日前から療治してやつてをるんですが、何しろ不衛生です
から、それが實に閉口します。」

「病症は何んです。」
「盲膜炎だらうと思ふんですが、何しろ久しい間打遣つて置
いたもんで、餘程症候が進んで居るやうです。全體なら手術
をすると好いんですが、手術と云へば僕の方の三宅先生で
すが、盲膜炎の手術なぞやらせると實に旨いもんです。パ
アセントなど取つて報告以上ですからな」と何ぞと云ふと直
ぐ學校の自慢である。

「はい、若先生、御免下さい。」と病人が入つて来た。

玄吉君は胸を突出して汚ない患者を見下すやうに見た。

「何うだね、痛むかね。」

「はい、お蔭様で痛むのは止りしたけど、頭のコム所が痛
くてなりませんでが。」と瘦せた頸筋の耳後のところを押し
て見せる。

「便通はあるか。」

「はい？」

「通じさ、通じはあるかね。」

「はアお通じでがすか。二三日前から結して居ります。」

「結して居る？ それだから頭が痛むんだ。薬は飲んで居
かね。」

玄吉君は昇水に指先を消毒したり綿を濕したり、さも器
用さうな手付きで點眼を始めたけれど、見る所では眼瞼の翻
轉すら満足には出来ない様子だ。

「何うです。この顆粒は、これで好く今日まで我慢して居た
もんですな。」と結膜を僕に見せた。

「甚しく貧血して結膜は眞白である。」

コカインを點して、銀水を點して、それを食鹽水で洗ひ落
す。

徳四も何時の時に來て見てみたのだ。

「婆さん、痛みすかね。痛むだら痛むと遠慮しないで云ふと
好がすよ。」

「は、何有これ位は」と婆さんは赤くなつて忪えて居た。

「本當に駄目だから、痛いなら痛いと云ふさ。何しろ書生先
生だからがむしやでがすからね。然し全體病氣にはその方が
好いんだ、恐る／＼療治してたんぢやトテも治るもんでない
から。」

「本當に然うで御座りすべな。」と外の輩も感服して聞いて居
た。

點眼薬と沓法劑か何かを與へて、療治は終つた。老婆は壁
際に凭かゝつて目を休めて居たが、やがて、「お蔭様でサツパ
リ致しました。では先生、又明日上りますから何うかお願申上
ます。」と諄いほど長い挨拶である。

「あゝ。」とばかり、玄吉君は尊大なる物腰であつた。

「は、頂いて居りしてがす。」

「あの丸薬の方を。あれを飲んで居て通じがないとは可笑し
いな。」

「何う云ふもんだか、この頃餘計無くなつたやうで御坐り
す。」

「そんな事はあるもんか。」と患者の蒙昧をせうら笑つて、僕
に、「ねえ君、苜蓿丸を十粒もやつて居るんですもの、便通の
無いと云ふ方はありませんな。」

「リチネでもやつて見たら何うです。」

「リチネですか。」と玄吉君は幾らか自分の矜りを傷けられた
ので、正直な人だけ。その不快さが直ぐ顔に出る。

「僕は何うもリチネが嫌ひでしてな。眼科は大抵苜蓿丸です
よ、大學でも何處でも。」目を急しく瞬いた。

「然うですか。」と僕は黙つた。

「ぢや君、些いと失敬します。」と僕に斷りを云つて、點眼瓶、
耳受け金盥、ガーゼ、脱脂綿、スプギイ、形の通りの眼科道
具を机の上に擴げ立てた。

「おい誰か、湯を持つて來ないか。コップに水と。」

「あれお湯と水を持つて來いとき、おそよ、おそよは居な
いか。」と文を取つて居た徳四が聲を掛けた。

そこに待合せて居た田舎の婆さんが、おそよに代つて湯や
水を持つて來た。そして、關際に突立つて療治の爲振りを眺
めて居る。後からも追々見に立つて來た人がある。

暫くして多三は汗みどろになつて歸つて來た。停車場へ使
に行つた戻り道で、久しく切れて居た駄を見付けたから、そ
れを買つて背負つて來たから晩くなつた。駄は豚の飼料なの
だ。カレイ粉や何か、何れ兄貴の嗜好品を求めにやられたも
の見える。

椽側に腰かけて汗を入れて居る間も置かせず、玄吉は座敷
から聲を荒立てた。

「多三、何所へ行つてるんだ、これほど待兼ねて居るのに。」

「そだつて、駄の好いのがあつたもんだから、それを買ふの
で晩くなつたのしや。」

「馬鹿だな。主は豚ばかり大事で兄貴の事なぞ何んとも思は
ない。」

「そんな譯ではがアせんけん、餘り安くて好い駄がすか
らね。何しろ四十三銭つて俵なもの。」

「馬鹿、本當に主にや手が付けられない。」と呆れて口を噤ん
で了つた。多三はケロリとして居る。

茗 荷 畠

その前の晩、田住生が訪ねて来た。一昨年の暮に亡なつた湯村の弟、六郎の親友である。今度福岡大學へ行く途中とあつて立寄つた。此間の洪水で鐵道が不通ゆゑ神戸までは汽船にする云ふ。白緋のあらゐ浴衣に、黒の帯、新しい瀧縞の袴をシャンと穿いて居た。お國風に衛さんくくと七つも違ふ湯村の名を呼んで居た。

「六郎さんが丈夫ですと、今年は一緒に大學へ来るんでした。一昨日の晩停車場でお母様が然う云つて泣かれました。」と、坐ると行也、その事を云出す。

「然うです。」と湯村は答へた。
「この人は矢張、二高出身で、六郎さんとも友達、東京の法科へ今度来たのです。」と云つて、一緒に来た小村と云ふ學生を紹介した。先きでは會つた事があると云ふが、湯村は飽迄初對面に構へた。丁度、朝からムシヤクシヤして居る所ゆゑ、日比谷見物に行くと云ふ二人を無理に引留めてビールにした。トマトに鎌倉ハム、都焼の角籠も切らせた。酒がやゝ荒んで来た頃、その小村は急に改つた調子で、「貴

方に伺つたら解るでせう。全體ラブつてどんなものでせう。」と問ふ。好くある事で、大抵の人はこの問題を藝術家の所へ持込んで来る——何も藝術家のみに解せらるゝ問題と思つて譯でもあるまいが。尙ほ云つて置くが、湯村衛はK氏の門生で近頃世に知られた小説家である。今年三十になるが未だ獨り者、妹夫婦を相手に暮して居る。

「戀は戀さ、何んだつてそんな事を聞くんです。」と湯村は瘦せた肩を聳てた。
「然し、何か變つた御意見があるでせうと思ひまして。」
「別に無いね、或る男と或る女と二人集つて、從來より更に複雑な、そして美しさうな生活を見出さうと勉める時、他はこれを戀と云ひます。詰り勉めて見るだけでさ。」と投出すやうに云つて、オリエントの脂をベツと袖へ吐く。

「そんな單純なものでせうか。」
「單純も何も、戀は苦しく觸れるべき事實、興味をもつて論ずる問題ぢやない。」
「でも、それだけぢや満足が出来ない。」と小村もツイ深入りした。
「満足出来ない？」と小さいが光る目を見て、「一體そんな事を云つて、君は戀した經驗があるのか。」と、湯村は食指で小村を指した。
田住の方が却つて恐縮して、ヘツと頸をちよめて友達足の裏を些と突いた。

小村は眞面目に、「は、有ります、尤もあれが眞の戀と云ふものか何か、そこは分りませんが。」と云ふ。

「何した、別れたらう。」

「え、別れました。」

「君は？」と今度は田住を指す。

「僕ア有りません。」と田住は袴に手を入れて堅くなつた。

「そして何故別れたんだ、小村君。」

「さ、兩親の承諾しないのも理由の一つでした、それに。」と言終らぬ中から、

「憎いだらう、君、女が憎いだらう。」と、湯村は自分の言葉ばかりサツサと撥ぶ。

「いゝえ、別に憎いたア思ひません、事情を聞きましたもの。餘儀ない譯なんです。」

湯村は酔うた頭を前後にフラ／＼させながら、「女の云ふ事情なんて的になるものか。」と、でも思出しては手酌でガブ／＼呷つて居る。

「そんな事ア有りません、僕は今でもその女を信じて居ますもの。」

すると湯村は突然に、「君、寢たかい。」と問ふ。
「僕は決して、決してそんな事。」と、小村は眞赤な顔して不興氣に口を閉ぢた。
「駄目だよ。君は矢張り物語か詩にある戀をして居るんだ。僕もやつた。しかもツイ近頃の事よ。そして別れた、同じく

事情ありさ。見たらう君、新聞に出て居た、湯村は某女學生に戀して、懊惱煩悶の極、小説が書けないんだつて、あれさ。」
「國民新聞に有りました」と田住が云ふ。「一體あれは本當の事なんですか。」

本當とも、今でこそ笑ひ事だが、その當時はこれでも眞劍さ。いや、眞劍だと思つたんだ。何しろ僕も矢張詩にある戀を現實にしようと思つた、馬鹿だからね。」
「然し世間のラブと云ふものは、貴方の云ふやうな、そんな冷たい冷かなものばかりでも無いでせう。」
「駄目だ。君等は未だ若いんだ。」
「然うでせうかね。」と二人は押しても争ひは爲無い。今来たシチュをせつせと強い胃袋へ詰込んで居た。

二

湯村はこの日、朝ツから癪が立つて、妹ばかり叱つて居た。鹽麩の鹽加減、座敷の掃除、銅壺に湯を断らしたの、一々癪に獨る。襦袢の洗濯を忘れて居たのでは、妹が泣出すほど叱り付けてやつた。「馬鹿、不親切極る、何を着れば好いんだ。如何に田舎者だつて、それ位の注意が出来んで何うなる。」と散々毒づいて見たが、妹は病上の着い顔して黙つて俯向いてばかり居るので、終にはぢれ出して、「こんな事ぢや所詮駄目だ。下女を一人傭はう、幸ひ先生から話がある。然うすりやお前達はお客様になつて、三度／＼あげ膳で喰はれる。」とま

で突込んだ。これだけと思つて居たのに、到頭口へ出して了つた。果して妹はオロ／＼聲で謝る。氣の付かない所は改めるから、今日の所は勘辨して下さい。「今下女なぞ置かれては、私共お氣の毒で、御厄介になつて居られません。」と疊へ手をつけてシク／＼泣く。でも湯村は、「駄目だ、そんな不親切な兄弟の世話になるより、金で備つた他人の方が幾ら好いか知れない。」と云ひ／＼書齋へ引込んだ。妹が襖越しに切りと謝るのに返事も爲ない。

妹婿が商法上の失敗から、夫婦して湯村の家へ寄つてから最う三月近くになる。氣の小さい二人は、「濟まない／＼」と、口癖に云つては居るが、さて恰好な仕事口も無いので、兄の筆耕をしたり、走使なぞしてブラ／＼日を送つて居る。常の湯村はたゞ鷹揚に、「何有、喰べる位の事なら何時まで居ても好い、ユツクリ勤口を探ささ。」

と然う云つて慰めて居る。妹と云つてもこれは早くから里子に行つて居て、里子流れに先方へ取られたのを、ツイ四年前に返つて來たのゆゑ、自然湯村とは兄弟の情合もさうい。教育も受けず、生れたまゝに育つて來たのだ。婿はもと湯村の故郷仙臺に銀行員の頃、伯母の世話で一所にしたのだ。生れは東京の者である。今朝仕事口を探しに家を出た限未だ歸つて來ない。下町に親戚があるから、大方そこへ泊る氣かも知れぬ。

まづい晩飯を濟まして、湯村は獨り縁側に寝轉んで居た。

然し、とも湯村は思つた。現に二十三日の晩、最後に會つた時でも別に變つた様子は無く、常の如く快く飲んで別れたのに、踵なぐりに十日と経たぬ昨日、唯あの新聞記事だけで絶交するとは可笑しい。何か無ければならぬ、と考へた。自分の態度の餘り強情なも癪に觸つたらう、事を好んで好く面倒事を引起すのも癪に觸つたらう。近頃遠々しくして居るのも癪に觸つたらう、と思つた。然しそれだけでは足らぬ。何かある、何かあると切りに考へた。

三

湯村は可也酔つて居た。そこに出たビール七本の中、五本は彼が飲んだのだ。瘦せた頬殺げた顔は蒼く、目が鋭かつた。烟管へつめる左の指がビク／＼顫つて居る。

何の機會からか、話は、信仰問題に落ちた。尤も二人共に基督教へ籍を置くゆゑ、自然そこへ行つたのだらう。でも二人共酒は飲む、教會を離れて信仰が得られないものなら、宗教に背いても好いなぞ云つて居る。

湯村は急に力を籠めて、「今の世に最う信仰は無い、神の權威は地に墜ちた。有るものは唯理解だけ、理解を離れては神の存在すら信ずる事の出來ぬ、淺ましい時代だ。」と云出した。

仕事の机へ向ふ氣も無い。酒屋と魚屋は月末の勘定を延して居る事ゆゑ、是非書かなければ約束の五日の間に合はぬと思ふが、それでも筆が取れない。書き掛けの分など仕上げねばならぬのだが、それも厭である。遊びに行く所をとも思つたが、面白い話のありさうな所も無い。K先生からは絶交狀が來て居る。辰馬が家を持つたと聞いたが、何れあれも今度の絶交一件に關連して居るだらうから、尋ねて行くのも變なものだ。それに、第一まだ宿所の通知も無い。

K先生に絶交狀を附けられたのは最う度々の事で、他に話しても、「又ですか」と笑はれる。感情の強い人ゆゑ、些とした事で騒ぎたてるが、直る事もすぐ直る。十日か十五日も遠ざかつて居ると、直ぐ迎の人か、手紙が來る。この前、後の月の晩、酒の上から同門の誰彼を捉へて、ひどい暴言を浴せかけた際も、その時は大した立腹であつたが、ものゝ一月と先生の強情は續かなかつた。今度だつて數は知れて居る。事柄が事柄だ。根も葉も無い蔭口が新聞へ麗々しく出たのでそれを湯村の悪戯と察して怒つたよけだ。日を腐らした上、此方から謝つて行けば何の事なく收るに相違ない。そして又些と酒が廻つて來ると湯村の手を握つて、「憎い奴だ、君のやうな面憎い男は無い。今度こそ今度こそとは思ふが、別れて見れば寂しい、何しても別れる事が出來ぬ。君とは全く腐れ縁と云ふんだらうね。」と斯う云ふのも見え透いて居る。無論氣にする程の事では無い。

二人の學生は正直に顔を見合した。

湯村は續けて云ふ。「夫婦だ、親友だ、戀人だと云つても皆然うだ。互に信じて胸と胸とが觸れ合つて、あやしい滋味がその間に交流するなんて云つたのは、ズットズット以前の事さ。今の世は詩や物語から分離して居る、唯相互の心を理解し合ふとする外に何の愛情も無い。今の世には唯むごい冷かな目の愛だけが残つて居るんだ。」

「然う考へたら、然し、人生は寂しいものになるでせうね。」と小村が云ふ。

「寂しいとも、無論寂しい。」

「そんなにして迄、寂しがる必要がありませんか、損な事です。」

「損得で論じやしない、これが人生の實相さ。吾々現代の人と生れたのが不幸なんさ。」と聲が憤つて居る。

「そんなら、強ひても信仰を求めたら何でせう。或る場合には築上げるんですね。無信仰の時代なんて、そんな事を考へただけでも恐しいですね。」

「築上げる？ そりや好いかも知れん。然し築上げたいにも築けん人がある。僕なぞもその一人だ。君等のやうに降誕も奇蹟も更生も、何の苦も無く信じ得る人は幸福だよ。そりや幸福だよ。」と然う云つて、ランプの心をグット振上げた。

小村も流石にムツとした。「然し僕等は降誕や奇蹟を離れても基督を信ずる事が出來ます。主の生涯が既に絶大な詩です、宗教です。」

「それが基督の人格美と云ふんだらう、度々聞く言葉だ。詰り理解ぢやないか、確實を信ずると云ふ事は既に信仰の範圍を脱して居る。」とグイ／＼酒をあほる。

「では宗教を原始時代に復さうと云ふんだ。」

「無論、總ゆる事が原始に復らんきア駄目だ。」と叫んだ。

「それぢや、どこに吾々の安心を得ませう。」と田住に謙遜つた聲で尋ねた。

「安心なんか現代にあるもの。新しき幸福とか知られざる神とか云ふものが、西洋詩人の理想通り見付かりや結構だが、さも無い間の人間はたゞ動揺あるのみさ。世の冷たい波に揺られ／＼て跳き苦しむのみさ。」

「迷信は何うです。」

「迷信も好い、けど僕等にや最う迷信も得られまい。」

「何う云ふもんでせう。詰り近代科學の影響なんでせうか。」

「根本は無論それだらう。人間の心に恐異心が無くなつた、見えざる目を恐れると云ふ事が無くなつた。」

「然うですかね。」

「雨に驚き、風に驚く頃の人間でなきア眞の宗教は有ち得ない。驚くと云ふ大なる力が人間に眞の信仰を興へる。詰り近代の人間は餘り自然に馴れ過ぎた。」

この續きの話が長い間取交された。喋るのは湯村一人、二人の學生は黙つて聞くより外はなかつた。

「何うも有益な話を伺つて、非常に啓蒙する所がありました。」

小説を書かうと焦つて居る。起きてる事も事實なら、夢の生涯も事實に相違ないとは、その好く云ふ所である。未だ纏つた作は無いが、いづれその内に書く／＼と云つて居る。筆で書くより魂で書きたいと云つて居る。例の朝寢、今起きた所と見えて、晝飯の膳に牛乳がついて居た、一閑張の机の上には「戀の挿話」に「聖僧の罪」ゾラの小説が二冊乗つて居た。「相變らずだね、關はずやり給へ。」と、湯村は縁の照返しを恐れて、座敷の眞中へと坐つた。

「では失敬するよ。」と土瓶をかけた箱火鉢を、客へあてがつて自分は食事にかゝる。兎のやうに前齒でチャキ／＼ものを噛むのがこの人の癖。

「實は今日、小説の趣向を相談しに來たんだ、批評を聞かうと思つて。」

「又書くのかね、好く續く事だね。」と箸を膝に置いて云ふ。

「書かんきア喰はれん。」

湯村は昨夜田住に話した事を委しく説明した上、「ねえ君、吾々は不幸にして無信仰に生れたんだ。不幸な時代だよ、人が人を信じないで何うなるだらう。不安、懷疑、實に恐しくなるね。夫が妻を信ぜず、友が友を疑ひ、親は子を疑ふ時代だ。考へたよけでも恐ろしい。僕はこの恐怖を書いて見ようと思ふんだ。何かしら安心のサジェションは無いかと悶え苦む現代の兒を主人公とした小説を書きたいと思ふんだ。」

「さア。」と辰馬の答はこれだけであつた。

た。」と二人の學生は厚く禮を述べて歸つた。

二人が歸つた後、湯村は妹に蚊帳を釣らせて寝たが、今の話に目が冴えて何うしても眠られない。酒も醒めた。

信仰と理解、何うも大なる問題らしい。慥かに小説になる。無信仰の現代に産れて、信仰に憧れる主人公は面白い、屹度書ける。辰馬が喜びさうな小説が出来よう。尤もこの事に付いては是迄深く考へもしなかつた。今日偶と、偶然と云はゞ偶然、口を衝いて出た言葉だ。湯村の癖で、ある時、偶然にある問題に觸れると、話の中に皮が著き肉がついて動かす可らざる問題に成長する。今夜も慥にそれだ。

今の議論を實際に當嵌めて見た。戀、交友、夫婦みなよく合理する。それと共に、先生に對する事件、彼女に對する事件、みな解決される。嬉しくて／＼ならなかつた。

翌朝目が覺めると、辰馬から移轉の通知が來て居た。もう耐らなくなつて、直ぐ車を命じて家を乗出した。

四

高田馬場四百番地。あの湯屋より少し早稲田寄りの北側と細かく書いてあるので辰馬の家は直ぐ知れた。仕立もの所田中と標札が出て居る。車を下りた。

辰馬は湯村と同じ門生である。長年その支關に居ただけ先生との因縁も深く、先づ外様と評代ぐらゐの違はある。瘦せた、眉毛の恐しい太い、目の沈んだ男で、比喩と諷刺だけで

「然し君は何う思ふね。信ずると云ふ事の無い世の中を不安とも不幸とも思はんかね。」

「思つても好い。然し、自意識の發達した我々時代にはそれが、餘儀ない傾向だらう。」とサラ／＼と茶漬を搦込む。

「不安は無いかね、煩悶は無いかね。」と湯村の調子は急込んで來た。

「然し自意識が發達すると云ふ事は、他人の間から自己を獨立させると云ふ事になる、また囚れた自分を活さうと云ふ事にもなる。」と膳を押し遣つて、心靜かに落着いて煙草を吹して居る。

「又例のレクチュアだ、僕は講義を聞くんぢや無い。」

「だつて然らだもの、吾々の時代が既に／＼信仰と遠かつて居る事は、何人も等しく認めて居る事だもの。」

「それだけか。」

「それだけとは？」

「然らさ、君は唯然う他の耳から理解してるんだ。僕は自分の心に湧上つて、自分の口から云ふんだ。」

「それが何う違ふだらう。」

「それ、それだ、その口の冷かな事を見給へな。」

「然し不思議だね。自然も自然極端な純自然。第一性論を主張する君としては大分變つた議論だね。」

「君は何故然ら熱が無いんだね。」

「君こそだ、思想と實在とを混同して居る傾があるもの。」

「最う好いよ、最う分つた、君は何事にも驚かない人なんだ。今に作品としてお目に掛けよう。」と湯村は話を切つた。大概はこの言葉に終る。どんな問題を提出しても、ツイそ一度辰馬は血を騒がせた事が無い。冷かに分解されるか、批判されるかの二つである。その時は此方でも、「書いて見せよう」と云ふ一語を放つのだ。體力も精力も弱い辰馬は、未だ一部と纏つたものを書いた事がない。それは自分にも残念がつて居る弱點である。湯村は他の弱點を適さぬ男である。

「された、あゝ、爲れたよ、」

「何う云ふ心なんだね。」

「僕ア知るものか、爲れた方なんだもの、蔭口を利いたとか利かぬとか云ふ、言譯するにも爲様の無い馬鹿々々しい問題だから、僕は打遣つて置く事に決めた。」

「僕昨日初めてその話を聞いてね、君の所へ行かうとも思つて居た所だ。」

「御免蒙らう。昨日まで親友で候の何のと云つて居ながら、詰らない愚にも付かぬ瑣小事で直ぐ絶交願だ。成程、僕は我儘だつたよ。他から見たら師弟の間ぢやないと思ふ程の我儘を働いたに相違ない。だが僕は先生に信じられてるとばかり思ふからね、少々の事は許されるものと思つて居た。」

「時々は思出すだらう。」

「誰が？」と云ふ湯村の聲は険しかった。

又言葉が切れる。表の通りを、鈍い調子の廣告樂隊が通り過ぎた。

「ぢや僕失敬しよう。」と急に立上る。

「何故？まだ好いだらう、久振りだ大に話さうよ。」

「またの時だ、僕は歸つて書くんだ。」

「羨しい精力だな。」と眞實羨しさに見上げた。

「ぢや君、先生へも宜しくね。」

「何うしたんだ本當に絶交する氣か。」

「するんぢやない、されたんだ。僕は謬つて居たよ。ね、人は信ずる者だとばかり思つて居た。」

「信じなくとも好いぢやないか、理解でも交友は續き得るよ。」

「僕は理解の交友は欲しくない、誰でも好い、これから後は信じられる人を求めるんだ。」と冷かに云つて表へ出た。

思ひ切悪るさうに辰馬は門口まで送つて來た。

「君、馬鹿に通ひ一遍になつたね。」と車へ乗るのを見て居る。

「なつたんぢや無い、されたんだ。失敬。」と湯村は云つた。

五

茗荷島を突切つて、大隈伯の邸について曲ると、新開の早稲田鶴巻町になる、たしか角は文房具屋と思つた。

か。」

「何故く。」

「皆、自意識を持つてるもの。」

「それで好く君は不満がないね。信じられない人間の中に生きて居ても思はんかね。」

「爲方がないね、時代だもの。」

「時代なら、極めて悪しき時代だ。」

「ぢや何んだね、君の今話した小説の趣向と云ふのも、詰りその絶交一件から思付いたんだ。」と洗んだ大きな目で湯村を見る。

「僕は君と違ふ。信のない世界には生きられない。理解だけぢや到底満足されない第一寂しくて耐らない。」

「常の君のやうにも無い、今日は存外弱い事を云ふね。」

「弱いんぢや無い。僕ア今まで世間を謬つて見て居た。少くとも僕だけは他に信じられると思ふから、思ふ存分に我儘もやり強情も張つて居たんだ。馬鹿だつたね。」

二人はやゝ暫く黙つて居た。辰馬は何服もく煙草ばかり吸つて居た。湯村はゾラの小説を取つて表紙を啓けたり、廣告を見たり、妙に落付かない様子を見せて居た。辰馬は終の灰殻を火鉢の縁へ強く叩いて、

「そして、何うしたね。龍子さんのその後は。」と眩しいやうな目を見せる。

「何うするもんか、あの儘さ。」

「旦那、市ヶ谷へ廻りますか。」と年寄の車夫はそこに立停つて後を振向いた。

「いや家だ——急いで。」と湯村は車上にあせつた。直ぐ歸つて創作の机へ向ふ積りなのである。なあに負けるものか、書いて見せると心が叫んで居た。

二三日續いての雨、上るには上つたが、夜上りだから長くはあるまいと人は云ふ。カッと晴れた秋日和の午後、二時は過ぎて居たらう、濃い蒼空にはカツキリ白い雲が雲母のやうに輝いて居る。九月の日は明るかつた。夏よりも明るい。然しジツと物の色に滲入る光では無く、軽るく物の表に浮ついで動く光である。向うから高下駄を穿いて、雨傘をさした職工らしい男が来る。番傘がキラ／＼と目に閃いた。鉛に喰はれた蒼い顔であつた。

この町の目貫、唐物店と洋服屋の四つ角まで來ると、長い町並が山伏町近くまで眞直に見えた。大學が休暇の間は町の姿まで怠けて赭色に長く見える。若い望に充ちた聲や叫び聲は何所の隅にも聞えない。自轉車、人力車、彩色した配達車そんなものは一輛も見當らぬ、通る人もく皆歩調をゆるめて、日當りを選んで、秋蠅の力無く歩んで居る。下宿屋は二階中を開ひろげて蚊帳や蒲團を乾して居る。店の裝飾に新をはこる唐物屋や洋酒店の中には半ば大戸を下した所も見えた。姿見を澤山かけ並べた理髪店には缺の音が閑さうに見えた。派手な誇張な看板に唯日が明るく射して居る。そして、

樟も柱も濃い色のペンキで塗上げた支那料理屋や、下町の活々した街から追詰られて来たと思ふ寂れた古本屋や、外に通ふ亭主の手助する薄資本の煙草屋やが、カッ／＼店を張つて居た。

ロゼツチかの詩に「晝の女王座」と云ふがあつた。札場の若い男が晝の樹に長々と寝て西瓜の皮をペン小刀でむいて居る詩であつた。何の關係も無い事だがその詩を思出した。そして、「寂れた沙着の無い町だ」とこの町を見た。魂が抜けて居る。」とも思つた。

秋の光を總身に浴びて、年季らしい小僧が胸を張つて眞直に來る。固く乾いた雨上りの道を素足で踏んで居る、眸の黒い兒であつた。口をキツト結つて居た。腹掛のドンブリには大きな棕櫚の塗ブラシを突立て、片手に蒼色のペンキを入れた壺を下げて居た。塵違ひざまに洗んだ目で車を見上げて過ぎた。憤を齒から出さぬと云つた意氣込が小兒ながらその顔に見えた。湯村は後から振り返つたが、母衣が覆さつてゐるので無論見えぬ。どんな目付をして後から見たか、恐しく氣になる。見えざる陰の目、見えざる陰の目、手を握締めたいほど氣がいらつ。

ホツ、ホツと締の無い笛を鳴らして、自働車が過ぎた。湯村の車が右に避けようとしたその車輪の際とい間をくゞり、重い強い發動器の響を聞かせて、砂埃の無い路を太いゴム輪が眞直に向へ馳せた。

乳房の胸を露はに一人の女が店頭にて、燗酒の酒を日に透して見て居た。

「おい、母衣を外してくれ。」と車の上で突然湯村が叫んだ。

「へえ？」

「母衣を取るんだ。」と叫んだ。

車夫は梶棒を下ろして、オゾ／＼母衣を後へはねた。

「これで好うがすかい。」

蒼い顔を日に曝して、帽子も被らぬ湯村はうなづいた。車夫は又梶棒を握つた。そして、又駈出した。むきみやの老爺で、店はお喋りな上さんに任せてある、定七と云ふ、今年五十六になる。酒が好きで好く上さんに隠れて湯村へ來ては盛切酒の振舞になつてる。心臓が悪るいから稼業は今年限りだと云つて居る。

櫻木町の橋へ出た。丁度、葬式と通り合し、車は襦袢の青物屋の前に止つた。

橋を渡つて長い葬式は明るい日の下をしづ／＼練つて行く。先手の龍燈は久世山の下にかゝつて居た。白木造りに飯打の寢棺を十幾人の人夫が擔いだ。萌黄に緑色の變襖を纏ねた白無垢を見せて、鉦がキラ／＼と揺れ動く。編笠扮装の施主が新しい紋付の肩を揃へて靜かに俯いて行く。導師、副導師の馬車。その後から會葬の車が幾十臺、みな塗色美しい母衣を下して長く／＼續いた。

「おい、何所か外を廻つて行けないか。」と湯村は身を乗出し

「あ、危ねえ。」と車夫の叫んだは十間も距つた後である。そして、暫時車を停めて汗を拭いた。車上には軽い服を着た貴婦人が二人、振向きもしない。

「大隈さんのだよ。」と一人の細君が荒物屋から飛出した。

「色が違ふ、三越だよ。」と今一人の細君、これは葎ものをさげて居た。手を額にかざして見送つた。

湯村は偶と氣が付いて常月の收入を胸の中に算へ上げた。間に合ふだけはある。來月も來々月も書きさへすれば充分に暮は立つ。先生の周旋は無くとも買ひに來る本屋も二三軒はある。先づ大丈夫と思つた、書く、書く、と心に誓つた。ズウデルマンは、「藝術家よ、書け、語る勿れ。」と云つたと聞いて、自分は體に語り過ぎた。交り過ぎた。黙して、そして默して書かなきアならぬ。馴れた机、馴れた窓明り、黙して書かなきアならぬ。空には蒼、土には緑、濃い／＼色に畫き上げねばならぬ。

山吹町の通りへ出た。曲角に大勢人が立つて居た。腰から下のバツとひらいた清國學生が五六人何やら大聲に罵つて居た。

兩側は低い屋根の家が續いて居る。この頃の大水に浸つた家々の床は、まだ乾かない。夜は焼鳥とおでん、やの出る角端の明店の前へ棚を据えて、葉のしなびた朝顔鉢が七つばかり並べてあつた。うりものと假名で貼札してある。蔓が長く／＼延びて居た。この邊へも人はどよ／＼みをつくつて居る。大きな

て車夫をせめた。

「改代町を廻つちや大變です、何有最少しですよ。」と車夫は動かない。

行列を越して音羽の大通を見た。九丁目から一丁目まで眞直である。空氣は澄切つて遠くも近くも總て同じ色に見える。白いものは益々白く、白地の袖が糊ばんで冷たさう。人の唇も手足も脂が切れて美しく乾いて見える。

湯村は袂から巻煙草を出してマツチを擦つた。何本も無駄にした揚句、やつと黠いたのをロクにも吸はずに、忙しく河へ投込んだ。前は青物屋である、市場の荷が未だ着かぬと見えて、店はヒツソリ寂れて居る。それにトマトや西洋瓜や、人の目をひく色濃い夏の果は大方場退けになつて、淡々しい秋の果がポツ／＼ならべられてある。水に流された梨子を大山上に盛つて附木の札を立てゝあつた。

葬式は未だ通り切らぬ。

湯村はたゞ氣をあせつた。久世山の下、音羽の九丁目にはもとの戀人がある。萬一出ては居まいかとも思つたので。今日ばかりは遇ひたく無い、見たく無い。何時もは何ともなく往來して居たが、今日は不思議なほど心が騒ぐ。自分も諦めて、他とエンゲージする事を許した。謂はゞ路傍の人、何うあらうと差支はない筈だが――さて、然らば行かぬ。先方は洋行歸りの會社員、西洋の派手な活々した社交を経て來た男。土産のトランクの中には指環やらブロッツチやら露西亞更紗の

派手な模様もあつたと聞く。今ごろは世の榮華に誇り切つた目を上げて新らしい戀人の耳に私語して居ぬとも限らぬ。「昔の事は昔の事。」と男の肩に摺つて居るかも知れぬ。片手を男の肩に置いて、片手で男の髪をまさぐるのが癖であつた。足を横に投出して、片手でヒタ／＼と乳の邊を叩くのも癖であつた。人を打つ掌は痛かつた。

「私は忘れません、私は生涯忘れません。」これが別れ際の言葉であつた。「忘れるな、キツト忘れてくれるな。」と湯村は念をついた。

青物屋の葱は日に光つた。燐のやうに光つた。湯村は晒者になつたやうに思つて蒼白い額を兩手に抑へた。

葬式は通り過ぎた。書いて見せる、書いて見せる、と湯村は聲に出して然う云つた。

六

外から入つた家の中は暗かつた。

「お歸りなさい。」と妹は然う云つて出た。

「油井は何所へ行つた、未だ歸らんのか。」と怒つた聲である。油井は妹婿の名である。

「何うしたんですか、未だ歸らないで。」と言葉尻が恐れに半分消える。

「何？」と湯村は聲が返つたのである。

「聞えない。」

「おい、おい。」と二三度呼んだが返事がない。ツカ／＼と立つて臺所の戸を明けた。妹は出窓際に鏡を置いて、身仕舞に氣をやつして、切りと鏡に見惚れて居る。白いものも幾らか付けたやうだ。

「おい、あんなに呼んだのに聞えないのか。」と冷たい調の上に立つた。

「あら。」と妹は最う眞蒼になつて鏡を隠した。

「何をして居る。馬鹿！おしやれか。」

妹は黙つて俯向いて居る。

「なんだ、その面で。宿場の飯盛りもあるまい、この部屋の態は何だ。」

二疊の女中部屋の壁際にガラス鏡を飾り、小棚の上には安香油だの百合の花のレツテルの付いた白粉だの、罐に入つた洗粉だのを並べ立て、居る。角な食鹽の明塩に眞赤な葡萄酒のやうな髪油も入つて居た。「おしやれ所の身の上か、馬鹿め自分自分の身を考へて見ろ、居候して居る分際で頭ばかり光らせても何になる、百姓め」と口から出任せに怒鳴つた、妹は蒼くなつてブル／＼顫えて居る。

「何故自分達の身を立てる事を考へない。いかに馬鹿だと云つて、その位の氣が付かないか。」と又怒つた。

「ですから、今日油井も……。」

「未だ歸りませんで……。」とそこへ窮屈さうに小さく坐つて、何時も叱られる胸前の襷を取り締めて居る。

「あつちへ行け。」と然う怒鳴つて、足音荒く湯村は書齋へ引込んだ。

原稿紙を出した、硯に墨も流した。途中考へて来た「信仰の力」と云ふ題を書いた。手が顫えて居る。世に信じる力は無く、唯理解のみになつたと悟れる人の寂しみ、悶え、それを書く積りなのである。二三行書いたが何れも文章をなさな。三枚書損つた。今度は題を「見えざる後より」とも、「見えざる目」とも更めた。矢張り書けなかつた。直ぐ前の井戸傍へ子供が大勢集つて、何かガヤ／＼喚き始めた。湯村は筆を投出して、ゴロリと寝た。

巻紙を出してスラ／＼と書く。私は謬つて居た、餘り接近したのは悪い。絶交は謹んで受ける。そして私は孤獨を守つて飽迄製作に従事する積りと書きかけた。R氏へののである。辰馬へはたゞ短かく、「余は活き得る途ありと信ず。」と筆太に大きく書いた。

風は冷々と吹入つて、襦袢着ぬ肌寒い。今晴れたかと思ふと直ぐ曇る、まことに沈着の無い空である。庭の松、葉銀杏、吉野檜、遠くは向う屋敷の樺、朴の木、柳、庭の隅の秋草まで、見る限りの葉が皆動く。ザワザワと葉裏を見せて皆動く。

「おい。」と湯村は聲が返つた。熱いお茶が飲しかつたのである。

「何？ハッキリ云へ。」

妹は泣出した。

「厭な色だ、何んだ。」と湯村は行也その髪油の壺を取つて流しに投付けた。三和土になつてる。ひどい音して粉々に壊れた。

「お兄さん、私悪るかつた……堪忍して……。」と妹はそのこの板の間へ突伏した。

「何が悪いんだ。何が悪い。」とやたらに激して、白粉壺も粉も、一つ一つみな投付けた。

「貴様は一體兄を兄と思はない。亭主より外に大事なものが無いんだ。へん、亭主は大事よ。」と咽低く嘲笑つて又書齋へ戻つた。

原稿に向つたが氣が興つて書けない、妹の泣聲がシク／＼聞える。

「今日は駄目だ。」と獨言云つて、シャボンを手に出掛けたのは餘程過ぎてある。外はもう暗かつた。

夕方、油井は歸つて来た。昨日來淺草の親戚へ泊つて、方々歩いて見たが、思はしい口も見當らない。兜町の仲買屋に書記が入用との話ゆゑ、行つて見ると最う新しい人が入つて居た。「運の悪い時は何所まで行つても駄目です」と悄け切つて居る。實體な氣の弱い男で、借金の言譯にさへ始終まごついて居る。

「爲方がないさ、まア緩り探す事です。」と湯村は鷹揚に云つ

「でも、何時／＼まで斯うして御厄介になるのもお氣の毒でして、どんな所でも口さへあれば勤めて見る氣で居ます。」

「何有、關はんさ、お互の事だもの。」
「然し夫婦連れですから、それに、御覽の通り氣の廻らん奴ですから、嘸、お氣に合はぬ事もありませうと思つてな。」
「だつて、僕にや妹だもの。」と笑つた。然し目は不安さうに相手をはかつて居た。

膳拵へして妹が持つて來た。二人はお先に済ましたからとて、湯村だけ膳へ向つた。ランプの心を高く上げさせた。

妹は最う先刻の事をケロリ忘れたやうに、夫の傍へ坐つて活々とした話振である。油井は又途中見て來た色々話をして聞かせる。下町の物價の高い事、風俗の派手になつた事、三軒が三軒見て來た芝居の木戸留であつた事、秩父編の月賦賣が却つて格安の事や何かを話して聞かせる。妹はそれを聞いて何時か一度是非その下町へ連れて行つてくれとせがんで居た。妹は二月前に東京へ來たなり、未だ一度も外へ出掛けた事がないのである。

「何れ連れて行くよ、その内には、芝居も見せてやるよ。」と油井は答へた。

「貴方のその内は的にならないから、その内／＼つて最う二月になりませうもの。」と粘つた調子である。

と云ふ一節まで來ると、われとわが身に聞く聲が次第に亂れて顫えて居る。又續けて讀んだ。

偶と耳を立てると、妹夫婦が何か言争つて居る。聲を憚つては居るが、室が浅いから手に取るやうに聞える。

「馬鹿を云へ、何所に遊ぶ錢がある、氣樂な事を云てやがる。」と油井の聲である。

「だつて金でばかり遊ぶんぢやないもの。」
「では何で遊ぶ、握り拳でか、貝殻でか。」
「知つてるもんか。」

「え、何んで遊ぶよ。教へてくれよ、俺は些つとは人並に遊んで見たいから。」

「また國に居た時のやうに？」
「然う／＼、あの時の事云はれると一言も無い。」

「決つてるんだから、病氣だね貴方の。」
「病氣にしちや好い病氣だね、手数がかゝらないで。」

「その氣だもの、呆れて了ふね。」
「へッ、この氣か。」と何かおどけた仕方をして見せたらしい。妹はぶツと吹出した。

湯村は忌々しさうに聖書をドシンと襖へ投付けた。

「馬鹿だね、靜にしるよ。兄さんが勉強してお出なさる。」
二人は又睦しさに、聲を低めてヒソ／＼話し始めた。

「偽故不可ないんです、え、何故？」と今度は妹が何かねだつて居る。

「屹度／＼屹度ですよ。」と念を押す。

「う、好い／＼。」と笑つてる。
湯村は箸を投げるやうに置いて、「陸さん」と呼ぶ。陸三郎は油井の名である。

「陸さんは感心だな、これを連れて電車へも乗る氣か。紡績の女工と云はれるよ。」

「へッへッ。」と煙管で頭を掻いて、「でも爲方がアせんもの。」
「好い氣だよ。二人共。」と湯村は書齋へ引込んだ。

七

書くのを思切つて、そこに腹這になつて、新刊書など出して見た。口繪や序文や飛び／＼に眺めたばかり、身を入れて讀まれさうにもない。痒いのに氣が付いて見ると、足に蚊が留つて居る。忌々しさうに掌打にすると、血は掌を汚した。妹夫婦は自分の間と定まつた支關脇へ集つて、ヒソ／＼聲で話して居る。笑ふ聲も聞える「あれだ」と湯村は苦い顔をした。

書架から手擦のした、羊皮表紙の新約全書を引ずり出した。盲目さぐりに開くと、約翰傳の十一章が出た、七節から讀始めたが氣も無く止した。又開けたのは馬太傳の六章、有名な山上の大訓である。小兒の時から愛讀書ゆゑ、詩を讀む心で讀んだ。唯讀んだ。果ては聲を立て朗讀した。そして、「それ狐に穴あり、鳥に巢あり、されど人の子は枕する所なし。」

「不可ないよ。」
「まア可笑しい、何故だらう。」
油井は黙つて新聞でも讀んでるらしい。妹は耳根ツこへ寄つて承知しないらしい。

「だから、何故不可ないんです、東京々々と思つて東京へ來て、淺草も見えないなんて、こんな詰らない話は無い。」

「上野を見たから好いだらう。」
「上野だつて、博覽會も過ぎて居たもの。私イルミネーションを見たかつた。」

「電燈がドッサリ點くばかりよ。水道町でだつて見られらア。」

「自分ばかり方々歩いて。」
「今に見せるよ、馬車に乗せて、三越で着物を買つて、白ぼたんで指環を買つて、そして奥山の玉乗りを見せよう。」

「馬鹿だね、私は出掛けて見たい。」
それから話は奥山の話になる。山雀の藝當やら、花屋敷の人形やら、珍世界、水族館などと色々出る、妹は氣をゆるめてもう話に酔つて居る。

湯村は蒼い顔して起上つた。そして、三疊に出て行つてその襖を開けると、寢轉んで居た妹は飛んで起きて、窮屈さうに坐つた。世間話を二つ三つしたが、油井は「は、は。」と謹んで挨拶して、煙草ばかり吹いて居る。妹は勿論一言も云はぬ。額越に兄の氣色を窺つて見る。

湯村は蒼い顔して起上つた。そして、三疊に出て行つてその襖を開けると、寢轉んで居た妹は飛んで起きて、窮屈さうに坐つた。世間話を二つ三つしたが、油井は「は、は。」と謹んで挨拶して、煙草ばかり吹いて居る。妹は勿論一言も云はぬ。額越に兄の氣色を窺つて見る。

又書齋へ戻つた。

十時頃だつた。湯村は突然、「陸さん、一杯飲みに行かう。」と誘出す。

「は、私は。——兄さん召上るなら麥酒を買つて参りませう。」

「馬鹿な事、お酌が無い。」と家を出た。

水道町のある洋食屋へ入つた。二階へ上つて見ると、客は二組ばかり居た。殊に向隅に傾取つたのは清國留學生が七八名、遠い本國の言葉で高聲に喋り散らして居る。

酒はウキスキイにビール、割つて飲むのが湯村の癖である。

油井は日本酒の方が勝手だと云つてその方ばかりやつて居た。

湯村の方では打解けた調子で話しかけるが、油井は唯々恐縮して居る。談がトンと興まない。特に女中を捉へてキヤツキヤツ騒ぎ立てる支那人の傍若無人さに、湯村は眉を蹙めてたゞガブ／＼酒を呷上げて居る。

「兄さん、最う歸りませう。」と油井が云出したのは十二時近くであつた、二組共客は歸つて、下では最う戸を閉め始めた。

「何所かへ行つて飲直さう。」と湯村の聲は大分もつれて居る。

「何所と云つて、最う遅ござすよ、十二時ですもの。」

「十二時だつて好いさ、神樂坂にや起きてる家がある。」と性急に帽子を取つて立たうとする。

夢でも見たのか、三十分許りすぎると、湯村は目を醒して、

「陸さん／＼」と呼ぶ。二度も三度も呼ぶ。ランプを持つて妹が恐る／＼枕元へ来た。

「何の御用ですか、私致しませう、もうスツカリ酔つて了つて、正體なく眠つて居ます。」

「ときか。」と湯村は爛れた息を吐いた。

「貴様達は幸福だよ、實に羨しい。然うあるのが本當なんだ。何時までも／＼然うして暮らせよ。」と云ふ。

妹は何と云つたら好いか分らなかつた。

「手を貸せ、手を。」と恐る／＼妹の手を固く握つて、振つて、「あゝ一生然うして送つてくれ。」と離した。

「でも今夜は遅いから。」とモゾ／＼して居る。

「大に騒がう、わあツと。そして飲むんだ。」

「それに、家でも待つてますしな。」

「それで歸らうと云ふんだな、歸り給へ。」と注置きのビールを一息に呷つて、「君は歸る家があるから好い。僕は無い。」と唇に流れる雫を平手でベツと拭いた。

「だつて、兄さん、今から飲んだつて同じ事ですよ、又明日召上がれば好いでせう。」

「僕ア大に話がある。」とそこへ坐込んで動かぬ。

「お話なら伺ひます。」と油井は迷惑して居る女中に目配して椅子へ掛けた。

「君ア女房が可愛いかね。」

「さア、困りましたね。」と頭を掻く。女中がクス／＼嗤出した。

「人間女房が可愛いやうぢや駄目だ。事業のためにや犠牲にする位の意氣込で居るんだね。」

「そりや然うですな。」

「駄目だよ、君は。駄目だ。駄目だ。」と頭をフラ／＼させる。

「だつて、私があれば出したら兄さんが困るでせう、だから私は我慢して居るんだ。」と笑つた。

「然うだらうな、はゝはゝゝゝ。ぢや、禮を云ふ。禮を云ふ。」二人はそこを出た。途中でも何度か愚圖るのを無理になだめて、家へ歸ると妹と二人が／＼りて寢床へかつぎこんだ。

卓 上

「僕は何故と云ふ言葉が大嫌ひだ。」と西洋畫家のM君が云ひ出した。マカロニシチュウに些いと酢を利かせたのが大の好物で、鼻からこればかり三皿も平らげた。背の圖抜けて高い、顎の大きな人、鐵縁の目鏡の玉か一つ裂けたのを掛けて居た。

詩人と小説家、それに畫工、若い美術家の集まる七人會の席上である。今日は二人缺けて五人しか居ない。M君は一座の放言家で、何時も話題の中心者とならなきア承知しない。そして又云ふ。「然うしたら君等は、僕が何故を嫌ふ譯を何故と聞くだらう。それが大嫌なんだ。理屈は無いよ、昔から何故で繪を書いた人が無い如くさ。」と云つて、ビールを高くあふつた。斯うなつて來ると、皆黙つて聞くより外はない。「おい、佐川が居ないよ。」とM君は隣席の宮石と云ふ新體詩人に云ふ。

「君が餘り氣焔を吐くからよ、遁げたらだらう。」と恐しく派手なネクタイの詩人は笑つた。「呼んで來いよ、佐川が居ないぢや話にならん。」「合せよ、苦しさを。」「關はんよ、問題があるんだ。」

何故酒が飲みたい、何故繪を書きたい、と屹度根本から問返す。晝寝にも何故、疝氣にも何故と云ふ。それも好いよ。然し一番癢に觸るなア、僕が折角好い晝寝を見付けて、吹聴ながら相談に行く時だ、一時間も二時間も内容や趣向を僕に喋らせて置いて、そして落付拂つて一番最後に曰くさ、『それが何うしたと云ふんだらう』と反問するんだ。癢に觸るね。何故が判つて繪を書く奴がある者か、何故と云ふ根本には蓋をして置く所に吾々の藝術があるんぢやないか。何故は藝術をひらく鍵ぢやない。その癖、當人と來たらツブ描けないんだ。コマ繪一つ書くにもギイ／＼苦しがつて居る。冷たい目はあるが手が無いんだ。怠け者でね、年中流浪してやがる。そして、他に對すると必らず『何故』とか『何う云ふもんで』とか勿體ぶつてこきアがる。面憎いね。人間は好きだが態度が實に面憎い。そんな時にや、落付き拂つて吹ふ奴の煙草のみ振まで癢に觸つてならん。畜生！ 描いて見せるぞと何時も僕は吐に思ふよ。

處がだ、閑給へ、この癢に觸る間に答へる痛快なる返語がある。東京にや無いやうだが、われ／＼奥州人のみにある言葉なんだ。それも大人は云はない、小兒の間だけだ。君等試みに奥州の小兒を捉へて何故と問うて見給へ。屹度、唯一！と答へるに相違ない。東京なら『何故でも』と云ふ所よ、それに問を嘲つてやる意味もある。簡單にして明快ぢや無いか、即ち吾等藝術家の心なんだ。すると今度は問ふ方が癢に觸

あつちだ、バルコニーで今風に吹かれて、眞蒼な顔して居たよ。」と他の一人が云ふ。

女中がその佐川を深しに立つた。「然し近頃の佐川君は些と變だね、甚くこずんでやがるぢやないか。仕事を怠けるしさ。」と宮石はその間を小聲で云つた。「ふん／＼。」とM君は急しく頷いた。そしてその事よと云つたやうに目で笑つた。

頬の蒼削げた、疲れた佐川が入つて來た。額の高い、目の沈んだ男だ。赤緒の草履を冷たさうに素足である。「おい佐川。」とM君は高張付、「今面白い話が出たんだ。例の僕が For What Reason と云ふ言葉を嫌ふ譯なんだ。」と獨りで景氣付いて居る。「又かね。」と佐川は力なく笑つて、椅子へ掛けた。その風を見てM君は、「おいシツカリしろよ、些と御見舞申すぞ。」

「あ、何うでも。」と着薄の前を搔合せて居る。M君は話出した。「僕の親友に何故と云ふ口癖の男がある。矢張り同じ西洋畫家だ。技倆は左程ぢやないが魂で活きて居る人だ。流行の畫風に飽足らんで、畫面から強い光を退けて、臙脂色をパレットに復活させようと努めて居る人だ。今の畫家を『鳥の目で書く』と嘲つて居る。その男だ。恐しく何故と云ふ言葉が好きで、

えて、『何故唯だ。』と斯う來るさ、小兒は濟したものの、『唯の唯』と答へる。『何うして唯の唯？』唯の唯の唯。幾回でも幾度でも續けて行けるんだ。」と言半してM君は些いと佐川の方を見た。佐川は鼻から阿蘭陀芹の白根を、前歯でチャキ／＼噛みながら空しい顔で聞いて居たが、旋てその大きな目を凝つと据えて、水銀のやうに重く見えるフラスコの水を見詰めた。目の置きやうで、瓦斯の光がキラリと水に光つた。M君は指を突込んで、新しい露西亞卷の赤い封目を切つた。火を點けた。

「その男、今話した男だ。これが或る時戀をした。相手は素人下宿の娘でね、今年十五か十六の小娘だ。胎毛のやうに眉毛の濃すい、色白の、些と愛らしい娘だが、何しろ未だ全ツしきのネンネで、桃色メリンスの兵兒帯を結んで、手紙を障子の間から投込んでバタ／＼縁側を馳出して行かうと云ふお轉婆さんだ。學校は女學校の二年級と聞いた。友人はそれに御座つた。所がその男の事だもの、口説けるものか、口説いたつて何うだか知れるものぢや無しさ。そりや見て居ても氣の毒なほどであつた。相手には寄らず觸らずにソツトして置いて、その周圍をグル／＼煩悶して廻つて居る。恐らく膝を並べて坐つた事もあるまい。そしちや、その一言一動に恐しく氣を揉んで、あゝだ斯うだと奥深い考へ方をしてゐる。同じ年頃の男の子と馴々しい口でも利いてるのを見ようものなら、全くその晩は眠らないでの懊惱さ。例の『何故だ』『何う云

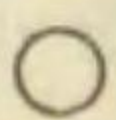
ふもんで」が切りと出る。何時かなぞはその娘の歩み振が變つたとて、奴さん大心配、處女が外輪に歩くやうに變るのには生理上どんな徴候だなどと、僕を惱ましに來た事がある。これが女になつた徴だと、耻入りながらも喜ぶ風が見えた。で、或る時、秋日和のぼか／＼する午後だつた。散歩ながら遊びに行くと、先生は娘と二人日向へ出て鶏の雛の嘴へ克明にナイフで刻目を彫つて、それへ一々朱墨を入れて居る、隣家の間違ふからだと云ふ。随分居た、何しろ卵を賣つて三人の小兒どもの教育費にするんだもの。娘はケツ／＼騒ぐ雛を横抱にして持つて居る、先生は爪切の尖で固く嘴を抑えて、コツ／＼お仕事だ。するとね、俯向いた男の頬が些い／＼と娘の白い二の腕へ觸るんだ。何時までも凝つとして居る時もある、押付けるやうにして。無論軀と軀はピッタリ喰付いて居る。恐らくこれが娘の軀に觸つた最初だらう。「よ、早くよ、何をしてるの。手がだるくなつた。」なんて娘を焦れさせ喜んで居る。男の目はホット紅くなつて、額や小鼻には汗が滲んで居たよ。僕に向つては、「些いと待つてくれ給へ。」とばかりで、娘が、「お客様もあるから又の時にしませう。」と云ふのを無理に抑えて、到頭三十幾羽と云ふ手術を終つた。僕は二時間近く縁側に寝て居た。

その日だ、僕は餘りの馬鹿々々しさに初めて眞面目な忠告をした。相手が相手だもの許せんぢやないか。すると友人は黙つて話を聞いて居た。忠告に従ふとも従はんと云はばない

そして「何故惚れた。」「惚れて何うする積りだ」と根掘り葉掘り尋ねても更らに云ふ所なしさ。今云ふ唯！の口だね、唯の唯！唯の唯の唯！何所まで行つても話が乾かないんだ。馬鹿な話よ。」とM君は勢好く笑つて、「ねえ、佐川」と付加へた。

「あゝ。」と佐川は鈍く答へた。そして矢張り凝つとフラスコを眺めて居る。手の阿蘭陀芹は葉ばかり残つた。

不生女の一生



龜次は六つの時伊達の機屋へ貰はれた。そこに三年居て、九つの年から雄勝の巫女の家へ養女になつた。そこにも五年居た。そしてその間は師匠の一字を分けて龜尾と呼ばれた。十四の時、頬髯のある恐ない目顔の人が思ひ掛けず迎えに來て、仙臺の實家へ取戻された。

野に茅花が咲いて居た。師匠は頸骨の角に張つた、口元が絶えず癢癢けて居る年寄であつた。龜次には見えないものを好く見た。迎えに來た人が頭／＼なしに談じ付けても、巫女は肩から袖へ穢れた行衣の膝の上に萎ひた手を置いて、顛えながら聞いて居た。

龜次は露次口の枳敷垣に隠れて見て居た。夕闇は顔に觸るほど濃く裏の杉林から漂つて來て、百姓家を直した棟木の高い家の中を次第に暗らした。懸箱の一本蠟燭は細々と揺ぎもせずにともつて居た。龜次は悲しくなつてシタ／＼泣出した。

この後幾年かの間、世に埋れて寂しく匂つて居る枳敷の白い小花を見るたびに、龜次は石材を截出す赤山の麓に棲んで

居る師匠のことを思出されてならなかつた。

この人にも子は無かつた。三十年も前に能登の國と云ふ遠い所から來たと寢物語に聞いて居た。

運河の堤は長かつた。

麥畑の中から雀が高くあがつて、光つた空の上で鳴いた。

この頃東京から流行つて來た、菊に蘭を描いた白地の蝙蝠傘を肩にかけて、連の男人は下駄がけで高間の小徑をユラリ／＼と行く。肩から脇に掛けた提げ鞆の金具がキラ／＼と日に光つた。五月の香しい空氣に弄られて、小娘の龜次は頬を眞赤にしながら後から跟いて行つた。草鞋掛けの紐足袋が幾度も／＼解けた。

東名と云ふ濱邊から帆を掛けた船に乗つた。龜次は米俵の間に挟まつて背中を日に暖めて居る中に好い心持で眠つて了つた。風が冷々するのを目を覺ますと、二階家が兩側に續いた混雑しい町の棧橋に船が着いて居た。熱い足を引擦りながら跟いて行くと、連れの男人は兩側の家を一軒／＼窺いては出て行く。中を薄暗らしくしてどの家の店頭も太い格子で入口を仕切つてあつた。

その晩は蒲團を一杯に詰込んだ部屋に寝かされた。連れの人は居ない。幅の廣い光かる帯を締めた女どもが大勢居て、廊下の外を男のやうに口を明いて笑つたり語つたりして通る

のをウツラ／＼聞いた。
昨夜雨の通り過ぎた石地の道を一日歩いて、仙臺へ着いた頃は日がトツブリ落ちて居た。連れの男人は思ったより口の軽い道化た小父さんであつた。そして昨夜泊つた宿屋のことをお祖母さんだけに話すと笑ひながら云つた。お祖母さんと云ふのは自分を生んだ母親のことだとこの人が話して聞かせた。

低い家と低い家の庇間から薄い煙が表へ流れて居る。目に滲みるやうな杉葉の匂が交つて居た。龜次は流し前の濡れた土に立つて居た。

「ぢや一所にそこへ來てるの。まア何んと云ふ吾妻さんだらう。龜さん。龜さんや。」と滑りの好い聲が聞えて、小作りの女が上り口から顔を出した。おみつである。

「さア／＼、何んだね。お前さんもお前さんだ。自分の家へ歸つて來たのに何をウジ／＼して居るのさ。——まア厭だ。風呂敷なぞ背負はせて。」

おみつは一人で賑かに燥いで、隅ツこに固くなつて居る龜次の足を無理に解いてくれた。

戸棚の戸も爐傍の縁も茶箆筒も女の兒どもが此等を見い御飯を喰べて居る飯臺の上も、雑巾のあたるところは皆テカ／＼と光つて居た。でも、重苦しいほど低い屋根の下に大勢人が居るので、龜次は好く息が塞らないものだと思つた。

の頃も猪狩のを渡すのに、それが無いため大きに難儀した譯だ。」と父は痲痺で短かく刈込んだ半白頭を撫で、居る。

「猪狩で又賣つたツてね。どれを、どの娘だらう。」

「三番目のあのおえつと云ふ娘さ。先方にも苦情はあつたけれど、三十兩と云ふ手取りで天童へ向けてやつた。先生飲めたよ。」

目の据つて來た父と吾妻は飲みながらこんな話をして居た。

「好い事ばかり流行つて結構だ。見ない世の中を見られませぬ。」面當らしく斯う云つて立つたのは母親であつた。

「なんぼなんだつて、この着せたものはさ。女の兒なのに。」おみつはブツ／＼云ひながら龜次の着物を着換えさせやうとして氣が付いた。そして肌にくもものまでスツカリ脱がせてしまつた。自分の絆纏に細紐を締めて妹どもの間へ寝かした。次の朝起きると、おみつは待構へて居る龜次の赤い頭毛を醋でひたしてその上を乾いた手拭でグル／＼に包んで了つた。脱いだ着物は盥へ入れて沸湯を注ぎかけた。そして、裏の木瓜の樹の下に古藪を上へ掛けて投げ出してあつた。

黒く土の腐れた裏藪には、瘦せた柿の木が二三本ヒヨロ／＼と立つて居た。炭俵が物置へ行く道に腐れて居る。柄杓で汲めるやうな浅い井戸があつた。母は朝から土間へ下りて木綿機を織つて居た。チャンカラ

龜次はこの中で聲の鏽びた父の顔は知つて居る。去年の夏何處かの歸りと云つて雄勝の家に来て泊つた。その時師匠は涙含みながら、惜しい／＼紙幣を幾枚か出して渡したことがあつた。

「さあ、姉ちゃんが來たよ。」おみつは醜い田舎娘を腹違ひの妹どもの方へ連れて來た。全く、龜次は、姉妹中でも一番不景色に生れた。目ばかり大きくて、鼻が低くて、前歯が二枚唇の外に反つて居た。雀斑もあつた。雄勝の田舎に居る時でさへ村の兒どもから、「反ツ齒そばかす、算盤目の燥魚。」とはやされて居た。

「お父さんにお辭儀は。」ときびしい聲を聞いた。怖えながらソチラを見ると、尖つた顔の母が自分だけ胡桃足のお膳も徳利も別に控えて、爐の向側に坐つて居た。黒の前掛を締めた瘦せた父は、「ハイハイ。」と頭を下げた。

米の飯はうまかつた。師匠は法の掟として栗の飯より外は喰べなかつた。茶碗の隅から目を遣つて聞いて見ると、父と客とが自分のことを話して居る。

「お祖母さん一杯つぎませう。娘一人拾つて來て上げたんだ。本當なら一鍋掛けて頂くとろだ。」他愛もなく酔つてしまつた吾妻は怪しい手付で徳利を取上げたけれど、母は無愛措に瘦せた手を盃に蓋して了つた。

「何しろ従前と違つて今では戸籍と云ふものがあるから、素人はメツタに動けない。あの巫女も騙つたことだらう。こ

／＼と棧の音が日和より響いて居た。なるべく母の目を除けるやうにした。

姉さはお錢持つて居ると、下のおたけに騒ぎ立てられたけれど、龜次は飽まで無いと爪を噛みながら剛情を張つた。母に機部屋へ引擦り込まれて、帯で繋られても泣かなかつた。

「然う剛情張るなら、御靈符飲ませます。血を吐いて死んでしまふ。」と紙切を水に混せて飲ませられても黙つて飲んだ。蒼くなつては居た。

龜次はその晩の中に炭箱の下の財布をコツソリ他へうつした。暗らい中で指先で錢高を讀み直して、その中から銅錢を二枚だけ別々の袂へ入れた。小さな銀貨は縁に爪を當て、見た。來る前の晩、師匠は年寄りの荒れた肌に龜次を抱き締めて、

「屹度悲しい時が來るぞ。その時はこれを持って逃げて來るんだ。私はもうこの年だ。これから新しく小兒を貰つても仕付ける根がない、一生でも獨りで待つて居ます。」と云つて、縣箱の底から財布を出して龜次に握らせた。太い眞田紐でグルグル巻付けてあつた。

髪の毛の耳の上まで伸びた十二の男の兒と一所に、龜次は法華寺裏の椿の木の下で遊んで居た。暖かい日は高い本堂

の上から這つてポトリ／＼と花の落る赤土を軟かくした。この兒と初めて友達になつたのは、四五日前の風ッぽい夕暮であつた。表に立つてボンヤリ雪の落ちた着い遠山の隈を見て居た。すると、肩繼の當つた穢ない着物を着た男の兒が友達にでもはぐれたのか。一人竹片たけざらを持つて森とした明神様の前の空堀を突き廻つて居た。薄い夕日が黄色な土壁に落ちて居る。道を通る人がこの兒だけ見付けないで行くやうに思つた。

「遊びませうか。」龜次の方から行つて聲を掛けた。病身らしい男の兒は青味のある目を見張つて、一杯に涙を溜めて居る龜次の顔を驚いて見た。

「兄さん、幾つになるの。」

「十二。」

「名は。」

「平田。」

「平田ツて名？」

「元吉ツて云ふの。」

斯うして二人は友達になつた。龜次はこの兒とだけは好く口も利いた。惜しみながら菓子も買つた。

この人氣のない寺裏が一番氣に入つた。龜次は家に居ても外へ出ても、周圍の狭いのが何より悲しかった。何所へ行つても十歩と距れないところに様々の人が居た。自分を何所かへ落して来たやうな氣がした。雄勝の家が戀しくなつた。或

姉は手荒らく障子を明けて、小さな二坪ばかりの小庭に植ゑた芍薬の眞紅な芽生を見て居る、土の底から温味が湧いて来るやうに、草も木も葉も活きた力に顫へて見えた。

龜次は姉の家に手傳ひにやられるのが辛らかつた。町の人々は皆飯事をして暮して居るやうに見えた三間はかりの家には稼ぐと云ふほどの事もなかつた。小さな飯鉢で朝飯が済むと義兄の善七は火熨斗に火を取つて座敷を引込んで了ふ。臺所を片付けて居る間に姉は青い顔して炭をついで、炭をならして、時々明るい方に縫物なぞ出して見るけれど、直ぐ飽きて投出して了ふ。龜次はキッチンと片付いた茶の間どこへ坐つたら好いかそれに困つた。

おいまは十四から嫁に来て二つ上の十六であるが、龜次の方がいくらか背なども高かつた。

「龜や、こんな日にはお芝居のお辨當でも喰べたいね。私はあの漆臭い匂を嗅ぐと氣がせい／＼するの。」

柱か火鉢かに寄りかゝつて、何時もグツタリ力の抜けたやうにして居るおいまも、氣が向いた時にはこんな話を爲掛けることがあつた。龜次は芝居も知らなかつた。

「まアお前、お芝居も知らないで何が楽しみなの。」と姉は小さい齒並を光らせて笑ひ倒れる。

「ぢや一度義兄さんに内所で連れて行つて上げよう。内所よ。」

「は。」

る日、おみつが縫直して襟に赤い繪のある巾など縫付けてくれた浴衣の袂を何氣なく探ると、中から、カラ／＼に乾つからびた草の葉が一つかみ出た。龜次はそれを持つて態々この寺裏へ来て泣いた。

元吉は海を知らなかつた。そして海の話喜んで聞いた。肩を並らべて、龜次は少しづつ嘘を混ぜませ海の話をして聞かせた。又目がくし／＼と、「紫匂ふ雲の上に、左手に刀、右手に紫紺の手綱をひかへ、ハイサナア、勇む黒駒引しめて、遙かに下界を見渡せば、ハイサナア。」と神降しの呪文なぞ稱へても聞かせた。

頸の細長い、肩が無いやうに落ちた姉の亭主は、姉と話するのでさへ妙にはにかんで恥かしさうにして居た。姉に較べると大變老けて見えた。言葉が吃つて居た。

「ハツキリ云つて下さい。キヤア／＼。些つとも解からない。」と姉のおいまは立ちもしないで火鉢の傍から怒鳴り付けるのであつた。

「おみつさんの事さ。」とこれだけ云ふにも餘程苦しかつた。「おみつが何うしたつて。又お株を始める。家へ來ちや悪るいんですか。」

「最う好い。もう好い。お前はアレに騙されて居る。私は本當のお母さんの方を思つてるんだ。」と日當りの好い障子際で小さな咳をしながら、一日ミシン臺踏んで居るのであつた。「寄書渡。子が親を貢ぐのが當り前ぢやないか。」

○

「は、だつて。まアこの兒は。」と姉は又笑ふのであつた。

龜次は床の低い臺所で洗ひものして居た。初夏の夕暮れは穩やかに暮れて行つた。妹どもは唄の稽古に行き、おみつは二つ三つ結つて來ると急がしさうに茶漬けを掻込んで出て行つた。二三日前の晩、五ッ橋の伯母が寺詣りの歸りに寄つて、母と二人して云ひ争つて以來、父はボンヤリ力なく長い日を送つて居る。訟事さうじの用事があつても大抵は吾妻をまはして、自分は寢たり起きたりして居た。

今日も物置から塵埃だらけな絡染たじりを持出して、小粋を半分ばかり繰つて見たが、掌に膏が切れて面白くないと云つて投出してしまつた。

「幾ら時勢だと云つて、木綿機には取付いて見る氣になれずさ。ケンチャウのザラ／＼するのが耳に立つて駄目だ。」と寂しさうに笑つて居た。

龜次はその力無い聲が身に染みるやうに思つた。母と云ひあの伯母と云ひ、何んで斯うこの瘦せた枯れた老人を責めるのだらうと、姉妹とて好く似た二人の大きな目が恨めしく思つた。父が悪るい悪るい、悪るいと始終母にも伯母にも聞かせられるのが飲み込めなかつた。若し話し掛けてくれるならいくらでも父と話したいやうな氣がした。

龜次は瀬戸物にあたる自分の指先が蟻蛙の籠泣きするやう

にコリ／＼と美しく鳴るのを凝つと聞詰めながら、薄暗らしい
流し前に立つて居た。茶の間を窺いて見ると、今まで晝寝し
て居た父は居なかつた。掻巻きを小さく疊んだ上に、黒い塗
枕を乗せて壁の隅へ寄せてあつた。

龜次は闔へ片足かけて外を見た。蒼空に浮かぶ白い雲は日
に／＼丸味を持つて光つて来て、暮方の物の色が日に／＼牙
えた。土の色の底から濕りを持つて軟らいで来た。涌口の豊
かな井戸の水から、匂立つ裏の柿の若葉から、チヨロ／＼
と流れる前の小溝から、遠い田圃の蛙の聲から、一緒になつ
て立ち騰ぼるやうな薄すい夕闇がフワワリと夜と晝との間の
時を包んで居た。

北側の屋根が半分頹づれ掛けた土族上りの筆師の家も稀ら
しく障子を明けて居る。そこからランプの裸火が靄の中に見
えた。その火のチラチラするのを眺めて居る。妙に引寄せる
やうな懐かしさが胸に湧き上つて、自分の心が優しくなつた
やうに思はる。何所かで笛でも吹きさうな夕暮であつた。

父は裾を端折り上げた素足になつて、やつとこの頃植ゑ換
えた十鉢ばかりの朝顔に如露から濕りをくれて居た。一つ
一つ泥鉢を掌へ乗せて暗らい手元で眺めたりして居る。この
父は。「お前さんのところを世間ではお嫁さん坂木と云つて恐
れて居ますよ。」と五ツ橋から年寄に面憎くさうに云はれた人
である。少しこゝむと背中が圓るくなつて、白い腰巻の下か
ら腹せた腰がタド／＼しく見える。

るだらうね。そして矢ッ張り一本獨鈷のあれが好いんだね。」
「細いのね。」

「そりや私だつて覚えがありますよ。私の娘の時にや吳羅の
羽織を着ないと娘のやうだとも云はれなかつたものさ。その
頃アおみつさんだつてお嬢さんさ。」と聲を立て、笑つた。笑
聲の美しい女であつた。

二人は何時まで倦きずに暗い中で話して居た。父は初鮪
を喰ふべく蠟燭を點けて裏の簾から山椒の萌を摘んで来て、
獨りで味噌を入れて搗り初めた。木の芽の匂が薄着の肌に滲
むやうであつた。

母は口を利かないで暮らす日が多かつた。寒むいやうな顔
をして居た。小兒どもを煩さがつて傍へ寄せたこともなかつ
た。「そらお祖母さんが。」と小兒どもは畏がつて居た。雨の降
る目であつた。猫の子が機臺の下でジャラけると、雨の中
へ投げてやつたのを見た。

おみつは、どんな時でも母に二合の酒は缺かないやうにし
て居た。見當の無い時でも徳利を前掛の下へ入れて駈出し
た。嘘を云つて借りるのが上手だとて、待たせ爛鍋なぞと云
ふ渾名もあつた。

又母は月に幾度かづゝ機部屋へ線香を立て、何も無い所
を拜んで居る時もあつた。そして龜次にも拜めと云つた。こ
こへ来る前の家に、龜次に二人の兄があつたのだ。二人とも
死んで了つた。

狭い家の中から段々抜け出して行くやうに思つて眺めて居
る外の闇の中から白い顔が浮かみ出た。

「お母さん居て。」と水口のところへ来て姉は小さな聲をし
た。

母は仕上げものをかゝへて親機の間屋へ行つた。

「おみつも居ないの。ぢやこれを何所かへ隠して置いて頂
戴。誰にも見られないやうに。」と囁いて萌黄の風呂敷包みを
龜次に渡した。

龜次はそれへ策をかぶせた。

「ぢや私些いへ行つて来るから、おみつが歸つたら然ら云つ
て下さいよ。」と下駄の音軽く小供どもが蝙蝠釣りに青竹を
持つて唄つて居る外へ出て行つた。

この頃流行の茶辨慶の袷に襟を置いたのを袖長かく着て、
姉のほつそりした姿が見えなくなつたが間もなく長前垂を締
めたおみつと二人して歸つて来た。初鮪の小皿を下げて急が
しく歸つて来るのとその角で遇つたのである。

「けど惜しいねえ。お母さんがお嫁に来る時に自分で織つた
んだつて、未だシャンとして居るんだもの。」おみつは人顔も
見えない外に立つて話して居た。

「惜しいたつて何んだつて、今時あんな帯締めてる人はあり
やしない。この間も市ちゃんにだつて笑はれた。田舎のお雛
様のやうだつて。」
「ぢや明日左源へ行つて話して見よう、けど七切ぐらゐもす

それでも五つ橋へ行つた時だけは、母も好く顔の似た姉を
相手に心から話して居るのを見た。そこには、「お曾母さん。」
と云ふ七十を越した伯母の姉が達者で居た。

毎晩寝ると龜次の颯から血が流れた。おみつは逆上を下げ
る爲めとて蒜を揉んで頬の上に貼つてくれた。それでも止ら
なかつた。梅雨の頃には舊る手紙を枕へ敷かなければ寝られ
ないやうになつた。それに腰の骨も痛んだ。

ある朝龜次は寢床の中で泣いて居た。何所も痛くはないが
このまゝ死んでしまふのではないかと恐れた。おみつは二三
度心配して聞きに来たけれど耻かしくて云はれなかつた。後
から母が来た。母は何も教へてくれなかつた。

凝つと顔を見て居て、「馬鹿。」と荒らい聲で叱り付けて通り
過ぎた。

義兄の善七は来る度におみつと争つた。常のおみつとは思
はれないほど善七には強かつた。酒氣を帯びて来た時などは
今にも攫み合ひさうで恐ろしくなつた。龜次は妹どもと暗い
所にかくれて居た。

「そんなみ、ツちい事云つたつて何うなる。おいまは若いも
んだ。貧乏して居れば親々を貢ぎたくなるのも當り前のこと
さ。女房にそれぐらゐのことをさせるなア亭主の働きと云ふ
もんさ。」

終ひには斯うおみつに投付けられて口が利けなくなつた。
「私は職人だ。五つ橋に居る官員様のやうな眞似は出来ませ

ん。」上方訛のある善七は、皺の多い年寄染みた顔をモガム／＼させて黙つてしまふ。激するほど顔が赤くなつた。そんな時は父も母も傍で酒を飲みながら見て居た。又父が行つて善七と争つて来る事も度々あつた。

出すの退くのと云ふ騒ぎも好く持上つた。その度おみつはサツサと行つておいまを連れもどして来た。あんな年の違つた渡り者にやるぐらゐなら他に日當りの好い所は幾らもあると獨りで力味んで居た。

その度仲裁に入るのは五ッ橋の年寄であつた。泣きさうな顔して善七が自身呼出しに来る時であつた。年寄は長い羅宇の煙管を唇にあて、膝の痛くなるほどおいまを坐らせて置いた。婦女の道、子としての道、龜次なその耳には骨のやうに堅い話ばかりであつた。流星のおみつもこの人ばかりに頭が上らなかつた。

「私は三十四の年に伯父さんに死分されました。それでも他後指一つ指されたことがなく、眞人を頭に三人の子を育てて、何うやら斯うやら今日のやうになつたのは、誰一圖にお天道様の道を守つたからですよ。若い時だと云つて私は子供どもにも我儘は許しませんよ。人間に若い時と云ふものはない。年寄つてから安樂する用意をして置くのが若い時です。私は毎日神様を拜むたびに、働きます、働きますとだけ拜んで、家内安全だの何んのと願つたことは一度もありません。」と落付いた調子で煙草をひねりながらユツクリ／＼話して居

色の黒い娘であつた。

廣い青々とした野原へ出た。野の向には杉森が低く續いて百姓家の薬屋根が所々に玩具のやうに見えた。あの田圃の先きは海だと教へられたけれど、同じ青いだけで龜次にはそれが區別されなかつた。白い雲が野の上に浮んで居る。

小さな板橋を渡ると、野を見晴らしの茶店があつた。柳の木に圍はれて、涼しい風が野から吹通した。その裏の座敷に赤い毛氈を敷き詰めて、若い派手な白地を着た男が待かねて居た。何所かで見えたことがあると色々考へて、好く遊んだあの兒、元吉の兄さんで芝居小屋の木戸に立つて居る人だとやう／＼思ひ付いた。

代る／＼湯へ入つて、姉もその娘も持つて来た浴衣に着換えた。毛氈の上に重ね箱が擡げられた。木皿も箸も盃も同じ色に塗つたのが箱の中から出た。下でお燗をした酒を撥ぶのが龜次の役であつた。皆好く飲んだ。最う暫く會はれないんだからと云つて、他の娘は眞赤になるほど飲ませられた。

おみつは下から三味線を借りて、肌抜きになつて賑かに引いた。若い男が踊つた。龜次はジューと耳の底まで鳴り滲みる蟬の音を聞きながら、涼しい縁側へ腰掛けて大きな目で眺めて居た。姉もおみつも今日ほど牙牙しく美しく思つたことはない。鼻の下にある鬚子がおみつの顔をさも情らしく見せた。

「龜次さん、貴方も一つお上り。」と若い男に手を取られて盃

る。「龜次も来て伯母さんのお話を好く聞いてお置き。」と傍から母が口を出して一緒に坐らせらるのが龜次には何よりも辛らかつた。

○ おみつの才覚で初めて紺緋の單衣と云ふものを着た。どの娘どもも挿して居る赤い水玉の簪も初めて挿した。龜次は背の縫目に刺でもあるやうに、身體をもちり／＼後から跟いて行つた。

おみつは平常着に絆纏を引掛けたばかりだが、姉は美しく着飾つて居た。金糸で龍を縫漬した緋縮緬の半襟を掛けた。阿波縮の大模様の單衣を着て居た。肩も見えるやうに頸を抜いて、透し模様のある日傘をさして居た。

熱い日であつた。梅雨上りの日の息吹に路傍の草が力なく喘いで居た。小暗らい屋敷町の門前に乾してある藪がキラキラ光つて居た。「皆他が振返して行くよ。髪が好いんだもの。」おみつは心から喜ばしさに姉の姿を後から眺めて居た。

途中から日傘までお揃ひのものをさした娘が一緒になつた。それでも二人は家並びの町だけ口を利かずに目で話しながら並んで歩いた。長い長い町であつた。龜次は腕が抜けさうになつて風呂敷包を左右に取換えながら歩いた。姉よりは

を持たせられた。龜次の師匠は毎晩少しづつ自分の酒を分けて飲ませた。若い男はそれを面白がつて姉のやうになつては不可せんよと、姉の方を睨む眞似しながら云つて聞かせた。

龜次は若い男を知つて居ると云つた。「私を、何所で。」と色の白い男はビツクリして箸を下へ置いた。

「元さんの兄さんだ。知つて居ます。」と云つた。娘どもは首を据ゑた目を笑はせた。笑ひながら二人して若い男を睨めた。

日がかげつて来て、野面はハッキリ近く見える頃、若い男の手を二人で引張りながら娘どもは菖蒲の咲いて居る小池の周圍を遊んで居た。龜次はおみつからあの土族の娘も近々に一ノ關へ賣られて行くのだと話して聞かせた。

若い男だけ残して、女どもは歸つた。木の下の間と明るい所とカツキリと別になつた夏の宵であつた。野地の溝々に虫が光つて居た。

「おみつさんも行つてしまふし、お瀧さんも居なくなる。残つて居るものばかり詰らないわねえ。」と姉が溜息を吐き／＼云つた。

白地の娘どもは腕を肩にからませて一人のやうになつて月の下を歩いた。「一ノ關つてどんな所だらう。近かければ遊びに行きたい

わ。お客になれば私だつてお瀧さんを買ふに好いでせう。」
「一緒に遊んだ人は皆バラ／＼だわ。」と娘も悲しうになつた。

「何うせ私どもぢやおはまさんのやうに官員様の奥さんにもなれず。麻を績んだつて機を織つたつて着物だつて着られやしない。相互に親はあるしね。」と云つて「貧乏士族の娘ッ子は。」と云ふ流行歌を歌ひ出した。

二人は町の曲り角で抱き合つて、殴り泣きながら別れた。

○

龜次は五ッ橋へ引取られることになつた。姉の婿は小さなおたけを取つた。龜次の給金は總べて濁り酒に換えて、母親一人の寢酒をつゞける約束であつた。龜次は別に不足とも思はないのに、伯母や義兄が口を酸くして子供の務めを説き聞かせた。そして、我が預かるからには嫁にやるまで長い袖の着物は着まさんと伯母は自慢さうに父へ斷つた。

然う決まる前にも、親類會議は度々開かれた。五ッ橋の伯母を初め、義兄の善七、近眼の鹽田、その他三四人の親戚が集つて、夜遅くまでヒソ／＼協議して居る。そして會議の後では必らず酒が出て皆酔つてしまふ。酒を飲まないでシヤンとして居るのは五ッ橋の伯母一人であつた。近寄り難かつた。

會議と云つても食ふ口を減らすか、頼母子講でも初めるか

に行く、花輪の家へ寝て、垂氷を喰べられるなんて悪口云はれて歸つて来る。私は見持です、伯母さんと伯父さんは夫婦養子だ。伯父さんが佛様になつて御座る枕元へ坐つて、伯母さんと私が暫く顔を見合せて居ました。——黙つてな。そこで私が云つた。嫁御、最一度亭主を持つて苦勞して見まいか、長い事ぢや無い三十年。何うだの、私が亭主になりますと云つた。伯母さんは泣いてな、三十年でも四十年でもと、斯う云つた。それからと云ふもの二人して、寸の時を惜んで働きました。伯母さんはな、三度の御飯と煙草の外は口へ入れませぬと鑿金様へ御願書を書いた。今では斯うして隣り屋敷の二つも買ひ潰して屋敷中に井桁の四つもあるやうになつて、花輪とか五ッ橋とか云はれるやうになつたのは皆この伯母様と私の手のおかげです。私は毎晩寝る時に自分の手を拜みます。貴方の家なぞも、お父さんもお母さんも侍でこそあれ、揃つて機の名人と云はれた人だ。あの手さへ遁がさずに置けば、立派に立つて行ける家なのを、それ御時勢だ改革だと云つて、自分から慌て、潰してしひなすつた。根は根な押せと云ひます。お母さんから娘どもまで毎晩お膳に一本づゝ徳利を付けて、役體もない事に公債證書も失くして了つた。——貴方なぞは何んでも伯母様の眞似をして居れば間違はない。さア若い人／＼。話が判つたら働かんせ。大きな手より小さな手。」と始終聞かせられた。伯母はまた大橋流の書を好く書いた。都路の手本を書いて

それ位のものだ。そして口を減らす段になると何時も龜次の身が先に動くのであつた。何うでも好いと思つて居た。

頼まれて出歩く用事の無い日の父の不機嫌と云つたら無次へばかり當り散らした。「あのいけ猪るさうな狐面を見ろ、賢女は俺だつて顔して、得の行く所へばかりゴマを磨つてやる。嘔吐が出る。奴等アみな系統を引いてるんだ。」と父は世話になりながら悪態を吐いて居た。母は姉の悪口をされる度に眞剣になつて憤つた。

五ッ橋は屋敷内の廣い大きな家であつた。毎年切り出して賣るほどの竹藪もあつた。栗の木ばかりも六七本、果實樹もその節々のものがあつた。伯母もその姑の八十三になるお曾母さんもおこの屋敷が自慢で、龜次へも好く話して聞かせた。従妹ども二人は相應なところへ嫁付き、總領息子は上方の上等裁判所に判事を勤めて居た。

「あの家だよ、好く御覽。」些つとも手を休めて置けないお曾母さんは、雨の日は縁側に出て賃元結を繕つて居る。今では看守の夫婦ものに貸して置く草葺のひしげ家を指して龜次に話して聞かせる。

「眞人(總領孫の名)が十二の年だから、三十年も前の話だ。大麻疹が流行つては、貴方のお伯父さんと云ふ人はそれで死んだ。その頃私どもはあの家に住んで居たもんだ。御知行がお借分／＼となつて屋根を葺けないわ。小兒どもが外へ遊び

夜々の稽古に小さな机も出してくれた。目が睡つて手ばかり習つて居た。そして、家と云ふことを好く話した。無理にも覚え込まないうちは承知しなかつた。枕を外して寝て居るのを見付けても、士族の娘ではないかと厳しくたしなめられた。

龜次は息の吐く間もなく伯母の後を跟かなければならなかつた。家内は年寄二人でも、離屋には鎮臺へ出る砲兵の少尉が二人づゝ居た。その馬丁も二人居た。横顔に痣のあるお吉と云ふ下女と一緒に十四の龜次はその廣い臺所を受取つた。

母は機屋の返りに好くまはつて、樽につめた諸味を龜次に買つて歸つた。士官達の週番か何かで居ない時には、伯母は膳を出して母に飲ませて歸した。飲めば膝が頰れて来る。

「おけさ、もう大抵澤山でせうよ。もう座敷の人達のお歸りになる時間だから。」伯母はそれを見て苦々しさうな顔して居た。

夏が過ぎて秋が足許まで忍び寄つた。細く透通る秋葉賣りの聲が、肌寒の朝々、小路から小路へ悲しく振れて行つた。龜次は離れがたき寢床の中にしがみ付いて色々のことを考へさせられた。自分は何うなる身體だらうと云ふやうな、今まで思ひも付かぬことが氣になつて来た。考へても／＼解らないから、頭がポツとなつて了つた。

或る朝、唇を寒くして表を掃いて居ると、いづれも貧しい家の小兒どもが笹を頸にかけて納豆を賣りに来た。その中に彼の元吉も交つて居た。龜次は後から、「元さん／＼。」と呼ん

で見たけれど、元吉は羞含み笑ひして黙つて通り過ぎた。二町行つてから小さな顔が振り返つて見た。龜次は譯もなく舊るい小兒の時から離れて了ふやうな気がして悲しくなつた。

玩具の銀貨のやうに思つて居たのは勳章と云ふものであつた。腰へ下げる刀はサンチヨロと云つたグルメツトや拍車と云ふ名も知つた。初めの間、伯母さんは何んの爲めにこんな赤いものだの黄色いものだの身體中に喰付けた人を尊敬するのだから些つとも解せなかつた。「官員様。」「他縣人。」と云ふその意味が解からなかつた。それでも、毛澤のキラ／＼する馬に乗つて、馬丁を駈けさせて町を出勤するその姿は流石に勇ましいとは思つて見た。

それに姉も遊びに来る度に、龜次からお膳を取つて自分がお給仕に出たがつた。酒の出る時なぞにはさも嬉しうにして歸るのも忘れてイソイソして居る。酔はせられて赤い顔して居た時もあった。殿しい伯母もこれは然う咎めなかつた。「だつて杉山さんが變なことを被仰るんだもの。」姉は何時もソツとお吉を捉へて甘ツたるいことを云つた。「貴方は別嬪さんだからさ。」と小作人の娘は口惜しうに云つた。

「あら、あんな。何時でもなんだか。」
「ハイ、私ども、今度は生れ代つて來ませうよ。」

居る。酒で眞赤になつた鼻先を風に光らして、自分を見たいと言葉もかけずに行つた。龜次は傷ましいよりさもしうに父の老人染みた後姿を見成つた。

落葉の上の霜は日に深くなつた。栗が無くなつてからメツキリ寝坊になつた。それでも五時の目醒しに起きなければならぬ。傍に寝て居るお吉は自分の起きる時必らず龜次の蒲團を引めくつた。風に腫れたやうな顔付して龜次を見て居る。

「最り起さるぐらゐの時間。」
「當り前さ、もう何時だと思つて居て。」と險しく云ふ。

龜次はこの下女が自分へ口敷を利かないのを恐ろしく思つて居た。

「水汲ませう。」
「それは私の役。」とお吉は不愛措に出て行つた。

ある朝、龜次が寝むさうに起きて來た臺所口に鬢を風に吹かれて母が寒むさうに立つて居た。

「姉さん遂々。」と袖を顔へ當て、泣いて居る。
伯母は泣き聲を叱り付けて北口の小座敷へ引張つて行つた。出て來た顔は鋭かつた。

姉のおいまが情夫と一所に遁げたのであつた。

二三日してやつと居所は判つたけれど、その時は父が憤つて女宿へ賣つて了ふとて承知しなかつた。伯母と母とが躍起

龜次もはかりながらも、何んとなく別な世界を見るやうな気がして若い軍人たちを見た。話すことも爲ることも明るさうに見えた。喰べるものにも着るものにも名も知らないものが多かつた。月の何日かには二人とも財布を伯母の爐傍へ投出して、「お婆さん、當月はこれだけ。後は皆飲んで了つた。」と氣爽に笑つて居る。一圓の青紙幣が何枚も重ねて入つて居た。

「まあ貴方、こんなに費つては何うします。スツカリお預けなさい。私が役に立つやうな物にしてあげます。」
「だつてお婆さん。女に惚れられて爲様が無いんだもの。一つお婆さんお得意の意見をして貰はなくちやかなはんよ。」額を白く若い土官はこんなトボけた事を云つて年寄どもを笑はせて居た。年寄どもはこの人達に我儘を云はれるほど喜んで居た。世間へ誇つて居た。

二人居る中でも杉山と云ふ人の方が氣が輕るくて面白かつた。龜さんが大きくなつたら僕のお嫁にするから、その代り立て居て物を出すと、踵を痒くするのは止めるんだよなぞと龜次をからかつて居た。恥かしいと思つた。

龜次はこの明るい賑かな生活を知るほど、暗らい自分の家が見えて來た。

昨日も使ひに行く途中で父に遇つた。毛の擦り切れた毛皮の帽子を被つて、紋羽の襟巻をした父が、書類の小包をかゝいてブツ／＼の口の中につぶやきながら行つた。足袋も汚れてとなつて争つたけれど剛情に聞入れなかつた。特に母は氣違ひのやうに父と争つた姉の居所も父はかくして聞かせなかつた。

母も龜次も草鞋を穿いて、寒むい松原を朝から九里も歩いた。道に沿うた山々は雪に白く光つて居た。その晩は穢ない旅籠屋の二階に二人寂しく寝て、次の朝早く白ペンキ塗の殿しい門をくぐつた。大河原警察署と書いてあつた。

龜次は母の後に頭へて居た。
棒を窩腕に挟んだ巡查が、光かる着物を着た姉を二人の前へ呼出した。姉は固い木の腰掛に泣いて居る母の顔を見て少し笑つたやうであつた。

「親の爲になりますのです。何うせ私どもは雀ツ子のやうに親に身體を喰べられるのですかち、何んとも思つて居ません。」と云つて引下つて了つた。

母は何時まで泣いて居た。「私の耻、家の耻ですから。」手を合せて役人達へ頼んだ。

「そりや無理だよ、お母さん。父親が承知で本人が承知とあつて見れば吾々にだつて手の出しゃうが無いぢやないか。と役人の一人は母の肩を叩きながら慰めて居た。

母は暫く伯母の家に居た。良人の面に泥を塗つて警察騒ぎまでするやうなものは家へ入れることが出來ないと父は怒つた。北口の座敷で縫物なぞして居た。意地を張り通しても二

度と歸らないと自分も云つて居たけれど、長い間には氣抜きのやうに勢が無くなつた。あれ程好きな酒も進まなかつた。伯母もお曾母さんも母を引合に出しては序さへあると、親と云ふことを龜次に教へた。維新前は親不幸を重悪の極としてその罪人だけを芭蕉の辻で鋸引きにして諸人をこらしめたものである。竹の鋸を肩に當てられて、ウム／＼日和の筵の上に唸つて居た若い男の物凄いやつが光景なぞ話して聞かせた。

その頃母は五十幾つであつたが、龜次は母と呼ぶ氣になれないほど老けて見えた。伯母の方が妹のやうであつた。黙つて居ても眼險の下皮がピク／＼と動いた。何時も吸口の跡を唇に固く付けて、馬丁どもが臺所で馬鹿話して居る時でも、母は無愛措にして滅多に笑つたことがない。用をしてやるのでさも／＼大儀さうであつた。お吉にも馬丁にも奥の人達にも、誰にも嫌はれて居た。

おみつは出入りに好く來た。母の方ではおいまをそゝのかした根を持つて居るけれど、片方は何んとも思つて居ないでお母さん／＼と寄つて來る。何時もチョコ／＼走り來て、お吉なぞを笑はせながら賑かな話をして行く。母の髪はおみつが結つてやることに決つて居た。

「爲様の無い女兒だけだ、又憎みやうもない女兒だ。あれが無くちや坂木の家が持てないやうなものだ。」と伯母も時にはそんな事を云つて居たこともある。間も無く義兄の善七は百騎町の世帯をたゞんで、伯母の門

ぢめて居た。土族と云つても父は證文の宛名さへ讀めなかつた。長屋を借りて食用兎も飼つて見たが兎は皆死んだ。凄いほど憤つた顔付して、幾度も龜次を連れに來た。何うなつても爲方ないから歸して下さいと母が泣いて來たこともあつた。その度伯母は口惜しがりながら三圓五圓と金を渡してやつた。

大河原の姉からも假名で書いた手紙が度々來た。斯う始終家から責められては足の抜ける時があるまい。龜次だけは縫物でも習つて、母の後を見られるやうにと淨瑠璃のやうな文句で書いてあつた昨夜も母の夢を見てエンサモンサと泣いたとあつた。エンサモンサでは皆大笑ひになつた。

ある朝——未だ薄暗らかつた。昨夜の風に臺所口の梨子の花は眞白く地に降つて居た。馬丁部屋でも未だ起きて居ない。馬屋の馬は足音を聞付けて、鼻を鳴らしながら暗らい中に羽目板を蹴つて居る。濕れた土の香が身體に滲みて、裏島に白い露が落ちて居た。

龜次は昨夜殆んど睡らなかつた。睡れば重苦しい夢ばかり見て、何んとなんく身體中を緊張されるやうな氣がした。暗い寢床に入つて居るのが苦しくなつた。

二三日前にもお吉がそんな事を云つて冷たが眞逆に本當とは思はないで居ると、昨日土藏の前で母と伯母とが相談し

長屋の一軒に住ふことになつた。

正月が近づいた。馬丁どもや近所の娘ともが毎夜空屋になつて居た長屋へ集つて夜を更かした。皆が炭俵一俵を出し合つて炬燵がかけられた。凍返る外の寒さを聞きながら、金歩だの木鉢ころがしのと云ふ遊び事が榮た。龜次も伯母の目を盗んではコッソリその仲間へ入つた。お吉は常に小袋に錢を持つて居た。それを思切り悪く張つて居た。今日は六錢負けたの五錢負けたのと口惜しがつて居た。

「さあ張つた／＼。張つた時の地藏尊。」と圓次といふ剽輕者の馬丁が音頭取りであつた。

龜次は離屋を掃除する度に、机の抽斗や筆筒を探て少しづつ錢を見付た。十錢紙幣を一枚軍用靴の中から披出た時だけは二三日身體が顫て居た。そして病氣だと云つて義兄の家へ行つて寢て居た。

○

二年経つた。龜次は夜になつても無尻絆纏を脱いだことな、黒くなつて働いた。家の仕事の外には茶の時に茶を摘み味噌の時には豆刻み、漬込時には肘までヒビをきらして働いた。伯母に賞められるのが何より嬉しかつた。

その間におみつに三番目の娘が生れた。松に竹、うめと付けた。下に使つた吾妻の方が出世して、父は規則の改正から裁判所へ出る用はなくなつた。朝から酒を飲んで女どもをい

て居るのを聞いた。頼める程口惜しくなつて齒の痛む振して宵から寢てやつた。

義兄の善七と自分とは二十も違つて居る。それを夫婦。一日ミシン臺につかまつて何時に一度面白さうな顔もしない男。それと夫婦。酔ひさへすれば捨てた姉のことを云出して泣きさうになる男。それと夫婦。考へても厭で／＼耐らぬ。誰が何んと云つても斷つてしまはうと心では決めて居たが、また何んとなんく、夫婦と云ふその事が氣に残つた、ポツカリと頬の温かいのに氣が付くと、赤い日が霧の中から顔を出して居た。濡れて萎れて居た竹藪が見る／＼ハツキリ目を覺した。巻いた葉がほどけた。

井戸傍を廻つて行つて見ると、善七の長屋だけ戸が一枚外してあつた。雲脂の浮いた所作の無い顔して、暗い所に起きて居た。龜次は逃げるやうにして歸つて來た。キツパリ斷つてやる氣で、一日待構へて居たけれども伯母は何んとも云はなかつた。

この日の龜次は皆に笑はれた。臺所を稼ぐにも離屋の掃除にも、仕事の手が付かなかつた。

次の日も次の日も何んの事もなかつた。それとお曾母さんにその話を誘つて見たけれど、この年寄は別儀でなく善七の辛棒振りばかり賞めて居た。

「女もないのに感心な人だ。何うしても醬油が無駄だつて、茶漬は漬けないと云ふ話を聞いて私は感心しました。好い心

掛の若い人です。」と日當へ出て澁紙を張りながら、自分の好きな辛棒話ばかりへ持つて行つた。龜次は活き物でも腹の中に飲んで居るやうな気がして、そんな優長な話は聞いている瀬がなかつた。譯も無く気が興つて、日に幾度となく善七の前を通り歩るいた。そして夜は色々のことを考へた。憎いけれど男が氣になつた。

新蓋の味噌桶から味噌漬の大根や人參を夜ソツと探り出した。それを持つて善七の棚の上に置いて來た。善七は不審さうに裁板の上から眺めて居た。

「お曾母さんや、伯母さんに内所ですよ。」と然ら断つて板敷の中から諸味も時々盗み出した。今に自分からひどい事を云はれるのも知らないでと思ふと、龜次は働きの無さうな善七の伸びた顔を見るのが可笑いやうであつた。

「好いのかね、龜さん。毎日然うして來て居て。」

「伯母さんなんかには、何うせ叱れてばかり居るんだもの。」
「そんなら關はないけれど、もう官員様方も歸つて來る時分だ。」

「私何んだかこの頃面白くない事ばかりあつて爲やうがない。」

「何うしてだか、自分にだつて解かりやしない。」

龜次は足の裏を掻き／＼投出したように云つて居る。冬中働いた足の皮はこの頃になつて剝け始めた。

う。」

「杉山さんが憤つたと云ふ話か。」

「それなの、大變でしたよ。そんな不埒な奴は切つて了つて憤つたの。あんなにムキになつて憤る旦那だと思はなかつた、圓次さんが影で舌を出したよ。然うしたらねえ、兄さん。」

「ウん。」

「あら他が話して居るのに聞いて居ないの、兄さんてッば。」

「聞いて居るさ。」

「聞かないア好い。私も歸る。來るもんか。」

龜次は眞赤になつて憤つてプイと立つた。そして、日和がグラ／＼動くやうな心持になつて家へ歸つた。でも次の日は又來てボンヤリ坐つて仕事を眺めて居る。

見かねて善七の方からそれとなく家へ寄ることだけを斷つた。すると龜次は汲んでやつた水桶をそこへ投出して憤つた。

「何んだ、皆知つて居るぞ。」と紺の袖を顔へ當て、泣き出した。

「何んだ、年が二十も違つて居るのに、人、知つて居る。ただ來たんだ。誰が仕立屋の女房になんか、人が知らないと思つて、伯母さんに聞いて口惜しくつて／＼寝られなかつた。」と大きな聲して歎息くつて居る。

善七は他に聞かせまいとして、口に蓋するやうにしたが龜次は泣いて泣いて止まない。善七は耻かしさに顫へて、顔も

善七は黒い唇の年寄染みた顔を振向けて不思議さうに見て居る。娘は火鉢にシダラなくもたれて、埋めてある炭團を碎いて／＼了つた。日和の火氣に顔が逆せて居た。

善七は又忙しさに身體を振り／＼針を急がして居た。假縫だけすました兵隊服は傍へ積上られた。

「兄さん。」龜次は俯向きながら小さな聲で呼んで見た。

「え。」

「兄さんは始終姉さんのことを思ひ出して居る。」

善七は顔を赤くしてクス／＼笑つて居た。

「ねえ、屹度然うでせう。當つたでせう。」

善七が答へないので、龜次は詰らなさうに周圍を見廻はした。六疊一間だが男の手とは思はれないほどキッチンと片付いて居る。茶棚の上には茶道具やら、桃の花の一輪挿、置時計、硝子の角な壺、兎屋の貸本、置く所にチャンと置いてある。先に看守の居た頃は手も出さうに破れて居た障子も最うスツカリ張換えられて、小穴一つ明いても花形の補張が張られる。

「もう四時、こんなになるのかしら。」と時計に氣が付いて外を見た。日が明るく當つて居る。でも龜次は思切つて立上るのでもなかつた。

「兄さん、お吉さんのことを聞きましたか、あの話。」

「何んの話。」

「知つてるでせう、圓次さんのこと。伯母さんに聞いたでせう。馬丁どもは掌でグルメットを揉みながら笑つて眺めて居た。」

夏の晩、親子のやうな善七と龜次とが場末の餅屋の暖簾をくゞつて出た。兩方で顔を合はせないやうにして歩いたが、曲り角へ來ると黙つて分れて了つた。龜次は體に洞が出來たやうな悲しい心持でその晩寝た。

善七は遇ふ度に赤くなつて俯向いた。龜次の方が目を眞直に明いて相手を見ることが出來た。

龜次には世の中が詰らなく見えた。さもしく、穢なく、急いで、酔つ拂つて、自分一人の官能に縦ならんとする男の様子が如何にも賤しく見えた。渠等は獸のやうに相手の心を顧なかつた。男が憎くなつた。でも、臆病さうな善七の目は、そこからこゝから暇なしに龜次を誘つた。

龜次はいやだ／＼と思ひつゝ、それに誘はれて行つた。これでは詰らない、自分を見付けなければならぬと始終爲ら考へずには居られなかつた。で、龜次は芝居に仲賣して居る平田の元吉を探がしたこともあつた。然し見ると如何にも小兒／＼して居てもう一所に話する氣も無かつた。

憎いばかりで無く又男と云ふものが恐ろしくなつて來た。低くはあるが、向つて云はれる聲に力があつた。誰が負けるものかと思ひ張りながらも何うしても勝てない。口惜しかつた。月の中の或る間は何んでなくも蓮と芋殻の煮たのを倦き

倦きするほど喰はせられた。又海老の煮汁も飲ませられた。そして、遇ふ度に身體を忘れては不可ないと喧ましく云付けられた。

自分の娘おまつを着飾らせて、おみつは伯母のところへ連れて来た。おみつに似て受口の目付にしほのある可愛らしい娘であつた。三四日前の年取りに數へ年の十二になつた。伯母は松を飾つた爐傍に苦がい顔をして居た。

「おまつ、好い着物着せられてうれしうらう。」と云つた。小娘は母の後に小さくなつて耻かしさうに笑つて居る。

「伯母さん、何んと叱られても、私には何うも出来ませんもの。この頃はもう暴れて飲むより外に能は無くなりました。用事は頼んで来ず、若い時問のある人達はズン／＼出精する。腹が立つて爲方のないものと見えます。と云つて、身體が怠けてますから機につかまるのもイヤでせうしこれ等だつて毎日追ひ使ひに豆腐買して、居るより却つて好いだらうと思ひます。おいさんの事もあるし、順序だから爲方ありません。」

「困つた人だ。今に子供の爵が當るから御覽なさい。」

「え、もうそこは諦らめて居るんですよ。爲方ありません。」

「お前さんだつて、未だ三十代だもの。夫に喰ふだけの腕も居る中は、またドンな目に會ふか知れない。少しの辛棒だ。私が悪いやうにはしないから。」と一寸伸しに伸して居るのが見え透く。

一度などは口惜しまぎれに攫みかゝつて苦しがるほど善七の顔を疊へ摺り付けてやつた。

終ひには知慧から思ひ付いて、身體の變徵（ひんしやく）を眞實らしく訴えた。この時はかりは善七も蒼くなつた。

「だから、あれほど云つて置いたに、馬鹿女。」と咽喉を鳴らしながら險しい聲で叱り付けた。

叱られながら龜次は嬉しかつた。一年この方初めて眞實の感情から出る男の聲を聞いたからである。

でも、問も無く男の聲は軟いだ。

「心配おしでない。屹度好いやうに取扱ふから、それまで腹の子を大事にしてね。大丈夫。」と優しく龜次の背を撫でた。

「なアに、こゝばかり町ぢやない。面倒な人の傍に付いて居るより、遠くへ行つて氣樂な世帯を持つても好い。お前だつてその方がどの位好いか。」と時にはそれとなく話した。

「遠くツて何所。」

「東京でも横濱でも京都でも。何所でも好きな所へ。」

東京——横濱——京都。龜次の頭は暴風雨のやうに狂つて来た。

「本當？ 東京本當ですか、私も行くんですよ、東京へ。」

「然うとも。」

あるんだから、子供を連れて出て見たら何うだね、些つたアあの男だつて氣が付くだらうよ。然うすりやおけさぐらゐは私が引取つても好い。」

「さアね。これで以前にはそんな事も考へる時があるんですよ。」

とおみつは意外な事を聞くやうに笑つてしまつた。「けど駄目ですよ、矢張り約束とでも云ふんでせう。」

「龜次、今度アお前へ廻つて来やしないかね。」伯母は呆れて笑つて居た。

おまつは中新田の遊廓へ下地ツ子と云ふものになつた。幾ら入つた金か知らなければいけれども、その金のある間は父も母も皆福々と賑かしく暮して居た。

その事があつて以來、龜次は自分の身が氣になつた。伯母の話に人外の商賣と聞いて居る。その中へ自分も落ちる時は何うなるだらうと思つた。夜など窃つと鏡の蓋を脱つて見た然う悪るい容色とも思はなかつた。二年前から見ると色も白く肥つて居た。急に急しくなつて男の處へ相談に行つた。

「約束通り、早く。」と早口に責め立てた。善七は母を扱ふ約束を自分から言ひ出したのであつた。

善七は何時もハッキリしたことを云はなかつた。

「ぢや私を騙したんだね、畜生。」と龜次は我を忘れて叫んだ。

「まア待つた。時節と云ふものがある。お父さんがあゝして

「東京ですね、東京ですね。」

善七は小兒の喜ぶのを見るやうに笑つて見て居た。

東京——娘どもにも若い者にも長い謎であつた。

そちらの雪はいかゞ、こちらは六尺ばかり、軒の上まで屋根の上までとどきます。

穴を掘つてその中を通ります。五日か七日もお日様を拜まない日があります。暗い座敷の中に居て。

車はない、ソリと云ふもの。

誰の顔もたき火と暗らい中に居るので眞ッ黒になつてます。

龜次さん、私はこの頃色々のことを考へるやうになつた。

寒むい熱いばかり考へて居てはトテも駄目。きやうだいと云ふのはお前さん一人です。

私はもうスツカリ別のかくごしてしまひました。好しいか。

私の唇に水を一度ひたしてくれる人が一番大切です。親より、おつとより、何よりも。

龜次さん。本當ですよ。いつまで生きて居ても同じこと本當ですよ。本當ですよ。

私はもうスツカリそのかくごして居る。

雪の中に居る姉いまより。

大河原に居た姉は越後の新發田へ移つた。そこから寄來し

た手紙である。一度伯母に読んで聞かせられたのだが、夜仕事して居る善七のところへ持つて来て新しく読んで貰った。初めて聞いた時よりも悲しくなつた。善七も寂しさうな顔して讀んだ。

「唇に水を一度ひたしてくる人。善さん、小兒のこと。」

「越後の新發田と云へばひどい雪國だからなア。」

「そんなに、小兒なんて欲しいものだらうかね。善さん。」と龜次は心が冷たくなるやうな氣がした。

「お父さんも無理だ。然うまで苦しめなくツてもなア。」

「本當ね。そんな雪の中に居て寂しいでせうね。急に姉さんに會つて見たいやうな氣がする。」

「私も會つても好い。」

「屹度今夜も今頃は考へて居るでせうよ。一人で。」

二人は寂しい顔を見合つた。夜更けて母屋へ歸ると、月は眞ッ白に光つて、木の葉に霜がキラ／＼した。遠くからカラコロと凍土に鳴る下駄の音が聞えた。

龜次は乾割れる柱の音を聞いて寝て居た。何か知らぬ恐ろしい力が自分の上へも次第に加つて来るやうな心持ちがして忘れて居るのに、何時の間にか、別な覺悟だの唇に一度水をひたしてくれる人だのと云ふ文句が口へ上つて居る。東京を考へても、描いても寝られさうが無かつた。

夜など寝なかつた事もある。姉の手紙を見たばかりで無く

た。家中出拂つてお吉も居なかつた。

その晩、善七の屋根の下で龜次は泣きながら聞いて居た。伯母は事を分けて話したけれど、善七は常の穩和しいに似合はず、何所からこの剛情が出るかと思ふほど剛情に云張つた。

「ぢや、善さん、私がこれほど云つても貴方は聞かれませんか。」と伯母も脈を棄て、聲の調子を換えたが、又優しくなつて、「けれども、この子のことも思つて下さい。貴方が承知してくれないとなると、厭でも家へ歸さなければなりません。然うすりや何うなると思ひます。」

「歸る歸らないは伯母さんのなさる事でせう。」卑吝な職人は何所までも云張つた。そして、「仙臺の人は恐ろしい。私は他所者です。」と片意地らしく顫えて居る。

「もう頼みません。それまで聞けば澤山です。私は例令姪でもそれだけのことはします。」と伯母は蒼くなつて立上つた。

善七は間もなく世帯をたゞんで遠くへ去つた。福島の方ともまた石の巻へ行つたとも人の噂に聞いた。

それが龜次の十七の年、三月の雪が解ける頃であつた。

龜次は斯うして伯母の家から實家へ戻された。

龜次は機場へ通つた。仕事は小兒どもに交つて絲を繰るのであつた。然うして十八になつた。

父とも度々競つた。ふてくされて定めめの給金を持つて來な

この頃から母と云ふものが氣になつてならない、先にも酒に酔ふ。好く泣き／＼したけれど、今では譯もない事を悲しがつた。姉のこと、龜次のことを言出しては先を考へて泣いて居る。メツキリ顔色が黄色くなつて、目の鞘がはぢけて見える。機に取付いても日に半反の木綿がむつかしく、始終來ては五ッ橋の世話になつて居る。

親が子を生む理由、難澁して育る理由。伯母が重々しく話して聞かせる言葉が強く心へ響て來る。

ポカンと口を明いて居る、四十年來苦勞ばかりに瘦せた母を見ると、今まで知らない新しい悲が湧き上がる。

「お母さん、貴方は誰を便りに生きて居るの。」と斯う云つて問も問ひたくなつた。

○

身體を欺いた事が暴れた時の善七の怒は無かつた。失望と怒りから龜次の襟がみをつかんで雪の降る戸外へ突き出した。泣きながら、泣きながらあやまつても聞かない。頭から眞白になつて遅くまで立つて居た。毎日行つてはあやまつた。

伯母は強い目で龜次の素振を二三日眺めて居た。

「龜次、些いとお出なさい。」

手爐と煙草盆をさげて、佛壇のある寒むい部屋に坐らせられた。龜次は無尻の袖を掻合はせて伯母の前に小さくなつ

い日が多かつた。機場の仲間と一緒に歸りには必らず芝居小屋へ入つた。元吉は龜次の醜いのを嫌ひながらも、何うしてもその手から免れることが、出來なかつた。元吉よりは力も強かつた。

「元ちゃん、遁げて御覽。私にも覺悟があるんだから。」と云へ／＼その手首を痛くつかんで居た。

或る晩、男ども二人が桐の花で暗らい機屋の門に待つて居た。龜次の出て來るのを見て、元吉の兄でない方の一人が肩を立てゝ寄つて來た。

「何んだ、この女子が。」と突然警を擡んで引付した。

顔に血痣の出來たのは悲しくもなかつたが、この女子かと吐出すやうに云はれたのが口惜しかつた。泣きながら無闇に石を投げ亂らした。

元吉は龜次の傍へ寄らなかつた。龜次はそれには知らぬ顔して、同じ機場に居る男と一緒に飛び歩いて居た。外にも男が出來てそれ等が喧嘩になつた事もあつた。

代つた人が來て、龜次は三十里も離れた田舎へ行くことになつた。何うでも一度は行けと云はれたが、龜次は伯母の家へ顔出すことはそれでも辛かつた。母が行つて餞別の帛紗を貰つて來た。

おみつが髪を結つて、派手な着物を着せて、車へ乗せてくれた。親の手へ入つた金はタツタ四十圓しかなかつた。

龜次はスツカリ別の人になつてまた家へ歸つた。證文手前に年を終へたのは稀らしいとて、主人は幾千の金を包んでくれた。外に少しの貯ひもあつた。五年振りに歸つて見ると、下の妹だけでも最う居なかつた。手習が嫌ひであつた女も、山形に居る中に一通りの手紙は書き、新聞ぐらゐ讀めるやうになつた。

酒毒でブル／＼顛えて居る父の前へ来て、「お父さん、これからは私の身體ですよ。」とキツパリ斷つた。初めての挨拶だつたのである。

工事前の險阻な關山峠を越える時、足の下に展ける最上平原を見下ろしながら龜次は車の上で本當に泣いた。五年の間の苦しい淺間しい生涯が染々と考へられた。苦しいと云ふものゝ、實は餘りに手筈の無い生涯であつた。虚偽から虚偽へ知らず／＼墜ちて行く人の一生が悲しかつた。本當に泣き、本當に笑ふ人となりたと思つた。

「今日ッ限り。今日ッ限り生れ代つて。」と峠の上でも態と口へ出して、斯う固く心に誓つた。

歸つて來ると先づ鐵槌で齒を染めた。

火のつくやうに泣き立てる赤兒を揺ぶり上げながら、水に手を腫してお吉は籠の下を焚き付けて居た。抜け道の無い枯枝の煙は息も聲もさうに低い屋根の下につまつて居た。目

その中に圓次も歸つて來た。海老茶毛糸の襟巻なぞ巻き付けて實體さうな商人になつて居た。

「圓次さんも、もうこんなのがあるんですかね。」

「もう駄目です。小兒にかまけるやうになつちや人間終つてす。」と毛深い腮の剃あとを撫で廻て居た。

熱い味噌汁で晩飯が濟んだ。お吉は相變らず食が太い。人後まで残つて菜漬を食べながらお湯を何杯となく飲んで居た。

「所で、お吉さん。私は些とお願があつて上りましたんですかね。」ところが一片付きしてから龜次は云ひ出した。「何うでせう、當分貴方の所の二階を貸して頂きますまいか。」

「二階を何うなさる。圓次は變な顔をした。」

「私も商賣の眞似でも初めて見たいと思ひます。」

「そりや結構だが、全體何んの商賣なんでせう。」

「まあ／＼、それを聞かずに置いて下さい。何うせ黙つて居ても後には判かることなんですから。」と笑つて語らなかつた。

「そして、お裏の御隠居だちも御承知なんですか。」

「それがなんです。此方の方の話から先に決なければと思つて、まだ裏へは顔も出さずに居るんです。」

夫婦は顔を見合はせて居た。

「まあ見てお出なさい。今度は私も一奮發するところですから。」と龜次は面白さうに笑つて居た。圓次はその如才ない話

を瞑つてフウ／＼吹き付けて居る所へ、

「お晩になりました。」と云ふ開馴れない聲を聞いた。

「誰方。」お吉は首を立て、表の方を聞いて居た。

「私ですよ、お吉さん。」

「私ぢや判らないね、誰方です。」

「私ですよ、お吉さん。」龜次はクツ／＼笑ひ乍ら低い臺所へ入つて來た。

「まあお龜さん。」とお吉は突ツ立つたまゝ口も利けなかつた。追駈け／＼三人目を産んでから急に額が上つて黄色いしなびたやうな女になつた。

「何うして來たの、お龜さん。」と不審さうに顔を見て居たが、「些いと待つて、下さいよ。今エツクリお話するから、見て下さい、相變らずダラシ無いんですよ。」とグツ／＼笑つて臺所へ駈込んだ。

冬になると炬燵をして遊んだ家である。柱も疊もその時のまゝ穢なく煤けて居る。たゞ壁だけを新聞紙や縁起繪で貼り代えてある。簞笥の抽斗から着物が半分喰み出て居る。大きなボン／＼時計と諸國狀さし山岡秣店と書いた大きな狀狹みが物々し過ぎて不釣合に見えた。

「先づ御馳走。」とお吉は頸の曲つた大きな火掻きに懐をドツツサリ持つて來た。龜次は凍しけながら歸つて來た四つばかりの穢ない女の子を膝の上に乗せて、霜焼けの手を焙つてやりながらお吉の仕事が済むのを待つて居た。

振りを聞いて、スツカリ世間を見て來た人だと思つた。

「裏でも變りましたよ。旦那がお歸りになつてからは皆御隠居様ですよ。」

「然うですツてね。」

「お曾母さんは段々お達者になるやうです。今でも日に二三度づゝは必らず見廻つて御座つて、毎日／＼お吉は小言です。」

こんな話に夜を深かして龜次は歸つて行つた。色々の計畫を胸に繰り返しながら。

龜次は寝ぐほど面白くなつた。疲れ切つて歸つて來て、腰を揉み／＼寐る時ほど、自分の生甲斐を思ふ時は無かつた。朝暗らいに重い麻呂敷を背負い出して、季節によつては二里三里もある田舎の臺所まで窺いて廻つた。装も振もあつたのではない。買出しの古着市へ行つては男の中へ交つて負けじと争つた。五ツ橋の龜さんは仲間でも評判になつた。圓次やお吉も驚いて見て居た。

やつとの事でギス／＼揺れる梯子を上ると、母の前でも足を投出して、頸に掛けた右近木綿から錢を疊へひろげて一錢二錢と讀み初める。一々品物と引合つた上で、その日／＼の利得を小さな帳面へ記け入れた。そして、惚け氣味の母が用意して置く不味い晩飯を濟まして、風呂を貰ひながら儲け錢を裏の家へ預けに行く。熱い風呂が何よりの樂みであつた。

長く入つて居た。お曾母さんも茶を淹れて待つて居る。

「ほ。こゝが二十錢、五十錢、七十錢、預りました」とお曾母さんは頼ふ手で小錢を讀んで用算筒の底に入れて了ふ。

又馬丁ども相手に抵當を取つて少しづつ、の錢は借した。馬の合羽や、主人の紋の付いた法被などを持つて来るものもあつた。

「二月流れ、承知でせうね。女だと思つて後でグツつたつて私は聞かないよ。唯の女子ぢやないんだから。」と借す時には必ず念を押した。

世間でも龜次に良人持つことを誘つた。ムシンに来る度におみつは色色の話を持込んだ。その中で増田在のある大百姓の話だけは萬更おみつのチャラッポコとばかりも思はれなかつた。當人も窃つと見に来たことがある。

龜次は容赦なく皆斷つて了つた。

「おみつさん、まだうまい事を云つて引張り出す氣なの。」

「何をさ。本當にその方が爲めだらうと思ふから話すのさ。」

「もう／＼お前さんの口前には懲々した。姉さんだつて私だつて。」

龜次は男のやうに笑つて相手になつたことが無い。

○

熱い日の午後母が死んだ。死なれて見て初めて驚いた。これほど見え切つて居た、足元まで忍び寄つて居た死に餘りも

た。兔に角、姉の用意した來た金と龜次とで不相應な葬式を父の家から出した。けれども五ッ橋の伯母は初ッから唇を結んで氣の濟まぬ顔して居た。死んだ顔も些いと窺いたゞけであつた。

「おけさも長い一生だつた。お前だちもこれで本當の孝行をしたと云はれないよ。」と葬式の歸り途で姉妹へ話した。龜次は心から寒むかつた。

初七日の朝、姉妹はわざと二人だけで、寺詣りに行つた。

姉の子は初めて靴を穿かせられたのを嬉しさに、前に立つてチョコ／＼駈けて行く。その後から靜かに話しく／＼行つた。別にこれと云ふ話もないが、龜次は何んとなく死んだ母とでも話して居るやうな氣がした。誰も然う云つたが、姉の顔はこの七年の間に餘程瘦せ尖つた母の顔に似て來た。

法華寺の寺裏から入つて行くと、墓地の片側が梨子の畑になつて居た。收穫に近い青い葉や青い果は照り付ける朝日に蒸されて、爽かな香をあたりへ送つて居た。日和はクル／＼ときらめいて、白いものがますます／＼白く見えたが、目に見えぬ地の底にはもう秋の冷たさが靜かに流れて居て。風も無いのに木の葉がザワ／＼と底騒しく絶えずなびいて居た。風の動く葉の裏は白い。空を泳ぐ白い雲も何んとなく落付が無く騒がしい。

云へば無頓着であり過ぎた。

夏中から鳩尾の凝結物が出來て、形のあるものが咽頭を通らない。煤氣色の水も吐いた。センブリや熊の膽を水に溶かして飲ませて居た。商賣に出る時は低い二階に獨り留守居もさせた。これは昔で云へば隔の症ですと醫者に教へられたのは、死ぬ辛つと十日ほど前であつた。その前はたゞ喰物が通りさへすれば好いと思つて無理に嘔下させるやうにした。病人は顔中を涙に穢してジリ／＼苦しんだ。

お吉の二階は泥壁の、板藏を直した暗い二階であつた。立てば頭が棟につかえた。窓と云つては金棒の入つた四角な窓が一つしか無つた。そこから九月下旬の西日が焦げ付くやうに射し込んで、女と生れて來た憫れな死人の枕元へ落ちた。「餘り呆氣無くつて、私はもう少し辛棒する氣でした。」

目が腫れるほど泣いた龜次は誰にも然う話した。

伊達から五ツになる先妻の男の子を連れて姉のおいまが出て來た。荒い稼に見違ふほど嚴丈な體になつて、言葉も伊達訛のある。根からの田舎女房になつた。藍の臭がしさうな手織綿なぞ着て居た。連れて來た小兒の世話ばかりにかまけて動くことが出來なかつた。心持も感情もスツカリ違つて昔の時の人を見るやうな氣がした。龜次は七年振りて姉に逢つたのであつた。

鈍い聲でダルさうに人と話して居る。氣の廻らぬ姉を見るとき、この人も悲しいと云ふ心掛があるだらうかとさへ思つ

貞操露明信女。白い卒塔婆が冷々する杉林の中の舊るい石碑の中に立てられてあつた。

姉は珠子をもみながらや、長く拜んで、龜次と入れ交つた。そして、他の石塔の前でいたづらして居る先妻の子の手を引いて來て、

「お前さんのお祖母さんだ。好く拜むんですよ。」と手を持添へて土饅頭の前にぬかづかせた。小兒は横目で見／＼龜次の前を體裁悪るがつて繼母の手を遁げやうとする。

「そら、佛様に叱られる。お祖母さんが見て御座る。」と兒の頭を抑へて無理に回向させた。

田舎で育つた小兒はバタ／＼と駈け出して來つた。

姉はこの兒に就いても話した。

姉は今の家へ行つてこの方、四年の上になるが未だ穿物を穿いて外へ出たことの無いほど働いた。今度の良人とも一千支以上も年が違ふけれど、乳飲兒のこれがあると聞いて身を委せる氣になつた。乳の無い體で苦しんで手鹽にかけたのも、兒が大きくなつた時に好いお母さんと云はれただけの張合であつた。一昨年デフテリヤにかゝつた時などは二十五日の間ボツチリとも寝たどが無と云つた。先の母が福島邊りに居ると聞いたが、近所へも頼んで小兒には眞實の母と覺へ込ませて了つたと云つた。

「あれも私の云ふ事でなくちや聞かないし、夜だつて私が居ないと一晩寝付けませんよ。嬰兒の時から背中を痒ゆがる兒

でね、寝るまで撫で、やらないと不可ない。馬鹿くしいと思つた時もありましたよ。」とガサツな手首を藍壺に染め上げた姉は、駈けて行く小児の後姿を見ながら話した。

「でも大きくなつて本當のお母さんを見付けたら何うしませう。」龜次は何んとなく心元ないやうな氣もするのであつた。

「見付けたつて、お前。私が育てた恩があるだから、私はな誰にも眞似の出来ない世話ばかりして居ます。小兒だつてチヤンと知つて居ますよ。それ位の事は。」と幾らか不快さうに云つて居た。

「そりや然うだね、生みの恩、育ての恩と云ふこともあるから。」

「然うだともさ。だからもう今の家へ行つてからは、何んと云つて來ても仙臺のことなど思ひ出さないやうにして居た。後で、母さんが身上を撥び出したなんて思はれるようぢや大變だからね。」

こんな事を話しながら家へ歸つた。

汽車まで姉を送つて來て、龜次はお吉の家の塵埃臭い暗い二階へ上つた。床を伸べて寝て見たけれど、頭が透明るほど澄んで居て寢付かれさうも無い。蚊帳の外の小机の上に位牌もなく蠟燭だけ點してあつた。お吉が茶話の迎えに二度ばかり梯子の下から聲掛けた。

疑つと灯を見詰めて居ると、灯の中から山形に居た五年の

陽まで口の明いたやうな若い者どもと蚊帳の中から相手になつて居た。

「私も交ざらせて下さい。賑かさうだから。」と龜次は肌寒むい寢間着の襟を掻合はせながら皆の横へ踞んだ。

「さア〜。これから面白い話の湧くところですよ。」と圓次は杉葉を盛つた摺鉢の蚊遣りを遠くの方へ除けた。

盆と云へば、風が冷たくなつた。朝見ると勢の好い茄子畠もシットリ露が落ちて、目に光つて居る。煙つたやうな畠の竹藪を見て居ると、それが大變近いやうに見えて、大變遠く思はれる。

若いものどもの話は何時他愛がない。

その下駄を借りて鐵道の踏切の方へ出て見た。工事中の停車場は煉瓦の山や鐵橋の材料でそここゝに黒い角な影をつくつて居た。

可也歩いて歸つて來ると、若者ども、最う居なかつた。圓次は寢苦しさうに蚊帳の中で團扇をバサ〜させて居た。

「お休みなさい。又明日。」

龜次は足元の危ない急な梯子を手探りで暗い二階へ上つて行つた。

○

流し窓が北に向いて居て、寒い冬は眞先きに吹き込む。幾度責めても良人は最少しくの辛棒と云つて居る。仕事する

間のことが見える。朋輩が氣を開いて面白さうにして居る時

でも、自分だけは油断しなかつた。男にも棄てられたけれど又男も棄てた。棄てた中でも郵便局の田邊と云ふ青年の蒼白

い顔が目にあざやかに出る。自分より五ツも年下。何所か元吉に似て稚びたところがあつた。七夕の晩には赤い紐の付いた編笠を被つて二人して踊つた。踊りながら知らぬふりして

些い〜龜次の足を踏んだ。——最後に來た時は小刀を懐にして居た。店の若い者に手取り足取り引擦れて行く時、蒼い

顔に涙が流れて居た。龜次は障子のかげで頼ながら見て居た。越後から來た縮屋の若い優しい聲。天童の農家の老人。茶

屋の息子。

皆自分と會つて皆分れて了つた。相互に居所も知らないで暮らすやうになつてしまつた。永久に——龜次は又死んだ

人のことを考へた。姉の身の上を考へた。

蠟燭の青い灯は人が瞬きするやうに瞬きした。今日までのものは何も彼も一つ残らず無くなつた。泣いたり、笑つたりしたと云ふ、悲しくも可笑しくも無い記憶だけしか残つて居

ない。

暫くして龜次がボンヤリ下へ降りて見ると、若い人達や馬丁どもが盆提灯を吊した縁側へ集つて、玉蜀黍を焼きながら

賑やかな涼み話がさかつて居た。近所の娘どももサツパリした浴衣を着て集つて居た。三人も子があつても何時も賑かな話

好きのお吉は、寢付けぬ小兒どもを邪慳に叱り付けながら、

やうな明るい窓も無かつた。然しもう二た冬も居る内に馴れて了つた。

良人の源吾は越後から來た指物大工であつた。五ツ橋の伯母が飽迄すすめるので、初めの間は剛情を張て見たが、何時と云ふことなくその氣になつた。嫁に來る前に伯母の家で一

度その男に會つて、自分の過去の暗い身の上から兩親のことを残らず話した。「それでもお好しければ。」と云ふ調子であつた。

「些つとも關ひません。お前さんの身體を貰ふんだ。私も何うせ三十六のこの年まで獨身で居るやうな男ですから、そんな事は何んでもありません。」と無器用な口で男は途切れ〜

に云つた。良人は土地へ來てもう十年も小僧相手に獨身生活して居た。

仕度料と名を付けて父へは幾らかの金を出した。女は二十

五になつて居た。

この二年、三年。龜次は自分にも最も幸福な時と思つた。世に辛らく渡つて來た源吾の大きな手は、年寄のやうに手觸り

優しく妻にあたつた。女の年の二十五にして初めて人の手の優しさを知つたと云つても好い。

源吾は他を疑はなかつた。龜次が雄勝に居た時の話、五ツ橋に居た話、山形に居た時の話。今まで溜めて置いた話を

陸ましい寢物語りにして聞かせると、良人は怡しさに聞い

て安心して寝た。姉婿善七の事なども娘が母へ訴へるやうな調子で話した。話すだけでは足りない、良人の今日までの話も聞きたくて、龜次は夜々我儘にせがんで見たけれど、無口な職人は笑つてばかり居て話さない。話すほどの事が無いと云つた。無理に責められると、十三の時繼母に連れられて高田の町へ年季奉公にやられて苦しんだ話か、二十四の年初めて仙臺へ来る途中飲まず食はずで十三里を歩き通したぐらゐの話であつた。不足と云へばこれが不足であつた。

源吾は龜次にかくして始終父を買いで居た。仕事の休日には空瓶に酒を詰めて好きな芝居なぞへ連れて行つた。龜次がムキになつて憤るのをなだめて、「私アまだ親の味を知らないんだ。道樂だと思つて見て居てくれ。」と然う云つて居た。父親もメツキリ元気が無くなつて、少し飲むとコクリ／＼坐睡して居る。龜次にも今までに無い優しい聲を掛けた。

源吾が三十九の年に、龜次は二十八になつた。

その間に良人の弟が國を失敗つて女房子を連れて仙臺へ出て來た。これも指物大工であつた。源吾は自分等が住んで居た北窓の寒むい家をこの夫婦へ譲つて、自分等は表通りに新しい店を借りた。若生屋と云ふ大店の材木屋の仕事ばかりでも手が廻りかねて、兼吉と云ふ小僧の外に日通ひの職人二人も雇つて置いた。

龜次は自分の名で郵便局に貯金の少しは出來た。

い。山の間に暮れる寂しい夕暮を一人眺めて居ると、自分一人だけ世から捨てられたやうな寂しい氣が胸に閉ぢて、居ても立つても居られなかつた。子の産れる湯と聞いて、二年續けて秋春とこの湯治場へ寄來された。良人は小僧に臺所をさせて不自由な留守して居る。急に氣がモタ／＼して翌朝は早く駄馬を雇ふて、秋草の咲く険しい山を下りた。

小僧が一人茶の間にシヨンボリして居た。美濃紙へ書いた手紙を火鉢の抽斗から出して急ぎ出てるお上さんに渡した。斯う書いてあつた。――

相互に年のくされない中のことにしたいと存じ候。私は考へて／＼の上に候。一生何をあてに暮しませう。私は行末の事ども心配になり申候。弟へ預けて置いた百圓と家財道具は一切お前様へ差上申すべく候。好く働いてくれた親切なお前様をきらつての事ではなきゆえ、好く／＼私の心持も御くみ取り被下べく候。たゞ子供がほしく候。

龜次は立つたまゝ讀んだ。來べき事が來たやうに、別に然ら不思議ではないやうな氣もした。氣がボウとして居る中でも、本當の事ならば斯う急に來るものではないと考へた。

小僧は泣きさうな顔して居たり立つたりして居た。

「兼吉、走せて五ッ橋へ行つてお出で。走せてだよ。伯母さんに、大變が出來ましたから直ぐ被來つて下さい、此方から上るんですけれど、甚だ失禮ですけれど云つてね。」

源吾の近頃は妙に張合なさうに見えるので、龜次は氣が揉めてならなかつた。仕事をして居る時でも、偶と考へ込むと興ない顔してウツカリ外なぞ眺めて居る。長年の稼ぎ疲れが出たのだらうと考へて、好きな晩酌のお菜など用意して置いても、そんな日に限つて酒も不味さうに見えて黙つて床の中へもぐり込んで了ふ。傍へ寄られるのを煩さうにして、妻にかくして溜息をソツと吐いて居た。

そんな事が三月も續いた。

すると、或る時、急に思ひ出して弟と相談して國の父の法事を營みに歸つた。土産ものなぞ過分買込んで、龜次も一緒に連れられて行つた。舊の三月、途中の小河は雪解け水に溢れて、岸には種々の花が一度に咲いて居た。

雪國風の勾配の急な百姓家は、腹代りの弟が繼いで居た。良人はこの家の暗い佛間や座敷を見て心が惱されるやうに見えた。いつそ、仙臺の世帯なぞたゞんでこの村へ歸り、氣樂な百姓仕事に一生を終りたいなぞと、冗談ながら龜次に話した。龜次には荒れた寂しい村であつた。

「私ア厭だね。こゝで一生終るぐらゐなら、仙臺に居て下女奉公でもする。山も見えないこんな村で。」と龜次はただ笑つて了つた。

然し、源吾は引立たない顔して居た。

十日居る湯治場に倦々して了つた。來る約束の良人も來な

からであつた。龜次が荒々しく斯う小僧へ云付けたのは、暫く間が經つてからであつた。

「何うしたのだね、龜次。」と息を切らして伯母が車を乗り付けた頃に、龜次はランプも無い暗い火鉢に泣いて居た。炭の火がホツカリ肘をうつして居た。

伯母は何うすると云ふ事は無かつた。強いて氣を落付けべく龜次を見い／＼煙草をふかして居た。

「私はもうドンナ事があつても、棄てられた後は迫ひません。追つたつてもう駄目ですもの。」と龜次はキツパリ云つた。涙が直ぐ乾いて居た。

「けれども、然うはさせません。子の無いことは元々承知の上で貰つたんだ。それぢや餘り他を踏み付けにすると云ふものだ。弟があるなら、私が弟を呼び付けてミツチリ云ひます。」と氣當な伯母は頸をガク／＼させて今にも立ち上りさうであつた。

「弟が何んと云つても、本人がこの心持ですもの。あの人だつて好く／＼考へての上でせう。」と龜次は力ない聲してランプを見詰めて居た。

チンマリと明るく部屋を飾り立てた桐の簞笥も火鉢も茶棚もみな良人が夜仕事に一つ宛組み上げたものである。一つに十日かゝつたものもあれば一月かゝつたものもある。それが五年の間であつた。

「然し、人には人の道と云ふものがある。私はどう云つても承知ができない。約束はどこまで行つても約束です。」
「だつて、伯母さん、あの人は悪るい氣なぞ微塵もないのですよ。」

「なんぼ無くても、斯う云ふ事をするからには……。」
「駄目です、駄目です、駄目です。」と龜次はわびるやうに手を振つた。

「伯母さん、理屈ばかりで行かない別のものがありますよ先方で謝つて来て元々になつたつてそれだけのものです。」と蒼い顔して云つた。

けれども、伯母は聞き入れさうが無つた。何所までも争ふ氣で居る。

○

良人の居所が五里離れた鹽釜と知れた頃にはもう、龜次は若い娘どもに交つて父の家から市内の或る裁縫塾へ通つて居た。その卒業證は田舎の裁縫教師として女一人喰べるだけの職を與へた。

龜次の止めるのも聞かないで、父も伯母も幾度か人を差向けて掛合はせた。けれども、源吾はもう新しい二十一二の女房を持つて居た。俺が足腰が利かないと思つて馬鹿にする。昔の腰ならあんな職人ぐらゐ一言で黙らせて見せると父は涙もろく口惜しがつた。

「龜次ですよ。」

「さうく、龜さんく。お前さん何うして暮して御座る。」

「裁縫の塾へ通つて居ります。」

「お仕事かね、そりや結構だね。女の仕事では上の上としたものだお亭主は。」

「ハイ。」龜次は爲方なくクス／＼笑つて居た。

丸鬚に結つた四十恰好の品の好い人が出て來た。從兄の嫁である。龜次は挨拶してお曾母さんを日向から家へ入れやうとした。

「はいく。まアこの楓の木の下だけむしつて了つてな。」

「好御座んすよ、お曾母さん。草なんか誰にでもむしらせますから。」

「然うでないで、この木は庭の主だ。この木に變があつたら且都の身に氣を付けうとさへ云つたものだ。私がむしら無いでは主人への役が濟みません。」とワサ／＼青苔の上を這ふやうにして居る。

「本當にお曾母さんはお世辭が好くつて。」と上方言葉の兄從嫁は龜次と顔を見合はせて笑つた。

龜次の居た頃から見ると、家の様子も暮し振りもスツカリ變つて了つた。窓を切り換え、無駄な納戸も潰して座敷にして了つた。最う年配の從兄は終日座敷に坐つて謠曲と圍碁に用の無い日を暮して居た。島も茶島も皆人の手を履つて作つた。床の間にはこれまでであつた八幡大菩薩の軸が外されて、

暢氣なのはおみつであつた。まだ新しい人をさがさせる氣で居た。相變らず調子の好いことを云つて、髮結ひを職に世間を面白く渡つて居た。顔付まで四十を越した女とは見えなかつた。

臺所を稼いだ手は細い針を持つに苦しかつた。折り物や雛形の込み入つた細工や、裁ち物の計算なぞ覚え込むには頭が鈍くなつて居た。子のやうな十四五の朋輩に頼んで算用數字から教へて貰つた。兎に角、一年居て前期だけの免狀を貰つた。その免狀を受取つた日の喜びやうと云つたら無つた。五ッ橋の伯母へ見せて、母の位牌の前へ灯を點けて飾つた。

だらしなく小兒を負つてお吉が二三度來た。圓次も來た。二人ともキツパリ斷つてやると五ッ橋から伯母の迎えが來た。

龜次は氣を強くして大きな袖辨のある昔門をくぐつた。

伯母は母屋の方を非職になつて歸つた悍夫婦にまかせて、離屋に寝たり起きたりして居た。夏から妙に元氣が無い。最う九十の聲を聞いて居るお曾母さんは相變らず達者で、小春日の庭へ出て大楓の下に草なぞ換つて居た。目も齒も達者だけれど、昨年大疾ひして以來、今のことを今忘れるやうになつた。

「誰方だツけな、お前さんは。」十日前にも會つたのに最う忘れて居る。

立派な表装のものと代つた。ボロを引擦らないばかりに手織木綿の布子に着ぶくれて居たお曾母さんも、赤い粗紐なぞ付いた彼布を被せられて頭もお隠居らしい切髪になつた。

「私はこれだけは厭でな。矢張り若い時から働らき通して來たのだから、働いて居た方が餘程樂だ。」とその當座好く龜次へも愚痴をこぼしたものである。

伯母の用事はお吉の話に外ならなかつた。今話合ひになつて男を二度目の良人に持てと云ふのであつた。

「もうく、何うか伯母さん。それはツかりは。」と龜次は斷つて見たけれど伯母は承知しなかつた何うしても聞入れない。

「けれども、私はもう一度で懲々しましたもの。」と龜次は投げ出すやうに云つた。

「それは我儘です。男の無い女は片輪です。今は逸氣に然う思つても、後になつて悔むのが見え透めて居ます。私はお前のお母さんに代つても身を固めさせないぢや居られません。悪るい事なら誰がこの伯母がすゝめませう。好く胸へ手を置いて考へて御覽。」と氣力の無い黄色な顔して居る伯母はデリ／＼と責めて來た。

「ですけれど伯母さん、後一年で辛つと私も目鼻が明くのですから、何うかそれだけは勘辨して下さい。」と龜次は手を合せないばかりに云つた。

勢の無い伯母が臺所まで送つて来て、「もうお前も三十だ。浮々して居ては年が聞かない。好く考へて御覽。」と云つた言葉が執念く心に彫り付けられた。寺門前の黄色な日向を歩るきながら種々のことを考へずには居られなかつた。

何故世間は邪魔して自分を通させやうとはしないだらう。と斯う考へた。何故女は一人で生きて行けない。と斯う考へた。何故斯う壊されては建て、壊されては建てる自分を建てゝ行かなければなるまい。と斯う考へた。小兒の時、娘の時、人の妻となつた時、いつ一度その時の爲めに活きたことが無い。そして、先方へと苦しんで追つて行くその先方は何時も容赦なく壊されて居る。それに何故人はその先方のために苦しむのだらう、と斯う考へても見た。

然し、ただ然う考へただけで一つも考へ付く事はなかつた。龜次はある大きな石塔の土臺石に腰掛けて、心にもたく薄すれ行く夕日を土の色に凝つと眺めて居た。遅い寺参りの女たちは、抹香の煙をなびかせながら時々前を通り過ぎた。龜次はその足音ばかりが遠くから来て遠くへ去つて行くやうに聞いた。

二日も三日もその事を考へた。考へるのが苦しくなつた。何んでも好い、變つた事が来い。死ぬとか活きたるか云ふ大きな變つた事が来てくれれば好いと、龜次は斯う考へて裁

自分と云ふものは力は無かつた。又人の妻となつた。何んの爲めに斯う引擦り廻されると反抗しても、矢張り伯母の言葉に背くことは出来なかつた。何んだか馬鹿くしい。芝居事でもして居るやうな心持で、古風な盃事にも眞面目にはなれなかつた。

○
今度の良人も矢張り越後者で、先の良人も、顔を知つて居た。年恰好も格別違はなかつた。不生女と云ふことがこの吝嗇な男に何よりの身體であつた。徳太郎と云ふ十三になる先妻の忤がある。世に謂ふ繼母の手へは掛けたくなかつた。

男手に育つた徳太郎は年の割に稚い心を持つて居た。夜も親父の懷で無ければ睡らなかつた。學校から下つて来ると包を抛り出して、「お父さん、何か。」と細工場へ甘えて行く。良人も又ブリキを細工しながら忤を相手に遊んで居る。自分へ寄せやうと骨を折つて見ても、徳太郎は勘定するやうな目付で油断なく龜次を計つて居る。冷飯を棄てた事なぞ、小兒のやうでなく父親へ云ひ付けたりした。

龜次は良人の見て居る前で好く小兒を撲つた。腹を立てるなら勝手に立てると云ふ氣になつた。

小兒は良人の小兒で自分のではない。良人は小兒の父で自分のではない。子を産まないのを調法に、私は小兒にも良人も雇はれて居るのだと思つた。詰らない。

縫の塾から家へ歸るやうになつた。今日も然う思つて歸つて何か變り事が待設けて居るやうな氣がして家へ入るのが樂みなやうな氣がした。

家の中はいつものやうに暗い。身體の不自由な父は小さなおたけをば傍から指圖して、晩飯の支度を急がせて居た。おみつも仕事から未だ歸らなかつた。

「唯今。」と大きな風呂敷包を置いて父の前に挨拶した。

「今お歸りか。はいく。」と父は頭を下げて居た。

夕暮のものゝ匂は何所からともなく家中に入り込んで、息をするに苦しいほどひろがつて居た。動かすに凝つとして居ると、自分の身體もその中へ吸込まれるやうな氣がする。低い家の薄暗い隅々を見ると、遠い昔の小兒の時を思出すやうな、何んとも知れない悲しみが胸を壓する。悲しげな町の響が遠く傳つて来た。

「お父さん、今晚私が一杯買ひませうか。」と龜次は終日寂しさに坐つて居る。元氣の無い父へ聲掛けた。

「然うさ。餘り飲みたいと思はないけど、では折角だから御馳走にならうか。」

「ちや私買つて来ますよ。」と手早く着物を着換えて酒屋へ駈出して行つた。

父はもう少しの酒に酔ふ。飲めば幾らか元氣も出来て、喧ましい口小言を云ふけれど、トても以前のやうに荒らしい聲は聞かれなくなつた。

五ツ橋へ行つてその愚痴を云ふと伯母は伯母でまた、自分の子でさへ自由にはならぬ。他の兒の世話にならうと云ふのだからと何時も叱られて歸つて来る。

「私は今一度獨りで暮らします。賃仕事したつて暮らせない事はない。」

痛が興つて来ると、龜次は好く自分の荷物なぞを風呂敷にまとめて居た。その度、良人は煩さく隣きしながら龜次の後を追掛けて慰める。

「最少だ。あれは未だ小兒だもの、辛棒してくれよ。決してお前の悪いやうにはしないから。」

と頼むやうにハラ／＼して謝つて居る。

「ちや、私の立つやうにして下さい。」

「お前の立つやうにと云へば、何うするのだらう。」

「一生、私が困らないやうにチャンと今の中から筋道を立てゝ下さい。然うもなくちや私と云ふものは何うなるか知れません。」

「好し／＼、屹度然うするよ。」

「屹度ですね。」

「あゝあ、好いとも。」

あの吝い人が好くもと心の中に然う思ひながら、然しまた龜次も本當に身體を引く氣はしなかつたグ／＼の間に日が經ち月が經つた。

この年は好く人が死んだ。四月には父が死に、六月には五

ツ橋のお曾母さんが死んだ。父の時にも伊達から姉が出て来た。十一の男の兒を連れて姉の良人も一所に來た。目の一つ足りない百姓くした頑固な老爺であつた。國訛りこそあるが自分の良人の方が若くも場所馴れでも見えた。

「はいく、お前さんが妹御の龜次さんで。拙者は伊達の――。」と云つた調子で姉婿は一人くの前へゴシくした挨拶をして廻つた。

中新田へ賣られたおまつも、白石のおたけも葬式の間合ふやうに出て來た。おまつの方は或る保險會社員の妻になつて、裾の長い空色縮緬のはやりの羽織など着て來た。

賣られた娘ども四人集つて母の時より立派な葬式が出た。前の晩、急に思ひ出しておみつに髯を剃らせた。そして、十一になるお梅の肩につかまりながら朝湯から好い心持で歸つて來た。鬮をまたぐ時何かブツく云ふと思つて居ると、

日の射し込んで居る土間に突ッ伏してしまつた。「なんと云ふ後生の好い人だ。そんな往生する人ぢやないと思つた。」前に來た時よりも一層母に似て來た姉が、丁度母ソツクリの聲で笑つた。

「だけど、それで助かるのさ。これが半年も一年も寝られて御覽なさい。せめてはのことで。娘どもへ孝行な死に方をしたと云ふものです。」

「六十幾つでしたらう、六かしら。私お父さんの本當の年であつた。この兒だけ七つまで里子に行つて居たので、自然兄弟中でも餘計者にされて居た。飯臺の隅に小さくなつて居る姿が不憫なので、龜次は何うしてもこの兒の方へ手が出た。土曜日くには泊りに連れて來て、好きなものなど買つてやつた。とり子は晴々した氣で遊んで居た。

德太郎は十八であつた。小學校限りで學問は止めさせると云ふのを、無理に望んで市立の徒弟學校へ通つて居た。親父よりもグツト背が伸びて、目付きの優しい、職人に惜しい恰憫な青年になつた。

五ツ橋の長男は福岡の大學に居る。とり子の兄でも、一人は高等學校、一人は幼年學校に出て居た。その他の親類でも大抵高等の教育を受けさせて居た。龜次は德太郎に對して母と云ふ考がまとまつて來るに連れて、自然のかゝり子一人だけ職人に朽ちさせるが惜しくなつた。

穢ない股引を穿いて暗らい仕事部屋に一日コツく働いて居る職人の生活は倦々してしまつた。自分の苦勞ぐらゐで相應な人になれるものならば、性質も好きやうだから、出來るだけの學問はさして見たいと思ふ。角燈籠や火消壺の蓋を拵える職人の母より學士が得業士ぐらゐの母と呼ばれたくなつた。

「お前、偉らい人になつて見る氣はないの、德太郎。」龜次は時々德太郎を捉えてこんな事を聞いて見た。

知らないのよ。

「私だつて然うさ。顔もロクく覚えて居ない。」

葬式の歸り路で、娘どもは銘々思ひくのことを云つた。斯うして二腹五人の妹姉が一所になる事はないとて、急に思立つて姉を眞中に寫眞を映した。

おみつと末娘とは中新田の妹が引取ることになつた。梅に婿を取つて坂木の家を繼がせると吟味が決つた。

五ツ橋のお曾母さんも往生は好かつた。二三日風邪で寝て、枯木の枯れるやうに死んだ。九十三であつた。孫やあ曾孫は大勢集つたが血を引いた者は一人も無い。田舎に甥があると聞いて、従兄は態々く人を使つて探さしたけれど、到頭焼香の間には合はなかつた。久しく經つてから端書で簡單な悔み手紙が來た。

○

龜次は何時となく自分の衰へに心付き初めた。まだ。三十五然う年寄つたとは思はないが、何所へ行つても龜さんと呼ぶ人は段々少なくなつた。

五ツ橋の二番娘は病身な小學校教師に縁付いて居たが、そこへ行くと小兒どもが小母さんくとかからまつて來る。身の箱より年寄つた方が心細かつた。

大勢の兄弟の中でもとり子と云ふ女の兒が一番龜次に馴れて居た。目のクリくした、鼻の詰つた、今年十三になる子

「偉らい人ツて、どんな人になるんだらう。軍人？」

「軍人も何んだけれど、文學士とか工學士とか肩書の付く人さ。」

「僕、そんな人になれるだらうか。」と德太郎は思ひも掛けない言葉に驚いて居る。

「成れないことがあるものか。小學校から中學校、それから大學校と順順に行けば好いんだもの、文さん（とり子の兄）だつて御覽、お母さんは知つて居るけれど、小兒の時にア然り利口な人ではなかつたよ。」

「工學士になると好いがね。何所の工場へ行つても意張つたものだからね。」

「然うだらう。だから勉強して早く然うならなくちや、お前が勉強する氣があれば、お母さんなんかどんな辛棒でもしますよ。資本だもの何んでもないぢやないか。」

德太郎は小さな腕組して呼吸を窺めて聞いて居る。

「ねえ、學士。親類中歩いても幅が利けます。何んぼ何んでも一口に職工と云はれてしまふのが口惜しいからね。」と龜次はもうソワくして居る。

「だけど、お父さんは何うでせう。そんな學問させるかしら。」

「お父さんは好いよ。私から話すから。悪るい事ぢやなし息子に學問したいのを止めるツて親はありますまい。大丈夫さ。」と輕々と受合つて居た。

（95）

良人は飽まで不同意であつた。煙管を固く口に啣えて聞いて居る。蛙の子は蛙だと云つて承知しない。その爲め何度争つたか知れない、徳太郎と二人して泣いて頼んだ。

終には良人も拒み切れなくなつて、知合ひの學校教師へ相談しに行つた。そして、大學を卒業させるには年限は十年、學資は輕るく見て二千圓と聞いて來た。それには龜次もギョツとした。良人が二十年間約しくして貯めた金、店の品物、諸道具を總計しても千圓には足りない。けれども末だ／＼思ひ切ることは出来なかつた。

「だから、この先き私も働きます。喰べるものを喰べないだつて息子の爲めなら好いぢやありませんか。」と云ふ龜次にはこの頃メッキリ元氣の無い悴の顔を見るに忍びなかつたのである。

「それなら、それだけの資本を下して、出來損ひがないとも限らないからな。」

「だつて、徳太郎さへシツカリして居てくれれば……。」

「それがだよ。」と良人は唇を結んで考へて居る。
「十年だよ。今まで三十年以上も働いて、辛つと悴が背等しくなつたのに、又十年働くとなるとな、俺の樂する時は無い。年だもの、然う何時まで／＼働けるものか。」と暗いことを云つて居る。

それには龜次も剛情を張り通せない。それと共に、又離縁して一生を働くことが馬鹿／＼しくもなつた。二十年間の辛

又當人の云ふ言葉も本當になりさうになつた。初めは胃癢、胃痙攣、胃潰瘍、醫者によつて様々の診斷があつたが、愈々症状が胃痛と決つたのはこの年の春であつた。龜次は徳太郎のことで心配最中ゆゑ、病人を見ふと云つてもツイ粗略になり勝であつた。

病人は五月の長い日をうつら／＼寝て居る。白辛夷の花が例なく咲き開つて、離屋の庭は雪の降つたやうに白くなつた。病人は自分でも大抵覺悟したらしく、苦惱の聲は餘り洩さなかつた。

たゞ視力が段々衰えて來た。

「何うせ六十日病と決つたものだ、醫者も何も騒ぐほどの事はありませんよ。」と従兄夫婦の騒ぐのを防いで居た。

「何有、もうこの病氣は金で癒る病氣ぢやありません。費ふだけ無駄だ。折角お曾母さんと辛棒した家なのだから、身上を大事にして下さい。それが何よりの養生です。」と態々雇つた看護婦の手も借りなかつた。

「お母さん、そんな事を被仰つたつて私どもが黙つて見て居られますか。身上は身上だ。私だちの云ふ事も聞いて下さる事です。」と従兄は時々枕元へ行つて斯う云ふけれど、病人は首を振つて聞入れなかつた。喰べものでも金を高く出したものは手も付けなかつた。

病人は行き違いた看護婦より従兄の嫁より、貧しい小學教師へくれた末娘と龜次の手ばかりを借りたが、特に穢な

棒は悴一人を教育する金にも足りない。唯生きて來たゞけと云ふより外に何も残つて居ない。厭だ。厭だ、辛棒して何になるだらうと考へた。

徳太郎は張合の無さうな顔付して徒弟學校へ通つて居る。小學校の同級生が制服を着て勇ましく學校へ通ふ間に、袴もいらぬ、年恰好も不揃な學校へボンヤリ午後から出て行く悴の姿が、傍から見ても氣の毒でならなかつた。で、本が欲しいと云へば本、講義録と云へば講義録、良人へは内所で買つて與へた。自分の私得金を出して銀鎖の時計なぞを質屋の流れ品から見付けて來て悴の喜ぶ顔を見たかつた。

良人はそれを見る度に怒つた。父と子との心持が離れ／＼になつた。斯うしたのは龜次だと云はないばかりの凄しい目付を始終見せられた。

龜次は自分の過失と知つた。二人の間の遠かるのを見ると悲しい。父の前には子を掩ひ、子の前には父を隠すやうになつた。

親類中の年寄は皆行つた。今度は私の番ですよ、五ツ橋の伯母は龜次に遇ふ度に然う云ひ／＼した。段々に氣の優しい人になつて、話するにも伸懸るやうに張強いところが無くなつた。詰らぬ手土産を持つて尋ねて行つても無上に嬉しがるともとの人とは見えなかつた。

い用はこの二人でなければ安心しない。従兄嫁は面白くない顔して居た。けれども、龜次も然う／＼家は明けられない。良人も又好まなかつた。徳太郎と二人居ると家は必らず揉め腐れる。些つとも飲まなかつた人が、自棄に酒を飲んで悴と争つて居る。

「又行くのか。あれと二人置いて。」伯母から迎への者が來る度に良人は氣不味さうな顔して悴を睨み付けて居る。

「長い事ぢやありません、最う少しのことですから。」

「あれの顔を見てくれ。人相まで土氣色になつて生れ顔が無くなつた。」と陰で良人がこぼして居るのを見ると氣の毒でならなかつた。

龜次が家に居ないと、徳太郎も出歩いてばかり居る。若い職人どもの行く悪い場へも些い／＼足踏みすると云ふ噂も聞いた。徳太郎を折檻して見ても、そんな事は無いと云張つた。

「俺だつて何時までこんな狭い世の中に居られるもんか。大宮でも横須賀の造兵廠へでも行けば一人前の工錢は貰ふに好いんだ。面白くも無い。」と父への不平を陰で洩して居た。

病人はスヤ／＼睡つて居る。

雨戸を加減した薄暗らい中に、骸骨へ粘り付いたやうな病人の顔を見て居ると、便りなく氣が減入り込んで來る。龜次

は人に頼んでソツと座敷を出た。今日で一週間もロクに寝ない頭はボツとして濡れ紙でも張つたやうに重い。従兄は青々しい楓の鉢物を日向の縁側へ出して、獸皮の上に端坐して四角な朝鮮机に乗せた尊い理趣品を誦して居た。従兄と云つても最う五十の上である。龜次は小兒の時から伯父さんと呼んで居た。頭髮を短くした所以か、耳が尖つて、ひどく年寄染みて見える、白木綿の兵古帯をキチンと腰に結んで居た。

「何うだい、御病人は。」と従兄は通り掛つた龜次へ心配さうな目を上げた。

「好くお睡つてるやうでした。」

「フム。お年だからな。何分お願しますよ。」と云つて繻のあたる太い聲で又お經を讀みつづけた。

上方に裁判官して居た繁昌時代の従兄は、龜次にはズツと遠い、近寄りがない人と思つて居た。時々の歸省にも遠く隅の方からお辭儀して居たものだ。斯う優しく云はれると譯も無く悲しくなつた。

草も木も土も温かい五月の光に蒸されて、匂が渦巻きながら青い空に擴がった。青梅の葉から毛蟲が落ちて、土の上にもまるまつた。垢付いた着物が急に氣になつて、軽い裾がなつかしく思はれた。着物ばかりではない。舊るものは皆振ひ落したいやうな明るい日であつた。

好く龜次にもお經を思はせた明神様の祠の前に、白い小帳が

思出された。デブ／＼肥つた田舎臭い女であつた。當惑して小さくなつて居る徳太郎を睨めて、「全體、お前さんがこんな所へ来るから悪いのさ。おかげ様で此方までお談議を聞かなくちやならない。」と長い煙管を投出してツン／＼して立つて行つた。

「何うもお邪魔でした。」と龜次は絆纏の肩をすぼめて、嚴丈な格子の入口から宵の賑かな町へ出た。若い者どもは掃き出しもしさうな目付で不縁起な親子を送り出した。

良人の涙を流して泣いて居る顔、暗らい何時も濡れてる臺所、徳太郎の棄鉢な言葉そんなことをそれからそれと考へて居る。

「龜さん、まただよ。」と病人は力の無い聲で枕元の龜次を呼んだ。

「はい／＼。」

「氣の毒だね。お前はかり。」と曇つた目で笑つた。

「何んですね、伯母さん。當り前ぢやありませんか。」と龜次は氣爽に立つて穢れものの掃除をした。

伯母は又昏々として睡つて了つた。

眞夜中であつた。従兄の嫁と看護婦は次の座敷へ寝て居る。一緒に起きて居る筈の伯母の娘も、兒に乳をやりながら快さうに肘枕して睡つて了つた。もう大抵三時が鳴りさうなものと待つて居るところであつた。

立てられて、古峯さまにさ／＼げる赤い飯が三寶に飾られてあつた。丹波栗の青葉がその上にかぶさつて居る。龜次は何年振りかで又その階段に腰掛けた。伯母と姑と三十年の辛勞で建て上げた大屋根の瓦がキラ／＼と日に光つて居る。凝つと見詰めて居ると、空気の圈が揺れ／＼と、段々家が遠く小さくなつて行くやうにも思はれる。

「長い事だつた。」何がなしそんなことを口へ出して見たいやうな氣分になつた。

掛竹にやつと蔓を掛けた豌豆の灰色が／＼つた葉の間から、つ／＼まじやかな紫の小花が窺つと世を窺ぞくやうに咲いて居た。心の糸を外から操られるやうに、時々氣が付いて見ると、自分は茫としてその小花の淡い色を見ながら色々の事を考へて居た。

寒い十二月にはモウロク頭巾を被つた伯母と二人でこの畠の麥を踏んだ。お前は身體が軽いから二十づゝ、私は十づゝと伯母は先に立つて泥足袋で踏んで行く。又五月の熱い盛りには長の日一日茶を摘んだ。門前から井戸傍まで敷き詰めた小砂利は、毎晩の食消化に清水小路の小河まで前掛に一つ宛の小石を拾ひに通つたのである。三年もかゝつてやつと敷き終つた時、「粒は升と云ふのはこれだから御覽。」と云つて龜次に教へた。

又一昨日の晩、「何う云ふもんですかね。私どもにや決かりませんよ。」とふて／＼されて灰に字を書いて居る若い女の顔が

枕元に點けたランプは絶食以來五十幾日になる病人の上へ黄色い色を投げて居る。滋養洗腸も保たなくなつてから最う一週間以上になつた。伯母はたゞ俗説の六十日を信じて、あと十日、七日と日の満つるのを毎日勘定して居る。

顔は日に／＼角味が取れて優しく見える。腮の邊なぞ生掛のやうな黄味を持つて來た。壓倒されさうで恐しかつた大きな目も、屹と結んだ口元も鋭い線が弛んで、皺も減つたやうだ。世に云ふ佛顔と云ふのがこれだらうと思つた。小鼻を動かしてスヤ／＼睡つて居る。

「黒い馬、黒い馬。お母さん、二才でせう。」

ゾツとして振り向くとそれは囁言であつた。囁語の中には必らず五年前に死んだ姑の名が出た。龜次は顔に浮いた脂油を拭いてやつて、枕の外に振亂した少ない白髪を靜かに／＼梳いて居た。靜けさ。櫛の齒に引掛かる髪の毛の音さへ聞える。

「睡つてるの。未だ夜は明けないのかね。」生欠伸しながらとりの母は兒を寢せ抜いて起きて來た。

「まだ、二時も打ちませんもの。」

「随分長いねえ。」

「鶏の聲を聞くとホツとしますね。」

「本當ですよ。何か探して來て喰べませうか。」と肩を頼はして火鉢の火を掻き起して居た。

「お母さん、馬が來ましたよ。黒い好い馬ですよ。」と病人は起きて居る時よりハッキリした聲で囁語を云つた。

「何んでせう、馬ッて。」

「先刻から度々ですよ。眞ッ黒な馬なんですッて。」

「何んだらうね。」

病人は又ホツカリ目を覺ました。うるんだ目を上げて二人の顔を代る代る怪訝さうに眺めて居た。

「お母さん。何か御用ですか。水を上げませうか。」と娘は首を近々と差寄せた。

病人は安心したやうに又昏々と睡つた。待兼ねて居た時計がやつと二つ鳴つた。

肥つた従兄の嫁が目を見よボ／＼して起きて来た。

「龜さん、さア私が代りませう。少し行つてお休みなさい。貴方一人にばかり願つて居て済みませんでした。」

「いゝえ、好いんですよ。もう直ぐ夜が明けますから。」

「だつて、毎晩／＼の事ですから身體が疲れますよ。」

「大丈夫ですとも、却つて起して置いて頂く方が勝手なんですから。」

「でもね。」

「いゝえ、本當に好いんですよ。」と云つて龜次は寝なかつた。

「ぢや、爲方ありませんね。」と云つて従兄の嫁は面白くなさうな顔して引込んで行つた。

龜次はとり子の母とヒソ／＼夜の明けるまで話して居た。

日は照つて居て、中空から雨がハラ／＼と青葉に降りそゞいで居た。そして地までもとどかない中に濃い霧になつて消えてしまふ。向ふの空屋敷の麥は奇麗に刈取られて居た。

もうこれで送るだけの人は送つて了つた。この家にも藥がる用はもう無くなつた。親類と云つても最う便る人は無くなつた。

斯う云ふ暗らい心で屋敷町の杉垣に沿ふて歩きながらも又、心の底には辛つと殿しい人の手から免れた。本當に自由な身體になつた。初めて自分に活きられると云ふやうな考も又頭を擡げて居た。

家に歸ると、コールタに穢れた小倉服の仕事着を着て、良人は狭い見世先でブリキを刻んで居た。ボンヤリして歸つて来た女房を不審さうに見て居た。

「さア、今日から私も働きますよ。」

母の位牌へ線香を上げて来た龜次は強いて調子付いて云つた。

「草臥れて居るだらう。まア少し休んだ方が好い。」

「なアに、最う大丈夫、葬式から此方寝るぐらゐ寝たんですもの。」と暑苦しい絆纏を脱いだ。

人の母としての苦しき二年。漸くの事でもとり子を家の者とした。大學に居るとり子の兄

終りになるほど苦しみ苦んで伯母は、六月五日の霧の深い明方に死んだ。生きながら土に埋られた人のやうにもがき苦しんで餓死したのである。看護婦でさへ斯う云ふ苦しみ方は見たことが無いと云つた。

○ 前の日爪を切らせながら。「お前さんも働いたんだ。未だ／＼お働きなさいよ。お前さんのお母さんもこの病氣、私もこの病氣、事に依つたら系統を引くのかも知れないから氣を付けなさい。」と魚のやうに喘ぎ／＼云つた言葉が遺言になつた。

葬式が済んだ。貞徳院——大姉の新しい墓標が立てられた。百合の花が周圍に植えられた。

「長い事非常なお世話でした。母も嘸満足でしたらう。これは詰らないものだが形見分の印です、何しろあの通りの方だから、分けるやうなもの一枚もないので弱つた。従兄は母の儉約を笑ひながら、紋付の帷子と羽織一枚を龜次へ出した。

外に奉書紙に包んだ新しい反物が添へてあつた。これだけは何うしてもと拒んだけれど、無理に渡されて受取つた。

「そしてね龜さん。私ども、段々寂しくなる計りですから、何うか時々御回向に寄つて下さい。佛様には大事な御親類様なんだから。」と従兄の嫁も言葉を添えた。

は不同意、良人も氣が進まなかつたのを、龜次は八方争つて徳太郎の約嫁として貰ひ受けた。徳太郎の徴兵検査が済んで一緒にする約束であつた。その前の年とり子の父が肺病で死に、貧しい寡婦は八人の子兒どもの養育に困つて居た。とり子は十三であつた。こゝから小學校へ通はせた。

紫紋羽二重の重ね紋付、白茶地繡珍の帯。これは良人に見せるために先方の結納品として良人の前へ出した。大事な／＼自分の貯金の中を減らしたのであつた。その着物を着せて龜次は親類中にとり子を連れ廻つた。

「これが、私の娘で御ますよ。」

朝から晩まで緋の無尻を脱いだことの無い、東ね髪の母親は人の前で斯う云ふのが何よりの樂みであつた。

「お前の好きなものなら何んでも買つて上げます。さア、お母さんと云つて御覽。」龜次は時々こんな事を云つて傍へ引付けて置く。とり子は耻しくて云ひそびれて居る。

「もつと高く。ハッキリ云つて。」

「お母さん。」

「はい、何んです、とりちゃん。」

娘は首を振り／＼バタ／＼駄け出して行つた。龜次は良人と顔を見合つて零れ落ちさうに笑つて居た。

徳太郎は徒弟學校を出て、鐵道の機械科へ出て居た。眞面目に働くので、會社のうけも悪くはなかつた。

漸くの事でもとり子を家の者とした。大學に居るとり子の兄

漸くの事でもとり子を家の者とした。大學に居るとり子の兄

然しそれも長くは續かなかつた。誰よりもとり子が考へ始めた。新しく學士になつた兄のところへ始終長い手紙を出した。兄からも来た。そして、それを讀みくとり子はいつも考へて居る。それに氣の付いたのは徳太郎であつた。良人は怒つた。

とり子はその年小學校を終つて裁縫の塾へ通つて居た。

ある日、洋服を着た髻を短かく刈つた若い紳士がある裏町の屋根の低いブリキ屋の前へ立つた。それがとり子の兄であつた。

「母は何う申しても、兄としてこの妹だけ一人、世話せずには置くと云ふ譯には行きませんから。」とハッキリした言葉で云つてポケットから紙包にした金を疊に置いた。

良人も徳太郎も頭ばかり下げて居て口は利けなかつた。

「文さん、ぢや何うか連れて行つて下さい。その代り、何うか私のやうなものはこの後ともに親類とは思はないで下さい。良人忤も二人とも職人なのですから。」と蒼褪めた目から涙を流して居る。

「然う被仰るのなら私どもの方でも爲方ありません。」

「死んだつて見て下さるな。」

「承知しました。」ととり子の兄は冷かに笑つて居た。

それでもとり子は泣きながら手を突いて行つた。

龜次は筆筒にもたれて何時までも泣いて居た。

く煙草入を抜き出した。

「だけど、何所か嶮さうな顔ぢやないかね。」と張合の無い聲である。

「嶮さうツて、あれぐらゐの容色は然う減多にあるものか。徳太郎にや過ぎてると思つて見て来た。」

「お前さんが氣に入つたら、それと決めたら好いでせう。」

「お前は何うなんだな。お前の方が嫁にや大事な人だ。」

「私は何うでも好い。皆が好いと云ふのに越したことが無いから。」

自分がその癖先きに立つて騒いだのだが、亭主が斯う乗り氣になると妙に張合が抜けて来る。この前の綿屋の娘もそれであつた。徳太郎に見せない中に斷つてしまつた。

又始つたと云ふ顔しながら良人は獨りで膳立てして鹽鮭の切り肉で冷たい飯をうまさうに掻込んで食べて居る。

龜次は力なく表の雪を眺めて居た。兵隊が一人通つた。

夜、徳太郎が頓えながら歸つて来ると、親子は二合の酒をむつまじさうに飲んで居る。

龜次は早く寝て了つた。

○

龜次は生れて初めての長い汽車に乗つた。仙臺から三十幾哩にして桑折の停車場へ着いた。汽車と一緒に走る野も山も珍らしかつた。

○

灰のやうな雪が昨日から降つて居る。板の間からスウ／＼吹き上げる寒風が背中を板のやうにした。さも無くてさへ暗らい茶の間は、店の大戸も窓も閉めたので眞暗であつた。炭の火は手の皮ばかりを刺した。時々炭賣りの駄馬が首を垂れて通つた。

「慶吉。」と店番の小僧を呼んで見たが、火鉢に坐睡りでもして居ると見えて返事しなかつた。

時計を見ると十一時過ぎて居る。最う良人も歸つて来る時、晝飯の仕度をしやうと、思ふがしぶつけなくて立つ氣が無い。日に三度づゝの決つた餌仕度も倦々した。百日咳にかゝつてコン／＼咳入る壁隣りの兄の啼聲に顔をしかめながら、サラ／＼と降る雪の響を聞いて居た。

龜次は獨り居る時の癖なる、貯金の金勘定や四十になる來々年は受取る保険金の勘定を又繰返して見たけれど、雪中りの頭は直ぐそれにも飽いて来る。心が洞穴になつたやうで思ふことがまとまつて来ない。

角袖外套の雪を拂ひ落しながら良人は外から歸つて来た。

耳も鼻も腫れたやうに眞赤にしてセイ／＼呼吸を吹いて居る。

「見て来た、好い娘だ。お前が云ふより餘ッ程容色が好いぜ。」と良人は脱いだ外套を壁へ掛けて、凍えた手で氣忙しな

停車場へは姉の息子が出向ひに来て居た。紺臭い法被を着て骨組の逞ましい若い者になつて居た。

「伯母さん、今かね。」

改札口から駈つて来た甥は龜次の顔を忘れて居なかつた。そこから二里、上り加減の道を甥と話し／＼歩いた。村々には桃の花が明るく咲いて居た。

「あれが盤梯山だぜ、會津の。」

甥は一々指示しながら教へた。通り違ふ村の人達は見馴れぬ風俗の龜次を不審さうに見て通つた。また、頬被りを取つて甥に聲掛けて行くものもあつた。

「あい、仙臺から伯母御が御座つたんでな。」と甥は一々答へて行つた。

野には雪雀が啼いて居た。青々と桑の畠が芽組んで居た。姉の家は考へて来たより大きく構えて居た。青い柳が家の前に枝垂れて居て、底の澄んだ水がチヨロ／＼と流れて居た。開けひろげた見世には鐵漿臭い藍壺の縁を渡りながら三人の職人がシユウ／＼と掛聲して木綿糸を染めて居た。

息子に聲掛けられて、姉は藁草履を穿ッ掛けて飛出して来た。

「まあ、好く來らつたな。いと伊達訛りそつぐらの軟和い言葉で妹を迎えた。」

「辛うとの事で。」

「徳さんも好い嫁さん貰つたツて、まあ好かつたな。いと

懐しさうに妹の姿を見上げ見下して居る。
「何う云ふもんですか、私にや些つとも。」と寂しく笑つて居た。

「さア、何時まで日和で立ち話してる。お客様ア草臥れて居られるにな。」

姉の良人はもどかしさうに母屋から聲を掛けた。

「それにな、龜さん、妙な事があるもんだぞい。お前の先の御亭の源吾さアな、すぐこの近所に居られるぞい。私アこの間會つてない。」と小さな聲で姉は囁きながら家へ入つた。

「この近所に。」

「まア何れ明日でも案内すツから、大層年を取られたぞい。」
壘一壘もある大きな爐の自在鍵は煤光にてテラ／＼光つて居た。五舛入ぐらゐの鐵瓶から湯氣が勢よく立つて居た。

職人まで代り／＼挨拶に來た中に、デツプリ肥つた赤い顔の女は甥の嫁であつた。もう小兒の二人もある。野の青草を渡る香ばしい風は家の中を眞ツ直に吹いて通つた。

「全く生返るやうな心持ね、清々して好いこと。」と龜次は夏はさぞ涼しさうな廣い家の中を見廻した。

姉は孫を膝に抱き上げながら、話しても話しても盡きないやうに妹へ話し掛けた。おみつのこと、五ツ橋のこと、お竹のこと、寺のこと、前から用意して居たやうに問ふ言葉が盡きないので、「そう、聞かれちやお客だつて休む暇がない。」と傍で良人が笑つて居た。

「あ、私もこんな田舎へでも引込まうかな。廣い所を見たゞけでも好い。」

「そんな事云つて、半月と居られツもんか。私だつて初めて來た時は半年ばかりは泣き通しだつたもの。——あ、そんな事云つて、最うお膳が出来たらう。さア、坊にもお乳をやるぞい。」と背中の孫に頬擦りしながら先に歩いて行く。

夜中は冷えるとして、炬燵をしかけて姉は寝ながら話した。山間の村は靜かに深けて、流れの音が雨のやうに響いた。龜次は本當の家へ歸つたやうな心持になつて快い夢に睡つた。

翌朝、まだ薄暗らい中に目が覺めた。裏口から外へ出て見ると、どこにも細い山河の流れが咽んで居た。東を丘陵に閉ぢられた朝の遅い村は、まだ濡れた露から覺め切らなかつた。遠い山、近い山は、區別正しく濃く淡く林を見下して居る。

龜次は偶と北上河に沿ふた雄勝の朝を思ひ出した。朝の露の中から櫓の音がゆるく流れて行くのを聞いたものであつた。師匠の巫女はもう十年前に死んで了つた。北國から遠縁の従弟とやら云ふのが來て、裏の山で焼いて骨にして持つて歸つたと土地から來た人に聞いた。

「早いこつたない。」と姉も赤兒を背中に受取つて畠の方から上つて來た。

「今日、源さん所へでも行つて見るかなしい。」

「さア、何しませう。」

「源さんも、お前さんにア濟まない事をしたツて云つて居られたツけ。それでも、小兒は四人とかあるとい。」

「然うですかね、最う。」

龜次は姉の著しく年老いたのに氣が付いた。もう頭が半分方白くなつて居た。下臉のヒク／＼動くところまで母親にツクテであつた。

盲魚

六月の強い日の下を葬式が續いた。施主親子は種々考案の上、寺方で云ふ鈍色木綿の袷に羽織、同じ袴を新規に仕立て、棺の後に立つた。

永昌寺の廣い客殿はギッシリ人で埋つた。餘つた人は廣庭の日和に立つて式の終るのを待つて居た。區裁判所の中田判事、郡立病院長、警察署長、水産組合長、郡視學、議員、その他町で重立つた顔の人だちは残りなく集つて居た。

人々の視線は、施主席にガッシリ坐つて居る豪氣な郡長の顔より、その子息の銀行員より、誰よりも先づ女席の上に居る四十恰好の肥つた人にそゝがれ勝ちであつた。分けて氣の弱い女教師連などはヒソ／＼囁き合ひながら痙攣するやうな同情の目を送つて居た。

海から來る微風は庫裏前にならぶ合歡木の甘さうな若葉を撫で、棟の高い窓々から古い匂ひの本堂に流れ込んだ。

括れた手頸に珠子をからんで、白い衣裳を着けたおいそは、板のやうに固い疊にシャンと坐つて、一つ所を見詰めたなり、七僧の長らしい讀經の間も、足の親指一つ内所では顔

さなかつた。

廣い本堂はたゞ一基の白木の位牌であつた。——新齋元、香雲院良貞高操大姉之位、享年七十四歳。

傍の一本蠟燭の灯先は揺れ動きもせず晝間の空氣に細々と點つて居た。貴き香煙は一縷白く靜かに立つた。

「おいそ様御焼香。」

田舎から出て來た紋付袴の舊家來が、縁側の隅から嚴かな聲で次第帳を讀み上げた。少し背筋の丸くなつた良人は合誦の讀僧の中を小腰かゝめながら、亡き母の骸に恭しく久離の香を焚いて居た。息子の猛が立つた。次が自分。後から自分を押退けるやうにしてガサツな良人の妹どもが急いだ。猛の妻。娘お總の名代、孫、甥、従兄弟ども……。

抹香の煙は次から次の人足に揺り亂れた。會葬の人だちまで浮き腰になつて混雜する中に、おいそはもとの席へ戻つて、大勢の立騒ぐ背中を見て獨り前の如く坐つた。身内の者まで何を急ぐとも無く急ぎ立つて、場所も思はぬ亂雜な振舞に佛を穢されるやうに思つた。

棺の天蓋も金欄の蓋袱も日の下に取除けられた。白木綿を券付けた細長い檜棺の上に前と書いた墨が鮮かに讀まれた。空臚に火葬を寄せた人足どもの手が、荒縄でそれを縛り上げ棒を通した差荷負にした。寺裏の濕つた杉林を抜けて町外の火葬場へ搬ぶのであつた。

おいそは加賀の大聖寺に居る時分、御連校様から頂戴した

大切な珠子を爪繰りながら、會葬の女連れと坂上の松まで棺を見送つた。日に乾いた赤土道は草の裾をつゞいて、小躰の光る夏らしい海が松の間から見えた。一團の近親にまもられて行く裸な棺は息杖で輕い拍子を取り取り、漁士町の靜かな晝を通つ、紺青色の霧の中へ遠かつて行つた。

寺に居る中から唇をピリ／＼ひきつらせて居た若い嫁は、眞蒼になつてその草原に蹠んで了つた。横腹を抑えながら人に扶けられて坂を下りて行つた。おいそは繪を見る時のやうな甘い悲味を感じながら、姑の棺の全く見えなくなるまで立つて居た。

そして、郡視學の細君等と話し／＼重い體を家の方へ搬び始めた頃には、もう冷却した陸の風が路傍の篠竹藪をザワ付かせて居た。細君だちは上役の奥様の身體を氣遣ひながら、重病で居る娘の病狀をいろ／＼心配してくれた。

「母よりはあれの方を先に出すとばかり思つて居ました。」
然し、おいそは落付いて微笑しながら斯う答へて居た。細君だちは悲しさうな目をして居た。

二

親類どもはそれ／＼歸つて行つた。妹どもは餓えたやうな目付して、分けられた形見を不足さうに見て居た。中には止まつて居て娘の看病をしたいと云ふ者もあつたが、お前達も長い間他の間を掻き廻したのだ。今度は私どもの身體にして

くれと、良人は磊落にその親切を斷つてやつた。仲夫婦だけは催しのある嫁の身體を氣遣つて態々通し人車で仙野へ歸した。

兎に角、自分の家になつた。殆んど何十日振りかで娘の病室へ入ることが出來たやうな氣がした。

「お總ちゃんや。」無駄と知りながらもおいそは日の射す枕元へ寄つて母らしい聲を掛けて見た。

魂の無い娘の顔が底から透通つて來た。無感情、無意識、無感覺になつてからもう二十日近くなる。瘦せも衰ひもせず、欲の無い美しい顔して、晝も夜も目をハッキリ開いて居た。

「一言ぐらゐ話してくれたら何うなの、お總ちゃんや。」母は傍へ寄つて、硝子のやうな黒い隣きもしない瞳孔に自分の顔を映した。二重腮の年寄つた女の顔が小さく映つた。何も彼も知り抜いて居て、態と斯う黙つて居るとしか思はれなかつた。

聲の太い父親は秘藏の短刀を錦の袋から抜いて娘の眉間に鈍など突き付けたりして見る。「見る。」と威赫の聲を腹の底から押搾つても人形のやうに動かなかつた。父親は溜息して二階へ上つた。

借家して居る今の家はニコライ信者の先の郡長の家である。他には些いと知れ憎くいやうに出來て居る二階廊下の潜り戸をくぐると、二三段高くして暗い部屋がある。先の老郡

長の隠れた禮拜堂であつた。おいそはこの構造が氣に入つた。喰べたり笑つたり人の息のかゝる座敷に神棚を飾る恐しさを思つて、日頃信心するお伊勢様、淺間様、杵築様のお暇身をこゝの祭壇に鎮め參らせた。七條の注連繩、幣束、眞神、總て日和山の神官を招いで大祓ひをした。

高い小窓が一つあるだけで常に濕氣臭くはあるが、おいそは日に三度づゝは必らず上つて塵淨手を切つた。お總にも禮拜を缺かしたことが無い。頭の亂れさうな時はこの薄暗い清淨な部屋に籠つて居て心持を整へた。又様々の事も思つた。

夕暮、闇が庭の植込の青葉から湧いて、靜かに家の中へ流れて來る時。おいそは祭壇の圓座にうづくまつて、御燈の灯の暈して來るのを凝つと見詰めて居る。黄色く顫える暈が顫えてく遠く小さくなつて行く。然らすると、もうシン／＼音のするほど心が顫え上る。何時も蜂の唸り聲が聞える耳が、秋の水のやうに澄んで遠い物音までハッキリ傳はつて來る、そして、日の光りが朝の潮をひたすやうに何んとも云はれぬ強い感情が身禮中に鳴り溢れる。

「私はこれまで一度も、筋の立たないことは爲ませぬ。」
下顎をガク／＼鳴らせて、顫えながら斯う云つてぬかづくのであつた。と、又直ぐ後に續けて、
「でも若し私に悪い所が御在いましたら、御先祖様、杵築様、何うか何うか枕神にでもお立ち下さい。屹度その場の縁目から私は改めます。」と周圍を見廻はしながら恐る／＼付

で生田流の秘傳まで受けた。舊城の天主閣が直ぐ前の小山の松森に聳えて、瀬の早い木曾川の切崖の下を流れた。夏は眞白な朝靄の中をホウ／＼と懸聲を取り代ししながら官材の筏を流して行つた。

旅に居る心持は自分でも美しかつたと思ふ。芝居を見ても泣いたり笑つたりした。官舎に居る細君連が代る／＼泣いて訴えて來るのを聞いても、多くは他愛も無い感情の衝突であつた。一人の細君が笑ふことは他の細君にも可笑しい事ではなければならなかつた。今のやうに底の心持で活けると云ふことは無かつた。

おいそは二十一になるお總を連れて故郷に歸つて來て、今まで考へもしない生活に出會つた。丁度、狭苦しい土に植えられた植木が、葉を伸べ枝を伸ばして、この廣大な空の光を争ひ、雨の一濕りを争ふやうに、人と人、家と家とが争ひ活きるさま／＼の穢ない姿を見た。善い悪いを決められないやうなセツパ詰つた争ひばかり見せられた。稚い心持を考へてお總に着せた派手な着物まで周圍とは釣合はなかつた。年々模様が地味になつて行くのが悲しかつた。

蒼い顔しておいそが二階から降りて來ると、良人はもう好い氣分に酔つて、田舎臭い若い郡書記どもを集めて、蓋物の嘗め味噌を嘗めながら、頸切り話の例のおはこを初めて居る。監獄に務めて居る間に自分が立會つて十幾人を斬罪又は絞殺した經驗談は、十七歳の時白川口の官軍と戦つた手柄話

添すのであつた。

氣の強い妹どもは、子供のことゝなると家のことゝなると、鳥のやうに氣負ひ騒いで争つた。おいそは沈着いて黙つて通した。姑は又善い悪い共に感情を外に見せぬおいその心持を疑つて、死ぬその日まで油斷を見せなかつた。然しおいそは姑につくす嫁の務は立派に済したと思ふ。ヤクザな姪を二人も引取つて世話した。親類の墓も掃除した。二人とも遁出して今は親々まで仇のやうになつて居るが、それは自分の罪ではない。

寧ろ、あのまゝ旅で暮らせば好かつたと思ふ。高が七八人の營養の悪い郡書記どもの上に立つ郡長ぐらゐの位置、それを振り當てられた時に自分の年を勘定して、故郷と云ふものに引かされて斷りかねた良人の衰ひが今から思ふと悲しくなる。大酒して、豪語して、誰の前でも太い頸筋を自慢にして來た人であつた。この人の掌で覆はれると、風も雨も身に來ないと思つて旅の二十五年を暮した。

お總は小菅監獄の官舎に生れた。子の無い若い細君たちの慰みになつて、方々の家から奪ひ合つて可愛がられた。岡崎では好く割籠や毛氈を持つて、海の見える葦山に大勢に圍まれて一日を暮した。岐阜に行つた時はもう典獄、上に立つ人は時々巡回する縣知事の外にはなかつた。何十人と云ふ看守長の細君だちや町の豪家の女どもが始終出入して、風雅な茶の湯の會や琴の合奏に廣い家を始終借りられた。お總はこゝ

とお對の自慢なのである。

「又ですか。」とおいそはいやな顔をして坐つた。
「又ですかつてお前、今のお若い連中は餘り度胸が無過ぎるよ。俺が後から抜き打ちにそのお朝の背骨を切り付けた話でも聞いて、些つとは膽に鹽をすると好いんだ。何うだ貴公だち。刀を斯う——」もう酒にくどくどなつて、同じ話を何度も繰返して居る。
おいそは黙つて火を見詰めながら聞いて居る。

三

おいそは娘お總の耳だけを便りに暮して來たと云つても好い。父親の氣質を受けた長男の猛はそんな込入つた話を煩るさがつた。又早くから東京へ修業に出て家に居なかつた。

母は低能な娘を傍に引寄せて、千石の太身から、この貧しい女家内の多い土族に嫁入つて來た以來の苦勞を話して聞かせた。皆あさはかな口の多い妹どもであつた。初孫の猛を見に田舎から上つて來た姑は、もう次ぎのお總がもう腹に居るのは氣付いて、「又ですか。」と蔑むやうな大きな目に沈つておいそを見詰めて居た。そしてその晩良人にヒソ／＼云ひ聞かせるのを聞いた。おいそは良人にかくれて黒砂糖の羹じ汁を飲んだ。兒は産むまいと産神へ願請をかけた。良人が古器物に凝つて、無勘定な負債するのを妹どもや親類は皆自分一人の所爲にして蔭口を云つた。そして、姑を騙して少しづゝ

物を搬んだ。自分等の旅から歸つたのを見て、折角辛苦して溜めた母の身上をねらうものゝやうに恨んだ。

同じ年頃の従姉妹どもは二三人の母となつた世帯に喘えで居る中に、稚いお總はまだ全然の嬰兒であつた。聞いたことを固く守るより外に分別する心がなかつた。二十三にもなつても、數を讀むのに、一萬から上はドツサリと手眞似して居た。母の目が命じない中は坐つた所も動かさなかつた。祖母、伯母ども、従姉妹どもを正直昔ばなしの悪魔のやうに怖れて居た。財産、親屬、家、なぞ云ふ恐ろしい觀念が脆弱な腦皮質のなかを旋風のやうに狂ひ狂つた。そして、母と一緒に二階の祭壇にひれふした。母の泣く時には同じやうに聲に節つけて泣いた。

良人と伴とが幾日も協議の上、整理の爲めに山根新田の田地を手放すと決めた時、姑は婿の病氣を口實に末娘の家へ行って半年も仙野から歸らなかつた。おいそは辛らい思ひして度々迎へに行つた。妹どもは笑つた。

散り後れた桃の花に四月の雨が闇を投げ付けるやうに降りそゝいで居た。おいそは鋭い目付を小さな物音にも狂はせながら二階に閉籠つた。ワナ／＼顫える手で奉書紙が人の形に刻まれた。筆をお總に付き付けて、戊歳の女、午歳の女と書けと小さな然し壓迫するやうな聲でせまつた。お總は眞蒼になつて云はれるまゝに書いた。筆を置く／＼と周圍が暗くなつた。

人の所置を恨むより外なかつた。婿の家は良人の支配する郡内の際に歸農した家柄の百姓であつた。例令酒の上にもしろ、貰ひませう遣りますと男の口で約束して來たのを、今更ら變換は出來ないとして、嫌がるお總を激しく叱り付けた。侍の娘らしく死骸になつて歸つて來いと出してやつた。

「もう何も云ふな。俺が悪るいんだ。死んだら俺も高野山へでも上る。」と良人は皺の深い顔をそむけて小さな聲で云つた。

奥座敷には胃痛の母親が寝て居た。姑の手前は婿と一緒に縁家へ歸つて了つたやうに云ひ繕つた。

「あれは本當の神様だ。穢れの無い心だ。」
母親は瘦せた手を苦しさに蒲團の外へ出して、遇はずに歸したことを残念がつて居る。そして、日に／＼衰えて行つた。

おいそは母の病室を出なかつた。娘は舊家來の女房と看護婦とに委せた限りで、同じ家に居ながら病狀を却つてその人だちから聞いて居た。

良人も又役所に入りに竊つと襖の陰から娘の顔を窺いて見るだけであつた。溫和しく二階の書齋に閉籠つてこの頃讀み始めた佛典に耽讀して居た。

六月一日の朝、母親は大勢の身内に取圍まれて死んだ。

四

「伯母さんが来る、お母さん、早く／＼。」お總は夜中にムツクリ起きて、寢床に顫えて居ることが多かつた。母親も蒼くなつた。

お總は里歸りに來て三日目白晝二階の窓から飛び下りた。お總の良人は幸ひに舅と一所に海釣りに行つて家に居なかつた。庇に大石の落つる音を聞いて出て見ると、お總は燃えるやうな芍薬の若芽の傍に寝てるやうに倒れて居た。何所にも怪我は無かつた。

「まあ、お總。」と母親は覆さるやうに娘にしがみ付いた。水汲みに行つた下女が飛んで來た時、おいそは只、
「何んでも無いんだよ、何んでも無い。」と手を振つて自分一人で離屋へ擔ぎ込んだ。

「私ぢやない……線香だ……蠟燭だ。」お總は水を顔に吹掛けられて早口に斯うつぶやいた。

「何を云ふんだ。黙つて、黙つて。」母親は袖で口を覆ふた。
「ぢや、ぢや、私なぞ、何んにも云はなくても好い。」と云つて目をパツチリ開いたまゝウト／＼と睡つて了つた。

婿にも嫁の姿は見せなかつた。氣の弱い婿は不審に思ひながら、二十里も離れた家に一人で歸つて行つた。

お總はその日から魂が無かつた。足の裏に針を刺しても感覺は無かつた。初め置かれたまゝに夜も晝も睡つて居る。顔色が日増に冴えて美しくなつた。
おいそは唯だ自分にも相談なく自儘に豫談を決めて來た良

夜は靜かに深けた。海の鳴音が遠く濱に荒れ狂ふた。看護の者どもは次の室に着のまゝで睡つた。

剛情な良人は醫師どもの治療を齒痒がつて、最う頼まぬ、自分で癒して見せるといらだつた。床の周圍に魚監觀音像を掛けて、その前に經机を置いて端座した。娘の口を利くまで離れぬとて、身を淨めて法華經の第二十五品を高らかに誦し始めた。

鏽のある太い聲は夜陰の空氣を揺つて、廊下の隅まで響いた。一回誦し終ると良人は立つて來て娘の額にお經を頂かせた。そして、妻の顔を見るも恐るゝやうにして、靜かに又もとの席へ坐つた。

飽まで抜け上つた骨太い良人の顔が蠟燭の隣きに動いた。好く見て居ると、娘の動かない顔の底に何かしい動く表情がある。春の風が地の底を流れるやうに、色々感情が去來するとしか見えなかつた。笑ふやうにもある、泣くやうにもある。時とすると、ものに怖れるやうな不安な感情も汲み取られた。

「貴方、貴方。」

午前二時の時鐘の唸りが、う／＼に遠く日和山の方に消えて行くのを聞きすまして居たおいそは良人を慌しく呼んだ。
「何んだ。」年寄らしく眼鏡を掛けた良人は經文から目をうつした。
「こんなまア耻かしさうな顔して。ホンノリ赤くなつて。」

良人も蠟燭を持つて立つて来たが、娘は人形のやうに睡て居る。良人は却つて心配さうな目を妻にくれた。「キツトあの時ですよ。富永の家へ初めて連れて行つた時、あの時の顔ですよ。お總は十八でした。」

帆船の走る蒼い湖水の縁を、春の日、華美に着飾らせた娘を連れて、通りすがりの人に見返られながら、許婚の家に見参に行く時の繪のやうな透明な近江の景色をおいそは現に見て居る。

「少し外の風にでもあたつて来なさい。」と良人は力なく經文に向つた。

「屹度あの時だ。」おいそは何うしても然う思つた。そして悲しくなつた。

その時袴を穿いて父親の傍に坐つて居た、蒼白い病身さうな、然し目付の蒼く若々しい青年の顔が著々と目に見えた。小藩ながらも家老職の古風な家造りも目に見えた。今日までたゞ一筋に生長して来た娘の稚ない心の中に斯う云ふ感情が潜んで居やうとは思はなかつた。恐ろしくなつておいそは目を避けた。

不可思議な娘の一生。二つの時縁側から轉び落ちて以來、七つまで口を利かなかつた。啞を産んだと世間や郷里の妹どもに嘲られる辛らさに、雪の中裸足参りを蹈んだこともあつた。やつと可愛氣盛りになつた頃は、長男の猛が腐骨瘡にかゝつて出入三年も岐阜の病院へ入院して、娘を染々顧る暇がな

法華經を誦する良人の顔に夜深けの脂が浮いて、聲は沈んで行く。洞のやうに空虚になつたおいその頭の中を撫でるやうに響かして行つた。

外に耳を立てると、もう拂曉の氣が動いて居る。暗い中から鋭い蒼味が破れて来るやうに思はれた。小山一つ彼方の牧場では搾乳場へ引擦り出される牛の唸聲が聞えた。

五

お總は寢てから二十三日目に初めて口を利いた。

「あゝ、煩さかつた。」或る朝、突然寢返りして然う云つた。そして、目が覺めてから身體が段々瘦せ始めた。云ふことが本當ではなかつた。

「私ぢやありません。蠟燭だ。線香だ。」と身を窹めて顫えながら見えない人に云ひ譯して居る。

縁家の親戚が道具を返しに來ての話では、向ふに居る中、佛壇に線香を供へる時誤つて重代の蓋袱を焼いた。その時喪心のやうにボンヤリして錦の燃えるのを眺めて居たから、大抵それが原因でせうと氣の毒さうに云つて居た。

然しおいそは單純なその譯ばかりを信じとれなかつた。未だく深い譯があるに相違ないと思つた。ひたぶるに縁談を嫌つた當時のことも思ひ出される。又愈々嫁くと決まつた時、二階へ連れ上げて母としては云ひにくい世の常の話を噛んでくゞめるやうに聞かせた時、蒼くなつて聞いて居た興さ

かつた。後ち氣が變になつて死んだ下女と看護守長の細君に

まかせた限りであつた。下女の乳を飲んだお總は當分母に馴染まなかつた。額の隅から意地悪く母を見て居た。それを自分の影のやうな心持に育て上げるまでには、まあどれだけの苦勞と折檻をしたらう。父親でさへ見かねて口を出すのを、女の子は女に委して下さいと云ひ張つて思まゝに育て上げた。

富永との許婚を破つたのは自分であつた。先の息子が工夫のする測量を志したのも氣に入らなかつたが、丁度犬山を退いて郷里に引込まうと云ふ際であつた。この智慧疎い娘を一人手離して遠國に残すのは自分にも便りなかつた。良人は大荷物七箱の書畫や刀剣を土産に郷里へ歸る如く、おいそは親類中にならぬ娘の容色を自慢に郷里へ歸るのであつた。

富永の息子もお總も何んとも思はず、當り前に別れるやうに別れた。たゞ昔氣質な富永の老人が怒り立つて、白髯を振はしながら人外のやうにおいそを罵つた。

それから九年になる、お總は二十六、七となつた。當人も富永のトの字も口に出したことがない。

そちこちから縁談もあつた。然し、おいそは何うしても手離す氣になれなかつた。不便なこの町で辛つと師匠を探し出して、茶の湯、生花、古式な三味線、と風雅な上品な藝事を仕込んだ。長い日も一日二階へ上つて秘傳までうけた琴を心靜かに奏でゝ居た。

めた顔も思ひ出される。人の世の快樂を待つ心なれば、新婚當時のとも忍びがたき穢なき征服も思はれる。夢のやうに暮して来た人が始めて現實に觸れる時の恐怖すべき戰慄も思ひ出される。見せべきで無い幕を明けて見せた。

庭に白い芙蓉の花が咲いた。裏の崖で遮られて居た西日は、日に／＼南へ廻つて掠れた日が離屋の障子に映るやうになつた。人氣が少なくなつた家の中は、急に間隙が出来たやうで、どの座敷へ行つても氣が寂しかつた。白く冷たい花のつゞましやかに咲いて居るのを見ると、自然と頬を傳つて涙が流れた。

お總は力なく、急に大きくなつた目であてもない宙を何時までも眺めて居る。母の顔でも凝つと眺める。おいそはその黒い瞳に刺されるやうに思つた。耐らなくなつて直ぐ二階の神棚へ遁れる。唇を顫はしながら、

私は一度も筋の立たない事はしたことが御在ません。」と我もなく突伏して了ふ。

巫女を招いて姑の死口も降して見た。肺病で死んだ弟の魂も祭つた。富永の息子やお總に乳をくれた氣違ひの乳母や妹どもの生き口に従つて、井戸も祭り又立ち樹の靈も祭つた。當り日／＼には良人の傍をも離れて居た。こつちから頭を下げるやうにして姪どもの機嫌も取つた。

「お總ちゃんや。後生だから何うか勘忍しておくれ。ね、お母さんだよ。」と斯う云つて、優しく娘の顔に觸つて見るの

「お前は誰だ。身體が穢れてる。私の身體に匂があるまい。」
早口に喋り立てる娘の顔は赤く血走つて居る。そして、硝子のやうに色澤が透明つて居る。

「お總ちやんや、私だよ、私だよ。好く見ておくれ。」
お總も時々母の顔を見分ける時があつた。そして、そんな時には妙に恐ろしさうな素振りを見せて、胸元のはだかつたなぞを窺つと掻き合はせて、いぢらしく小さくなる。
「氣が付いたね。シツカリお爲よ。さアお母さんと面白く遊びませう。」

「はい。」

「お芝居へ行きませう、赤い着物を着て、烏田に結つて。」

「はい。」と云つて居るけれど、それは長い事ではない。海の日が雲を追ふやうに直ぐ暗くかくれて了ふ。

朝々霜が裏山に白く置いて、渡り鳥が落葉の上をカサつかせる頃、仙野の猛から二番目の女子を産んだことを知らせて来た。おいそは冬の日の赤い離屋の枕元で、掠める目で針を通しながら赤や青や紫やの友染の襷ね着物を仕立て上げた。
落ち残つた栗の枯穂がカサリ／＼と地に落ちた。光の失せた雲は忙しく空を西へ／＼と走つて行つた。

帽子を持つて良人は掛聲もせず玄關から入つて来た。黙つて病人を見て居る。
「好く、睡つてゐるな。」と目線の多い目を向けて小さく聞いた。

た。

「今日は好く睡るやうですよ。好い鹽梅です。」
「ソツとして置くんだよ。睡るほど好からう。」と足音を忍ばせて二階へ上つて行くのであつた。後姿が年寄つて見える。この頃は女中の手も籍りないで獨りで着物など着換えて居るのであつた。

「關ふもんか、これからはこの小さな嬰兒さんと相摸でも取つて、氣樂に日を送らうよ。」と何時かお總が荒れ出した時に云つた良人の言葉を思ひ出しながら、おいそは孫の晴着を縫つて居た。

日がさびしく落ちて、障子がバツと明るくなつた。

家 鴨 飼

門前の草葺は土工の辰さんの家。女房がおしま。お夏と云ふ背負兒があつて三人暮である。裏の崖下には門左老爺のひしやげた家がある。コルター塗の空籬を魚の鱗のやうに綴り葺にした、そりや穢ない小家なんだ。この二軒が昨年K——先生の引越した、謂ゆるその戸塚御殿の瘤借家である。持主は西洋食料品で名高い新橋の龜屋。先生の前は何とか云ふ法學博士が長らく棲んで居た。

僕等は先生の家を戯れに戸塚御殿と呼んだ。先生は又、まるで見付が尼寺のやうでしてな、と笑つて居た。なるほど、尼寺は好い。前通りはズツと人背ほどある草堤、その上に枳殼垣。檜や櫟の程合な攪林が間込に立並んで、その透間から圖抜けて高い、眞四角な、黒く雨腐つた茅葺の大屋根が見えるのだ。故と奥深かさうに門を堤から引込めて、露地先を長く取つた具合など、何う見たつて常の構ぢやない。門前に授戒日の高札でも出して置きたい位だ。それに、門内の兩側には秋萩の盛株をギツシリ並べて玄關まで植込んである。芽伸の早い五月雨頃などは傘を横にしなれば通られない。

家は可也ふるい。そして、建坪の大きな割には間取りが何れも小さい。悪く拵つたせい、こましい間ばかりである。座敷らしく使はれるのは客間の十疊と茶の間ぐらゐなもの。書生部屋にして居る玄關脇の三疊でさへ簀子天井に丸窓を切て好く好く凝つたものだ。地震には好いが、壁濕りが通して困ると、書生の梅津は始終こぼして居る。

先生の書齋は三間續きの離屋で、半茶室がかりと云ふのださうだ。机を据ゑた突端の三疊などと來ては、その氣取りさ加減、まつたく厭になつて了ふ。先づ天井が竹皮の網代編、柱は手斧目の柾杉、重鹿の何時も薄暗らい部屋で、隅つこには爐も切つてある。何う見ても俄分限の隠居か、植木屋位的好みと云ひたい。たゞ要領だけは誠に良い家で、兩戸の一枚／＼まで懸棧やら合釘やらあつて、却つて開閉に厄介な位である。しかし、庭は好い。先生は第一これが氣に入つた。之と取立つて心にするやうな古木や珍木は無くとも、四時それ／＼の眺めに飽かぬやう——主に葉物とか草物とか、廣い庭に調和よく植込んである。秋ぐち、白芙蓉の盛り時は殊にも好い。捨石、石燈籠、鉢前の石、何れも苔さびしたものだ。夏の夕暮などは好く庭の隅に篝火を焚かせて、先生は椽先の蒲蓆にビールを飲んで居る。庭先に空地を置いて前は直ぐ隣屋敷の樅、胡桃、栗林が茂つて居る。某銀行家の別荘と聞いた、その雜木林の續きが——櫨、漆なども交つて——先生の家の横、崖際までズツと續いて、吹上げの北風を防いで居

るのだ。だから裏の田圃の方から見ても先生の大屋根はコンモリ茂つた林の中に小暗く透いて見える。

然うく忘れて居た。先生の所は戸塚村の、それも落合最寄りで、字の源兵衛村の方が好く通つて居る。穴八幡まで出るにも小十町、火葬場への通路である。電車の便もないから原向ふの大久保のやうにわるく開けないのだけはまあ見つけものだ。銭湯や西洋料理ぐらゐを前騙者として、端へ端へと擴がつて行く郊外の借家建と来た日にや見ても貧弱さうで耐らない。武蔵野の立木を切拂つて、そしてお蔭で家が明るくなつたと喜んでゐる輩が多いんだ。然し、不便を云へばこの上なし、郵便もこの邊から出すと二日もかゝつて東京へ着く。買物は少し先きのガードの手前に昔ながらの荒物屋、鹽物屋、理髪店、桶屋、蹄鐵屋などが五六軒あるが、何うで碌な者のある筈がないので、大抵は馬場下か早稻田を重寶して居る。そのツ代り、雜木林、紙漉場、小流れの土橋、田圃、辻地藏、唐辛島、みな昔ながらのお祖師街道である、武蔵野である。たゞ一軒直ぐ眞向ふに角屋と云ふ賣茶屋があつて、そこで巻烟草や麥酒ぐらゐを並べて置くので、急の客などにはそこを間に合せて居る事にして居た。

二

大腹な先生の事だから、引越して来たその日、蕎麥代りに手拭地一反つゝを二軒の權借家へ配らせた、門前のおしまは、

の、好い氣になつてやがる。誰が當節こんな事なさる方があるものか。いゝえ、全くですよ。しち癖になるから貴方ズンズン持つて歸つてやれば好いのにさ。」

「まさか然うも行きませぬしな。」
「いゝえ、それで好いんですよ、貴方、全體あの老爺は近所でも憎まれものなんですからね、構ふ事ア無いこれからグン／＼やつておやんなさい。誰れのお蔭で生きてやがると思つて、龜屋さんだからこそあゝして置いて下さるんです。それを何時も／＼高慢ちきな面ツ付して、人を人臭いとも思ひやがらない。それだからこそ、あゝして娘にまで見離されやがる。」とおしまはムキになつて老爺の悪態をならべ始めた。
「娘があるんですか、一人のやうでしたよ。」と梅津は爲方なしにやつと相手になつた。

「それ、その。」と腮を突出して、故とらしく聲を低めて、
「角屋ツて茶屋に奉公して居るお多ツて女が然うでさあね。馬方どもの相手をして被在る。」と鼻ツ先をヒョつかせて、下司な笑ひ方をして見せる。

「馬方のお相手ツて？」と梅津は眞面目に判らなかつた。
「いやな書生さんだよ、まあ。」と皺をむいて、おしまは大口に笑つた。「この邊にやドツサリ居ますよ、何だかまあ貴方も晩に出て見て被來い。」と笑立てる。

「あ、それですか。」と顔を赤くして笑つた。ところへお終の荷馬車が着いたので梅津も袖を蝙蝠にして飛んで行く。

小兒を横抱きにして直ぐ臺所口へ飛んで来て、ベチャクチャと空世辭を並べて立て、相手に取られた下女のお慶を弱らせて居る。おしまの家は此方の臺所から井戸を距て、五間と

も距れて居ない門脇にある。風呂桶も明いて居るからお使なさいの、埃箱も特別に拵いた大きいのがあるのと愛想の限りをぶちまけてゐる。何うで先の博士が置いて行つたものなのだ。恐ろしく顔の焦けた、背の低い、赤ツ毛の齒を染めた女である。何時も笑つてるやうに目皺の寄つた下司顔で、發育の下良なのを、その儘固つて了つたと云ふ形がある。聲などは全るで十五六の娘のやうに甘ツたるい。些いと年頃の鑑定を付けかねる女である。

處へ書生の梅津はブン／＼憤つて戻つて來た。

「變な老爺ですな、實に横柄極る奴だ。」

水口に立つて切りに憤慨してゐる。

おしまは横合から取ツ付いて、「あ、あの門ぢやくれでせう。極つてやがる、何か云つて居ましたか。」と好奇しさに直ぐ口を出した。

「門ぢやくれとはあの老爺の名なんですか。」

「眞逆！ そんな名ぢやないけれど、誰もあんな老爺の本當の名なぞ呼ぶ者は此邊にありやしません。」

「僕アものを持つて行つたですな、すると、あ、あ、と云ふ返辭ですな、難有うとも云はない、實に變な老爺だ。」

「然う云ふ氣違ひだもの、折角斯うして結構なものを下さる

おしまは龜の前に突立つて、今度は下女のお慶を相手に老爺の讒口を喋り立てる。やれこの邊の小兒どもは、門左を嘲して「門左門ぢやくれ、も／＼んぢいの門左衛門。」と唄ふの、門左の家に火種のおつたのを見た事がない、何を喰べて活きて居るのだらうと誰も不審がつて居るの、あの家へ入つて二十幾年と云ふもの家賃を入れた事がないとか、切りにあくぞもくぞを並べて、無口なお慶を弱らせて居た。

そして最後に、思出しても耐らないと云つたやうに、話さない前からゲラ／＼笑ひながら、「それに、こんな事があるんですよ。その時の様子ツたら……その今云つたそのお多ツて娘に、理髪屋の前で眞ツ晝間ビシヤ／＼と撲たれた事があるんですよ。」何うで取つて置話らしい。

「やア子が親を打つのかや。」と三河訛のお慶は雑巾の手を置いて驚いた。

「然うさお前さん。それが寄りツ兒だよ。」と故と口を切つて相手の好奇心を煽らうとする。

「まあ何う云ふもんだな。」とお慶は到頭畏にかゝつた。

それはこんな話である。角屋に奉公して居るお多は今年十九か二十であるが、界限名代の莫連女で、始終浮名が絶えない。男に髪を切られた事も二三度はある。それに逆せ性の女で、男さへ出来ると月々幾らかづゝの約束も門左に怠けて、皆男に入れ揚げて了ふので、老爺は何時も娘の情事の邪魔をして歩かなければならない事になる。若い男と話してゝも居

る處を見付けると直ぐシャ／＼り出て、仲を裂きにかかると云ふ。その撲たれた時は水車の久さんと云ふが相手であつたと云ふ。

それが済むと、今度は自分の亭主辰さんの自慢話である。口が重く素ッ氣無く見えるけど、根が大の正直者で、韻屋さんの隠居は殊の外鼻負にする。何事があつても辰や／＼と呼出される。この屋敷も辰やが居るからこそ借家に出して置くやうなものゝ、さもなければ幾ら取れる家賃ぢや無し、既に賣拂つて了ふんだとさへ云つて居るなぞと切りに吹聴して居た。

三

勝手口の前を廻つて、木萱の生覆さつてる小道、そのダラ／＼を下りると崖下を走る小河の岸に出る。關口を流れる江戸川の上流である。雨さへ降ると直ぐ灰汁濁する瘦ッ河だ。でも、其崖下だけは一面の岩床になつて、浅い蹠ぐらゐの水がスルスルと滑つて行く。その上崖際には胡桃や栗の青葉が押覆さるやうにコンモリ茂つて日の目を遮つて居る。清水もチヨロ／＼湧く。先生は名所圖繪にくらべてこれが名高い一枚岩と威張るが、それは然し怪しいものだ。前は一面の落合田圃を、の直ぐ向ふが雜司ヶ谷の高臺である。

そのダラ／＼坂の中程から横にそれて足が／＼りもない、険しい小路がある。川から云へばその一枚岩の少し河上にズツと街道の根ツこまで喰込んで深い窪地に下りる小路だ。昔し

ものゝ、口惜しさはその聲にも聞えた。保さんは小さくなつて歎歎つてる。

僕は外へ出た。勝手口からその障子を明けると、門左爺は怒つた目付で、ノツツり水口の前に突立つて居た。手には青竹の杖のやうなものを持つて居た。そして僕の姿を見るとスタ／＼と引返さうとする。

「小兒が何か粗忽したさうですね、何をしたんです。」と僕は何氣ない風で呼留めた。

「お前は何んだこの主人か。」と如何にも横柄な出やうだ。「僕はこの家の書生だが、小兒が何をしたんです。悪い事があつたら謝ります。」

老爺はそれには答へないで、水口から奥の方を窺込んで、瘦せた長い頸を伸して居た。「大きな家へ入つてると思つて人を馬鹿にしてやがる。——小兒だつて、大人だつて、お前まで人を馬鹿にして居る。」と聞取れないほどの小聲でブツクサ云つて居る。

「だから謝らんぢやないか。坊ちやんが一體何に悪い事したぞん。」とお慶は齒痒さうに臺所から横口を出した。

「家鴨に石を放つた。」と老爺はその方を睨んだ。

「石だつて！ これッばかりの土ぢやないか。」

「土なものか、石だ。」と、老爺は一足前へ申し出る。

「土でなくちや土でなくちや、の、坊ちやん、土を些いと摘んで投げたゞけだの。」と勝氣なお慶は茶の間へ大きな聲した。

砂利を掘立した跡だと云ふ。門左の小屋はその窪地の底にある。二間に三間ぐらゐ、横に細長い、屋根曲りした掘立小屋である。乾泥を塗つたのだらう、壁土が汚なく眞黒だ。家の前には小さな小池があつて、それに十四五羽の家鴨を放飼に飼つて置く。小池と云つた所で高がそちこちからの落水を竹樋なぞ通して小工面に堰止めたものだ。日蔭ではあり地低くではあり、年中ジメ／＼して乾いた事がない。摺鉢の底のやうな砂利跡ゆゑ、一側の川端にさへ竹垣を結つて置けば、生物を飼つて置いても遁げられる心配は無い。

引越して三日目か四日目の事。保さんが泣いて駈込んで来た。保さんと云ふは今年六つになる先生の子息である。何うしたとも云はず、行也奥様の肩に縋つて無上に泣いて居る。顔の色も變つて居た。

「何うしたんですね、犬にでも吠えられたの。」と奥様が切りに尋ねて居た所へ、下女のお慶が、これも聲を顫して入つて来た。

「恐れ爺さんです事な——裏の爺さんさ。坊ちやんが家鴨に悪戯したと云て、怒つてな、竹ッ切を振上げて追駈て来ましたぞん。餘り厭々しいでな、私餘程云つてやらうと思つたけど、私の顔を斯うヂュツと睨んで居るもんで——えらァい劍幕のオ。」と口惜しがつて居る。

「全體、お前が悪いもの、餘所の飼物へ悪戯すると云ふ事がありますか。」と若いお母さんは保さんを叱り付けて居た。

「まアお前黙つて居るさ。」と僕は下女を制して置いて下手から老爺をなだめた。すると、老爺は小さな光る目で些い／＼僕を睨みつゝ、大きな家は何んだ、威張るな、人を馬鹿にするな、なぞと、そんな事を獨言のやうにブツ／＼云つて居る。

この騒動を聞付けて、門前のおしまが片跛の下駄を引ッ掛けながら、細帯一つで飛出して来た。老爺はそれを見ると又慌て、崖の方に戻りかけた。

「お待ちよお待ちよ。」とおしまは老爺の竹杖を搦んだ。老爺は口をモガ／＼させて立停つた。

「一體どうしたんです、何が悪くて振込んで来たんです。」とお慶に尋ねるので、下女は一伍一什の行立を息を切らしながら早口に辯じ立てた。

「たゞそれだけ。」と聞終つて、今度は老爺に「爺さん、大きに悪るかつたね、それで家鴨は何うなつた、大怪我でもしましたか。」と皮肉に出る。

老爺はその大きな掌でヅルリと顔を撫て小さな目をパチパチさせて居た。

「お前だつて商賣ものだ、損したゞけの所を私から奥様に願つて頂いて上げやうぢやないか。」

「……………」

「そしてさ、お前さんが然う文句をならべるなら、私の方にも些いと文句があるよ。御覽よ、こゝを。」と杖をグイとしよ引いて、傍の小さな畠の方に老爺を向かせた。

「お前さんの家鴨が稼業なら、この菜だつて道樂に植ゑて置くんぢやありませんよ。些いと目を離すと直ぐ来て畠を荒らしやがる、ギヤア／＼ギヤア／＼ツて、あの啼聲からして面白く無い。餌も満足にやらないから、他の畠まで荒らすんだ。」

「たつた一度だ。」と門左老爺は重い底聲で云つた。

「ヘン何度と一度だよ。それに家鴨ばかりぢやないよ、この頃あ夜起きる鳥まで手傳つて他の畠を荒らしやがる。何所の何奴だか知らないけど、今度來やがったら、足腰の立たないほど打倒してやるつて内ぢや本當に憤つてるよ。」

老爺が眞赤になつて顫えて居た。でも何とも云はずに、「離せ／＼。」と青竹を引張つた。

「離すよ、誰がお前なぞ擱いて置くものかね。」と皆の顔と見較べて老爺をあざ笑つて、「だけど、全體お前は誰に斷つて家鴨なぞ飼つて置くんだい。あれだけだつて田にでもすりや、年に一俵やそこらの米はあがるんだよ。龜屋さんが應揚になさるもんだから、好い氣になつて他の土地を使つて居やがる。」

「お前だつて畠を自由にしてる。」

「大きに憚りさま。ちやんと私共は龜屋さんへお斷りしてあるんですよ。」と鬨を突出して見せる。

「離せよ。」と老爺は竹に兩手をかけたが、眞逆に無理に引張りもしなかつた。

「でもね、お爺さん。」と態と聲を變へて「お前は何にも知

れても縮み上ります。」と笑ひながら、奥様の袖の下から心配らしう顔を出して保さんを見付けて、「あら坊ちやん、そんなに恐かつたんですか。」とおしまは愛想笑である。

保さんは「バタ／＼と茶の間へ駈出した。奥様はおしまへ半襟か何かをやられたやうだ。そして、その時聞いたおしまの話によると、先生の住んで居る本宅はもと門左老爺のもので、二十年前までは老爺もこゝに住んで居たものだが、息子の道樂と人に騙されて些と筋の悪い證文に印を捺したのがもとで、家屋敷を龜屋へ渡す事になつた。そして、間もなく女房は死んで了ふ。息子は松前熱に浮かされて北海道に渡つた限り死んだとも生きたとも何の音便もない。で、老爺はその頃乳飲兒のお多を抱へて、殆んど路頭に迷ふたのを、今の角屋のお神が氣の毒がつて、お多を引取つてくれ、龜屋の方へも談合の上、何うせ何にもならぬ砂利場へ掘立小屋を建ててそこに住ませる事になつたのだと云ふ。

四

それから後、僕は滅多に老爺を見掛けた事が無い。書生や下女の話によると、何時も天氣の日には屋根へ上つて、そつちを引剝したり、こちを張換へたり、例の空籬葺の修繕に餘念なく、終日コツ／＼やつて居るとの事である。雨漏りすると思見える。又夕暮の静かな日などは、崖下の捨石に腰かけて、瘦せた兩肘に腮をもたせながら、凝つと、此方の家を仰ぎ見て

るまいけど、今に玉川の電氣がこゝに引けるやうになると、お前の家の所が丁度買上げられるんだつてね。お氣の毒さま。あの池んとこからズツと小屋のどこまで埋めて了ふんだつさ。」

「嘘だ、誰が云つた。」と老爺の聲は險しかつた。でも、キョト／＼不安さうにおしまの顔を見て居る。

「嘘なら好いよ、昨夜うちのお店へ行つて旦那から聞いて來たんだ、後になつて後悔しないが好い。」と思ふさまに嘲つた顔を見せて、急にグンと竹を突離した。

老爺は目張つて、的もなくそこらを睨め廻した。そして何か口小言を言ひながら、いちかり跨になつてソロリ／＼と坂を下りて行く。おしまはゲラ／＼笑ひながら切りと惡態を背後から浴せかけて居た。

「おそがい爺さんですことな、あの目付きや、いやな目ぢやないか。」とお慶が後で云ふと、

「なアに、あれで、から意氣地がないんだよ。臆病犬見たいなもんで、少しコツちが強く出ると、直ぐ參つて了ふのさ。關はないから、これからあんな事があつたら、ドシ／＼云つておやり。それでも面倒臭かつたら交番へ然う云ふと嚇してやるの、然うすると爺さん小兒のやうに顫え上つて了ふから。」と逸氣になつて饒舌つて居る。

「へえ、然うですか、交番が怖いんですかね。」と奥様も禮心に出て來られた。

「恐いの何のつて、そりや可笑しいですよ、戸籍調べに來ら

居る事がある。その時此方から誰か顔でも出すと、白い目で睨むやうに暫く見て、やがて、ブツクサ獨言ながら引込んで了ふが、さも無いと何時までも／＼然うして居ると云ふ。「まあ厭ですね、餘程恨みが掛かつて居る家と見えます。」と氣の弱い奥様は心配さうに云つて居た。

又何日か、朝は早かつた、裏の方で、「泥棒々々。」と叫ぶおしまの金切聲が聞えた。何事だらうと皆出て見た。

僕も後れて駈出すと、勝手脇のダラ／＼坂のところでもバツタリ門左老爺に出遇つた。老爺は餘程慌てた様子、僕の顔を見ると、何時になくニヤリと笑つて黄色な小さい齒並を見せた。そして、些いと烏打帽に手を掛けて、「お早う。」と會釋する。

「お早う。」と怪しみながら答へた。

老爺は黙つて坂を下りて行く。さも落付拂つた物腰でユツタリした後姿であつたが、坂の途中で急にと急にガサゴソと笹藪に音立て、老爺の姿は見えなくなつた。

裏へ行つて見ると、おしまは長い竿でバサリ／＼と栗の枝を叩きながら、「畜生、本當に油斷も隙もありやしない、今年こそドツサリ食ふ氣で居たのに。」と未だ青い稔を叩き落して居る。この頃中老爺が毎朝、暗い中から竊つと栗拾ひに忍んで來るのを、今朝運悪くおしまに見付けられ、散々口穢な罵られた揚句、竹竿で追こられたのだと云ふ事である。そして無口な辰さんまで手傳つてその日の中に、まだ罅みもせぬ白栗を、三本が三本、皆叩き落して了つた。その上、ミツ

チリ油を取てやらうと思つて、何度となくおしまは崖へ出て見たが、門左老爺はその日一日戸を閉ちて外へ出なかつた。餌に饑えて家鴨が終日ギヤギヤアと鳴いて煩さかつた。

五

十一月初旬、霜の厳しい朝であつた。その日は先生の家に僕等門下生の談話會がある。奥様から寄附の資込おでんと稻荷鮎だけでは何うも物足りない。何か火鉢を取圍んで暖かいものをと云ふ急な動議から、門左老爺の家鴨を一羽譲つて貰ひ、葱や牛蒡をドツサリにして、家鴨鍋を突付かうと云ふ事に決つた。そして、買出しの役は僕と今一人、石田と云ふ早稻田大學生。

すると、梅津が云ふには、「裏の崖は駄目ですよ、老爺め、何日かの栗の樹事件から崖下にズット竹垣を結つて了つたから那所からは入れません。」との事なので、僕等は表通りから廻ることにした。

「何所を下りるんだ、道が無いぢや無いか。」と石田は崖の突ツ端に立つて周圍を見廻して。

云ふ如く道は無い。摺鉢の窪のやうな砂利場の、向ふは川、三方は二丈ばかりの險しい切岸で、足溜りに下りる小徑も無い。そして、勝手脇から下りるダラ／＼坂下には、細い裏竹でグルリと竹垣を圍して了つた。

日當りの開きは明いて居るが、老爺の姿が見えない。目の

下の水田には家鴨が十二三羽、浅い泥水をスイ／＼と軽く泳いで居た。目白臺を下ろして来る北風が眞向ふに吹上げ、その寒さツたら無い。

十時からの會合ゆえ、その時、朝は八時頃でもあつたらう。日蔭は霜柱が一寸の上も持上つて居る。

「おい呼んで見やう、居れば返事するだらう。」と石田が云ふので、僕と二人は大聲に叫んだ。返事が無い。

すると、直ぐ背後から聲かけて若い女が来た。角屋に見かける女、門左老爺の娘お冬とは直ぐ知れた。顔の小肥りに肥つた、頸の短かい女である。二十二三と思ふ。起抜けと見えて、膚の荒れた顔を寒むさうに曝らして、自墮落な咬へ楊子の片手に何か小さな竹皮包みを下げて居た。

「何か御用なんですか。」と女は薄赤い齒磨の唾を吐いた。

「家鴨を譲つて貰ひたいんだけど、誰も居ないやうだ。」と石田が云ふ。

「あ、ぢや貴方はお向ふのK——さんの書生さんね。私と一緒に被來いな。老爺に話して見るわ。」と先に立つて行く。妙に甘たれた言葉つきの女である。

「危な御座んすよ、この木に攫つて降りるんですから。」と云つて女は崖端に突出して居る椎の木に攫つて、チヨ／＼と三四歩降りる。そこからは急ながらも些いとした坂落がある。僕等はズル／＼滑りながら降りる。

女は先に降りて、「まアそんな好い下駄なんか穿いて被來る

んだもの、耐らないわ、あ、そら羽織の裾が、だもの……。」と僕等を見上げて居たが、寄て来て僕の着物の泥を拂つてくれた。そして時々厭らしい媚びるやうな目付をする女だ。油

氣の無い薄い髪の毛はそ／＼けて日當に赤かつた。

「フン。」と僕と石田は後から鼻先笑ひを浴せてやつた。女は知らない。

「そして何の位の所が好いの、何うせ鍋にして食がるんでせう。」

「なる可く大きいのが好い。」と喰いて行つた。

小家の前に来て、娘は、「爺さん、御馳走持つて来たよ、寝てるの。」と呼んで、持つて来た竹皮包を椽から内へ投げてやつた。

老爺は黙つて顔を出した。包々を持つて胡散さうに僕等の顔をデロ／＼眺めて居る。家の中でも例の鳥打帽に毛糸の襟巻をしてゐる。四五枚裏わた綿入の裾がバアとはだかつて裾先を踏むやうな歩き付である。

「天婦羅だよ、蝦蛄の。海老もあつたらう。昨夜留さんが来たから、思入り奢らしてやつたのさ。」

老爺は僕等の方を氣にしながら、ソロ／＼と包を解いて見た。リウマチかして中指がブル／＼顫えて居る。

「生で食べちや駄目だよ。焼かなきア身體にあたるよ。お午飯の樂にするんだよ。」

「然るか。」と老爺は又包返して、その棚の上へ乗つけた。

そして、ウツソリ立つて僕等を見て居る。

娘が云ふ。「あ、それからね、この旦那だちが家鴨を一羽譲つて貰ひたいと被仰るんだよ、見て上げたら好いだらう。」

石田も同じ事を云つた。

「駄目だよ、この節ア價が高い。」と態と僕等の顔を見ない。

「高いたつて、幾らだね、八金もするかい。」

「もつと／＼高くなつた。」

「兎に角見せて上げるさ。」

「それに俺ア所のは卵取るんだからな、卵は好い値になるよ、一つ十五錢からする十も産めばお前……。」と妙に氣を持たせて、賣るとは云はない。

「一羽五圓もしますか。」と石田は慌しがつて口を出した。

老爺はジロリと見て、緩りとそこに踞んだ。「何しろ量で賣るもんだからな。」と動じない。

「だから代物をお目に掛けたら好いぢやないか。」と女は傍から口を出した。

「喰べるのかね。」と今度は僕等に云ふ。でも偏屈らしく顔を俯せて此方を見ない。

「喰べるんさ、當り前ぢやないか、早くお爲よ。」

「喰べるのなら廉いがある。足を些と怪我してるが、あの方が好いよ。こゝに飼つてるのは皆種鳥だから高いものばかりだ。」

「ぢやそれでも好い、何所に居るね。」

「鳥屋へ伺つて置いた。何有、些つと怪我してる丈だ。」
 「見せて貰はう。」と僕等は様先へ寄つて家の中を覗込んだ。
 「喰べるのだね。」と又念を押す。
 「煩さいね、何時まで同じ事云つてるんさ。早くしないかよ。」娘は獨りで焦れて居る。老爺はノソノソ入つて行つた。
 家と云つても、鳥と人と同じく棲んで居るのだ。いや、鳥屋の中に人が住んで居るのだ。疊なら十枚ばかり、四角な家の真中に赤焼けた疊を三枚敷いてそこが人——門左の住居である。グルリの隙間に鳥屋をギツシリ並べてある。疊の上は餌鉢鳥の糞、落羽で足の踏所も無い位である。小さな佛壇の側に埃ない蒲團を突くるんであつた。
 ギヤア／＼鳴かせながら、老爺は奥まつた鳥屋から一匹の家鴨を抱いて来た。

「あ、それ。」とお冬が見付けて、「駄目だよ、そんなものが何うなるもんだね」と齒をゴシ／＼磨いて居る。
 「何んで。」と老爺は睨むやうに娘を見た。
 「何んでも無いもんだ、そんな鳥が喰べられるもんかね。」
 老爺は鳥を抱いて引込みにかゝつた。
 「兎に角見して貰はう。」と石田。
 「駄目ですよ、貴方。あれを賣付ける氣で居るんだから。」
 「兎に角。」と僕も云つた。
 老爺はそこに立つて、「だから、俺ア何も賣らなくても好いんだ。」とブツ／＼云ひながら爲を僕等の前に見せた。

怪我どころでは無い。體かに病鳥である、結構かも知れない。瘦せて骨が立つて尻が半分青黒く腐つて居る。些いと觸つても羽がバラ／＼と抜け落ちる。兩の目の膠に閉ぢた、その長い頸を伸してギヤア／＼と枯れ聲に啼く。
 「駄目だ。そんな者。」と石田は怒つた。
 「駄目なら捨すさ、無理に賣らない。」と落付いた聲で云つて、ソロ／＼引込んで行く。
 「爺さん、折角お出になつたのだから、那方の好い方を賣つてお上げよ。」
 「牛込へ行くと鳥屋幾軒もあるよ。」と老爺は何んと云つても應じない。終には返事もしないで立つて居る。
 僕等は歸つて来た。その後で親子は何か切りと争つて居た様子だ。

六

十二日の中頃、弟の三回忌で僕は郷里へ歸つた。三週間ほど滞在してこの一月十日頃に又出て来た。来て見ると五——先生の住居はガラリと様子が變つて居る。前通りの草堤も攪林も立木も取拂はれて、廣い空地の中に家ばかり殺風景に取残されて了つた。土も擔んだと見えて、庭の要垣から周圍は赤土新しい空地になつて居る。何うした事と聞くと、先生は笑つて、「錢のある奴には勝てないよ。こゝら周圍の土を擔んで裏の砂利場を埋めて了つた」と云ふ。今度いよ／＼玉川電

氣會社の原簿線敷設のために、屋敷の半を借上げられる事になつた。原野地として貸すと宅地として貸すのでは借地料が大變に違ふと云ふので、急に人夫を入れてこゝらの土を切類して裏の砂利場を埋立て、居るとの事である。
 「見付が寂しくなりましたね。」
 「寂しいにも何にも借家はこれだから厭さ。」と笑つて居る。
 「ぢや門左は何うしましたらう。」
 「未だ居るよ。酷く頭張つて居るさうだけれど何うで駄目さ、今度は餘所から土を買つて来てあの池も何も埋めて了ふツて事だ。」

「可哀さうに。」
 「本當に可哀さうだよ。昨日なんかホロ／＼泣いて居たツて事だ。何しろ生れた土地を追はれるんだからな。」
 「全く然うですね。」と答へて僕は外へ出て見た。
 成程電柱は戸塚通を斜に切つて藥屋の前まで来て居る。太い、一抱以上もある、半分丹塗の柱で、その柱の一本へは黒文字で太々と危険と書き、それにあふなしと振假名した張札が打付けられてある。柏木、無名地、戸山の原、戸塚を通つて、早稲田の發電所へ通するのである。針金は三十六本捻の銅線が六本ある。萬一の切斷を恐れて架枝の下には金網を張つて防いで居る。この次の柱と、その次の柱はおしまの菜畑、その次は今度地形を盛つた砂利場、例の家鴨の伺つてある小池と云ふ順である。

門左老爺の家はと見ると、相變らず戸を開放して姿が見えない。家鴨どもは長閑に池をあさつて居た。
 電柱敷設で飛んだ利得をせしめたのは角屋である。埋立の人足やら工夫どもが盛んに入込んだので、晝間の中から忙しいほどの繁盛。幕張りの工事々務所も直ぐ軒先に設けられて、技師や監督もそこに陣取つた。丁度夕飯の時分なので、店先の床几には電工と染抜いた法被の工夫どもが五六人、お冬に酌さしてコップ酒を呷つて居た。
 家へ歸ると家でもその噂である。夕飯前の忙し時を、おしまは又何か注進に来て居るらしい。

「まア厭ですね、そんな危険なものを傍に樹てられては、ウツカリ小兒も外へは出されませぬね。」と奥様は眉を顰めて聞いて居た。
 「何しろ大變なんですよ、あの針金一本切れても二十間とか二十幾間四方とかの人が死ぬんですつてさ。」
 「門老爺さんは何うしたぞん。」とお慶が傍から口を出した。
 「全るで氣遣さ、お前さん今日のさまつたら無かつた。工夫さん達には嚇されるね、龜屋の番頭さんには叱付けられる。それでも立退く氣は無いんだからね、因業老爺ですよ。」
 「まあ可哀さうも可哀さうですね、立退く家も無いんでせう。」
 「だから、そこは龜屋さんでさアね。引越料十五圓も出してやつたんですけど、糞老爺めそれを何うしても受取りやがら

「矢張り生れた土地だからね。」と奥様はシンミリと聞いて居る。

「生れた土地も何も、賣つて了へば爲方がないぢやありませんか。なんぼ、こゝの土に腐りやがる氣で居たつて。」

「ぢや何うしても立退かないんですね、然し自分だつて危ないくらゐは氣が付きさうなものですかね。」

「本當にのオ、奥様。」とお慶も云ふ。

「處が面白いんですアね。うちのが行つて色々譯を話して聞かせたんですけど、何の針金に觸つて人が死ぬ管がないと何うしても聞きません。心が邪んで居ますからね、騙されて追立てられるものとはばかり思つてるんです。」

「追立てられたら何所へ行くのだらう。」

「然うですね、落合の先には未だ空地があるから、あんな方へでも行くのでせうよ。」とあざ笑つた。

その晩、湯に行つた歸り途、僕は砂利場の端端に立つて下を眺めた。月の良い晩である。砂利場の半分は最う埋立てられて、地均しも出來た。門左老爺の黒い屋根はヒツソリ鎮り返つて蒼い月光は小池に碎けて居た。

角屋の前に来ると、油障子に灯が赤々と射して陽氣な笑聲がドット外に洩れた。お冬の聲も聞えた。

七

老爺さんになつても耐らねえな。」とワイ／＼云つて居る。

「些いと、その源吉でな、あの背のヒヨロ長い、眉毛の稜とした、些いと好い男の工夫さんぢやないの。そんな裏の唄のところ居たつて。」とおしまは背中を焙りながら口を出した。

「へん好い男は知らねえ。おいお神さん、お前餘り持かけると、レキ（と親指を見せて）が大變だよ。」

「馬鹿にしてるよ、この人ア。」と亂次の無い笑方をして、「そんな事ぢやないんだよ、あの工夫さんなら角屋のお冬が血道を上げてるからさ。」

「焼くんだね、お神さん。」

「知らないよ、人が違えますよ。だけど、お多つて女はあれで仲々の浮氣者だから些いたア眞劍にかつとするのさ、何時だつて然うだよ。」

「悪口は見つとも無いぜ。それほどなら、俺ア一番取持つてやらうか、何うだい、はははははは。」

「へん、馬鹿にしてるよ、この人ア。」とおしまは平手でビシヤリと男の背中をどやしつけた。

「何んだい／＼。」と笑ひながらその噂の源吉が仲間に入つて來た。腹掛をグット捲り上げて焚火に腹を熱めた。

「なアにさ。この神さんが手前に……。」と一人が喋りかける横合から、おしまは引奪つて、

「嘘だよ、嘘だよ。今お冬さんの噂をして居たんさ。」
「有難う！」と源吉は笑つてる。

翌日もその翌日も、人夫やら工夫やら荷馬車やらで屋敷うちにはこつた捏ねるやうな大騒ぎ、喧しくて仕事も出來ない。夜は夜で、毎晩角屋で大騒ぎが始まる。撲合の喧嘩も二三度あつた。

今日こそは愈々老爺が追立られます、來てお覽なさいと云ふおしまの注進があつたので、僕等も好奇心に驅られて、見物ながら裏へ出て見た。

新しい厩が春に入つてやつと十日ばかりだが、心持の所以か、地蟲も甲羅を乾しさうなボカ／＼と暖かい日であつた。

工夫が五六名、日當りに焚火して、何か切りと喋り散らして居る。シヨベルや鶴嘴やをそこに置いて、仕事の始まりを待つて居る様子だ。おしまも中に雜つて居た。

僕は少し離れた切株に腰かけて聞くともなく聞いて居た。

「待たせやがるな、構はず遣つ付けて了へば好いになア。」と一人が大欠伸した。

「好いぢやないか、お蔭で骨が休まると云ふもんだ。」

「そりや然うと源吉は何うした。また角屋へ突ッ入りやがつてるんだらう。」

「今まで其處に居たツけ、何んでも家鴨を釣るんだとかツて大騒ぎして居たよ。」

「ぢや本當にやるんかい。おかげ様だよ、今晚は暖かいんで一杯飲める譯だな。」

「悪い悪戯をしやがる。娘を釣つたり、家鴨を釣つたりよ。」

「何がよ。」

「お冬の噂ツて云つたぢやないか。だから有難うさ。」

「いやだよ、聞かせる氣で居るんだもの。」とおしまは大口を開いて笑つた。

「一次また話が盛つた。」

暫くして源吉は思出したように、「何をしてやがるんだ。サツサと仕事を始めたら好いぢやないか。あんな蟻螂老爺の一人位は、捕縛つて置きア好いんだ。優しくするから付上りやがるんだ。」と軽々と穿いた草鞋を踏みながら云ふ。

「今巡査を呼びに行つた。」

「それにしても最う來さうなものだ。」と源吉は急云つて、そこを離れて向ふの方へ行つた。

その栗林の下で、先刻から用ありげにお冬が合圖をして居たのである。

八

巡査が來たと聞いて、午後、また飛出して行つた。痘瘡のある鼻先の赤い老巡査であつた、外に會社の役員、龜屋の手代なども居た。工夫どもの焚いた焚火に當つて居た。

「ぢや始めませうかね。」と巡査はポケットから手袋を出した。

「では、何うか。然し剛情ですよ。」と手代は笑つた。門左の家には雨戸が締つて、人の居る模様もない。

「然し居るには居るでせうね。」と巡査は木に縋つて下りながら手代に尋ねた。

「居ますとも、あの通り家鴨を放してあります。」

「籠城の覺悟だ。」と笑つた。

續いて、役員、僕と下りた。おしまも物好に喰付いて來たのを巡査に叱られて舍した。僕は龜屋側の者と間違れたものと見える。

「おい〜。」と巡査は隙間だらけの雨戸を拳で叩いた。返事が無い。

また、「おい〜。」とやつたが何の音も無い。

「居るんですよ。」と代つて手代はドン〜と烈しく雨戸を叩いた。すると家の後からヒョククリお多が出て來た。源吉も後から續いて。

煙の上では工夫どもがドット嘸し立てた。二人は平氣で日常に顔を曝して居る。

「居ないんか。お爺さんは。」と巡査。

「居ますよ、寢て居るんですよ。起しませうか。」

「あ、然らしてくれ。」と退く。

お多は戸をガタヒシさせて、「爺さん、爺さん、起きないかよ、交番の旦那が被來つたんだよ。」と大きな聲をした。

家の中ではウーンと唸る年寄の聲が幽かに聞えた。

「起きといでよ、爺さん何だね。」と力任せに引張る拍子に雨戸がゴトリと明いた。

「ぢや最う池は埋まるのですか。」

「今日にも仕事にかゝる、解つたね。ぢや仕事の邪魔をしちや不可んよ。」

「何も私は邪魔はしませぬ。」

「邪魔はしないでも泣いたり騒いだりすれば即ち邪魔ぢやないか。」

「だとツて、家鴨は私のものだ。」

「誰も家鴨をお前のもので無いア云はんよ、會社は家鴨の背中へ柱は立てない。」と警官は噴出した。

皆ドット笑つた。老爺は額越しにデロリと皆の顔を見た。

でも、お多は捷く源吉の背後に隠れたので老爺には氣が付かなかつた。

警官と役員と相談の上、池は今日にも直ぐ取潰すけれど、

家は五日間の猶豫を與へる。その中任意に引拂ふやうにと命じて、警官は劍を鳴らしながら歸つた。

「さ、仕事だ〜。」と源吉は下から上へ聲を掛けた。工夫や

人夫どもはドヤ〜と窪地へ降りて來た。

「待つて、待つて。」と門左老爺は空を泳ぐやうな手付で、慌てゝ寢床を起つた。見ると顔の色も蒼褪めて、眼も涙含んで居た。唇はブル〜と顫えて居る。

「何んだ、未だ文句があるんか、爺さん。」と一人は鶴嘴を杖つきながら嘲つた。

「家鴨を納つて……垣根も私が結つたのだ。」とヨボ〜

老爺は蒲團にくるまつて、瘦犬のやうに寢て居た。そして、ゴホン〜と力ない咳を續けざまにして居る。

「何うしたんだ、病氣なのか。」と巡査が尋ねた。

「はい、はい。」と蒲團の上に畏つて、瘦せた膝を小さく揃へた。

「不可ないな、何う悪い。」

「背筋が痛みましてな、まるで板のやうで御座います。」とビヨコ〜と頭を下げる。

「何時からだ。」

「二三日この方、何うも不可ません。寒さが甚く感じます。」

「好い加減な事を云つてる。家鴨が出てるぢや無いか。」と手代は笑つた。

老爺はやゝ慌て氣味で、「いゝえ、そりや私が出したので御座います。生物ですから穩しく鳥屋へ入つちや居ません。」と切りに辯解する。

「病氣なら好いよ、誰れもそれを嘘だとは云はん。」と巡査は鷹揚に出た。「然し會社の方は然うは行かんよ。お前一人のために工事を休んぢや居られない。」と巡査の説諭が始つた。會社は夫々の手續を踏み法律を遵奉して堂々とやる、云はゞ公共事業である。箇人の主張を許さぬ。強つてとあれば強制執行を敢てしても立退かせる權利がある。それに反抗はしな、穩しく立退くやうにと諄々と説いて聞かせる。老爺は膝頭に兩の拳を置いて、「はい〜。」と聞いて居た。

と様先を下りる。

「早く爲ねえ、背中に柱が立つよ。」

と皆を笑はせる。

老爺は大手を擴げて池の周圍をグル〜回りながら、ト、ト、トと鳥を一所に集める。頸の長い牡鳥が一羽、悪戯さうに其方此方と遁げ廻つて何うしても鳥屋へ入らない。老爺は息を切らしながら一生懸命追廻はして居た。そして、やつと入れた。

「さア仕事だ。」と監督の命令で人夫どもは埋立の土を畚で搬び始めた。老爺は丸い背中を日に曝らしながら周圍に結つた裏竹の垣根を眞體にほぐして居る。

九

五六人がゝりで、太い丹塗の電柱を一本煙の上から轉落した。池の丁度真中に立つ二百何號の柱である。

「さ、始めるぜ。」

源吉は二本筋入りの法被を脱いで、毛糸シャツの身輕な姿となつて、電柱の肘木へ垂具を取付けにかゝつた。力を籠める度毎に肩の肉がムク〜と動いて、頸筋に太い静脈が浮いた。傍のチャン鍋からは陽炎がホラ〜と立騰つて、汗ばんだ男の横顔が日に輝いて見える。キツソリと踝につぼまつた股引に穿いた編上げの靴も見た目が悪く無い。

お多は少し遠退いた立木にもたれて、譯も無く男の方を眺

めて居た。そこへ、おしまが遣つて来た。お夏を横抱きにして擴けた胸から乳を飲ませて居る。

「お冬さん。」と背中を一つどやしつけた。

「何んさ、おしまさん。」

「何んさも無いもんだ、大概にしたが好いぢやないか。」

「何をさ、變な事をお云ひぢやないか。」

「奢つておくれよ。唯ぢや厭さ。」とそこへ踞む。

「何がだらう、可笑しなおしまさんだ。」

「可笑しいなお前、こつちで云ふ言草だよ。」

と獅子ッ鼻をひこつかせる。

「本當に何がさ。」とお冬は飽迄とほけた目付である。

「へん、お恍けで無いよ。」と大口を開いてゲラ／＼笑つて居る。

門左はお冬の居るのを見付けて、ソロ／＼と寄つて来た。

「お前何しに来た。」と低くはあるが怒つた聲である。

「何しに来たつて好いぢやないか、私の勝手さ。」

「でもお前、昨夜……。」と其邊を歩るきながら、おしまと源吉の方を些い／＼と流目に見て居る。

「だつて昨夜はお客があつたんだもの、忙しくつて遇つて居る。」

「何、別に。」とおしまを氣にして居る。

「何んでも無きア好いけど、私は又仕送りの催促ぢやないかと思つて、来て見たの。今日は持つて来るよ。」と懐から細繩の

財布を取出して掌の上にチャラ／＼と鳴らした。そして財布を見せびらかしながら、「好いだらう、この財布、貰つたんだよ。」と目を下げて笑つて居る。

「誰にな。」

「誰でも好い人に。」とお冬はチュウと風鳴した。

「お、厭アだ。」と頓狂な大聲を出して、おしまは立上つた。

老爺は黙つて娘の手元を眺めて居た。

「ぢや今日は置いて行かう。」

「う。」と老爺は手を出した。

その手をビシヤリと平手で叩いて、「厭だよ、爺さん、何ん

だい乞食見たいに。だから私まで他に馬鹿にされる。」

「う、う。」

「上げるよ、そら。」と五十錢銀貨を二三枚掌に乗つけてやつた。

「これだけか。」と不足らしい。

「不足なんかい、厭になツたふね、勝手にするさ、私だつて

眞逆盗み泥棒して来た金ぢやないよ。」

「でも先月も貰はない。」と小さな目に力を持たせて、聲まで鋭かつた。

「チョツ、あれだもの。」と又幾らかを老爺に渡して、「そして

ね爺さん、私だつて商賣なんだもの、あ、昨夜のやうにガア

／＼見世先で怒鳴られちや私が立たないよ。第一外聞が悪る

いやね。云ふ事があるなら私に云つたら好いぢやないか、何

もお神さんにグツる事はあるまい。」

老爺は領きながら、貰つた錢を頸の財布へ入れて居る。

「本當にお前のためにや私どの位苦勞して居ると思つて、些

つたア考へて見ても好いぢやないか。」

源吉は汗を拭きながら聞いて居たが、「お冬坊、大變な劍幕

ぢやないか、女ッ振りが上つたぜ。」

「へん、馬鹿にしないね。」とお冬も媚び笑を男に向けた。

老爺は凝つと源吉を睨め付けて居たが、何も云はずに又垣

根をほぐしに行つた。

その晩、家鴨が一羽見えないと云つて、何度も／＼探しに

来た。それを井戸端に居たおしまが聞付けて、

「門左さん、探したつて駄目だよ、今頃は煮えてるだらうか

ら、角屋へ御馳走になりに行くが好いよ。」と喚かけて居る。

老爺は角屋へ行つた。

久本氏

これを都落と思はれるのは心外なり、貧乏はしても未だ未だ元氣な積に候と。小さく追書した活版刷の葉書が久本先生から来た。かねて噂に聞いた如く、近々小樽の某新聞へ主筆に買はれて行く通知である。ツイ一週間ほど前、その噂を新聞で見たゆえ直ぐ様訪問してその虚實を確めた所、先生は例の癖でカラ／＼と高く笑つて「馬鹿を云へ、未だ田舎稼ぎはしない、高が松前の小新聞ぢやないか、久本のこの骨を購ふ力があるものか。」とテンで取合はなかつたが、それでは矢張り事實だつたのだ。——いつもの遣り口だ。午後、役所から歸りに先生のお宅へ上つた。大勢お客があると見えて陽氣な笑ひ聲が外まで溢れて聞えた。沓脱に穿物をカン／＼つけて、飄軒の岡持やら權詰やら繩からげの麥酒やら、其邊中將も無く積重ねてあつた。

「あら唯野さんなの、私、誰方かと思つた。」と世管子さんが入つて来た。先生の一人娘で今年二十二になる。背の高い、些としゃくり顔の方で、小さい味噌ッ齒が顔の愛嬌になつて居る。「さ、被來いな貴方も、みんな御遠慮の無い方ばかりだから。」と私にも来て一緒になれとすゝめる。「今日はこれで失禮しますから、些いと奥様へ然ら申上げて下さい。」
「何故？ 好いでせう。」と頭をかき上げて私を見込んだ。好くこんな馴々しい、そして幼らしい様子をする人だ。同じ年の自分の妹なぞに較べると、まるでもう小兒である。應場な暮に育つたゆゑと常々感服して居た。
「失禮ですもの、こんな姿では。」私は見窄らしい自分の役所姿を恥ぢた。羽織ばかりも紋付の方を着て來れば好かつたと思つた。
「好いわ、それで澤山よ。」と、それでも私の衣服に氣を付けて見る。
「いや、全く今日は御免蒙ります。」私は固くなつた。
「妙な方ね、では母様に然ら申上げるわ。」とバタ／＼奥へ駈つて行く。
入違ひに奥様が出られた。瘦せた小格な方である。言葉切れのハキ／＼とした、陰氣な事やみ／＼つちい事の大嫌ひな方で、これが二十二の子の親とは見えない。お實家は何んでも下町

の商人と聞いたが、誰も委しい事は知らぬ。先生が佛蘭西遊學前寄宿して居られた家の娘と云ふ者もある。恐しく煙草が好きで長羅宇の煙管を手から離した事がない。何時も小さい根下りの銀杏返しである。
私は今度の事の餘り唐突な事を話して、暇乞の挨拶を述べると、奥様も一昨日初めて聞いて驚いたとの事である。
「では先生ばかりと云ふ譯ぢやないんですか。皆様も一緒にお出なさいますのですか。」
「然うですとさ、本當に厭ですわね、北海道なんて名を聞いただけでも寂しさうですわ。それに函館から船で一晝夜もかゝるんですつて。」
「然し變つた所を方々御覽なさるのも結構です。」
「だつて、田舎なんぞ見たつて爲様がありません、何を云つても、矢張り東京が一番好きござんすね。」
「御出發は十八日ですか。」
「然うですとさ、あの氣性ですもの、自分でばかり勝手に決めて、私共なんかテンデ相手にもしないんです。」
縁側を下シ／＼踏鳴らして、色の淺黒い、目のギロリと大きい、久本先生が入つて來られた。行成そこに胡座を組んで、「何うした唯野、一杯飲んで行つたら何うだ。」と錆びた元氣の好い聲である。
「今日はまア。」と辭退して改つた暇乞の挨拶を繰返した。先生はたゞフン／＼と聞いて居られた。御自分は一滴も酒を召

上らないのに上戸の相手を喜ぶのが先生の癖である。
「相變らず顔が黄色いな。些と御馳走を喰べるが好い。」と笑ふ。
「は。」私は赤くなつて俯向く。
「不可んよ、若い者にや些と元氣が無さ過ぎるぞ。影が薄いよ。」
「駄目です私共なんか、一昧の天分が無いんですもの。外の人の眞似は出来ません。」
「天分つて學問か？ 馬鹿な事、世の中は力だ、力ある奴が結局勝つ。何でも好いからウンと押通さうと云ふ力さへあれば好いんだ。世の中はこれだ。」と拳を固めてドンと突身の形を見せて、そしてカラ／＼と高く笑ひ上げた。
「先生／＼。」とよるめきながら入つて來たのは、木内と云ふ某新聞の二面記者で赤門出の法學士である。有名な放蕩家で毎も黒玉の眼鏡をかけて居る。
「先生、僕ア酔つた。」とドカリとそこへ胡坐を組んだ。
「何うした、最うへたばつたか。」と先生はフラ／＼する木内を見て鷹揚に笑つて居る。
「へたばるもんですか、これから大に活動しようと思ふんです。」
「又小遣を貸せだらう。」
「タツタ五兩です、奥様貸してやつて下さい。屹度返します／＼。」と手を出す。

「先生からお借りなさい、私ほもう懲々です、何時だつて満足に返された事がないもの。」と奥様は笑つて居る。
「今度は返します、屹度お返し爲ます。指環の一つ位なら利息をつけませう。」

「あれ、あゝ云ふ事を云ふんだもの。」
「ねえ先生、貸して下さいよ、先生が然う命令しない内は出しませんよ。これで奥様は中々仕末屋ですからね。」
「はゝはゝゝゝ、木内め餘程恨みがあると思える。ぢやまア出してやれよ。」
「ホントにに憎い口だね。」と奥様も笑ひながら立つた。

二

十八日の朝、役所へは遅刻の届を出して置いて上野停車場へ見送りに立つた。

二等待合室の一隅に陣取つたは先生を見送りの一群であつた。何れも皆血氣盛んな中ばかり、烟草の煙を室内に漲らせて、先生を中心に盛んに放談して居た。木内學士などは外交政策か何かを滔々とまくしたて、居た、角帽を被つた大學生やら、ネクタイの派手な若い記者やら、未だ志を得ずに下宿屋を迷惑がらせて居るらしい少壯政治家やら、總てそんな連中が二三十人も詰掛けて居て、中々傍へは寄付けさうも無い。先生は眞中の椅子に凭れて、引受け／＼相手になつて居る。奥様はと見るとこゝも矢張その輩に取巻かれて話に花を咲かせ

て居る。奥様の姉様と云ふ蒼い顔の方一人と、世音子さんのお友達が二三人寂しく立つて居るばかり、外に女連は見えないかつた。

私は挨拶をソコ／＼に済し、戸口に退いて時間の来るのを待つて居た。そこには同じ見送りの人が二人立つて居た。先生の舊友でもあるのか、何れも相應な年配の人達で、一人は髓かに官吏と見た。

「相變らず久本君は盛ですな。何うですまアあの元氣な事。」と一人は羨しさに云つた。

「全くですな、我々と同年配とは何う見ても見えません。心は何時も青年の心で居るのですからな。」と官吏風の人が答へた。

「久本君の時代は過ぎたなんて云ふが、あれだけの渴仰者を持つて居れば恨は無い。」

「二十年以來何時も青年の味方ですな。」

「さぞ又北海道へ行つたら、あの激烈な筆で呼號する事ですよ。」

「當人も豫期して居るらしいです。」

二人は言合せたやうに久本先生を見た。そして暫くの間互に言葉が無かつた。
發車の時が来た。人々はゾロ／＼とプラットホームに流れ込んで、先生の窓の前に集つた。先の二人や女連は後の方に押除られて側へも寄附けなかつた。

茶呑茶碗を五ツ六ツとウキスキイの角壺を持つて、黒眼鏡の木内は遅れて駈付けた。

「何うだ諸君、先生の健康を祝さう。」と人を掻別けて一番前へ出た、そして人々へ茶碗を渡して酒を注いでやる。先生も汽車の窓からニツケルの旅行用のコップを出した。

「久本先生萬歳。」と木内が高く酒を捧げる。
「萬歳。」と皆強い酒を呷つた。

祝杯が三四度繰返された時、屬官風の若い男が息を切らして駈付けた。折靴から二枚の名刺を出して木内に渡した。

「先生、原次官の代理です。」と木内はその男を先生に紹介して名刺を出した。

「原の代理？ 御苦勞でした。」と先生は軽く頭を下げて、

「何故原自身来ないんです。」とその人を見た。

「些と公用があります上に、二三日前から不快で居られますので、それで、私が代理に出ました譯です。」

「然うですか、何にしても忙しいのは結構ぢや。役人は些と忙しい位が好い、閑だとロクな事をせんからな。」

笑聲は見送人の中に溢れた。「痛快」と叫んでドンと牀を蹴つたものもある。

「原に然う云つて下さい。久本は舊友ぢやとね。それから舊友を忘れずに代理でも何んでも寄來してくれたい厚意を謝しますとね。」

「はい。」とその男は小さくなつて頭を下げた。

「が然し、久本のやんちやは七ツ下りの雨だ、未だ中々止みさうがないつてね。」と高く笑つた。

「久本先生萬歳。」と一人の大學生が進み出て音頭を取つた。

「萬歳。」と若い連中は又叫んだ。
汽車は緩かに動き出した。

私が先生を知つたのは、かの有名な三十年事件に敗れて後、某氏と共に九州の某炭鑛に着手して居た頃である。私はその某氏の宅に寄宿して居た。三十年事件とは某國の志士等と氣脈を通じて、その政府を顛覆しようとする陰謀であつた。先生はこの頃から社會の表面に立つことを避けるようになった。無論、その極大の筆も見られなくなつた。

久本先生は長く青年の友であつた。われ／＼の學生時代にはその名を聞いただけでも烈しく血を騒がしたものだ。その巴里遊學中に草せられた『愛國本義』や『セエヌ河上より』の如き文章は一言一句愛讀暗誦せられたものだ。強い力のある、燃ゆるやうな熱情と、そして莊重勁直な文彩とは、相俟つて當時の學生の心を動かしたものだ。久本鐵州の講壇は恒に數百の若い渴仰者に圍繞れて居たものだ。黒斜子の五ツ所紋に紫の太い羽織紐の風采は長く學生間の流行として残つた。

私の知る所を以つて云ふと、久本先生は何時も失敗の人であつた。その鑛山は無論の事、その後引續いて鹽専賣の奔走、武州山林の拂下げ、一つとして失敗に陥らぬものは無い。然

し先生は常に平氣なもので、新しい事くと事業を探した學句、到頭北海道クンダリまで流れ稼ぎするやうになつた。それをその某氏が評して、「久本は物事に利口過ぎる、あれが失敗の原因だ。も少し鈍くなつて算盤が讀めないやうだと好いのだが、勝負の見越が餘り早くつき過ぎる。」と云つた事があるが、或は然う云ふ點が有つたかも知れぬ。官海に居れば今の原次官の上に坐る人、新聞記者としても事業家としても、儘に第一流に居る可き人なのに相違ない。

三

二年経つた。私は依然として腰辨當だ。去年の暮に霜降羅紗の外套を新調した位なもの、外に變つた所は無い。たゞ下宿住居も飽々したので、新小川町の裏長屋を借りて、そこに自炊して居た。久本先生からは其後何の便も無い。年に一度年始状が来るばかり、こつちから何度手紙を出しても返事は無かつた。

十月末のある日、恐しく底冷のする、秋雨のシト／＼降る日であつた。その久本先生から突然手紙を寄來された。急に會つて頼みたい事がある。直ぐこの俵で來て呉れるとあつた。場所は四ツ谷の鹽町、備前屋とあるから何れ旅舎であらうと思ふ。直ぐ出掛けた。

門口に棍棒を下されて驚いた。先生の泊る宿舎ゆゑ何れ相應な家と思つて來たのに、電話も無さうな商人宿である。

「また吠えやがる。」と、先生はいかつい眉をしかめた。服裝を見るに眞新しい節袖の袴を二枚纏ねて、帯には太い金鎖を巻付けて居る。

「何うしてこんな場末へ宿をお取りになつたのです、第一御不便でせう。」と私は遠廻しに尋ねた。

「いや、そこで君に是非頼みたい事があるんだ。私は近頃兒を設けてな、男の見だよ。」と云つて又一盃を乾した。そして苦さうに唇をつぼめた。

「今お啼きになつたお見さんですか。」

「然うさ、實は些と面目ない次第だが、或る女に關係して出來た見だよ。奥や娘にも知らせたくは無いな、それで態々仕末ながら東京へ出て來た譯よ。」

私に頼みと云ふは詰りそれだつた。應分の金を添けて親知らずの約定で他へ遣りたいが、若し心當りがあるなら世話を頼みたい。尤も親戚や友人もある事ゆゑ、その方に頼めば何うにもなるが、それでは久本の名が出る、こんな事に名が出ては久本一代の名節が地に墮る。名も傷けずに圓滿に行くやう一骨折つてくれまいかとの頼であつた。

「然し、何うせ私共の知己にはロクなものが有りませんしね。」

「や、何所でも好い／＼、貰つてさへくれ／＼ば好いのだ。」

「と入つて、眞逆に看守や巡查つて譯にも行きますまい、先生の御身分もある事ですから。」

諸國講中や御定宿の看板を軒に掛並べてあつた。蒼張れた小女が取次に出た。

「や、久し振だつた。こつちへ來給へ。」と先生は廊下まで出迎へて、薄暗い六疊へ私を導いた。脂冷のする薄い更紗蒲團を出してすゝめた。

「それからな、お前。」と小女に向つて、「何も無くとも好い、熱い酒を二三本持つて來てくれ、大急ぎだよ。」と命ずる。

「私は何んですが、先生は召上るんですか。」

「私も些つとは飲む、まア今ゆつくりするさ、今日は眞面目に頼みたい事があるんだ。」と何時に無く眞面目な様子で、自分の膝ばかり見詰めて居る。こんな事は嘗つて無かつた事だ。あゝ先生も老いたな、と私は心に思つた。

燒海苔と生玉子を肴に酒が來た。それを飲みながら一別以來の話が始つた。以前一滴も行けなかつた先生だか、今日は珍らしいほど飲まれる。惡熱い麴臭いやつをグイ／＼續け様に五六杯も呷られた。

「驚きましたね、先生が酒を召上るやうになるとは。」

先生は大きな目で私をデロリ見て、「寒い所ア矢張り酒だよ。」と又銚子を取上げた。

「奥様やお嬢様はお壯健でせうね。」

「あ、愚痴ばかり零し居つて閉口だよ。」

奥の間で嬰兒の啼聲が聞えた。そして、それを宥める女の聲も聞えた。もしや奥様かと思つたが、然うではなかつた。

「ホントに好いんだよ、よしんば車夫でも差支は無いんだ。」と先生は云ふ。滿更の冗談とも思はれぬ口振りである。

「眞逆に然うも行きませぬまいが——。」

「無いかね、君、無いかね。」

「一軒ありますがね、大工ですよ。」

「好いね、たゞ貰つてくれるかしら。」

尤も心當りはあつたのだ。私の隣り長屋に住んで居る大工の夫婦で、かね／＼子供を一人欲しいと云つて居たのを聞いた。

「そりや喜んで貰ふでせう、唯職人ですからね。」

「職人だつて管はない、又金なら幾らでも先方で承知するだけ添けよう。」と先生は最うすつかり氣込んで居る。

兎に角、先方へ相談の上に決する事と話を決めた。先生はホツと一息吐いた様子で、「頼むよ。今度だけは全く恩に着るからね。」と繰返し／＼然う云つて居た。

酒が可也興んで來た後、私は何の氣なく、「では、奥様は一向御存じない事なんですかね。」と問うた。

「知らせるもんか、聞付けたら嘸煩さからう。」と先生は笑つて居た。

「藝妓ですか。」

「何が？」と先生の目は鋭く光つた。

私は氣も付かぬから、「そのお見さんのお母さんと云ふんです。」

「う、まアそんな所よ。」と先生は苦い顔して居る。
「中々先生も隅にや置けない、私は又先生は謹厳な方とばかり思つて居ました。先生崇拜の青年共にでも聞かして御覽なさい、喫驚しますよ。」と私も酒の上の口を走らせた。
「唯野君。と先生は顔を上げた。眞蒼になつて唇をブル／＼顫はして居る。」

「君は僕に小兒の仕末を頼まれただけだ。小兒の母、僕的人格、兩方共に君の關係した事ではあるまい。餘り餘計な饒舌はせん事ぢやよ。」

「は。」

「僕は君を信ずるから頼んだのだ。些と久本の名譽も思つてくれ給へ。」と怒つた聲であつた。

私はソコ／＼に旅屋を辭し歸つた。

四

家へ歸つてその相談をすると、大工夫婦は大喜び、そんな素性の正しいお兒なら直ぐ様貰ひ受けたいと事ゆゑ、手紙で其旨を先生へ申送ると、先生の返事には、善は急げとある。直ぐ取極めたい、就いては明日その兒を連れて行くから、先方へ然る可く話してくれとの事であつた。

大工は朝から仕事を休んで先生を待受けた。何所で借りたか分の狭い三ツ紋の羽織などを着込んで居た。
雨のビシヨ／＼降る中を、先生の俵は私の長屋へ音訪れた。

つて事が御座いますからな。」

「圖も大圖だつたよ。」と先生は大腹中に笑つて居る。

「全くですよ、そんな大圖があるからこそ、こしとら風情に可愛い坊ちやんも下さるんでさアね。難有い事ツてす。」と獨り恐悦がつてる。

「然う思はれると、お兒さんも仕合です、それに誠に氣質の好い夫婦ですから。」と私も傍から合鍵を打つた。

「そして、坊つちやまのお名前は。」と臺所から女房が尋ねた。

「正一と云ひます。正は正しいの正ぢや。」

「ですけど、坊ちやまのお母さまは嘸惜しく思つて被仰いませうね、こんな可愛いお兒様なんですもの。」

「さア、何うでせうな。」

「思つて被在いますよ、そりや血を分けたとなれば情愛は又別ですものね。」

「私は何とも思はんがね。」

「そりや男だからでさ、男はそこへ行つちや思切が好うがす。自分の腹を痛めませんからね、はゝはゝ。」

「でもお母様はお泣きでしたらう、坊ちやまにお別れなさる時。ねえ、旦那様。」とこの女房も幾らか酔つて居る。

「見せなかつた、産んで翌日から乳母へ渡して、産婦には見せなかつた。」と先生は然う云つて瀧と向ふの障子を睨んで居た。

「まア、何故で御坐います、お産はお重かつたのですか。」

母衣を撥上げると先生は五ツ紋の羽織に仙臺平の袴を折目高に着て、嚙友染の襲衣を被つた嬰兒を自身に抱いて居られた。外に風呂敷包が一つ、これはおしめや着換の産衣を包んであつた。

「さ、何うかこちらへ。」と大工夫婦は飛んで出て、雨垂下傳ひに先生を自分の家へ導いた。

「私はこの兒の父です。萬事は唯野君からお聞きの通りです、宜しく願ひします。」と用意して来た目錄を夫婦の前へ出した。

「へえ／＼。」大工夫婦は唯頭ばかり下げて居る。

「些と仔細あつて、私は今後出入もせんから、そこ所は何うか悪しからずな。」

「へえ、何う致しまして、私共も然う願う方が却つて都合で御座います。頂戴した以上は私共の兒ですから、外に氣を移されては困ります位で、へえ。」

「いや、然う聞くと私も安心ぢや。」

酒が出た。何は無くともあつて、儀式ばかりの酒盛が始つた。女房はその兒を先生から受取るなり、牛乳を飲ませたりしなびた乳房を含ませたり玩具のやうに喜んで居た。

「全くな、私も面目ないよ、斯うして自分の兒を他に育て、貰うかと思ふとな。」と言出したのは先生の方なのだ。

「何うしまして、私共も覺のある事で、決して面目ないなんて事アありませんよ。」と亭主は最う餘程酔つて居る。時の圖

「然うぢやらう、見せて女を喜ばせる位なら、斯うして無理に貴方々に差上はせんよ。」と先生は咽で低く笑つた。また顔の色が變つて居た。

「や、大きに／＼。」と亭主は泳ぐやうな手付をして、貴方々にや又それ／＼の格式と云ふものお有なさる。然うこしとらのやうにあけすけに出来るものか。腹の苦しい所アそこでさ、ねえ旦那然うでせう。」

「然うだよ。」と先生は重く頷いた。

「え、私ア讀んでますよ、旦那、貴方の腹は好く讀んで居ます、え、全くですよ。」人の好い亭主は頭をフラ／＼させて居る。

「最う歸らう。」と先生は突然立つた。

「あら不可まませんね、歸らうは禁句です。それに何は無くとも用意をしましたからお口だけでも濡して被行つて下さい、然うでないこの兒の縁起が好くありませんから。」

「然うかな。」と先生は又坐られた。然し何か深い物思に沈む様子で、寂しく黙つて坐つて居て、亭主がはしやくのにも相手にはならない。御飯も二杯目を輕くすまして、素湯ばかり飲んで居られた。

出掛けに、「ぢや、何分お願申すよ。」と穿物を穿かれる。

亭主は閻際に畏つて、「へえ、大丈夫です、私共貧乏はしても決してお身分に觸るやうな事は致しません、繋がる御縁で私共も御親類の片ツ端ですからね。」

先生は黙つて出て行く。

五

いろ／＼お世話であつた。お禮心に一杯飲みたいから、と無理にすゝめられて、その晩は先生のお伴をして神樂坂の偶ある洋食店に飲んだ。

卓に付くと同時に、「唯野君、今度ほど僕は自分を傷けた事が無い。」と思入つた調子で云ふ。

「何うしてとす、急に。」

「僕はツク／＼恥ぢた。あれを僕の兒と思ふかね、世音だ、悪い奴は世音だ。」と激した聲になる。

私は黙つて居た。先生は暫く言葉を切つて例の大きな目に卓上のコップを洗つと睨んで居た。

「君に話すのも厭でな、なるべくなら僕の兒にして濟さうと思つたが、何うも不可ん、君だけに話さないと僕の氣が濟まないやうな氣がする。全體、僕の小刀細工も過ぎた。」

「突然うでしたか。」

「聞いてくれ給へ。」と先生はウキスキイを呷つて話し出した。

世音子さんは今年二十四になる。何れ相應な養子をと探して居るうちに、さる富豪の次男で目下法科大学に居る某を見付けて、それと結婚させた。來年は卒業ゆゑその上に結婚の式を擧げやうと待つて居る内、世音子は社内の探訪で何とか

云ふ男と私通した。生れた兒はあの正一である。その時明瞭めいりょうに洗つて了へば好かつたが、そこは親心で、病氣と偽つて青森の某温泉に出養生させ、そこで産落すのを待つて先生自身それを抱いて東京へ來たのであると云ふ。

「何しろ君も見るとりの家庭ぢや、世音子ばかり悪いとは云はれんが、私は今度ほど甚しい恥辱を感じた事がないよ。」

「御尤です、そしてお嬢様は御壯健ですか。」

「そんな不義を働く奴だ、暢氣なものだ。」と目を瞠はつた。

「宜しう御座います、お兒さんの方は私が御引受して、屹度悪いやうには致しませんから、その點だけは御安心なさるやうに、奥様やお嬢様へも申上げて頂きます。」

「頼むよ君、外の事と違つて餘の人には口外も出来ない事だからね、君より外に頼む人は無い、是非お願して置くよ。」

と云ふ、私は先生を知つて以來こんな弱い言葉を始めて聞いた。

その晩は晩くまで飲んだ。そして翌々日の汽車で寂しく別れた。

* * * * *
半月ばかりして、奥様から手紙が來た。今度の禮を細々述べた上に、名産の林檎を送つて下さつた。そして、その中正一へとした無名の一包がある。玩具や毛糸の帽子など入つて居た。

先生からも其後手紙があつて、新聞社の方に好い口がある

から來て見る氣は無いかとあるが、これは未だ決答しないで居る。

闘

昨夜また徹夜して獨歩集を読んだ。富岡先生、女難、少年の悲哀、夫婦、どれを読んでも面白い、胸を刺される。あゝなれば最り單なる藝術品とは云はれぬ。活きた人生その物だ。机に坐つて紙を舒べて書き得る作品ぢやない。泣くも叫ぶも悶えるも咀ふも、その何れにしても總べて他の聲ぢやない。慥かに自分の聲だ。獨歩氏自身の痛切なる聲である。

特に、特に僕は第三者に動かされた。動かされたと云ふより寧ろ刺激された、叱咤されたのだ。口惜しい／＼と顫えつゝ讀んだ。取分け十一回目のお鶴と江間との對面などは息も窘まる思ひで讀んだ。讀了つて本を投出して、始めてホツと息を吐いた。

第三者の江間君は慥かに僕だ。僕の他の人では無い。作者は獨歩自身を書いたのだと云ふかも知れないが、讀者たる僕は又僕自身を書いた者だと思つて讀んだ。然し僕の江間君、僕のお鶴は第三者にある如き詩的なる大團圓を取らなかつた。もつと無頓着で、もつと散文的で、もつとお芝居的であつた。それも到底舞臺には乗らない實に拙劣なるお芝居だつた。

く腹が立つて、些いとでも自我を棄てたかと思ふと、實に何とも云はれぬ不快な氣がします。」と、これなり。あんな事とは何んだ。兩方の手を肩に置いて抱合つたばかりなり。唇は愚か手の甲にキッスだにせず。

六月卅一日

Y君O君、来る、終日雑談雑話。

夜、民子来る。翻譯の手傳ひせんとてなり。月末の拂は出來ず、大窮迫。されど仕事はせずに話込む。

七月三日

夕方より千葉生を連れて和良店に小さんを聞く。駱駝と云ふ話。間も無く佐川君來りて、民子の事につき相談ありと云ふ。地下室の食堂に入りて話す。民子今日佐川君を尋ねて、余との關係を如何にすべきと泣きて訴ふ。果して渠は余の物に非らず。全く他の物なり。佐川君余の爲めを圖り、余に代りて渠と絶交を約せりと。好意なり。されど余は其好意に従ふを好まず。二年の長き間——假令渠は知らずと云ふも——この情緒を煽られ、悶えつ、苦しみつける事を、對者に何の印象も留めずして別るゝ氣は更らになし。人は其心を石に刻まんとするに非らずや。未練と云はゞ云へ、余は余の損はれたる自負心を衛り、活さざるを得ず、痛飲、よからぬ家に泊る。

七月四日

惑溺く。酒あり、女あり、媚あり、笑聲あり、歡語あり、

た。

僕は甚麼場合にも眞面目にはなれない男なのかも知れぬ。何時も下らぬ芝居ばかり打つて居る男なのかも知れない。—まア好い、兎に角書くんだ。書くだけが僕の職業なんだ。

二

書くのも煩さい。くどくしく行立を辯じ述べるでもあるまい。たゞある時、ある處に、ある女を戀したとばかりでも要は足りやう。それで足らぬと云ふならば、その頃の日記と云ふものがある。その中から數節を引照して置くとする。日記だけは流石に嘘がないと豫め思つて頂きたい。

そのある女、こゝでは先づ民子として置く。六月卅日の條下に、

不快なる一日。何を思ふともなく徒らに思暮らす。愚なり。少くとも一喝して起たざる可からず。家の中急に廣く寂しく、仔細も無く人待たるゝ心地するは、われながら弱く耻づ可き事ならずや。あさまし。その過去れる過去の暗黒を開きて、而かも猶思斷つを得ざるは何故ぞや。これを戀とせんか、戀とは餘りに馬鹿くしく、謙遜に過ぎたるものなり。

夜、民子来る、雑談、些と癢に觸ることあり、歸り際に大に叱責してやる。その言葉、「私はカアツとして昨夜のやうなあんな事をしたのを後から考へると、自分ながら耻かし

困憊あり、睡あり。

七月五日

午後歸宅。用事に托して民子を招く、來らず。來らざるも好し、と夜まで眠る。夜遅く民子来る。蒼削けて病める人の如し、結局渠の眞情の余に傾けるを知りたる上、更らに爾後三年間は自由生活にあらん事を約して去る。

七月七日

終日獨思ふ。民子來りしも、相互に隠し包みて何も云はず、世間話なり。焦慮に耐えず。この夜雨を聞いて獨り飲む。

七月十日

渠、今後處生の根本問題を余に圖る、詮じ詰めたる所、岡野と余の何れにも背き、幼稚園の嫁婦でもして生涯獨棲に終らんとなり。余問ふ、果してそんな事が出來得ると思ひますか。」

「出來さうです、出來ない事はないと思ふわ。」

「今でも昔でも、嚴正なる獨棲生涯を終へた婦人が世間一人でもありますか。」

「さア何うですか、私だけは出來ると思ふ。」

憎し。余の前に平氣でかゝる問題を持出すは、寡くとも心既に余に背けるなり。僕も負けちや居られない場合だ、大にその不所存を非難して、岡野との前約を踏んで正しく結婚せよと懇々説き聞かす。終には譯もなく涙零れて、机に

突伏して泣く、涙を女に拭いて貰ひたかつたのだ。女も泣いて歸る。
寂しい、寂しい。
直ちに佐川君を訪ふ、不在。途中某社より金策してよからぬ家に飛込む。泥酔。

三

日記は最少し續く。斷つて置くが、記中よからぬ家とあるは神樂坂の某と云ふ待合。その頃僕は松次と云ふ藝妓を買つて居た。今は居ないやうだが、内氣な話の無い、何時も氣にして唇の皮を剥いて居る女であつた。

日記はズット飛ぶ。要するにその間も始終同じやうな事を繰返して居たのだ。然し何度繰返しても飽きは爲なかつた。

馬鹿くしい。

七月廿三日

昨日逢はず、一昨日逢はず、三日目なり。岡野より求婚頗る急、御當人も常住入浸つて勉強も出来ぬ、寧ろ深川の親戚へでも寄宿せんかとの相談なり。余は好い加減の返事をした。

卑怯だが僕は未だ疑を挿む。右し左し、殆んどその眞意を知るに苦しむ。女ほど要領深きは無し、蟻の巢を暗ますが如くその足跡を紛さんと勉むるものなり。然りを然り否を否と解されては満足出来ないのなり。また酒。

七月廿八日

朝早く来る。外出の途と見えて甚くおめかしだ。眞面目な相談だとなつて、机の前にキチンと坐り込む。昨夜岡野より手詰の談判、結婚なりエンゲージなり。擇ぶまゝに明かに處決し置かんと迫られた、それを如何にすべきが相談である。僕はドツチとも答へなかつた。その口振りでは岡野の方を全く斷たん事を望むらしい。

流石に不快だ。不審がる渠を追立てるやうに歸して、直ちに佐川君の下宿へ行く。留守だと云ふのを無理に上り込んだ。女中に賄賂してビールを命じ、獨り飲む。圖書館より佐川君歸る。大に訴ふ。半分は酒も手傳つて、泣いて訴ふ。友人も持餘した形で、例の大きな眼でデロリく僕を見ながら、僕のまくし立てるのを聞いて居た。そして最後は煙管をカラリと投出して「駄目だよ、君は臆病者なんだ。癡りや好いぢや無いか。」と生欠伸ばしながら然う云ふ。

戀は相互の弱點によりてのみ保たれる。その以上は何も無い。最後の弱點を掴んだ時初めて動搖を免れる。相互に別々の世界に生きて居ては戀も何もあつたもので無い、と斯うだ。

知つて居る、そんな事はチャンと心得て居る。

七月廿九日

連日の酒に胃腸を害せりと覺し。あゝ、不覺至極。大事な體を酒ぐらゐに損ふとは何事ぞや。

七月廿五日

余は渠を掴まざる可からず。如何なる手段を敢てしても掴まざる可からず。掴れば存外隠和しく目を閉ぢ頸を窘むるものなり。手綱は短きに限る。何時かこんな事もあつた。「ねえ、貴方。兩人のこれが戀と云ふんでせうか。」と突然民子が言ひ出した。兩人して戸山の原の夕暮を散歩せる時なり。

「然うさ、戀で無くて何んだ。」

「然しこれが常態の戀ぢやないわ、戀つて最少し何うかなつたものかわ。」

「何うつて何う？ え、何うなんざ。」

女は立停つて凝つと自分の足許を見詰めて言葉が無い。夕暮の空氣は重く凝つて辛らいやうに目に滲みる、「何んだ可笑しいぢやないか、何うしたんだよ。」と僕は民子の肩に手を置いて、窺込むやうに顔を見た息遣ひが荒かつた。——すると急に、目をグツと瞑つて、遺瀨無さうに唇を顫はして僕の胸に纏り付いた。やゝ暫くの間。かと思ふと、突然大聲に笑出して「馬鹿くしい。」と自ら嘲りつゝ、僕を突除けてセカく歩るき出す。追駈けて話かけても返事もしない。到頭早稲田まで無言。後から跟いて行く僕は、「見て下さい、何時もこれで弱らされます。」と自分に微笑みながら歩いた。もう半月の以上も前の話だ。

理窟の上、義理の上より見れば、余は未練氣も無く渠を棄つるをよしとす。棄てざれば棄てらるゝに決つて居る。先を越して一日早く、思切好く渠を棄つるは、渠の心に長く余を活かす所以なり。分つて居る。然しそれが出来ぬ故に苦しいのなり。何方にしても余は事件の解決に何等の權威も有するものに非らず。擇ぶ資格なし、不足でも設けられたる席に坐るより外なし。然しそれは厭なり、厭なり。成行に委せる、これは唯一つ残された賢き爲方なり。その成行は果して如何なる形の成行なるべき。

岡野も余と民子の關係を嗅付けたる如し、思切れば思切るところなり。これその一。民子は前約にからまれて厭々ながら岡野に嫁する、僕は黙つて見て居る。これその二なり。岡野にも行かず、余にも來らず、ズルく時に腐らして自然の解決を待つ、これその三なり。民子及びその母は三つの何れを擇ぶ可きか。それに最一つ、これは眞面目に考ふべき事なり。岡野との手を切り己れに全く傾き來らば余は如何にすべき。果して渠を妻とし、その母を母とし、その弟妹を弟妹とする心ありや。心ありてもそは果して満足なる心なりや。

これは未だ一度も考へざりし問題なり。大切なる問題なり。

七月三十日

この月に入りて酒飲まずに寝たのは昨夜ぐらゐなものだ。

寝苦しい矢張り飲んだ方が好いかも知れぬ。昨夜一晚考へた。そして民子と僕とは遂に断絶すべきなかだと思つた。何故とか何故とか云ふ議論は無しに、何うも然う思はれる。

僕は最初より斯う思つて居た。僕と民子との戀は到底成立する筈は無い。イヤ戀までも漕付けられまい。理窟は無いが唯然う思ふ。一步步進んで行きながら、他の目にも戀と見られる仲ながら、何うも自分は戀して居るとは思はれない。他人から羨しいとかお樂様だとか云はれて見ると流石に嬉しくない事もない、最少羨しい所を見せ付けて上げやうと云ふ氣にはなるが、さて一人になつて考へると甚だ危ツかしい。本當の氣で他が羨しいと見てくれるのだらうかとも思ふ。詰り、僕一人の判断ぢや駄目だ。第三者に見せて聞かせて、そして逆返しにそれを第三者の口から聞かない中は安心されない。だから今までは民子の事も自分の事も單獨に眞面目に、第三者から離して考へた事が無い。考へたのは正直今度が初めてだ。

文句は無い。僕は待設けて居た結果を正しく受けたのだ。午後、手紙して民子を呼付けた。結論をつけんためだ。何時まで幕のしまらぬ芝居は打つては居られない。民子は飽迄昨日までの説を主張する。即ち二三年間先方の申出を拒んで、その間に期待を得やうと云ふのだ。「然う決めてるぢやありませんか、何故また急に然う結末を急ぐの。」と頗る

解せない態である。見るに顔色も憔悴して、苦勞のあと著しい。顎も瘦せて長くなつた。氣の毒だ。話し話して十時過歸る。

何所まで行つても同じ事である。面白くも無い、日記を寫す事は最う止めやう。その後の事でも話した方が氣が利いてる。たゞ僕は民子と別れる事と決つた。とだけで澤山だ。岡野と云ふは某教會の牧師で、久しく四國邊の傳道に従事して居た。

四

いざとなると女ほど強いものは無い。腹を据えてビクとも動かない。男は女を負しはせぬと云ふ自信があるのだ。如何に負けても、男が女を負したと云ふその一事で立派に凱歌を擧げる。互に五分の理を争ふやうになつちや最う駄目。男は既に最う敗北して居るのだ。争へば争ふほど穢なく負けるだけである。女は唯愛すべきもの、決して争ふ可きものぢや無い。昔から女と争つて勝得たる男を聞かない。僕のお鶴民子も矢張り、いや矢張り以上に然うだつた。

ある日、八月の末であつた僕の留守に来て、今晚是非御相談したい事があるからと云残して歸つた。取次に出た雇婆が添加へて云ふには、「何うも御様子が變でした何か餘程思込んで被來つたやうです。」と云ふ。例の恐しく改つた切口上であつたのだらう。

「愈々來たな。」と僕は思つた。流石に胸は騒立つたけれど、何うなと爲れ、來るべき結果が正當に來たのだ、とも思つた。

事件は事件としても、どんな面をしてどんな事を云つて來るだらう、泣くか、訴へるか、跪つくか、平伏すか、早くそれを見たい、見てやりたいと氣が焦つた。それには此方出やうもある、飽迄落付いて冷靜に、口數も多く利かず、高い所からグツと見下してやらうと思つた。目を据えて成可く凄い顔付をして見た。

雇婆には小遣錢を當がつて晩方から寄席へ出した。

果して民子が來た。何時もの如く机には寄らず、隣りにキチンと坐つて、「實は眞面目な御相談があつて。」と云ふ。昨日までをケロリ忘れたやうに冷かな口上だ。生徒が保證人に對する言葉だ。

「は、然うですか。」とこれだけで澤山なのに、僕はツイ「僕も待つて居ました。」とやつて了つた。

「ぢや御存じなのでせう。」

「何をです。」

「最うスツカリ御存じだらうと思ひます。」

何も知らない、とは此の場合何うしても云へない。黙つて居た。そして、血顔ひする蒼い顔で女をグツト睨み付けてやつた。

女は俯向いて疊の目を見て居る。これも無言、何時まで經つても口を利く模様が無い。兩手を膝の上に組合せて、凝つ

として居る。室内の空氣は急に冷却した。聞えるのは僕の荒い息遣ばかりである。

女の無言は何時までも續く、二三度強く咳拂ひして、自分の憤れる眼に女の注意を向けやうと試みたが駄目であつた。僕は最う棄鉢になつて、

「民さん、貴方好くも僕に合はせる顔があるね。」と、耐え耐えた聲が到頭咽喉に破れて了つた。失敗つたと思つても最う追附かない。「耻を知らないにも程がある。耻ぢるさ、耻ぢるさ。貴方は今日まで他の感情を弄んで居たのだ。僕い好い弄具にされた。」と後からく留度無く出て來る。

女は黙つて仰向いた儘だ。毛一筋も動かさない。冷然と構へて居る。僕になると最う耐らない。のしかゝつても更らに以上の言葉を浴せかけて女を騒がし取亂させ頼えさせたくなつた。

「今日まで僕を弄んで居たんだ。岡野と何うだの、自由生涯だの、獨棲だのつて、口では綺麗な事を云ひながら、僕を弄んで居たんだ。右の手は固く岡野と握手しながら、左の手をチラ／＼僕の前に振廻して居たんだ。握手だけなもんか。圖々しさも大概にしる。ヘン、それで煩悶だ？ 苦しい？ 何が煩悶だ。二月三月の間よくも假面を被つて僕を弄んで居たものだ。」と息の繼目もなく捲し立てた。

女は剛情なものだ。未だ口を切らない。でも幾らか肩を窺めて深く仰向く様子に、占めた、泣出したなと心に思ひながら、

僕は益々嵩にかゝつて罵つた。終には調子に激して来て、涙聲を頼はしながら、「嘘吐き！ 汚女！ 恥知らず！」とまで頭ごなしに貶してやつた。

「反應があつた。民子は漸く顔を上げた、そして正面にその大きな眼を僕に注いだ。眞蒼になつて、乾き切つた冷かな眼であつた。泣いて居る所では無い。」

「貴方は今までも私を然う見て被在つたんですか。」

「無論さ。今までは知らなかつたが、今になつて考へると然うなんだ。然う見られて不足なんですか。伺ひませう。不足なら不足な點を並べて見るさ。」

「最う何も申しません。爲方ありません。」

「爲方無い？ 爲方無い何んです。今日まで僕を弄具に散々釣つて置いて、そしてお終は爲方無いですか。言分があるなら伺ひませう、あるなら伺ひませう。」とズツと膝を乗出した。然し女は身動きもしない。

「私は何も申上げますまい。」

「利いた風な口を利くもんぢやない。何を今更ら申上げる事があるものか。」と僕は持つて居た本をドシリと疊に投げつけた。然し女は身動きもしない。

「何んとも被仰い。私は今日まで人に耻辱を與へられた事が無い。」とハラ／＼と涙を降した。

「耻辱だ！ そりや僕の言草だ。世間からも人からも笑物にされる僕の耻辱は何うだ。耻辱も好く出来た。どの顔で云へ

ます、ど、どの顔で云へます」と僕は擦寄つて女の頸に手を掛けた。そして、凝つと睨付けてやつた。

「女は僕の爲る儘になつて居る。口を屹つと結んで、聲を外に出すまいと泳えて居る。眼は大きく開いたまゝ、蒼い顔はワナ／＼頼えて居る。」

「不貞腐れ！」と僕は突離した。

「でも私は初つから、貴方と何うと云ふ約束はしませんでした。岡野さんと前に約束した事も隠しませんでした。」

「ぢや二三年間の自由生活は何うしたんだ。」

「ですから、飽迄母とも争つて見たんですけど、何うしても駄目なんです。」

「分るものか、お母さんだつて何うせ同類だもの。」

「ぢや貴方は此上私に争へと被仰るんですか。」

「誰が頼むもんか、貴方の勝手だ。」

「最う何も云ひません、私は最う歸ります。」

「お歸んなさい、お歸んなさい。」

民子は静かに立上つて歸つた。途中から引返してども来るかと思つたが、そんな事も無く夜は徒らに更けた。

五

その晩僕は眠れなかつた。

「翌朝早く麗婆を使つて民子を呼寄せた。そして、その後で僕は朝飯も食はず、冷たい酒をコップで引掛けた。」

民子が来た。「何か御用だつたんですか。」と昨日の場所に坐る。

僕はコップ酒を机の前にチビ／＼やりながら、でも暫くは黙つて居た。

「何か御用なんですか。」と民子は落付かぬ様子である。

「岡野が来る日なんですか。」

「それは何うでも好御座んす。早く御用を伺ひませう。」

「僕昨晚些つとも寝ずに色々考へました。」

「はア。」と素ツ氣も無い。

「婆やを呼んで四杯目のコップを明けた。」

「僕が悪うかつた、感情が激するとツイ夢中になるのが僕だ。心にも無い事を云つて屹度後から後悔する。悪うと思ひました。で、一應はそれを貴方に話して置かんと濟まないと思ひました。」

「いゝえ最う、私は何とも思つてや爲ませんから。」とマヂマヂと僕の顔を見詰めて居るのだ。

「然う打遣られちや困る。同じ別れるにしても心持好く別れたい。悪うい事は悪ういと云つて下さい。」

「だつて、私は何んとも思つては居ませんもの。」と取濟して居る最う全くの他人の聲だ。

「そんな冷たい事を云はんで、僕は何も今更未練らしく何う斯う云はんから、唯心持よく別れたいんだ。昨日の暴言、餘程腹が立つたでせう。」

「いゝえ、別に。」

「駄目だ、駄目だ、民子は最う相手になつてもくれない。話を早く話して下さい、私は急い體なんですからと云ふ態度を膝に見せて居る。」

「民さん、貴方は昨日まで全く僕を愛して居たんでせう。」

「……………」

「何うです。それを云つて下さい、僕は最う昨日までの愛で満足する。この儘、何も無く、他人が他人と別れるやうな別れやうはしたくない。明日は何うでも好い。昨日まで、昨日まで戀人であつたと云ふだけで僕は満足だ。云つて下さい、僕は頼むから。」と僕は形にまで頭を下げた。如何にも蔑むやうな眼付であつた。矢張り石の如く黙つて居る。

「僕はね、僕は昨夜一晩泣きました。岡野君と貴方の関係、そりや好く知つて居る。例令氣に入らんでも前約を踏んきやならない事情も好く知つて居る。それを僕が無理だ。貴方を犠牲に、いや岡野君も併せて犠牲にしやうとしたんだ。僕が悪うい、僕が悪うい。」と言半して僕は泣いた。全く眞に涙が流れ出るのである。

「私は昨日貴方に被仰られたあの言葉を一生忘れません。」

「悪うかつた、僕が悪うかつた、勘辨して下さい。」と膝を固くして俯向きに泣いた。「だから最う何も望まない、嘗ては戀人であつたと忘れずに居て下さい。僕の希望はそれだけで充

分だ。」

「そりや貴方とは實際然うでしたらうもの、なんぼ何んでも忘れるやうな事はありますまい。」

「最う充分です。僕はそれで満足する。」

「ぢや最う御用は無いでせう、歸つても好御座んすか。」と流石に立ちかねてモジ／＼して居る。

僕は又酒を呼んで呷つた。民子は平氣でそれを眺めて居る。

「ね、歸つても好いでせう。まだ御用がありますか。」

僕は俯向いて啜り泣いた。

乳 母

この頃になつて急に氣の付いた事だが、賢ちゃんも妙に乳母のおりんを嫌ひ初めた。何かに付けて酷く當り散らす、優しく云はれる程逃げを打つて、なるべく一緒にならないやうな工夫なぞする。誰の目にも不思議な位であつた。

賢三は今年十二、附屬小學校の生徒だが、來年は是非府立中學の試験を受けるんだと云つて、法科大學生の宇野を家庭教師に切りと筆算や読み方の稽古をして居る。學問の素性はまア好い方である。

背は割合に伸びて居るが、身體は餘り達者ぢやない。頸や胸が恐しく細く長く、睫毛の黒く長い、頭の大きい兒である。何時も考事してるやうに、その蒼はんだ大きな目を沈ませて居る癖がある。裸體にすると背中などは大人より胎毛が濃い、肌澤も悪る黒い。二年この方、鐵舍利別を持薬同様に飲まされて居た。

或る朝の事である。制服を著けながら、賢三は乳母に送られて學校に行くのは厭だと云出した。何うしても厭だと聲である。幼稚園以來賢三は乳母のりんに送り迎へをされて居るのだ。

「何故そんな事を云ふの、妙な見ね。」と氣の好い母親は怪ん

だ。生付きの病身で、大抵は病床の上にゴロ／＼して居る。

「りんは大嫌ひだもの。」

「ですから、何う云ふもんで然う急にりんを嫌ひます。あれほど大事にしてお前の事ばかり心配してくれるのに。」

「だって、りんは色んな事を云ふんだもの。」と慧しげなる少年は、さも返事に窮したと云ふ體で、譯も無く俯向いて顔を眞赤にした。

「その色んな事と云ふのが、お母さんには分りません。」

「煩さいんですよ、りんてば本當に煩さいんだから。」

こゝへ學校包みを持つて來たのは乳母のりんである。その話を聞いて、「まア坊ッ様、何時何をりんがお煩さく致しました。」とりんは笑つた。

賢三はさも憎さうに、その黄色い乳母の顔をデロリと見て、「煩さいよ、お前は本當にシッコイなんだもの、僕シッコイ人は大嫌ひさ」と悪たれ口を利きながら、學校包を引奪るやうに取つて、小さい腫を見せてブイと驅出した。

「まア、シッコイだつてさ。」と母親は兩の指で顚顚を揉みながら口を開て笑つた。

「スツカリ坊ッ様に嫌はれて了ひました。」と乳母のりんもその小さな目に、猾さうな主人の顔を窺ひながら、これも可笑しさに笑つた。

りんは元出入りの塗師屋の女房である。徳太郎と云ふ件を産んだその年、肺病の夫に先立たれて久しく後家暮しをして

居た。手仕事が巧いのでそれで活計を立てた。そこを世話する人があつて賢三の三つの年から乳母に雇はれたのだ。再縁を世話する者もあつたが、亭主では最う懲々しましたからとて賢三の成長を樂みに斯うして居る。伴の徳太郎は下谷邊の唐物店に奉公して居ると云ふ話だ。

賢三の友達どもは、おりんの渾名を輕石だの盤臺だのと呼んだ。痘痕があつて黄色い顔が大きい所から云ふのだ。中々親切もので氣も優しいが、些いとの事にも逆腹を立てる癖があり、一旦斯うと出出しては中々あとに退かない。主人だつて容赦は無い、自分の我通りにならない中はブリ／＼憤つて居る。だから好くも云はれる、悪くも云はれる。男のやうになりふりなぞは一向關はず、何時もへたつた汗臭い着物を袖長く著て居る。頭は薄い地毛の丸鬚に結つて居る。

矢張りその日の事、賢三は友達と遊び呆けて、例よりは二時間も晩く、ランドセルを背負つて歸つて來ると、門前の枳殼垣の小蔭に乳母のりんが立つて待つて居る。

賢三は途迷つた顔付である。「坊ッ様、今朝はまア随分色んな事を被仰いましたね。」と聲が頼へて居る。凝つと賢三を見詰めた。

「だつて僕は、然うぢやないんだよ。」と賢三は急にしよげて了つて、朝の元氣どころか、俯向いて吃り口調である。

「貴方と云ふ人は然う云ふ方だ。りんがこれほど思つて上げても、何んとも思つて下さらない。三つの年から手懸にか

て今日までお育て申して、それを思ふと、りんは泣いても足りません。」

本當に泣いて居る。膏の光る頬に涙をハラ／＼と流して、さも口惜しさうに見て居る。

「だつて、りんはお友達の邪魔をするからさ。」と少年は強ひて肩を聳かして、小さな編上げの靴先に、道の小砂利をボンボンと門前の空堀に蹴込んで居る。

「何時りんはそんなお友達の邪魔なぞ致しました。」

「爲たよ。最う忘れたの。」

「宮川さんへ被行つては可けないと、お止め申したばかりぢやありませんか。」

「宮川の民子さんと遊んで叱られた。」

「それは當り前ですとも。此から偉い人になる方が、女の兒なぞと遊んで居て何うなります。だから賢は柔弱だ／＼と、始終お父様からりんにお小言が出るではありませんか、何うです。」

「民子さんへも斷つたんだつてね。」

「は、お斷り申しました。」それが何うしましたと云ふ風で聞き直る。賢三は別に云ひやうが無いから黙つて居た。その日は一日、賢三は何かに付けてネチ／＼と遣込められた。著物を著換へながらも湯に入りながらも、例の粘ばりした調子で諄々と聞かせられる。自分が手に懸けてこの方の心遣ひやら、心配やら、一昨年の肺炎には鬼子母神に三七日の斷斷ちして

平癒を禱つたの、賢三の世話にかまけて現在伴の徳太には、年に二度の宿入りにも碌々優しい言葉をかけた事が無いの、それからそれと九年以來の世話振りを並べて愚痴を云ふ。聞いて見れば、何れも尤も、又氣の毒にもなる、悪い事をしたと思はぬではない。

「僕悪かつた、勘忍しておくれよ、最う云はないから。」と賢三は床に就く時になつて謝つた。

「何も謝る筈はありません。りんは最う心で決めて居る事がありますから、何うせ私は奉公人です。」と口では憤りながらも、毎日のやうに自分の傍に添臥して、眠り付くまで世話をする。ゆつくり／＼背中を擦つて貰はなければ眠らないのが、この兒の地癖なのである。

ウト／＼して目を覺ますと、乳母はギツシリと自分を抱寄せて涙の目に凝つと見詰めて居る。

「りん未だ憤つて居るの。」とその軟かい腕を乳母の頸にかけで見上げた。

「黙つて御寝なされ。」と聲を低くめて、乳母は小さな括枕の下に通した腕に力を籠めて、抱上るやうに賢三の顔に額に唇を寄せた。油臭い髪の毛がブンと鼻を衝く。

賢三は目を瞑つて、呼吸を窘めて、黙つて、縦なる乳母の愛否女としての愛を素直に受けるより外は無い。何時も然うである。

賢三は女と云ふものを疎まらずには居られなかつた。

賢三は次第に乳母を疎した。なるべく寄り付かないやうに避けた。でも追つて來る乳母の前には従はずには居られぬ。勉強に托けては支關の宇野の部屋にはかり入り込んで居る。夜もなるべくはそこに寝る工夫をして小さな頭を痛めた。

宇野は極めて快活な男で、暇さへあると部屋の眞中に大字の晝寢ばかりして居る。起きると直ぐ風呂場へ飛出して、威勢よく頭から水を被り、廊下をドシ／＼と詩吟して歩いて居る。存外親切氣もある男で、面倒も厭はず賢三の世話を見る上、夜は又續きものにしてアラビアンナイトの面白い物語をしてくれる。歌の文句は節を付けて唄つて聞かせるのだ。車夫も女中も手さへ明くと宇野の部屋に集つて聞くやうになつた。

アラビアンナイトは十二三日も續いた。賢三は話が終つても尚ほ宇野の腰骨に付いて離れず、根掘り葉掘り、美しい薄命の玉女や、豪傑や、盗人や、猛獸やの細かい註釋をせがんで夜の更くるのも知らない。

乳母のりんは定つて、二度も三度も物語の中から迎へに來た。

「何時だと思つて、最う十時ぢやありませんか、明日の朝起きられないから、早くおやすみなさい。」と終には叱り付けるやうに云ふのだ。

「九時過ぎたばかりだよ、最少し聞いたら寝るよ。」と何時も賢三は机の上の目覺時計を見ながら、哀願するやうな口調で

云ふ。

「いゝえ、奥のお時計は十時打ちました。」

「睡むかないもの。」

「不可ません、奥でも最久御寢になりましたよ。」

「最少しで完むの、ホンの最少し。」

「ぢや、りんは此所に坐つて待つて居ります、さ、宇野さん、その面白い話を私も伺ひませう。」と闕際に固く坐り込んで、難しい顔して聞いて居る。

賢三は何時もの弱らされて、大きな目を然も潰瀾なげに伏せて、時にはホット大人のやうな溜息を吐く時もある。そして譚を聞き終ると、

「また明日の晩もぬ、宇野さん。」と念を押して力なく乳母に引張られて行く。

こんな時傍から口でも出さうものなら、それこそ大變、乳母はムキになつてその人に爪を磨く。宇野も三四度やられた。坊ッ様は私が育てたのです、ハイ、誰のお世話も受けません、と、直ぐそれが出るので。

然し又時には賢三の方から、乳母を求めて、煩さく付廻して居る事もある。情合とは云ふものゝ何が何んだか分からないぞ蔭口を利く者もあつた。

ある時、宇野がこんな事も云つた。

「乳母やは君を可愛がりますね。可いですね、僕らもあんな親切な乳母やを欲しい。」

も團扇の上げやうがなく、氣の毒ながら暇を出したのだと云ふ。

「僕ア知つてますよ。りんが悪るいんだ、宇野さん勘忍して下さいね。」と賢三は小さな胸を痛めて、涙含める目に宇野の大きな男らしい肩付きを見上げた。

「可いですよ。君の知つた事ぢやない、女なんて者は何うせあんな者です。君もそんな事心配しないで、大に勉強して來年は是非及第して下さい、落第すると僕が笑はれますよ。」

「え、え。」と頷いて聞いて居た賢三は、「そして何所へ行くの、今日から。」

「何所ツて當はありません、先づ當分は友人どもを廻つて居候です。」と蟬りの無い聲で高く笑つた。

賢三は何と云ふ事なしに、涙が頬にハラ／＼と流れた。

「又遊びに來て下さいね、宇野さん。」

「來ますよ、時々來ます。」

「僕も行きますよ。」

「是非被來い、直ぐ葉書を出します。ぢや。」と大きな掌で賢三の手を固く握り締めた。

賢三は門前に立つて、洋燈を持つて荷車に追て行く宇野の後姿を何時までもく眺めて居た。

夕暮である。

自分の部屋に歸つて見ると、乳母のりんは眼を泣腫らして机の傍に坐つて居た。

賢三は慌て、相手の顔を見上げて、「だつて僕ア嫌ひだ、早く何所かへ行つてくれれば好いと思つてるの。」と云ふ聲は力が無かつた。

「何故です。」

「何故ツて僕ア女は嫌ひさ。」

「女は女でも乳母やは別でせう。」

と宇野の何氣なく云ふ言葉を氣に掛けて、賢三は恐ろしく憤つた。

「君は失敬だね。僕アそんなぢやないんだよ。」と顔を眞赤にして憤る。

「何がです。僕にや解らない。」

「失敬だ。」賢三は憤つて飛出した。そして、その二三日と云ふもの全く宇野の室に寄付かなかつた。

ある日、賢三が學校から歸つて見ると、宇野は袴を穿いて、荷物の始末をして居る。裏口には荷車が二臺來て居る、驚いて様子を聞くと、何か乳母と言争つたゝめ急に暇を出されて下宿に歸るのだと云ふ。その原因と云ふのは宇野が乳母に向つて「餘り小兒を可愛がり過ぎる、男の兒は最少し自由に育てなくては不可ぬ。」と云つたのを、乳母は恐ろしく僻んで取つて、「私は坊ッ様を悪るく育てると云はれました。これほど心配してお育て申して、他に彼此云はれては濟まぬから、今日限りお暇を頂きます。」と兩親の前に泣かれたので、母親

「坊ッ様、私は口惜しう後座ますよ。」と地木綿の前掛の前に當てゝ泣伏した。何だか娘のやうな眞似をすると賢三は心に思つた。そして、少年はホッと又溜息を吐いた。

紫

學士は弟の子原一の手をひいて、裏庭へと出た。秋晴の朝、日は冷たく白芙蓉の瓣に射して居た。紫菀、秋萩、秋の草秋の花盛りである。この頃中からの寝不足に眼瞼が重脹れて、角膜も充血して居る。始終搔撈する指癖は明らかに頭髪に残つて、火を寄せたら燃えさうに亂れて居る。

學士は蒼殺げた顔を日に曝らして、帽子も被らずに掌を額にかざして歩いて居た。明るい光線が目にしみるのである。原一は七ツ、色の白い、頬の軟かな、くりく〜と肥つた兒だ。

「伯父さん、伯父さんは毎晩おそくまで何をして居るの。」
「學問さ。」
と瘦せた理學士は誇りがに答へた。

「何の學問。」
「生理學。鳥でも犬でも總べての生きてるものを檢べて、そして、人間が何故生きてるか云ふ事を知るんだ。」

「學問すりや、それが分かる？」
「分かるとも、恐らく學問で分からぬ事は一つも無い。」
「さう。」
と小兒は疑はなかつた。

學士は今、「生の意義と其の範圍」と云ふ長い論文を書いて居る。一通は獨逸語、一通は拉丁語、その何方かをウキルヒヨウ寶函に掲載し得れば本望だと云つて居る。極端なる細胞論者でも總ゆる原力をこの女微體の機能に歸結して居る。

この春からは大學の助教も止して、専心その研究と著作に従事して居る。屋敷内に小さな試験室も建てた。夜も晝も書齋に閉籠つたきり、飯時でも減多には出ない。時々大學の書庫へ入る位なものである。麥粥と生蕪とが大好きで、大抵は孵卵器をティブルに書齋で間に合せる。食ふ事も好く食ふ大鍋一杯の粥汁を鬼のやうにガツ／＼しながら大きな胃袋へ詰め込む。そしちや、緩るいズボンをグツとずり上げて、又讀書に耽るのだ。

「伯父さん、學問ちや難かしいもの？」と甥は又問うた。
「難かしい、むむ、難かしい。」
と大股にゆる／＼歩いて居る。

二人は秋草の花壇に出た、扇形に、蛤形に、そして、同心圓形に、狭いながらも見好げにしつらへた花園は夫人の親切である。中の小徑は厚い波斯芝の芝生。學士は疲勞の一時を必ずこの籐椅子に休息する事にして居た。

原一には伯母様の學士夫人は今年三十二まで子を持たぬ。唯向に良人を信じ、敬ひ、畏れて居た。兩人對向に坐つても他人のやうに打解けない。手を膝にシヤンと畏つて居た。晝も夜も原一ひとり其の相手であつた。

秋草は眞盛りである。中にも桔梗は紫の濃い強さうな花を仰に咲かせて居た。

原一は見た。

「伯父さん、あれは何の花？」と問ふ。

「う？」

と、學士は顔を上げた。些いとしても最う何か考事である。

指して、「あれ何の花？」

「桔梗さ。」

と日向に鈍い目射である。

「何と云ふ色？」

「紫さ、お前七ツにもなつて紫の色を知らないのか。」

と、笑つた

「紫、紫。」

と原一は口の中に繰返して居た。

その日の晝飯時であつた。原一は偶と思出して伯父に尋ねた。

「伯父さん、紫でッどんな色でしたッけね。」

「どんな色ッてお前、紫は紫ぢや無いか、桔梗の色が紫だ。」
學士は俯向いて大い箸を動かして居た。

今日は珍らしくも食臺を座敷へ持出して、夫人と三人ならんで坐つた。

「桔梗は分つて居るけれど、口で云つて見て。」

「色を口で云へ？ 紫の色を。」

と學士は背筋を反して笑つた。

「だつて、僕は。」

と小兒はやゝ含羞んで、横に伯母の顔を見遣りながら、

「僕にや僕のやうに、あの花のやうに見えるけれど、伯父さんにも矢張り然う見えるかしら、僕それが分らない。」

「紫は紫よ、誰にだつて紫に見えるさ。」

「僕と同じやうに？」

「あゝ同じやうに。」

「然うかしら。」

と小さな原一は慧しげに小顎を傾けて居た。眸の黒い、睫毛の長い見である。

夫人は笑ひながら甥の顔を見て居た。

「だつて變だな。」

「何が變なのだ。」

「だつて、僕にや伯父さんの目に何う見えるか、些つとも分らないもの。」

「何？」

と學士は尋ねた。そして些いと考へて、不審さうに甥の顔を見た。

「桔梗の花も何にも無い時、紫の色どんなものと聞かれたら、僕何んて云ふだらう、分らないな。」
「妙な事を云ふ原一さんね。紫色のものはドツサリあるぢや

ありませんか、袂紗にだつて、帯にだつて、それ原一さんの餘所行きの帽子の裏だつて矢張り紫だわ。」

と夫人は叮嚀に教へた。

「そんな事ぢや無い、この兒は別な事を尋ねてるんだ。」と學士は大きな目を据ゑて原一の顔を見て居た。

「ぢや何んなんでせう。」

「根本の問題なんだ、よ、は、は、は、お前なぞに分るものか。」

「まアそんな難かしい事、原一さん貴方何時の間にそんな學者になつて。」

と甥の顔をのぞきながら、膝の上の零れものなぞ世話焼いて居た。

「原一、ぢやお前の云ふのは斯うなんだ。僕には紫つて色はあゝ見える：あの桔梗のあの色のやうに見える。だが他の人や伯父さんにや何う見えるだらう、矢張り自分の見るあの色と同じだらうかと、斯う云ふんだ。然うだらう。」

「え、然う。」

と首肯して、小兒は好奇らしい伯父の説明しを待った。

「そりや然し大科學だ。認識論と云つて、學者達でさへ昔から研究しかねて居る難しい問題だ。」

「伯父さんにも分らない？」

「いや、分らないぢやないが説いたつてお前達には分るまい、早く大きくなつて學問を爲い。然うすりや分る。」

「だつて、そんな難かしい事ぢやないもの、何う見えるでせうつて、僕それを聞いているの。——それでも矢張り學問な

の。」

「あゝ、學問だとも、立派なむづかしい學問だ。」

「然うかしら。」

と小兒は思切り悪るい口振である。

夫人は傍から口を入れた。

「だつて原一さん然うでせう、貴方毎日々々御飯を食べてるわね。そして他に御飯の味は何うと聞かれたら何んと云ふの。」

「僕おいしいと云ふ。」

「味は——分らない。」

「それ御覽なさい、矢張り同じ事だわ、毎日食べてるもので云はれないぢやありませんか。」

「うゝ。」

と原一は不承らしく行詰つた。

「ね、それと同じぢやありませんか。」

「だつて。」

「ぢやまあ、御飯の味を然う云つて御覽なさいよ。」

と伯母は愛らしげに甥の顔を見ながら笑つた。

黙つて居た學士は突然顔を上げた。

「はゝ？」

と夫人は學士の眞面目な聲に聞いた。

「原一の尋ねるのは根本だ、そしてお前の云ふのは比喩だ。」

と立上つた。グット満腹の背伸をして。

「あゝ紫の花。」

と眩いてノシ／＼書齋入つた。

馬 (童話)

(上)

老病にかゝつて權四老爺が死んだのは私が九ツの年である。それはこの頃になつて聞いた。して見ると、これは私が七ツか八ツの時だらうと思ふ。何うかすると、まだ／＼前の事かも知れない。それに私は、その後二度とその村を訪ふた事もなければ、また村方の人に遇つてその話を聞いた憶も無い。生涯はたゞ一度と云ふのは、全く、こんな事を云ふのだらう。私は此幼い、取留の無い記憶を辿つてお話する。

權四老爺と私の家とはどんな間柄だつたのか、それは知らない。たゞ毎年冬になると屹度來たのを憶えて居る。決つた手土産は勝栗に乾草であつた。あの邊からは今でも毎年出るゆゑ、老爺は事によつたら熊鷹賣りだつたかも知れない。脊のガツシリと高い、掌の大きな老爺だ。赤い瘤鼻だけは目に見えるが顔立などは全で分らない。夢に嗅いだ物の香のやうなものに嗅いだには違ひない、そしてその時は好い悪いそれ／＼の感じを明に持つたと云ふ事ができる。智慧が残つて居るのだ。けれどもそれを再び心に呼活かして見やうと思つても、何うしても出来ない。恐らくは誰にも出來まい。鹿毛

皮の胴衣をムク／＼と着て大きな定紋付の印籠を腰に下げて日和へのたり出て物で踵の厚皮を剝いで居た、その姿は體に何時かの記憶にあるやうだ。見たと思ふ、見たと思ふ。でも、何う勉めてもその時の姿を心に活かす事が出来ない。そして、それと共に、直ぐ山茶花のホロ／＼散るさまが目に見え所を以て見ると、或は北口の庭、板倉の敷石前あたりであつたかとも思ふ。何時も新しい藁筵を敷いてあつた所である。權四老爺が亡つたズツ後に——私が十二三の時——町の青葉祭を見物しながら伴の伊作が一度訪ねて來た事がある。頭にハンケチなど巻付けて、薄い髪の毛をピタリと梳けた、瘦せた平顔の若者だ。二十四五でもあらう。綿銘仙の袷に淺黃の帯を締めて居た。サンライズと云ふその頃流行つた、悪臭い安煙草を耳に挟んで居たのも厭であつた。

私は伊作に尋ねた。「おい、お前の所のあを未だ生きてるか

い。」

「あをね？あをは何匹も居るが、どのあをだつべえね。」

「あをよ、後足の膝の所に白い斑のある馬だつた。跛足になつたかも知れないな」

「後足に白斑の入つた馬はドツサリ居るからね、どいつの事

ツたかな。」

「何でも恐ろしく高い價の馬だよ——二百圓位もする。」

「二百圓。」と伊作は高慢らしく低い鼻を笑はせて、「私が家の

馬は大抵軍馬にするだて、二百圓位は然う珍らしくアせん

よ」

「其馬と一所に雇人が大怪我した事があるだらう。」
「知りませんな。」とボキ／＼指を折つて居る。

話はこれだけにした。そして、伊作は二三日も逗留したが、私は餘り話しも爲なかつた。

私はたゞ一度権四老爺の村を訪ふた事がある。

間歇泉で名高い鳴子の温泉、その温泉から西へか北へか二里位も離れた所が権四老爺の居村である。途に長い／＼赤土の切通し坂があつたと覺えて居る。檜の暗い大森もあつた。莖の赤い蕎麥の畑、麥の畑、そんなものも所々に見たやうだ。私は祖母と一所に秋湯治の戻り道に些いと立寄つたのだ。馬の脊中に蒲團を幾枚も幾枚も積んで、白い手拭を被つた祖母はその上に坐つて御座る。片方の鞍脇には湯治道具を入れた柳行李、片方には火燧樽を空同にして、それへありたけの襲着をして私が入つて居る。権四は後手に長い手綱を引いてノシノシと歩く。秋は多く透澄な奥州の大氣に驛路の鈴をカラン／＼と鳴らしながら、長い／＼峠路を通つて行くのである。祖母はこんな時には何時も、道中持の長い煙管を持つて居たものだ。

「権四老爺、降りて歩くよ。」と私は最う窮屈な馬上に倦々して了つて、偶ある坂道へ来た時に然う云つた。

「我慢させえよ、最う少した、そいに和子が降りると片荷になつて、馬ばかり難澁するだから。」と聞かれなかつた。

ウ／＼云ひながら束ね藁で馬を洗つて居る、鬘を梳いて、尻尾を梳いて、毛並をそろへて、そしてヒラリ裸馬へ裸の人が乗る。蹄固めに乗廻すのだ。「ほう、ほう。」と矢聲を懸けて村中を乗り廻すのだ。十位の小兒で二匹馬をせめてるものもある。穏和しい動物は鬘を押立て、蹄を軽く、張り切つた身體を勢ひ好く村の長い道を駆つて居た。

「権四老爺、馬ばかり居る所だな。」と私は門口へ降されるなり然う尋ねた。祖母は椽側へ腰掛けて、筋張つた脊を伸して居た。

「まア、明日でも牧へ行つて見せよ、こんなものぢや無いから。」と老爺は荷鞍から荷物を下して居た。

「ドツサリ居るの。」
「何千と無く居ますだよ。」

その晩は泊つた。薄暗い、そして屋根の高い、廣い臺所に松明を點けて、夕飯となる。五人居たか七人居たか、荒井の若衆たちが代り／＼来てはサツサと食へて行く。低い箱膳で蓋を明けると布巾まで附いて、椀、茶碗の飯道具が入つて居る。食べてしまふと、自分で洗つて拭いて蓋をして、定めの棚へ乗せて行く。私は何だかあの箱膳で食へて見たいやうな氣がした。しかし、若者たちが然も珍らしさうに、デロ／＼私たちを見て行くのが厭だつた。権四老爺は柱にもたれてコクリコクリ坐睡して居た。

私は妙に心細くなつた。夜風がザワ／＼と騒いで、裏山の

又途中でこんな事もあつた。ある立場茶屋の前で一人の行者に遇つた。白衣を着て、錫杖を突ツ立つて、白布をグルグルと頭に巻いて居た。最上三山の先達でもあつたらう。この顔は今にもハツキリ覺えて居る。日に焼けた頬骨の高い、目の大きい、口の屹と結んだ、脊の高い男であつた。

日が餘程傾いて、山上げの冷風が冷々と身に染み、旅心のいと寂しい夕暮であつた。人ツ子一人通らぬ峠道の眞中に立つて、私共の通るのを屹と見て居た。そして獨言のやうに

「あ、好い馬ぢや。」と云ふ。
「もう暮れやすでな。」と権四は些いと頬被りに手をかけた。

「右々と歩かッしやれ。右々と歩かッしやれよ。」と重く云つて、「和子、徒然だらうな。」と大きな目で私を見た。申渡しのやうなドス太い聲であつた。

私は黙つて居た。

別れた後でも、私は二三度振返つて見た。矢張り立つて居る。斯うキツとして、暴風に吹曝された人のやうに向ふを見込んで立つて居た。白い姿がウツスリ暗い夕闇に遠ざかる。

村に着いた頃は最うトツブリ暮れて居た。黒い屋根の下からチラホラ灯が見えた。村へ入つて見ると、どの家も／＼馬の／＼が／＼に忙しなく、男も女も小兒もそればかりにかまけて居る。秣を切るやら、釜をたくやら、寢薬を敷くやら、穀吠を解くやら、今が一番急がしい時である。門先に大馬盃を持出して、骨組の逞しい若い衆が素裸になつて、熱い湯にス

雑木林にゴウ／＼と鳴る遠くから谷河の瀬音も聞える。

「あ、颯風？」と一人の若者が喰掛けの箸を置いて立つた。鳥屋の方にけた／＼ましい音がしたからである。私はソツと祖母の膝へ寄つた。据風呂へも入つたが、狭苦しい掘立小屋で煙がひどく目にしみる。その直前は裏山で、山清水がチヨロチヨロと流れて居た。

(下)

次の日か、その次の日か、そこはわからない。何んでも私はこの山中の小村に三四日滞在して居たと思ふ。

風が激しかつた。砂交りの南風がドウと吹付けて風に向いては息も吐けないほどであつた。表の土橋に遊びに出て危く吹仆される所であつた。私は祖母と共に兩戸や戸障子を閉切つてその暗い奥座敷に小さくなつて居た。風は撓林に當り、屋根にあたり、裏の大林にあつて、凄しい音に鳴る。権四老爺や若衆たちは牧場が心配だとか云つて梯子を持つて出掛けた限り、夕方まで歸らなかつた。

「お祖母さん、早く仙臺へ歸らうね。」と私は涙ぐんで居た。
「歸らうたつて、この風ぢやアね。」と祖母は外の暴風を聞いて居る。

「歸りませうよ、ね。」と私は何故かして泣けた。

「弱い兒だね、男の癖に。」と祖母は笑つて居る。

この日は晩までそれを言ひ立て、祖母を弱らして居た。

暗くなつて、皆下々／＼と牧場から歸つて來た。家の人たちはばかりでは無い、村方の者も雜つて二三十人はあつたらう。松明を振翳してガヤ／＼と騒がしい。大戸を明けると烈しく吹入る風と共に油煙の臭が強く鼻へ來た。

「細引だ、細引だ。」と權四老爺の怒鳴る聲がその中に雜つて荒々しく聞えた。

「細引だよう。」と今一人。

風はドツと吹付けて、松明の火が眞暗く風に靡いた。そして、又パツと明るく大勢の顔を照した。

「何んだらうね、お祖母さん。」

「此方へお出。」と云ひながら私の手を無理に引張つて座敷へ入つた。

人々の聲は風に吹かれながら厩の方に外れた。

「何んだらう。」と心配さに又尋ねた。

「誰か怪我人があると見える。」と聞耳を立てながら祖母は云ふ。風が強いので、他の音は何にも聞えない。

心配さうに權四老爺が入つて來た。今朝の稼ぎ姿のまゝで草鞋だけ脱いで居た。

「何うしたんだね、騒ぎらしいが。」と祖母は尋ねた。

「何うもはア飛んでも無い事ツて、あをが崖落ちしましてな」とベツタリそこへ坐つた。

「おや／＼、それはまア、そして何かい大變な怪我かい。」

「萬一助かつた所ではア、何うも満足なものにやなりますま

いよ。」と大きな掌で顔を上から下へと撫でた。

「何うしたんだね。」

「なアにはア、風に仰天したでがすよ。風に飛んだ笠ア見て狂ひ出して、夢中で駈出したでがすよ。」

「誰か居なかつたのかね。」

「多利ちウ奴が手綱執つて居たんですが、野郎の世話してた馬だもんで、よくせき可愛かつたと見えて、野郎引擦られながらもいつかな手綱離さねえだ。だもんだから、これもは

ア到頭崖から轉落ちて眞ッ逆様に行つた。大怪我しました。」

「價のある馬かい。」

「價もはア然うだけんど、我が家の厩で産れて、あれまで育てたもんだでなア。」

「幾ら位するんだね。」

「私は金で惜しむでねえだよ。」と權四老爺は不興氣にデロリと祖母を見た。そして、太い溜息をホツと吐いた。

「權四どん、早く來せよ、あをが目イ開けたよからよ。」

「何、目イ開いた？」と老爺は跳り上るばかりに喜んだ。

「早く來て見せよ。」

「今行くだよ。」と立つて、神棚の前に坐り込んだ。燈火して灯を上げて、柏手高く何やら拜みを上げて居た。

私はソツと外へ出た。風は時、どりして段々強くなるばかりそして、些いとても吹止んだ時の靜かな事、上にも下にも、森として何の音も無い。星は牙えに牙えて、刺すやうに目に

鋭い。と思ふと又ドツと吹捲つて來る。

厩の前には村中の人が大勢集つて居た。女も小兒も寄つて集つて小聲に何やらヒソヒソ話して居た。弓張提灯やら松明やらまんどうに點けて全で晝のやうに明るい。

厩の梁から太い麻綱を下げて、馬の腹を高々と吊し上げてあつた。そして馬はグツタリと首を垂れてビクリとも動かない。斯うして見ると大きなものだ。腰の折つた白髪の老百姓

が唐辛水で切りと馬の口を洗つて居た。

權四老爺が萎々入つて來た。

「何うだね。」

「今些つとばかり目イ明いたがな、又駄目になつたよ。」

「日イ見たら戌日だアよ。」

「戌日だとツて然う氣を落すでねえよ、主が然うガツカリすると、助かるあをでも我性が無くなる。俺が好いやうにするから、主はあつちさ行つて寢て居らよ。」

「おいよ。」と權四は力が無い。

「酒でも飲んでな。今に伯樂様も御座るだから心配するで無えよ。」

「おいよ。」

「クヨ／＼思ふなよ、死んだツて何うすべえ、壽命だもの。」

「あいよ。」と權四は首を下げてトボ／＼と出て行く。老百姓は後を見送つてホロホロと涙をこぼして馬の鼻面を撫でた。そこでもこゝでも涙をすゝる聲が聞えた。

權四に踵いて木小屋へ行つて見た。こゝにも人が一杯で、とても中へは入られない。軒下に立つて聞いて居る。

權四の聲である。

「多利よ、何ぜうだな、實なかんべえな。」

病人は、う、う、喚きながらもつれた低い聲である。

「親父、あをを……何ぜうだね。」

「大丈夫だよ、今伯樂様が御座つて然う云つたよよ、だから、主も氣を強く持つて、早く好くなつてくれよ、なア多利」

「あをを鼻上撲つたよよ。」

「でも大丈夫だ、二三日もすると癒るだから安心しろよ。」

「あををさへ助かりや……俺なぞ何うなつても好いだ、あをを村一番の馬だ、俺が……俺が育てたんだ。」

「知つてるだよ。」と權四は大きな聲で云つて聞かせた。

「あをを、あをを、あをを。」と病人は讒言のやうに馬の名を稱んで居た。

私は又そこを離れた。

敗北者

冬の初、十一月末頃によくある、恐ろしい霧の深い、靴を通して足先の凍て付く、其癖風もなく静かにく更け行く夜であつた。私は神樂坂のとあるピーヤホールに入つた。某私立大学の研究會に講演をすましての歸りである。牛込見附に電車を下りて俵を探したが、生憎出拂つて一輛も無い。尤も足袋屋の前で一輛、見窄しい空俵に遇ふには遇つたが、聲でも知れる、乗るもみじめなヨボくの爺さんで、目白臺までと云つたら、顫え聲で切りと言譯しながら、寒さうに四ツ谷の方に行過ぎて了つた。

夜は可也更けて居た、宵から見ると感じやうも一層酷しい。店々は早や大戸を下して、町は潮の退跡のやうにヒツソリと寢静つて居る。低く昏暗な空には星一つなく、今にも寒い雨をシト／＼と寄越しさう。屋並の軒ランプはボンヤリ水氣に薄曇つて、急に廣く寂しい道を覺束なく照らして居る。直ぐ坂上でカタコトと小刻の人の足音がしたが、横町にでも外れたか、旋がて其も聞えなくなつて了つた。私は外套の襟を深く押立て、急ぎ足に坂を上りかけた。

凍つた大氣は足に連れてシユウ／＼と音を立て、幽かに耳朶に鳴る。立留ればヒタと止む。丁度凝つて動かぬ古沼の静けさを攪拌して行くやう。そしてビタ／＼と地を踏む靴音の、洞穴の中でも行くやうに、遠い闇に空しく響くを聞くと、誰か後から尾行てよも居るやうな氣がして、譯もなく背後が氣になる。と云つて振返つて見るのも無氣味。知らぬ土地を歩かず彷徨つたらこんな心持も爲さうか、何うも馴れた道を歩いて居る心はしない、自分ながら不思議なほど、それは最妙に人懐しい、心寒い晩であつた。

ピーヤホールは坂の中段、右側にある。其前まで来ると若い陽氣な笑聲が内からドツと溢れた。其に煌々と明るい光が窓一杯に射付けて居るのを見ると、私は妙に心を引かれて何うも其儘行過ぎがたい氣がした。——家の中は如何にも賑かに暖かさうに見えたので。「おい、ウキスキイを一杯。」私は十年前の書生時代に返つた氣で、ドアを啓けるなり故と元氣らしく斯う命じて、入口に近い椅子の一つにかけた。室の中は煙草の煙で一杯、向ふに掛けた額がハッキリ見えな。安マニラの烈しい臭がブンと鼻へ来る。外套に觸つて見るとシツトリ霧にぬれて居た。客は只二組しかなかつた。早稻田邊の學生らしいが三人、今勘定を済して紅茶を啜りながら、盛んに野球の噂をして居る所。其外には八つばかりの蒼い顔の男の兒を連れた洋服の

男が居る。後向で顔は分らないけれど、大分もう酔つて居るらしく私の入つて来たのも氣付かず、膝に突張つた兩肘に力を籠め、首を抜いてガツクリ俛首れて居た。「何に致しませう、キチン種は切りましたが。」と白上着を着た給仕が寝むたさうに重い草履を引擦つて来た。「ハムなら出来るだらう、サラダにしてくれ。」と私は帽子を其に渡して、急しく火鉢の火を掻廻した。

「へえ出来ませう——ハム、サラダ——」と妙に筋付けた大きな聲で料理場に通して、酒臺からコップとウキスキイの角壺を取つて来る。夜深けの霜白い白熱燈が、洗立ての白上着に浴懸けて、入つて見ると矢張りこゝも寒むさうである。其聲に目を醒ましたのか、洋服の男はムツクリ顔を上げて「おい何うした、此方の誂は。」と怒鳴り付けるやうに叫んだ。大分酔つてる聲だ。

「へえ只今、直ぐ出来ます。」とその方は見向もしないで、給仕は私のコップに酒を注いで居る。「先刻から何回催促すりや宜いんだ、出来ないなら出来ないぞ。然らう云へ！」「へえ、へえ。」とばかり給仕はテンで相手にもならない。「早くせい！早く持て来い！今日はあるぞ、大に持つて居るぞ。見せようか。」「ですから今拵らへて居ります。」「見せよう、何時も無いから、俺を馬鹿にするんだ。」とフラ

付きながら立上つて、上衣の内衣匣を探り／＼、重い財布をヂャラリと卓の上に投出した。「そら此通り、今夜こそあるぞそら。は、は、は、は。」と躍上るやうな手付で笑ひながら、椅子に凭れたが、又グツタリと俛れてトント他愛がない。すると小兒は要心深い目付で周圍を憚りながら、ソツと其財布を自分の方に引寄せた。

私はそれを何うも聞覺のある聲と思つた。慥かに何處かで聞いた聲に相違は無いのだが、借其が誰であつたか後姿を見ても急には思ひ出せなかつた。背の低いゲツソリ瘦せた人で、肩付なぞは慘しく骨立つて居る。この頃の寒さに外套もなく、行丈の詰つた鼠色の間着の、それもひどく色褪めたのを着て居る。しかし頸には不似合な絹ハンケチの眞新らしいのを巻付けて居た。そして右の手には間断なしに太い葉巻をくゆらしながら、時々思出しては正宗の壺を手元に引寄せてチビリ／＼やつて居る。その度毎に壺を瓦斯に透して見るのが癖らしい。

小兒は對向の椅子に窮屈さうに掛けて、オド／＼した大きな目付で絶えず周圍に氣を配りながら、借りてよも来たやうに小さくなつて居た。營養が好くない所以か、肥つては居るが顔色の勝れない、さかしげな目付の、何所か病人らしい兒で、風邪でもひいて居るのか始終コン／＼と小さな乾咳をして居た。子供心にも餘りに晴々しい光を恥ぢるものと見えて紺緋の薄汚れた筒袖の前を掻合せたり、肩揚が落ちて手に覆

さる片方の袖を直したり、臆病らしく始終モチ／＼して居る。そして其前には全ても付けない料理が三皿ばかり列べてあつた。

「はい、お待遠うさま。」と態と大きな聲で給仕は私へのサラダと一所に、何か一品小兒の前にも置いて行つた。

「これ僕？」と小兒は小さな聲で、當惑らしく尋ねる。

「あゝ、お前に取つたんだ、其なら屹度喰べられる、キヤベツ巻と云ふもんだ。」

と又酒を引寄せる。

「僕もう澤山、喰べられやしないよ。」

「喰べられない、喰べられないつて事あるもんか、弱い事云つて、子供なんかドシドシ喰ふものだ。」

「だつて、お腹が一杯なんだもの。」と女の兒なぞのやうに粘つた調子で甘ツたれて云ふ。

「そんな事を云ふ奴があるか、喰べて御覽、折角取つたもんだ。」

「だから僕は澤山だつてのに、お父さんは關はず然らう云つちやつたんだもの、本當に今夜は酔つてるよ。」と何所までも心配さうに、空しく冷へて行く皿を見詰めながら、年にはませた口の利きやう。

「そりあ酔つてるよ、初めつから酔ふつもりでやつたんだもの。」と灰になつた煙草をスバ／＼吸つて居る。

「家ぢや心配して居るね。」

「家で？家の奴等か？」と忌々しうに舌打して煙草を牀に投付け、二するが好いさ、大にするが好い、然うでもなきあ滅多に性懲がつかないからなあ。」と力を籠めてそれを踏躑つた

「お酒はもう澤山だらう。」

「馬鹿云へ！今夜は飲む、お前先刻飲んでも好つて然らう云つたぢやないか。」

「だつて、大變酔つてるもの。」

「まあ餘計な事を云はないで喰べろ、喰べるのはお前、飲むのは俺、これが即奴等への復讐だ。はゝはゝゝ。」と締のない聲帯から大きく笑ふ。何うしても慥かに聞いた聲である。

「行かう！」先刻から話を止めて胡亂さうに聞耳を立て、居た學生連は一齊に立ち上つて、酔客を尻目にかけてながら下駄を鳴らして出て行つた。

小兒は怖ぢけたやうな目差で、暫く黙つて其後影を見守つて居たが、やがて聞取れぬ位の小さな聲で、「だけどね……後で又色々な……だから僕は可厭なのさ。」

「後でとは何が？」其聲は酔つて居る父にも聞取れなかつたのである。

「え？」と却つて聞返へして、上目遣に切りと私の方を氣にして居るらしいので、私は態と肉叉を動かして居た。

「何がよ、正志、何が後でなんだ。」と醉人は苦い言葉を態と呼出す時にするやうに、強い調子で斯う嚴しく聞返すのであつた。

「だつて僕……。」と自分の霜焼の痛々しい手の甲を擦りながら、小兒は俯向いて口籠る。

父親は新しくマツチを擦つたシガアの脂をベツと吐きながら、「又お母さんの事だらう、屹度それだ、然うなんだらう。」とそれでも幾らか不安さう、思切りの悪い口振である。

「……………」

「はゝはゝゝ、それが何うした。」と酔客は取つて付けたやうに突然笑つて、「馬鹿だお前は、だから不可ない、先刻あれほど云つて聞かせたのに未だ判らないな、お父さんにや考がある、好いか、お前は小兒だから何も知るまいけれど、今日は態と飲むんだ、其にありやお母さんぢやない、お父さんの敵だ、敵だ。」

「お父さん！」と小兒は他人に聞かれるのを恐れるやうに其烈しい言葉の腰を折る。

「まあ聞け、那りや敵なんだ。」と二三杯續け様に呷つて、フウと酔を吹き、「那奴等があるので、お父さんは一生こんな態で居る、情ない事だ、全るで馬車馬さ、斃れるまでは那奴等に苛責まれるんだ、他は好く生活が辛らい……生きる、生きて行く事が苦しいと云ふが、俺ア最り生きる事よりも生きて居る……生かして置かれる事が一層苦しくなつた……。」と酔つてる人の癖で、自分の言葉を奥深く聞かせようとして、斯う云ひかけて態とらしい重い吐息を吐いて見せた。

「お父さん！」と小兒は只ハラ／＼するばかり。

「だからお父さんはな。今日まで始終何うして生きて居よう！、然らぢやない、どんな風に活かされて居やうと云ふ事ばかりを考へたんだ。そして……。」

「お父さん！」ともう涙聲である。

「何んだ？」と其でも酷しく聞答める。

「もう歸らうよ。」

「歸るもんか、今夜は大に酔ふ。」と又してもグビ／＼呷つて居る。

「もう酔つて居るよ。」

「駄目だ、こればかりぢや不可ん、大に酔つて皆困らせてやる……そら困るだらう。」と形で何か飲込せた風で、「そら、然らうすると俺に謝る外は無い。悪かつたつて皆なお父さんに謝るワ。はゝはゝゝ、皆謝るよ、はゝはゝゝ、な、愉快ぢやないか。」

「然うすると何時かのやうに、又祖母さんが来るよ。」

「來たつて好いさ、那奴が悪るいんだ、悪るい奴は皆謝らせるさ。それに無いものは何うにも爲様がないぢやないか、何うだ。」と急に活返つたやうな調子になり、瘦せた拳を上げてドンと一つ力任せに卓を叩いた。注置の盃から溢れて酒はダラ／＼と膝の上に流れる。其を無造作に平手で拂退けて、乗も切らず其手を又ツボンに擦りつけながら、「愉快ぢやないかお父さんはこんな愉快な事はないと思ふ、然しお前にや其が分るまいな」とグツタリ椅子にのけぞつて、濃い煙を吐出し

ながら、夢見るやうにボンヤリ何か考へてゐる。小兒は泣出しさうな顔をして、黙つて其を眺めながら、他に知れないやうにソット仆れたものなぞを直して居た。

外は夜靜かに更けて行くらしい。醉人は突然起上つて、「正志、お前幾つだつたな。」と何か急に思出して問ふ。

「僕？九つ。」

「九つか、九つぢや未だこの心中は分らない、今に年を取るとお父さんの心持が好く分かる時が来るよ、お父さんがあゝ云つたツけと思ふ事は後になつてあるだらう、お父さんは只酔ふ爲めに酒を飲んで居るんぢやない。」とシンミリ沈んだ調子になつて、又暫く何か考込む。

小兒は何と云つてよいものか、コン／＼咳入りながら心配さうに父を見上げて居る。

「寧ろ朝鮮にでも行かうかな。」と父は獨言のやうに云つて、醒際の寒さに寂しく身を顫はした。

「朝鮮に？そんな遠くへ行く氣なの。」

「あゝ、俺あ東京は全く厭になつた。」と云ふ聲は酒の氣のある人とは思はれぬほど沈んだものであつた。

「何うして？え、お父さん何うしてなの。」と小兒は其事柄よりも、寧ろ急に變つた父の態度に驚されたのだ。

「其りや分るまい、お前なぞにや未だ分らない事なのだ。」と許り寂しく口を閉ぢて了つた。小兒は又俯首された。

二

聲に聞覚えもある筈、醉人は舊い親友の狩野享介である。尋中も同期に卒業し金澤の高等學校に二年までは一緒であつたが、家事上の都合から狩野は學校を半途にして、新聞記者になると云つて上京した限、その後十幾年と云ふもの全く消息を絶つて居ながらも、今尙ほ當時の舊友等と折々の噂に上る親友の狩野享介であつた。

私は餘りの懐しさに渠の泥酔して居る事も忘れて、その傍に立寄り、「狩野君、君は狩野君でせう。」と聲を掛けて見た。

酔うてる人の目は存外に慧い、「おゝ！」と云つた限り、攪かれたやうに其所に突立つて、暫く言葉がない。

「狩野君、思出せますか、僕です。」

「おゝ、横山君！いや横山博士ぢやつたな。」と取つてくつ付けたやうに高く笑つて、又ドツカと椅子に頽れて了ふ。

「先刻から何うも似た聲だと思つたが果して君でした、何うしました、相變らず盛んですね。」

「うゝ。」と狩野は唸るやうに笑ひながら、卓の端を叩いて、先づ酒を命じやうとする。

時計を見ると十一時過ぎてゐるので、「いや、今夜は然うしちや居られない、最う晚いです。」と、止めるのも聞かず、狩野は遠慮なくドン／＼叩く。

「全くですよ、こゝの家も迷惑さうだから、何れ又の時にし

ませう。」

「關ひません、大に痛飲しよう。」と溢々出て來た給仕に向つて、「オイ、酒を二三本一緒に持つて來い、其れから何か喰べるもの、冷肉でも好い。」と命じて置いて「君、好い所で遇つた、一緒に飲まう。」と私の肘を取つて無理に其所に腰掛けさせる。

「全く今夜は晚い、其に君も大分酔つてるやうだから。」

「大丈夫！僕あ大丈夫だ、其とも君は……。」と脂ばんだ小さい齒並を見せて、にやりと相好を弛ませる、「僕と一緒に飲んぢや博士たる君の體面でも傷けるかね。」と、それは厭な笑ひ方。

私は稍ムツとしたが、「いや那樣に取られちや困るが、僕の家でも待つて居るだらうから。」

「君は細君があるか。」と又笑ふ。

「ある、子供もある。」

「そして家庭は圓満に行くかね。」

「圓満と云ふものか、——僕は先づあんなものだらうと思つて居ます。」

「其れで急ぐのか。」と又ベツと空唾を吐いて、「舍し給へ、要するに愚だ、僕も妻が待つて居るんだ。だから態と斯うして痛飲して居る、奴等を征服するには此に限る、獅子は慣らせ女は懲らせさ、舊い諺だか眞理だね。」とガチ／＼顫えながら給仕が今持つて來た酒を私にも酌して、賤しく咽を鳴らして

グビリ其を傾ける。

私も一口飲みながら、「其にしても全く不思議な所で遇ひましたね、先刻から何うも聞いた事のある聲だとは思つたが、眞逆に君とは思はないからね。その癖皆とは君の噂は始終出て何時も懐しがつて居るんですよ。」

「然し僕はもう駄目だ、昔の狩野享介ぢやない。」

「何うして？」

自分の懐でも覗くやうに、俯向に頭をフラ／＼させながら「何うしても何も無い、もう駄目だ、然し僕の方ぢや君の消息は好く知つて居る。洋行した事も博士になつた事も、ツイ僕の近所の目白臺に邸を構へて居る事も能く知つて居んだ。」

「其なら早く訪ねてくれても好からうに。」

「それだ、うむ……。」と何か暫く考へて「ぢや君は其譯を聞いて呉れるか、聞いてくれると云ふなら大に僕話す事がある聞かかね。」

「聞くは好いが今夜は全く晚い。」

「晚いたつて關ふもんか、久し振りで會つたんだ。」

「然し小供さんが氣の毒だ、先刻から大分晩むさうだもの。」と小兒を振返ると、小兒は臆病らしく最赤になり、睫毛の長い目を慌て、膝にそらして、又しても着物の前を苦にして居る。

「これ？これは勝はんです、こりや僕の味方だ、家族中僕を

信じ僕を解して居る唯一の味方です。」
「御子息ですか。」
「然う、長男です。おい正志、お辭儀をせんか、立つてお辭儀をするんだ。」

出後れた所を促がされて、小兒はいと眞赤になつて、椅子を下りて丁寧にお辭儀をした。其時には別に氣も付かなかつたが、後で見ると、三つの時重い關節炎に罹つたとか云ふので、左の脚が縮んで伸びない、痛々しい不具の見であつた。

狩野は旨さうに又一口飲んで、「何うです横山君、これが僕の足跡ですよ、恐らく狩野享介が社會に残した、最も大きな足跡はこれです、狩野正志です、おい正志、此所へ来い。」と自分の膝近くへ引付けて、其頭を撫で下ろしながら、「妻は僕を子煩悩と攻撃するが、僕は全くこの子の顔を見る時だけです、自分が生きて居る心持になるのは、恐しい吹雪に遇つた奴は、自分の聲を耳に聞いて、初めて實在を信するもんですつてね。僕はこの兒によつて初めて生命を見出して居る。僕は今大吹雪の中に立つてるんだ。其に妻や何かは……。」と聲が荒く沈んで来る。

「お一人ですか、まだ下がありません。」と私は開辛らい話題を故と避けたので。

話の腰を折られて、狩野は些とマゴ付きながら、「有ります、下が二人、この二つ上が女の兒です。然し駄目だ、僕あ子とは思はん、女は生れながら女だ、何うしてもまかせて居やが

る、幾らか世間も見える、母もある、祖母もある、目に映るなあ親父ばかりぢやない。随つてものを批判しやうとする氣があるのです。この兒のやうに唯僕だけを見、僕だけを信じて居やしませんからな。それに僕の如き者は何人の批判にも耐へないものだ。形を以つて價を問はれりや零、虚無だからな、はははは。」と聲ばかりで笑つて兩腕をシツカリ胸に組み、實際の蒼い顔に、あてもなく凝と一所を見詰める様子が如何にも寂しさう。

給仕は當附らしく通路だけ明けてガタビシと戸を下し始めた。電燈も外は消したので急に卓の上は暗くなつた。

狩野は二三度身顫して、靜かに語り出す。

「それも好い、それならそれで零で通してくれるかと云ふに中々何うして、零の僕を二にも三にも値を見出さうとするんだ、無理なんだ、零は割つても掛けても零ぢやないか、何うしたつて値の出やら管がない。處を女はだ、其で承知しない面倒な式を立てたら或は何うにか値の出るものと信じて居るらしい。或はと云ふ期待で不可能を消さうとするのは女だ。小兒の遊戯を見ても知れませう、ね、ゴム人形を取扱つて口を利かせやうとして居やがる。いや利かせる、ドンな面倒をしてもゴム人形に口を利かせて、一所に泣いたり笑つたりさ。數の性質などはテンで問はうともしない、然るに其零、いやゴム人形の身になつて見給へ、其辛さは何うだ……凡そ世の中何苦しいと云つて、自分を正當に解されない程の苦痛

はあるまい、それは信じられないのも苦痛だらう、解されない事の苦痛に比較すると、未だ諦めようも慰めようもある、自分を解させよう云ふのは、總て自分を投出しての上だ、降参しての上だ、それにも拘らず其無抵抗の僕をせめると云ふのは残酷ぢやないか、信じられるとか信じられぬとか云ふ人には未だ隠場がある、然し僕には何があらう、其が即ち凡てぢやないか。全部ぢやないか。其に向ふ方で寸法を決めて貴方は六尺ある、七尺ある筈だと僕を責めるんだ、所が僕は實際五尺一寸しかないんだもの、何うなります。で、僕は之々しか無い身體だと正直の所を見せても、嘘だ、そんなはずはないと何うしても承知しない。終には自分の不明を糊へ上げて、泣くな、喚くな、罵る、狂ふ、何うにも手の付けようがない。僕は全く、去の十幾年と云ふものを其ばかりで苦んで来たのだ。」と又しても續け様に呷る。顔の色も蒼鬱めて唇は神経性にブル／＼と顫つて居る。私は黙つて聞くより外はなかつた。

狩野はドンと強く足踏して「所で僕は斷然決心したのだ、之ちや到底生きられないと思つたね。斯うなりや戦ふより……詰り渠等は征服する外に道はない、信じないでも解しないでも勝ちさへすりや好い、力を以て恐れさせさへすりや好い詰り其が僕の自己を救ふ所以だと思つたね。で、僕は近頃そんな方針を取つて居る。今日も實は或本屋から少しの原稿料が入つた——何有くだらん翻譯だが——其でも兎に角一月以

上も努力したもんだから、家では其を的に待兼ねて居る、又急に差迫つた拂口もある、其所が即ち此の櫻へ所だ、だから僕が斯うして朝から方々飲廻つて居る。酔ふよりは寧ろ金を費ふのが目的なんだ、然し馬鹿ながらも少しは悟つたものと見えて、今朝原稿を持つて出ると云つたら、妻は正志を——この兒です。」と傍に擦寄せて、「これを一緒に連れて行けと云ふ恐らく監督の心持なのだらう、其は望む所なんで一緒に出て金を受取つて飲んだね。殆ど夢中になつて飲んだね。神田、麴町、方々飲んで歩いた、はははは。」と瘦せた肩を揺つて然も得意さうに笑ふ。

私も幾らか興を醒して「それは然し残酷だね。」

「君は残酷だと云ふね。」とその人は目を光らして、「何が残酷だ、君等なぞアお坊ちゃんだから何も知るまいが、我々の身になつて見たまへ、生活は取も直さず残酷な戦争だ。夫婦と云ひ、親子と云ふ、詰り互に活きん活されんの寄合に過ぎないのだ、娘が妻となるのは更に好く生きん爲なのだ、情愛とか和樂とか云ふ事は暖かに着、暖かに眠り、缺陷なきに苦しむ人の贅澤な情動の發現に過ぎない。愛とは何ぞや、他人の間に自己を見出さんが爲なりか、そんな坦道を歩んで来る人に、僕等の生活が解し得られるものか、暴風期の獅子はひどく餓へれば其子の父を喰ふと云ふ、僕なんかその雄獅子だ、現に今喰はれようとして居る所なんだ。」と一語は一語より激しく、狩野は其妻を咀ひ、其家族を罵り止まず、漫に興奮し

て、譯も無く牀板を踏み付たり、拳を空しく空に打振つたりして居る。そしてその目は凝つと一所を睨んだまゝである誰にしても先づ目から酔ふものだが、狩野ばかりは然うでない、飲めば飲むほど霜刃に刃をえりて来て、見て居ても氣味の悪いやう。私は何とも云はれぬ冷い重さを心に感じて、惘れむと云ふよりは寧ろ恐しくなつて来た。

ピヤホールを出たのは彼此二時近くであつた。歸らぬと云ふのを無理に嫌して俚に乗せてやると、狩野は道々譯の分らぬ事を喚き散らして居たが、其でも氣になると見えて、時々「正志、おい正志！」と後の俚に聲を掛けて居た。小兒は既に最う正體なく眠つて居た。

三

狩野享介は私より二つ多い、今を二十五になる。お互に泣いて別れたのは私が十九の年ゆゑ、もろ十三四年振で今圖らず邂逅つた勘定である。好く、忘れて居た過去は長いものと云ふが、それにしても此十幾年かは私の身に取つても格別長かつたやうな氣がする。單に境遇の變移のみを見ても、私は其間は高等學校、大學を卒業し、三年の洋行もする、博士の學位も得る、妻もある子もある、不足をならべては際限無いが、兎に角まあ希望の半ばは達せられたと云つて好い。然るに我舊友は其同じ間に何を營み何を爲て来たらう！如何にして人の夫となり人の父とは爲つたらう！見る所の様子では

何うも幸運な境に居る人とは思はれない、衰へても居る、疲れても居る。長い苦しい運命に揺られ／＼て来た慘苦の影は有々と其顔に其聲に讀まれる。あゝ薄倅なる友！渠は何時になつたら此恐しい生活の苦闘から脱れ得るのだらう。記憶は十幾年前の彼に遡る。

私共の郷里では四五月の頃になると、春暖かい海の上に馬鹿鳥と云ふ渡鳥が寄つて来る。鶉に似て鶉よりは大きく、嘴の黒い腔の短い水禽で、本當の名は別にあるだらうが郷里では一帯に然らばかり稱んで居る。肉は血臭く羽は短く、取つて見て肥料にでもするより外何の役にも立たないものであるが、何う云ふものか運の拙ない鳥で、濱を通つて此鳥の波際に泳いで居るのを見掛けると、漁士でも女でも小兒でも唯は赦さない事にして、小石を擲りか砂を浴せるか必ず酷い悪戯をする。其も鳥の方で遠く沖合にでも逃げれば無いんだが、この馬鹿鳥の癖として遠くは決して逃げない、一度は水中に姿を隠しても、右か左か必ず二三間の所に浮び上る其を矢繼ぎに又攻める、又攻める、執念深く攻付けられる内には到頭度拍子を失つて却つて危ない濱際の方などに寄つて来て、血迷つた所を苦も無く手摺にされる。そして無残に叩殺された揚句の果ては、海鷗の餌食に濱邊に打捨てられて了ふのである。馬鹿鳥と云ふ名も何れ其邊から出たのであらう。

狩野は何時も自分を評して、其馬鹿鳥のやうなものと云つて居た。其頃は格別氣にも留めなかつたが、今日から思ふと

不幸な此人の半生は全く其やうなものであつた。

渠は生れながらの逆境兒であつた。恐く今日まで唯の一日も自ら慰め樂しむと云ふ日はなかつたらう。全體何人にも生存をほこる心はあるもので、特に浦若い青年の時代には其が一倍烈しい、生れて此世にあると云ふ其事が、既に最う非常な寵幸のやうに考へられて、譯もなく其を誇り樂しむものであるが、此人には兒童の時から那樣風は更に見えなかつた。血氣盛んな學友等が夢のやうに將來の希望を語合つて、譯もなく興奮したり衝動したりする時でも、狩野は唯一人其群から離れて、血色の悪い顔を俛れ、寂しく中指の爪を噛んで居て、他に問はれても、「僕などは何なるんだか自分にも分らない位だから……」と捨鉢な事を云つて何時も泣くやうな苦しい笑を洩して居たものだ。詰り狩野に取つて現在に活きると云ふ事が既に大切な問題で、將來に憧れる餘裕などはなかつたのだ。

恐らく狩野は母の顔も知るまい、當人に聞けば兒童の時死んだと云ふけれど、世間の噂には良人の偏僻に愛憎を盡かして乳飲兒の彼を捨て、江州から来た絹商人と奔つたとも云ふ兎に角彼は寂しい片親に育てられたので。父親は佐川流の鎗の達人で、其頃警察や中學校の師範をして居たが、恐しく偏僻な人で、國でも持餘されの氣味であつた。背の圖抜けて高い、腰のしゃんとした、鼠緒朴齒の日和駄に弓の折を杖につき、落付拂つた拾ひ足に、何時も道の眞中を選んで歩く老

人で、縣令の馬車にも道を避けた事がないと云ふ、其は／＼頭固一徹の老人、廢藩の當時、時勢の推移を察するの明なく頑固にも武藝一天張りに凝固つて、數代傳はる名譽の狩野家を見る影もなく微祿さしたの皆自分の罪、祖先にも子孫にも申譯がないゆゑ、自分の一代は何事にも口出し手出しはせぬと固く言張つて、誰が何と肝煎つても自分の出世の途さへ講じようとは爲ない。世に背き人に背いて、住荒した武者小路の廣い家に寂しい後生涯を托して居た。那樣風だから自然子供の教育は思ふやうにもせず、狩野が小學を出た年、二人の子供——狩野は次男で一人の兄がある——を膝近く呼び、「私は見る通の廢甲斐無しだから、お前方の世話も教育も出来ない、然し伎倆あつて獨刀人間になるなら、其を妨げもせねば後々共にお前方に寄らうと云ふ賤しい事はせぬ。私の一代之代は私が衛る、お前方は其々の才に任せてくれ。善惡共に今日を境に干渉は決して爲ない。」とキツパリ申渡した限、固く其誓を守つて口出しもせねば世話もしない。嘗て狩野が兄貴に苦しめられて酷く難澁した時でも、ついで一度仲裁らしい口も利かなかつたと云ふ。詰り親子三人は同じ家根の下に、他人のやうにして寂しく無交渉の生活を續けて来たのである。那樣譯で、狩野は十三四の年から自ら養はねばならぬ運となつた。處を僥倖と拾上げるものがあつて、尋中も二三年の頃までは宇津木と云ふ判事の家に書生して、何うやら學校にだけは通はされて居たが、兄が其家にひどい迷惑をかけたと

云ふので遂に其所からも追はれて了つた。狩野の兄と云ふは元來軍人志望から教導團に入つたのだが、何か破廉耻な所業があつたとやらで其所を逐はれてスゴ／＼郷里に歸つては見たが、別にこれと云ふ職業はなし、父は其通りかまひ付けてはくれず衣食にも窮する所から、其頃地方では厄病神のやうに恐れられて居る執事の下役をしたり、新聞社の探訪などして居る中に、一體に性質の好くない人と見えて、次第に墮落して終には壯士の眞似なぞして始終弱い者いぢめをしては不義の利益に衣食して居たものだ。其が煩さく狩野につけまどつて仕事さへなくなると、弟の世話になる家を利用したり迷惑を掛けたり、時にはころげ込んで来て三日も四日も泊り込んで動かない。狩野が大町筋の齒科醫の家を出されたのも、師範學校の教頭の家を出たのも、其他三月と居耐らないで四五軒の家を出されたのも、皆其兄の爲めであつた。で、終には狩野も諦めて他の家に世話になる事を思ひ止まり、家に歸つて牛乳や新聞の配達をしたり夜は新聞社の印刷方に雇はれたりして、傍目にも氣の毒なほどの烈しい労働をしながら學校に通つた、丁度五月の穂麥にからまる蔓草の、幾度か酷い農夫の手に敵から敵へと撈り捨てられながらも、覺束ない日の光と地の濕を慕つて、儂ない小さな花を咲かせようと執念く勉めて居るやうなものであつた。然し頑固な父親は那樣境遇の狩野にも喰扶持を固く入れさせ、若し其が怠りでもすると好い顔をせぬと云ふ、兄は兄でまた始終弟の油斷を窺つて

居て、隙もあらば弟の掛先でも横取り爲よると的つて居る、其れや此れやから、弱く疲れた狩野の頭は何時も生活と云ふ事に悩まされて居て、満足に勉強する暇はなく、學校の成績は何時も好い方ではなかつた。自身を評して馬鹿鳥と云つたも無理はない。

隨つて彼れには成功と云ふ纏まつた概念がない、何事も今日は今日だけである。渠にとつての明日は考へるさへ恐しい闇黒である、明日の事は誰か知らうと云ふ言葉は渠に取つては一層深い重い意味がある、今日を樂しむ心を持つて明日に酔ふと云ふ事は到底出来ないのだ。詰り苦痛と努力で辛つと築上げようとする石疊を、今日も他が来てはむごく蹴飛ばして行くのである。其が又一度や二度ではないから、渠には天で成遂げると云ふ氣は無くされて了つたのだ。言葉を強めて云ふと、渠は成功を思ふ毎に常に一種取とめの無い恐怖に脅かされるのであつた。これは然し強ちに渠の弱い性格とばかりは見られまい。

高等學校に入學後の二ヶ年、これが恐く渠の生涯を通じて最も輝かしい幸福な時であつたらうと思ふ。入學試験が發表されると同時に、狩野は遠縁の石上と云ふ家に引取られる事になり、他の學生と同様樂々と學校に通はれる事となつた。其所にはおけいさんといふ一人の娘があつて、後家暮ではあるが財産も相應にあると云ふ噂。修業中であり當人同志には洩しもしまいが、無論狩野を家督に直す下心であつたと見え

初めつから食客扱ではなかつた。おけいさんは其頃十七か十八で、腮の美しく圓るく、眼の牙々しい、好く虫齒に泣いて居る娘であつた。

同じ一部でも私は法科、狩野は文科、級は一つでなかつたが、始終往復して居て入學當時に一番骨な獨逸の暗誦などは二軒の内必ず何處かに集つて復習する事にして居た位である。元來狩野は友人の無い方で、尋中以來親しく交際して居るのは私位のものであつた。然るに不思議な事には、石上に引取られて後の狩野と云ふものは、以前にも増して次第に沈んで来て、元氣は衰へる頭は荒む、何時も蒼い顔して學校に來ても好く欠伸ばかりして居る。病氣かと聞けば何所も悪くないと云ふ。其癖一人になるとボンヤリ物思に沈んだり、時々は儂なげに溜息など吐いて居る様子、其に酷く物怖ぢするやうになつて、些この事にも顔の色を變へ、直ぐ動悸が高ぶつて來ると云ふ。那樣風だから學校の成績も餘り好くない、一學期も二學期も注意點の附いた學課が三四科目ある、其癖當人は必死になつて勉強もするのだが、何う云ふものか氣根が續かず、直ぐ頭がボンヤリして來て、讀んだ所も分らなくなる。

丁度學年試験の時であつた、一人では直ぐ飽が來て精力が續かぬから、來て一緒に勵ましてくれとの事故、私は試験中狩野の家に泊つて勉強する事にした。ある晩の事、狩野は濡手拭で額を冷しながら、懸命に獨逸

文法の前置詞論か何かを調べて居たが、突然後に打付けて、「あゝ、駄目だ、駄目だ。」と叫ぶ。

「何うした、何が駄目なんだ。」

「僕は所詮駄目なんだ、幾度讀んでも解らない。寧ろ學校など止さうかしら。」

「何をくだらない、那樣事で氣を落して何々する、伯母さんやけいさんにも濟まないぢやないか、起きてやり給へな。」

「其も然うだな。」と、狩野は起上つて机に向つたが、三十分とも経たない内に、又「君、僕はトモ駄目だよ。」とシンミリ云ふ。

見ると狩野はホロ／＼泣いて居る。

「何うしたと云ふんさ、餘り意氣地が無いぢや無いか。」

「僕は頭が悪るいんだね。其に此所の家へ來てから尙ほ出來なくなつたやうな氣がする。寧ろ又労働でも始めようかね。」

「何故？此所の家に居て勉強を仕事にやつてさへ出來ないと云ふなら、労働などやつたら尙更の事ではないか。氣を張つて讀み給へ。」と勵ます積もあつて私は些と強く云つた。

狩野は平手で涙を拭ひながら、「其が然うぢや無いんだ、何うも以前の身體になつた方が好いやうな氣がする。僕は近頃何か重いもので始終心を壓迫されるやうだ。幾ら考へて見ても其が何のためか分らないけれど、何か斯う恐しい物にでも追駈けられるやうな氣がして、耐らないほど胸が騒ぐんだね。僕の今日は實に幸福さ、幸福だが、其が何時まで續くものか

と云ふやうな氣もある。丁度高い懸崖に立つた時は、深い谷底を見下すと妙に腋窩がムツ／＼して寧ろひと思に飛込んだらと云ふやうな氣がするだらう、僕は今時々那樣心持になるよ。だから、此所を出て學校も止したら甚麼に愉快だらうと思つて見るんだね。」

「伯母さんは君に親切ぢやないか？」
「其は親切だよ、僕は母がないから知らないが、あつたら那麼ものだらうと思ふね。然し僕は親切にされ、ば爲れる程、一層そんな捨鉢な考へが出るんだよ。妙だらう。」

「其にけい子さんだつてさ……。」と私は青年時代の譯もない好奇心から斯う言半して竊かに對手の面色を窺つた。
「けいさん？ けいさんは……。」と些と言渡んで、旋て臆病らしく早口に、「僕大好きだ。……全く親切な人だもの。」と眞赤な顔をする。

「其れなら好いぢやないか、何も文句は無い筈ではないか。」
「僕も然う思ふんだがね、其に時々こんな氣になるのは……君、斯うぢやないかね、僕は父も兄も那の通り放任主義の人で、小さい時から恩を報ふるの扶養するのと云ふ責任を感じた事がない、其が急に斯う生涯が變つた爲めに、初めて責任の壓迫と云ふものを感じるのではあるまいかね。」
「然うね、大に其所もあるね、其に從來の過度の勞働で頭が弱つて居る所もある。」
二人の話は那樣所に歸結して、又勉強にかゝつたが、試験

の結果、最後から二番目ではあつたけれど、兎に角狩野も及第して二年級になつた。

其から後、狩野の憂鬱は更に甚しくなつた。憂鬱と云ふよりは寧ろ不安状態と云ひたい位であつた。物に沈着が無く、何事にも直ぐ倦き果て、夜も晝も暇さへあるとウト／＼坐睡ばかりして居る。身體も餘程瘦せたやうである。石上の伯母さんも酷く心配して、何か苦勞があるなら力にならう、其とも私共親子に不満な事でもあるなら遠慮なく言つてくれ、大事な身體には換へられぬから、若し望みとあれば下宿なり何なりして氣養生をしてくれと、親切に心配され、ば爲れるほど却つて氣の毒がり、私などに向つては始終自身の腑甲斐ない事を残念がつて居た。

二年級になつた年の暮からかけて、其傾向は益々烈しくなつた。講堂に居ても講義などは聞かず、眞蒼な顔して毎も深い物思に沈んで居る。そして私を促へては始終石上の家を出たい／＼と口癖のやうに云ふ、其ならば何か不満な事でもあるかと云ふに、當人の心を探しても別に那樣事情はない。唯何う云ふものか那の家に居るのは不安でならない。二六時中些とも氣の休まる時はない。言葉には云はれぬが鉛のやうな或重い癡體が始終胸に痞へて居て、其が始終心を齧かしてならぬ。自分の現在、將來の幸福を考へれば考へるほど、何とも云はれぬ不安に襲はれて来る。陥穿にでも向つて行くやうに心騒ぎ、手足がわな／＼ぐ。今にも恐しい破裂が自分を待設

けて居るやうな氣がすると云ふ。
第二學期の成績が發表された、矢張よくない、而かも獨逸語などは一學期よりひどく、餘程努力しなければこの學年のも危ぶまれるほどであつた。然るに狩野はと云ふと、全く勉強なぞする氣は無いらしく、下調べは無論の事、自分の嫌ひな學科の時は、大抵其時間を休んで裏の植物園なぞを、蒼い顔して力なくぶら付いて居る。私ども友人も見兼ねて時々忠告をしたが、當人は唯「今の生活から遁れたい。」とばかり言張るので、何が不足か何で那樣氣になるのか些とも解らなかつた。

學年試験も済んだ。所詮見込がないなら今年一杯休學して靜かに身體を養つては何うだと切りに勧めて見たが、當人には其程思切つた勇氣はなく、厭だ／＼と云ひながら、矢張試験を受ける事は受けた。

愈成績が發表になる前の晩、六月末だと云ふのに肌寒むい雨のシト／＼と降る晩であつた。狩野はボンヤリ私を尋ねて来て、用があるから外へ出てくれと云ふ。顔色を見ると矢張蒼い。不審に思ひながら、傘をさして表に出ると、狩野は低い下駄のまゝビシヤ／＼と泥濘をこぐやうに歩きながら、「君僕は斷然決心した。東京に出ようと思ふよ。」

「石上の家を出てか。」
「無論さ、僕は那の家に居ると、段々煩悶が烈しくなつて死ぬばかりだ。」

「又始めたぜ、君は屹度何うかしてるよ、何も煩悶すべき筈が無いのに、自分で苦んで煩悶して居るんだもの、那樣事では何所へ行つても駄目だ。」

「僕も然う思ふ。近頃は自分の事ながらツク／＼愛憎が盡きるね、然し何う云ふものか僕には以前の放縱な生活が戀しくてならない。この二三日僕は一生懸命に考へたんだね、何うしても僕は幸福な地位より逆境に居るべき人なのだね、苦しいは苦しいが其方が何うも好い、よく苦んで小さくなつて熱い湯に我慢して入つて居る人がある、僕は全くあれだよ、搔廻せば好いのだが借其をする勇氣がなく小さく窘んで居るのだね。將來を思つたり自分を考へたりすると、唯譯もなく情なくなつて、一と思に今の位置から飛下りたくなる。責任とか義務とか努力成功など云ふ壓迫は絶えず弱い僕の心を苦しめて煩悶させる。だから矢張學校もやめ、石上の家も出て、死ぬとも斃れるとも自分一人の身體になつたら却つて救はれるだらうと思ふ。其にこの試験は無論駄目だ。然し僕は寧ろ駄目な方が好いと思ふ。まだ多少未練氣がある間は苦しきも煩悶もしたがね、其安心と云ふものは、ホツと息して長年の重荷が去れたやうな氣がする。」

無論斯う筋立つた話ではなかつたらうが、狩野は例の寂しい粘つたやうな調子で道々此やうな意味を云ふ。知らなすば兎に角、これまで長い間の渠の煩悶を見聞して居最る慘めな感がして、其に異議を挿む事すら出

寂しい所くと選んで歩くので、二人は何時か城跡の大手の所へ出て居た。

「然しけい子さんと云ふものがある、君は那の人を棄てても断然行くと云ふのかね。」

「さあ、實は僕も其れがあるから今日まで苦んで居たのだが何うも爲方があるまい。」

「君は立派に忘れ得るかね。」

「さあ、其れだ。」

「駄目だよ君、君はけい子さんに戀してるんだから、然う容易に棄てられるものかね。」

「……………」

雨はビシャ／＼降出して来た。潑返しが足にかゝつて其氣持の悪るさと云つたらない——二人は可也長い間黙つて立つて居た。

旋て狩野はホツと深い溜息を吐いて、「然しね、僕は到底戀する資格はないものだ。僕は戀の努力にすら堪へない、直ぐ疲れて了ふんだね。あゝ、僕は遂に敗北の人だよ。」と寂しく口を結ぶ。

「東京に行くにしても、無論無断で行くのだから、伯母さんは屹度喫驚するね。」

「其はするよ、僕は那様に親切にされたのだから、其が氣の毒でね。」

「何うしても行くかね。」

「何うも爲方がないものね。」

二人は一時間ほど雨の中に立話して居た。色々に話しましたが、狩野は餘程思込んだ事と見えて、何うしても江を翻す風はなかつた。

あゝ、重い凍傷に罹つた者は、火にあたれば却つて指が腐れると云ふ。狩野は嘗つて馴れない情愛や温味に其心を腐らしたのであらう。試験の成績は無論駄目であつた。

四

其後四五日過ぎて、學校の歸りに狩野の家を訪ねた。音羽の三丁目、番地は前に置いて置いたので直ぐ知れた。何とか云ふ紙漉場の裏隣で、床の低い昔建の二間長屋、木柱も古く壁も煤つて、雨には無暗さうな家である。合借家には巡查の標札が出て居た。屋根は直ぐに小日向の高臺で、見上る程高い地境の櫓林は押覆さるやうに此方の日射を遮つて居る。其に此邊は一帶の湿地と見えて門内の霜解は靴でも難澁する位である。

案内を乞うたが返事がない。其癖裏口には人の氣勢がするので、道端の悪るい流し前を廻つて見ると、狩野は日當りの井戸端に出て年寄らしう盥に背を丸めて、切りと小供の下駄の泥を洗つて居た。

「狩野君。」と後から呼懸けられて振返つた其人は、さも悪るい所でも見付られたやうに、甚くドキマギして、

「いゝえ那樣譯ぢやありませんが、何事も生活の爲めで、面目もありませんよ。」

「モオバツサンでせう。」

「え、××雑誌から頼まれましたな。」と些いと私を見上げたが、慌て、偏屈らしく目を膝に落した。これが此人の昔ながらの癖で、話するに何時も對手の顔を避けるやうにする。

「××雑誌と云ふと？」

「青年の文學雑誌です、貴方々には御存じもありませんまい。」と火鉢にかけた鐵瓶を氣にして、切りと火を吹いて居る。

十一月末の明るい——其は夏の日よりも明るい——午後の日光は、煤ばんだ障子の裾に近々と射付けて、寂しい友人の横顔を明らかに照した。瘦せたと云ふよりも寧ろ衰へて、顔に姿に何所に一つ活氣の閃く所は無い。顔色も黄く濁り肌も乾いて居る、綿の重さうな綿入に着ぶかれて、空しく火を吹いて居る態は、何う見ても四十を越した姿である。

私は熟々心から深い憫を覺えた。如何に生活の爲めとは云へ、肉も心も世路の長きに倦し疲れた此人が、今尙ほ若々しい青年の群と立雜つて、鈍れる眸を擧げ響なき聲を勵して、世の熱き戀を説き狂熱を説かねばならぬとは、何たる傷心の事であらう、年と共に老ゆる事すら許されぬとは人生の慘事である。

狩野は切りと火を吹いて居る。

私は態と話題を轉じて、「好く日が射しますね。」

「や、好く来て下だすつた……子供持はこれですからね。」と妙に顔を赤くして濡手の雫を切つて居る。

「餘り天氣が好いから、つい散歩ながら来て見ました。」

「此間の晩は失敬しました。」

「大變な氣焔でしたね、驚きましたよ。」

「然うでしたつてね、へゝ。」と例の表情の無い顔に寂しく笑つて、先に立つて表口の方に廻り、庭先の低い木戸を潜つて縁先から六疊の間に私を導く。

三間ばかりの家である。然し客間にも書齋にも室らしい室はこれ一つと見えて、障子際には面の剥けた一閑張の机を出し、床の間には洋書や古雑誌や新聞の綴込やを埒もなく雜然と積重ねて置く。襖の摺模様は大方箔が剥落ちて、天井は煤で眞黒、疊も可也汚れて其所此所にインキの汚點さへ見える。夜はさぞ鼠の荒れさうな住居。

細君は不在と見えて、狩野は自ら火鉢、茶道具を搬んだり一人まめ／＼しく周旋する。机の上には書半しの原稿紙、翻譯でもして居る所か、我々が二高時代に舎の目を偷んで好く愛讀したモオバツサンの英譯、餐後叢書の一冊が枝折られてある。

「翻譯のやうですね。」と私は渠が漸く落付くのを待つて話かけた。

「へえ、ホンの眞似事です。」と切りと火を直して居る。

「何ですか、近頃は小説の方でも。」

「何有、午後ばかりです、然し餘り日當りが好いと、却つて目が疲れて長く仕事が出来ませんでな。」

「然うでせうな、然し御身體は益々壯健でせう。」

「え、此上病氣までしては其こそ大變です、一家路頭に迷ふやうな事が出来ませう。」と寂しい笑を洩す。

「お子さんは？」

「三人です。」

話は又途切れた。誰かの言葉に、世に舊友と遇ふほど果敢なく興醒める事は無い、舊友は舊友として記憶に活かして顔を見るものではないと云つたが、全く那樣傾きがある。昔懐しさに遇つて見ても、お互にもう境遇も變つて居る。利害も別にして居る。其れにお互に自分の現在を衛らうと云ふ氣があるから、見得も張りたい、防禦もしたい。口では互に懐しさうな事を話合つて居るもの、油斷なく相互の心を讀み合ふ不快さと云つたら無い、私は寧ろ訪ねて來た事すら後悔する程であつた。

臺所にガタコト人音がする、大方細君でも歸つて來たのだらう。前の紙漉場からは卑しい流行唄が聞える。勢ひ話は舊い學友時代になるより外はない。

「然し久し振りですね」と私が先づ口を切る。

「何しろ十幾年ですからな。」と狩野は漸う沸立つた湯に、香しい番茶を煮て私に勧める。

「全體、何故これまで私を尋ねて呉れなかつたのです、君の

方ぢや好く僕の消息を知つてたと云ふではありませんか。」

「え、然うも思ひましたがな……何しろ斯うなつては、何も彼も最う駄目ですよ。」と又私の方をチラと見る。私は何となく十幾年前、城跡で分れた時の事を思出した。

「何故駄目でせう、お互に舊友ぢやありませんか。」

「其はもう何ですがね……。」と便なげに片手に煙草をつめて俯向きながら香の強い煙を吸つて居る。

「君は相變らず氣が弱い、昔と些とも變りませんな、君は何うか知らないけれど、僕等は全く君を戀しく思つて居た、何時も宇山や登坂と遇ふ毎に能く噂が出るんです……昨日も君に遇つた事を登坂に話したら、登坂も切りに會ひたがつて居ました。」

「登坂君は今？」

「法制局に參事官をして居ますが、若手では先づ切れもの、方です。」

「宇山君は？」

「昨年京都に行きました、大學の助教教授です。」

「千田登太郎君は？」

「實業の方です、慥か三菱あたりに居ると聞きましたが、久しく遇はないから委しくは分りません。」

「然うですかね、皆出世をしましたな」と狩野は小さく貧乏揺ぎをして居る。

私はこの場合餘り心無き事を言つたのを悔いて「然し同じ

事ですよ、成功と云つても失敗と云つても、大きな目から見れば何方が果して偉いのか、容易に判斷されるものぢやありませんからな。」と我ながら甚だ拙い繼足をした。然し狩野は幸に氣にする風もなく、ボンヤリ自分の膝を見詰めて居る。

「お父さん、お父さん？」と小兒のうめき聲が聞えて、やがて續けさまにコン／＼と咳入る。襖が半開きになつて居る隣室で臥ても居る様子である。

狩野は其方を見返つて、「お、正志か、もう目が覺めましたか。」

「お父さん、蜜柑を。」

「好し／＼、今上げるよ、好く睡つた御褒美に大きいのを上げるから……。」と床の間の新聞包みから三つ四つ擲出して、「そらコンナ大きい、お母さんに好く割いて貰つて喰べるんだよ。」と疊の上をコロ／＼ころがしてやる。

「御病氣ですか。」

「え、何有、寒胃でせうけれど、二三日前から熱氣があまりましてね……いや小兒の病氣は何より弱らせられますよ。」

「其は不可ませんね、此間お目にかゝつた那の御兒さんですか。」

「え、長男の小僧です。」

隣りの間では、又、「お父さん／＼。」と呼ぶ小兒の聲がする。

「何んだね。」

「貴方、些と來て見てやつて下さいました、私ぢや何うして

も喰べないツてますから。」と細君であらう、女の聲。

「お前其所に居たのかね、其なら其位の世話を見てくれなくちや困るね。」

「だつて、私は厭だつてこの兒が剛情張るんですもの。」

「病人だもの少しは我儘も云ふよ。」

「だから、貴方が世話をなさるが好い、私はこの兒が大嫌ひ！ねえ賢坊！」と懷の乳飲でもあやして居る様子。

「お父さん！」小兒はシク／＼泣く。

「あ、好し／＼。」と狩野は憚るやうに私を窺つて、自ら隣の間立つて行く。

夫婦は未だ何か争つて居る。狩野の聲は低くて分らないが細君の不平は好く聞える、狩野は其を私に聞かせまいと切り氣を揉む様子。旋て細君は蜜柑か何かを疊にドシリと投げ付けて客間に入つて來た。

狩野から見ると不似合なほど年も若く、色白なムツリ肥つた雀斑のある女で、軽い訛はあるが物言のハキ／＼した女々しいネチ／＼した事が大嫌ひと云つた風が見える。育ち柄も然う卑しくないらしく、何所か臍揚な所がある。

一通りの挨拶が済んで、「何か御病人なさうで、お困りですね。」

「はい、然う大した事もないやうですけど、何しろ秘藏ツ子なものですから、良人が氣難しくて困ります。」

「當時流行すると云ふ、インフルエンザではありませんか。」

「さあ、如何でせう、何有貴方、二三日前の晩、薄着のまゝ良人が方々引張り廻つたものですから、其で寒胃でもひきましたものと見えます。」と茶なぞを入れ換へる。

「醫者には？」
「何分昨日からの事ですから、未だ診て頂きもしませんが、食事も然らば變りませんから、大した事はあるまいかと存じて居ります。」

「然し御小供衆は大切ですよ、寒胃が因で好く肺炎なぞ併發す事がありますからね。」と話して居る所へ、狩野は戻つて来た。

「いや、失敬しました。」と私に斷り云つて、獨言のやうに、
「何しろ大變な熱だ、那れぢや切ない譯だ。」と細君に當付けて云ふ。

細君は聞えない風をして居た。
「冷して見たら何うです。」

「さ、然うも爲なけりや爲りますまい、身體はビツシヨリ盗汗です。」

「咳嗽は然ら無いやうです。」

「今は左程ぢやありませんが、夜分は可也烈しいやうです。」
細君は今の先の事など、もうケロリと忘れて了つて、「で、もう寢まして御座いますか。」

「何？」と狩野は態と意地悪く聞返す。
細君もムツとして、「正志は眠りましたかと伺ひますので。」

と切口上になる。

「眠るよ、小兒だもの、少し親切にさへしてやりや直ぐ眠ります。」

「森岡さんにも来て頂きますか。」

「好いよ、お前は忙しい身體だ、正志の事は私がします、那れは私の秘藏ツ子だもの。」

「其でも今伺ひますと、大層悪い寒胃が流行るさうですか。」

「……。」狩野は黙つて煙草を吸つて居る。

細君は又かと云はぬばかり、聞えよがしに舌打して出て行つた。

私はソコ／＼にして狩野の家を辭して歸つた。

其翌日文科省からの命令で、私は目下來遊中の英國某博士と共に、關西地方を巡回講演に出發する事となつた。日數は一ヶ月の豫定。

五

豫定の講演を終つて、漸く東京へ歸つたのは暮の二十七日節季を前に人の心もそゞろ慌つ頃であつた。報告は何れ來春でも濟む事、取敢へず先づ大學だけに歸着届を出し、翌日は久振りで樂々と自分の軀に寛ぎ、日和の縁先に籐寢臺など持出させて、留守中の書狀類や、尤も重要な分は旅先に回送させたが——訪問帳なぞを繰り調べて見た。すると其中に——

「さ、如何でせう、私は唯一度お目に掛つたばかりですから。」と何か考へて居る。

「おい、林檎は何うした、剣くのぢやないのか。」

「あら。」と美しく微笑んで、器用な指先を動かしながら、「けれども、妙に斯う恐いやうな方です、些と氣が何うか爲つて仰在るのぢやありませんか。」

「何故？そんなに憤つて居たかい。」

「憤るも憤るですけど。」と青磁皿に林檎を入れながら、「抑る事が何うも變でデロ／＼私共を御覽なさる其目附つたら：今考へても私恐しいやうですわ。」

「屹度酒に酔つて居たらう。」と小楊子で林檎を一つ突く。

「え、酔つて被在りましたとも、ヒヨロ／＼して口も縁に利けない位。」

「困り者だな。」

「貴方ジャムを上げませうか。」

「え？」私は狩野の事を考へて居たので、
「林檎につけて召上るやうに、ジャムを持って参りませうか。」

「で、何も用向を言置かなかつたのかね。」

「え、別に……尤も貴方が被在るのに、私共が勝手に取次がないとでも思つたのでせうよ、切りに口惜しいつて泣いてお出でしたわ。貴方ジャムは？」

「ジャムはまあ好い、それで、口惜しがるとは何を口惜しが

通、鼠半紙の封筒に至急と書いた狩野の手紙が混つて居る、文句を見ると、これほど窮して尋ねて行くのに何故遇つてはくれぬ、意地も我慢も張れない場合だから頼むのに、耻を耻とする者を更らに耻ぢよとは酷い事だ、と、此方が故意に居留守でもつかつたやうに誤つて、散々厭味をならべてある。日附を見ると十二月十九日、處は駿河臺の何某病院何號室としてある。

處へ妻は紅茶を煮て持つて來た。

「おい、又忘れたね、こんな至急の手紙が來てるぢやないか。」
「あら、それもお送りするんでしたか、まあ然うでしたか。」と却つて不審さう。

「でも此通り至急と書いてある。」と私は熱い紅茶の香しい香を嗅ぎながら、「それに度々尋ねて來たと云ふぢやないか、手紙の様子ぢや僕の旅行も知らんやうだ。」

「御存じの方なのですか、全體あれは何う云ふお方？」

「知つてる所か、私の舊友だ。」
妻はさも驚きましたと云つたやうに、今剣掛て居た林檎の小刀を止めて、「まあ那の方が？ 矢張大學に被在つたのですか。」と小兒らしく目を圓くする。

「いや大學ぢやない、國で小供の時からの親友だ。」
「道理で謙さん／＼つて、貴方の事を然う云つて被在いましたよ。」

「餘程用がある風だつたかね。」

「詰り貴方にも見棄てられたてんでせう、私共好くも聞きませんでしたけれど。」

「然るか、それあ氣の毒な事をした。」

「悪う御座いましたね、然うと知つたら早く其お手紙をお送りするのでしたのに。」と素直な妻は私が黙つて考込んで居る風に、何か一角落度をしたやうに、直ぐもう氣を揉んで繰返し、其を謝る。

「いや、お前方の過失ばかりぢやない、何しろ長く逆境に居るので先も餘程ひがんで居るからね。」

「其れに豊が音羽通りでお目に掛つた時などは、如何に何んでも餘り變な御様子なものですから、私は又何時かのやうに女ばかりと付込んで、何か強請か苦情を言つて来るものと、一圖に然らばかり思込んだものですから、豊にも言付けて貴方の御旅行の事も可成曖昧に申さして置きました。」

狩野に就いて、順序を追うて妻の話す所を斯うである。

私の不在中狩野は四度も訪ねて来た。二度までは下女の豊の取次に穩しく歸つたが、三度目に来た時は甚く泥酔して居て、主人が留守なら細君でも好いから、是非遇はして貰はうと支關の式臺に腰掛けて動かない。爲方が無いから妻が出て、私の旅行を叮嚀に話して聞かせたが、何所までも其を信する模様はない。用向はと問へば主人で無ければ話されぬと云ふ。そして妙に僻んで、男には見苦しい程の愚痴や厭味を散々な

小兒の病氣が其後差重つて、其で今狩野も病院生活して居るに相違ない。

で、私は多少の金を準備して、直ぐ出掛ける事にした。すると妻は不承らしい顔して、何うも様子が變だから、貢ぐものがあらば誰か代理を差向けて、自分は可成遇はぬ方が好いと何所までも先を氣遣にして心配する。友人の非難は誰にも面白くないもの、特に落魄の友を見ぬ振りするやうな事は出来ない性分なので、餘計な事とは思つたが、狩野の不幸な境遇を搔擗んで妻に話して聞かせると、其所は女である、酷く動かされた顔で涙組んで居た。

晝飯の時、妻は不圖思付いたやうに、「ぢや狩野さんの奥様て方は、餘程シツカリした身體も壯健な方でせう。」と突然な事を尋ねる。

「然う身體は壯健らしいが、其が何故？」

「何故つて事もありませんけれど、唯何ですか其様氣がしますわ。矢張貴方の好く被仰る直覺なんではせう。」

「直覺は直覺としても、何も那云ふ男の細君が必らず壯健だと云ふ根據はないやうだ。」

「其でも多く然うですわ、其に世間でも好く那樣事を云ふぢやありませんか。」

「どんな事？」

「どんな事つて、貴方。」と妙に嬌羞むやうな薄笑して、「好く云ふぢやありませんか、犬でも鶏でも然うですつてね弱い雄

らべた上、「あゝ、僕は横山にさへ見棄られたか。」と云つて、

袖を噛んでホロ／＼男泣に泣く。見れば双子の綿入に、ペラ／＼になつた奉書袖の羽織、帽子も被つて居ない様子に、妻も幾らか氣の毒になり、どんな御用向か知れませんけれど、私で解りまする事ならば。」と多少の事はする積りで優しく云ふと、狩野は恐しく機嫌を損じて、「私は合力や無心に來たのぢやない、この胸の——。」と瘦せた大きな掌で胸元を叩いて「此胸の苦しさを横山に訴へに來たんだ、貴女は何んだ、高が横山の細君だらう、僕は横山の舊友だ、舊い親友だ。親友から見ると妻君は兩方の他人だ、僕は横山の親友だ。」と涙の流れる儘の顔に、肺臓でも破れたやうな凄惨な笑い聲を聞かせて、踏きながら杖を力に歸つて行つた。其から四五日過ぎて——丁度この月の中頃——寒い小雨がシト／＼と降る朝、狩野は頭から濡れて、足袋も穿かず眞蒼な顔して飛込んで來たが、未だ歸らぬと聞いて、甚く失望したやうに、何も云はないで惜々と歸つて行く其後姿が如何にも慘らしかつたと云ふ。すると同じ日の夕刻、豊が買物ながら音羽通へ出ると、九丁目の角で其姿を見掛けた。八つばかりの蒼徳めた小兒を人力車に乗せ、自分は其後から朝のまゝの姿で、風呂敷包や何かを乳母車に積み、泥濘の中をビシヤ／＼水道町の方に押して行つた。其時は既に可也酔つて居るらしく、諸のやうなものを唸りながら歩いて居たとの事である。其でまあ様子が荒方知れた、手紙と日附も合ふ、察する所

に強い雌を一所にして置くと、却つて卵は多く産むけれども雄の方は段々いぢけて心持も僻んで行くもんですつて。」

「然う云ふものかね。」

「何うもそのやうですわ、猫などは現に臆病になつて鼠も捕らなくなるさうですわ。」

「然うかね。」と私は立上つた。

「あら、好く然う云ひますわ。」と妻は何故か眞赤な顔をして憚るやうに私を偷見た。

私は道々狩野の事ばかり考へて居た。好く弱い人にはさもない事にまで強烈な壓迫を感じて、道を歩くにさへ路傍を選んで歩くものがある。狩野などは其である。強ひて自ら悶え苦しんで段々自分を縮めて行くのだ。

六

途中用達に暇どつて、病院を見舞つたのは午後の三時過ぎ。家を出る頃から危んだ空合は、いとど底曇りに曇つて、風も乾方に廻つた。雲か雪か、何れにしても一降り寄來さなければ上るまい。外來患者は大方歸りつくして、薬局の前に寒むさうな薬取の顔が二三人居るばかり。廣い宏大な建物はガラ／＼として、晝靜な僧院の如く鎮まり返つて居る。特に大節季前の忙ない町を、追駈られるやうに突切つて來た私には、一層その感も強く、とても同じ世の姿とは受取れない。小使どもは長い柄付のブラシでドシ／＼廊下を洗ひ始めて居る。

受付口から狩野の室を尋ねる。閑さうに今朝の新聞を讀んで居た馬面の隠居が、物臭さうな目を私に振向けて「狩野さん？ 狩野さんなら丙號室の七番、——傳染病室ですよ。」と教へる。

「傳染病？ それぢや面會は出來ますまい。」と私の聲はツイ騒ぎ立つ。

「いや差支はありません、當院で取扱ふのは、傳染病と云つても、然う危険の無いものばかりです。然し、勿論、御注意なさるに越した事は無いが。」

「病症は何でせう。」

「さやうです。」と背後に貼り出した塗札に探して、「腸チブスとあります。」

「餘程悪いやうですか。」

「重態ですな。」と隠居はデロ／＼と私の姿を見廻して、さて、「甚だ突然のやうですが、貴方は狩野さんの御親戚の方ですか。」

「いえ、違ひます。」

「甲田さんとは被仰らぬ？」

「私は横山と云ふものです。」

「然う、これは失禮でした、その甲田さんならば、御面會なさる前に些と御相談申上たい事がありますので。」

「然うでしたか。」

傳染病と聞いて有繫に私も氣後れした。このまゝ引返さう

目付を取換して、身を横に、足早に、スウと行過ぎる。切髪品の品好い老女が俯向きながら行くのも見た。何所かの室で幽かな呻聲が二度ばかり聞えた、が然しそれも直ぐ止んで後はもとの寂寞にかへる。

私は妙に膝が浮いて來た、歩くに力が無い。そして、周圍の空氣が急に重たくなつたやうで、深く呼吸すると胸先に軽い抵抗を感じる。

偶ある室の前で看護婦は停つた。これまで口一つ利かなかつたのだ。そして相圖のやうに僕を見返り、要心深く竊つとその硝子戸を明けて、「狩野さん、お客様です。」

「誰ですく。」と云ふのは狩野、別に立つ様子も無い。標札を見ると狩野正志とある、慥かにこの夏會つた狩野の總領だ、それでも施療では無いと見える。

「まあ待ち給へ。」と狩野は不精らしく立つて、それでも押入から白毛布を出してすゝめる。

私はこの頃中の旅行を詳に話して、先の誤解の解けるやう留守中の不念や家内の疎略を懇ろに詫びても、狩野はたゞ／＼と聞いて居るばかり、別に深く氣を留める様子も無い。成程やつれた。妻が氣味悪るがつかも無理に無い。髪や髯の伸びたゝめか、一體に骨立つた顔は一層寂し限びて了つて二月前のその人とも思はれない。ものを見る目が鋭く轉走つて、始終ピリ／＼と唇を顫はして居る。一體の様子に沈着が無く、不意と顔を上げて當もなく空を見詰めるかとする、

デツと聞耳を聳てる。そして、その時に限つて眩しさうに激しく瞬きをする。涙が充血した結膜に滲出る。

「その後の経過は何うなんです、矢張好い事ありませんか。」と私は先づ病氣の容態を尋ねる。

とも思つたがまた思直して右に左些時だけでも會つて行く事にした、そこに居た看護見習が案内に立へ。

寒さが厳しい所、病室の戸は大抵閉切つてある。私は薬臭い空氣の漂ふ長い／＼廊下を幾曲りかして乙號室——呼吸器病者が多いやうだ——の前を通過ぎると取端が看護婦の溜所になつて居る。そこで帽子や外套を預けて、草履も青緒のに穿換される。

看護婦が代つた、矢張青の襟章をつけたのだ。それに廊下も今までの板敷では無く、一段低い、三和土の上に歩板を渡してある。兩側は芝生の廣庭、吉野檜や石櫛や山茶花やが、他の病室から見透せぬやう、一面に厚く植込んである。それを斜に出抜けた所が丙號の隔離病室なので。空は險惡に曇つて、風足がより低くより強く、冬枯の梢にざわめく。

丙號室へ入る。先づ目に付くのは、顯微鏡室。消毒室、試験室など、何れもいかめしく標札した室である。私は譯も無く胸がどつついて、一種の惡寒さへ覺える。何も傳染を怖れるなど云ふ纏つた考は無いが、今にも重く恐ろしい箱の蓋を明けて、その中に潜む死の慘劇を見せ附けられさうな氣がしたので。それに常に馴れて居る防腐劑の臭も、場所柄だけに異様に鋭く鼻を嘔かす。

病室は恐ろしいほどヒツツリして、咳一つ聞えない。廊下を通るにも皆足音を偷んで、煙の如く音無く歩む。偶々人行逢つても挨拶だもせず、何れも／＼不安らしい沈着の無い

「腸出血があるもの、熱も下りませうさ。」
話は途切れた。風も息んだと見えて、外には何の音も無い。夕暮の慌しい一次、遠く近く物賣の聲が、幽かにく聞える。今日も最り暮れるのだ。

「それで、看病は始終君一人ですか。」

「……？」狩野は唯ボンヤリ、窓に薄る暮色を眺めて居る。「看病する人です。」

「え、僕一人、尤も付添看護婦も雇つて見たが、却つて駄目ですな、不親切で癢に觸るから、僕一人でする事にしました。」

「細君は？」

「あれですか。」と吐出すやうに云つて、私をデロリ横に見て、「あれは尙駄目です。面を見るのも厭だ、近頃はまるで寄付けないやうにして居る。」

「けれども、それぢや君の身體が耐らない。」

「なアに。」とセ、ラ笑つて、始中終厭な事を見せ付けられるより、一人で居る方が何の位氣樂だか分らない。」

「それにお仕事もあるやうだ。」
「え、これを怠けたんぢや、第一人院料も拂はれないからね。」

處へ細君が入つて来た。寒い中を急いで来たと見えて、鬢もそく唇の色も變つて、セイ／＼苦しうな息遣ひ、扮装は然り見苦くは無く、銘仙物ながら小ザツパリした羽織を引

でも沈着拂ふ。

「あります。」

「死なれりや、お前も悲しいか。」

「何ですって。」

「は、は、は、は。」と狩野は懐手の身を反して、嘲むやうに咽で低く笑つて、「ぢや、まだ親子の義理だけは知つてる。」

細君はムツとして云返さうとしたが、何時もの癖と思返し、素知らぬ顔で立ち上る。病兒の容態を見やうとしたので、すると、狩野はそれまでも執念く遮つて、「あ、お待ち、今やつと沈着かせて睡らした所だ、又起されでもすると私が困る、何らかそツちにや入らんでくれ。」

細君は口惜さに唇をブル／＼顫はしたが、黙つてそこへ坐つた。

弱い人ほど勝利につけこむものだ。狩野は故とらしく細君の方を見遣つて、「そして、今日は何と思つて来たんだ、家の方も忙しからうに。」

細君はそこにある煙管を取上げて、聞えぬさまで煙を吸ふ。見れば、その大きな目は涙で一杯。

「おい、聞えないのか、何しに来たと聞いて居る。」

煙管を強く火鉢にあて、「はい、入院料を拂ひに来ました。」

「入院料だ？」と狩野は聲音まで變らせて、「そして、お前、それを拂つたな。」

「はい、入院料を拂ひに来ました。」

張つて居る。

狩野はデロリ細君を見た限、にがり切つて居る。

細君は私に挨拶もソコ／＼、「そしてあの、正志はどんな鹽梅です、看護部屋で聞いたら、今朝も血が下つたと云ふぢやありませんか。」と氣忙しく問ふ。

「あ、あつた。」それが何うしたと云はぬばかり、狩野は貧乏揺ぎしながら外方を向いて居た。

「有つたよぢやありません、それなら然うと俥夫でも走らして下さるとか何とか、家でも皆心配して居るんですから。」

「いそがしい所を氣の毒だからな。」

「まあ貴方と云へば、何うすりや然う……。」と云ひ掛けたが私の居るのに氣が付いて、「そして今どんな様子です、始終ウト／＼して居ますか。」

狩野は俯向いて火弄りだ。「そりや濟まん。そんなに心配を掛けちや濟まん、然う心配してくれるとは知らんからな。」

細君は又ですかと云つたやうに、肝積らしう眉をあつめて「そりや心配ぢやありませんか、私にも子ですもの。」

「ほう？」と笑つてる。

「まあ貴方ツてば直ぐそんな……。」

「然し生れ損ひの廢疾者だよ。」

「廢疾だつて何だつて子は子です。」と氣の好さうな人だけに、直ぐ向ッ腹を立て、險しく夫を見る。

「然うか、矢張お前でもそんなに思ふ事があるか。」と何所までも斯うして小兒を世話して頂いて居て、何時まで知らない顔が出来ないぢやありませんか。」

「それぢや、金を借りたな。」

「は、借りました。」

「借りた？」と狩野はたかぶる息を肩で抑えるやうに、しばらく言葉が無い。

細君も黙つて居る。

「返して来い、入院料は僕が拂ふ、今の内に行つて返して来い、狩野享介だ、あんな畜生めらの世話にやならん。」

「畜生でも私にや母です。」

「然う、知つてる、貴様には母だ。」

「ぢや今までだつて、そんな畜生の世話にならないが好いちやありませんか。」

「何んだ？ 今一度云つて見ろ。」

「何度だつて云ひます。」と細君も膝をつき直して、「今までこれほど世話になつて居ながら、その世話になつた人を畜生も無いもんだ。みよが生れたつて、貴方が病氣したつて、駈付ける所は何時も私の里だけでせう、それを畜生だなんて、餘り……餘り……。」と細君は俯向いた膝の上に涙をハラ／＼零す。

「でも俺を意氣地無しと吐した。」と云ふ、寧ろ、然う叫んだので。

「それは爲方ありません、貴方が陰で幾ら威張つたつて、先

は金を見る商賣です、そんな偉い方ならお金に不自由する筈がないと思ふのは、今日誰でも當前ぢやありませんか。」

「俺を馬鹿と云つた、云つた、立派に俺の前で云つた。」

「ですから、タント働いて金を取つて見せるんです。」

「何？」

「世話になつてゐるうちは、何と云はれても爲方ありません。」

狩野は黙つた。そして暫の間、凝つと細君の横顔を睨付けて居たが、冷かに笑つて押黙つて了つた。細君は度胸を据えて何ぶくもく唯煙草ばかり吸つて居る。

「然し金だけは返して来い、今のうちに返して来い。」

「だつてもう會計へ納めて來ました、返したいにも返しやうはありません。」

「返しやう無くても俺の耻だ、返せ、早く返して了へ。」

「ぢや貴方が被行つて會計から取戻して下さい、なんぼなんでも、私はそんな馬鹿くしい事を云はれないから。」

「何だと？」

「然うでせう、病人を斯うして寝せて置いて、その入院料を拂はないと云ふ事が何所にあります。會計からは毎も催促を家に寄來す、私には何うしても知らぬ顔が出來ません。」

「だから俺が拂ふと云つて居る。」

「拂ふとばかり云つても、催促されてから今日で幾日になります、それに原稿は未だ半分も出來ないぢやありませんか。」

唸つて居た隣室の丹毒患者も、スルホナルが利いたと見えて何の音も無い。何所か遠い室で、氷を砕く金物の響が、広い廊下を突きぬけてこゝまで反響する。

「御回診ですよ。」

廊下から看護婦の聲を先振に、二三人コト／＼と病室の方へ入つて來た。

狩野も立つには立つたが、遠くはなれて實際に腕組のまゝ突ツ立つて、風に吹曝される人のやう、物凄目付してヂツと様子を見成つて居る。

私は病人を見た。然し餘りの慘さに長く正視するに忍びなかつた。顔の色は冷油の如く冷く、心持ゆるんだ唇は血が死んで居て、小さな白い齒並が覗いて居る、頬の肉の削げた所、以か、眼も半眼に閉ぢ切らず、眉尻が勢なく垂れて、睫毛が急に伸びたやうに見える。俗に佛顔と云ふのもこんな顔立なのだらう、キョト／＼物怖した目付で、醫者の顔を順々に見廻はして居るけれど無論、意識あつての事とは思はれない。診察終るのを待かねて、細君は心配さうな小聲になり、「あの如何で御座います、先生。」と容態を尋ねるので。

「然やう。と副院長は噴霧器で手先を消毒しながら、「餘程お悪いやうですよ、御注意なさい、何しろ多量の出血でしたからな。」

「急に模様が変わるやうな事でも……。」と細君は最うオロ／＼聲。

「原稿は出來んでも……拂ふと云つたら俺が拂ふ、狩野亭介だ、例令餓死しても人情知らず、畜生のやうな奴等の金は借りたく無い、グヅ／＼云ふな、早く叩き返せ。」と肩で息しながら、齒をガチ／＼させる。

「然し好く考へて御覽なさい、今度はかりは此方から頼んで借りるのぢやなし、先が見兼ねて用立てると云ふのですもの、常は常としても、今度は全く、恨の持つて行き端がないんですよ。」

「後でキツト云ふよ、あいつ等の事だもの、恩に着せて右や左云ふのが見え透いて居る。」

「そんなら向後世話にならない事だ。」

「何？」

「そんな口が今利かれる場合ぢやない、此方も満足になつてから云ふ事です。」

「何？」と云つたきり、狩野は眞着な顔して空しく空を見詰めた。

看護室の方でカチ／＼拍子木が鳴る。夕方の回診が初まる相圖だらう。細君はパイと立つて病室へ入つた。

私もそれを機に引き上げやうと思つたが、狩野が頼むやうに引留めるので、無下に振り切る事も出來ず、そのまゝ座に着く。

外は何時の小間にか雪になつたらしい。サラ／＼、サラサラと廣庭の植込に積る囁が幽かに／＼聞える。先程まで通し

「さあ、そこどこは何とも。」

「今夜にもつて位でせうか。」

「さあ。」

すると傍から助手の醫員が、氣の毒さに口を出して、「今一度食鹽液の注入を試みたら何うでせうね、駄目ですか。」

「さあ、それも然し。」

細君は氣が氣で無い、副院長の生返辭をもどかしがつて、「先生、駄目でも好しう御座いますから、何うぞその注入とやらを遣つて見て下さいまし、何うでもう諦者なのですけれど……せめて何うか。」と全く手を合せないばかりに纏り付く。

「見込はありませんよ。」

「は、無くとも好しう御座いますから。」

「ではね、君——。」と副院長はその準備を助手に命ずる。

狩野はツカ／＼寄つて來て、荒々しく細君を突除けた。

「不可ん、注入なぞしちや不可ん。」

「何うして？」と助手が聞答める。

「何うしてとも無い、あんな慘酷は見るに忍びないからだ。」

「然しこの場合外に方法は無い、萬一の心頼みはそれだけなんです。」と副院長も隠かに言葉を添へる。

「萬一だ？」と狩野は肩を上げて一足前に踏出す。「萬一だ何んだ。僕の子だ。親としてそんな萬一を頼みとして安心して居られるか。萬一を頼む位なら、僕は寧ろそひと思に死なれた方が好い。」と言葉調子が段々荒くなる。